
Journey through the Decade Re:imagination

イマジンカイザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Journey through the Decade Re:
imagination

【Nコード】

N9571L

【作者名】

イマジンカイザー

【あらすじ】

仮面ライダーディケイド、門矢士。幾多の世界を巡り、その瞳は何を見る？この作品はディケイド一行が『リ・イマジネーション』された世界を巡るクロスオーバー作品です。

【はじめにお読みください】

このたびは、『Journey through the Decade Re:imagination』を閲覧していただき、誠にありがとうございます。

この作品は、他作品の作者様に影響され、「自分もクロスオーバーものを書いてみたい!」と思いつき、せっかくだからと書いてみたものです。

が、普通にクロスオーバーをやっても、自分の力量じゃ他の作品群の中に埋もれてしまうと思ったので、いくつか”自分ルール”を設けて書くことにしました。

・『仮面ライダーディケイド』の設定にちなみ、登場する世界の登場人物や世界観を『リ・イマジネーション』として書くこと

2

・章ごとに設定や世界観をリセットするオムニバス形式

・ディケイド勢の時系列は一律して「シンケンジャー編」終了後

・大ショッカーその他は話によって出たり出なかったり

一番最後のは自分が長編ものを書くのが苦手だということもあるのですが。

批判は受け付けます。設定が設定ですし、代わりに『リクエスト』も受け付けます。

(リクエストは”感想”及び”活動報告”に適当にポチってください)

知らないものは書けないのですが、一応勉強はします。

というわけで、一発目。

『自分がいつたいどういうものを書くか』ということを示すため、あまりクロスオーバーになりきれない、っていかそっ呼んでいいのかわからない、

「仮面ライダー一号」の話を書いてみようかと思えます。

なお、同作者が執筆している「Journey through the Decade Remix」とは、
本小説は何の関わりもありません。

ライダー1号誕生！怪奇顔面バーコード男 前篇 【原作：仮面ライダー】

「ここは……何の世界だ？」

「さあ？」

「なんだろーなー」

門矢士、光夏海、小野寺ユウスケが困惑するのも無理はない。

新たな世界の地平に立ったことを示す、写真館の”背景ロール”に描かれていたのは、

『荒涼とした造成地をバイクで駆け抜ける”仮面の男”の姿』だったからだ。

「まつ。こういうのは動いてみねえと分からないもんだしな。

とりあえず外に出てみるか」

「そうですね」

「ここはどんな世界なのかな、よおーっし、がんばるぞッ」

三人は玄関の扉を開け、写真館を出て行った。出て行った、はずだった。

「なんじゃこら」

「なんじゃありゃ」

「なんなんでしょう」

彼らが面くらったのも無理はない。

玄関を出て、彼らの目に飛び込んだできた光景と云えば、うねうねと曲がりくねったジェットコースター。

見上げるほど高くそびえたつ観覧車。

馬やそれを引く馬車がわきわきと蠢くメリーゴーランド。

そんな乗り物に乗って遊ぶ子どもや家族の姿。

気になって後ろを振り返ってみると、写真館だったはずの場所は”お休み処”と立て看板の入った、休憩所のような場所となっている。

「遊園地の中”、か？」

「どうやらそうみたいですな」

そう考えるのが妥当であろう。

光写真館一行はどこかの街の”遊園地”に移動したようである。

「遊園地かー、中学の修学旅行以来だなあ。”恐竜が逃げた”って言って、

ジェットコースターで一時間待たされたのも今じゃいい思い出だよ」

「せっかくだし、みんなで遊びに行きましょうよ」

「いや、待てお前ら。何か……おかしくないか？」

士は自分の体を見つめ、”違和感”があることに気付いた。

ユウスケと夏海は訳が分からないとでも言うように彼の姿を眺める。

「何が……ですか？」

「いつもと何も変わらねえけど」

「馬ア鹿。『変わらない』こと『自体』が問題だろうが。

役割だよ”役割”。新しい世界に来たんなら、世界の崩壊を防ぐために、

俺には何かこの世界で何かの”役割”が与えられるはずだろ？」

世界の崩壊を防ぐため、”仮面ライダーディケイド”である門矢士

には、

その世界において適切な役割が与えられるはずであるが、この世界だけは、彼には何の役割も与えられることはなかった。

「そういえば、そうですね」

「でもでも。んなこと言ったらよ、

ネガの世界に行ったときだって、お前には何の役割もなかったじゃないか」

”ネガの世界”。夏海が暮らしていた世界と酷似してはいるが、ライダーが人間の敵となり、全てがどこか”反転していた”不思議な世界。

例外的に、そこでは彼に何かしらの職業が与えられることはなかった。

「そつだな。だが、なんとなく釈然としねえ」

「まあまあ。いいじゃんいいじゃん。」

せつかく遊園地に来たんだ。細かいことは置いて、遊ぼうぜ」「馬鹿、何が悲しくて遊園地で、しかも野郎連れで遊ばにやならんのだ」

「年甲斐もなく照れちゃって。遊びましようよ」

「うるせえな。遊びたきゃお前らだけで遊んでいればいいだろ」「連れないこと言つなよ。せつかくだから」

De - De - De - DECADE。De - De - De - DE
CADE。

どこかで聞いたようなラップ音。なぜか震える上着の右ポケット。何事かと思いポケットを探ると、

これまた胡散臭い『ピンクと黒の縞模様の入った携帯電話』が、

持ち主が取るのを望んでせわしなく音を立てていた。

士は遊園地に来て年甲斐もなくはしゃぐ二人の男女を手で御しながら、

携帯電話の通話ボタンを押し、耳に押し当てる。

しゃがれてはいるものの、”馬鹿”がつくほど大きな声が周囲に轟き、

耳に押し当てた士の耳をつんざいた。

「なにやってるんだ新人！次の”シヨ”の時間まで、あと10分もないんだぞ。油売ってないで早く戻ってこい！じゃあな」

「おい、ちよつと待てよ何の事だかさつぱり……」

士の返事を待たずして電話は切れた。

裏手で頭を軽く叩いて態勢を立て直すと、

電話口の人物が行ったことについて、思案を巡らせる。

「シヨ？新人？一体なんのことだ？」

「どうしたんですか、士君」

「ああ。なんだか知らんが、

この携帯電話にかかかってきた相手がそんなことを言っているな。

俺は携帯なんて持ってねえし、俺の役割に関係すること、なんだろ」

士をはじめ、写真館の面々は携帯電話を持ち歩かない。

たとえ契約を交わしたとしても、その世界を出て行ってしまえば、その契約は不履行となり、どうあっても不通になってしまうからだ。

にもかかわらず、士のポケットには携帯電話が入っており、

何者かが土宛に電話をかけてきた。

”土がこの世界ですべき役割”と関係していることは間違いないだろう。

だが、彼には電話口の人物が発した単語の意味が分からない。

何のことかと思案を巡らせていると、彼の隣にいるユウスケが、にやにやと笑みを浮かべながら彼の肩をちよいちよいと指で触った。

「な、な。土。”ショー”ってのは、あれのことじゃないのか？」

”あれ”？」

ユウスケは肩を触っていた指を離し、別の方向へと向ける。

彼が指差す先には、【戦え！ぼくらの仮面ライダー】

と書かれた看板が立っており、奥行きある小さなステージが組まれていた。

「どういうことだよ」

「”ヒーローショー”だよヒーローショー！

テレビのヒーローたちがデパートの屋上とか、

遊園地の野外ステージに集合するあれだよ！子どもの頃に行ったことあるだろ」

「ねえ。っていうかそもそも、俺には過去の記憶がねえ」

「はいはい。そうでしたね」

「で、どうするんですか土君」

「気が進まんが、行ってみるしかねえ、だろ。お前らは？」

「それはもちろん！」

「遊園地を堪能してくるに決まってるんだろ！」

「分かったよ。とっとと行っちまえ」

(はぁ……、俺は…何をやってるんだろっなぁ)

ファイファイフィッシュ!

この遊園地は偉大なる『シヨツカー』の改造人間、

”北海マグロ男”がいただくツッシュ!

「出たわねシヨツカーの改造人間!あなたたちの好きにはさせないわ!」

ふん、たかだか女一人に何ができるサカナ!

お前たちイ、観客席の子どもを根こそぎ捕えて連れてくるツ

ッシュ!

(こんな小さなステージで、その舞台の中で)

ふっはっはっは!捕える捕える!どんどん捕えるオ!

子どもたちを捕らえて改造し、侵略用の兵器に作り替えるサ

カナ!

(奇声を上げる、怪物の着ぐるみなんか着て、さぁ)

ステージの上では、黒い全身タイツを着込んだ数人の男たちと、

「頭からマグロをかぶり」、「両手が魚のひれになっている」ような怪物が、

観客席の子どもを捕まえてステージに上げ、彼らを取り囲んでぐるぐると回っていた。

この物騒な格好をした怪物の中身はもちろん門矢士その人。彼は不気味なぐらい忠実に再現されたマグロを頭からかぶり、紫色のタイツの着ぐるみの中で、やる気をなくしてうなだれていた。

なお、念のために付け加えておくと、

”北海マグロ男”の声は事前に録音されていたもので、手動スイッチ操作で音が出る。

ゆえに、士がこのような台詞を実際にしゃべっているわけではない。念のため。

あ
(盛り上がってればいい。盛り上がってさえいればいいんだが、な

「このままじゃ……、みんな改造人間にされてしまうわ！
みんなー！お姉さんと一緒に叫んでー！せえーのっ」

かめーん、らいだー。

かめん、らいだー。

……。

うるとらまーん

(子どもの方も熱が入っていないんじゃないかあ、なあ)

士がやる気をなくしてうなだれるのも無理はない。

つかまってステージに連れてこられた子どもたちも、そのままステージにとどまる子どもたちやその親も、誰も彼からも、”熱意”を感じられなかったからだ。

それは周りのスーツアクターも一緒なようで、
着ぐるみの重さのせいで大げさにばたばたと動く士を除くと、

黒タイトの戦闘員たちは皆、猫背のままやる気なく、手に持ったおもちゃの剣をぷらぷらと振りまわしているだけ、なのだから。

生身ゆえに吹き替えもきかず、

それでも精一杯声を上げる司会のお姉さんがかわいそうに見えてくる。

(めんどくせえ。俺もこのままどこかでトングズラしちまうかね)

こんな辛気臭くて馬鹿らしいステージになんていられるか。

怪人役のスーツアクターである士ですら、ステージを降りようと階段に足をかける。

待てッ!!

しかし一人の男の一言が、ステージを降りようとする士の足を止めた。

言葉ではなく、その男が発する威圧感か、存在感か。

ステージ中央に作られた扉が開き、もうもつと上がるスモークと共に、

無機質な緑の仮面に、ピンクのマフラーをはためかせたこのショーの主演、

「仮面ライダー」がその姿を現したのである。

「出たなショッカーの改造人間！この遊園地をお前たちの好きにはさせない」

トオッ！

お決まりの決め台詞を口にし、北海マグロ男に向かい立つ仮面ライダー。
ポーズをとってただ立っているだけだというのに、着ぐるみ越しだ
というのに、
感じるただならぬ気迫に、土はにやりと笑い、冷や汗をかいた。

「で、出たなア仮面ライダー、この大口で飲み込んでやるサカナー
！」
「やってみるがいい！私の手で生け作りになった後でな！」
「こしやくなーッ」

ひれとなっっている両手をばたばたと動かし、仮面ライダーに襲いか
かるマグロ男。

ライダーはひらりと突進をかわして、すれ違いざまに左手で裏拳を
叩き込む。

トオッ、トオッ！ヤアッ！

歯切れのいい掛け声と共に、仮面ライダーの戦いが始まる。

マグロ男の手ビレチョップを腕でいなして抑え込み、右腕で必殺の
ライダーパンチ。

胸を打たれてよろけたところに、肩目掛けてのライダーチョップ。
どでかい顔に頬にこめかみに、体重の乗ったワンツーパンチ。

襟に相当する部分をつかんで右拳をがんと叩き込んだ後の回し
蹴り。

流れるような徒手空拳に手も足も出ないマグロ男。

だが、すごいのはそのコンビネーションだけではない。

（どうなってんだ？これだけの攻撃を浴びせられたつてのに、

着ぐるみ越しとはいえ、全然……『痛くねえ』」

空手や格闘技などにおいて、打撃を当てる寸前で止め、直撃と同時にすぐに引くことでダメージを軽減する「寸止め」。

それをコンビネーション攻撃の中で、ここまで正確に行える技術。士は目の前の男の戦闘技術に驚きを隠せないでいた。

「よしッ、とどめだッ」

そうこうしているうちにシヨも終盤。ライダーが怪人を倒す場面に差しかかる。

ライダーは足先で床をこつこつと叩くと、ぴよんと軽く跳びあがった。

それを見計らうかのように、ライダーが今まで立っていた場所が左右にスライドし、

中から簡易的なトランポリンが現れた。

ライダー、キイイイック！

トランポリンが出切ったぴったりのタイミングでライダーは着地。両足に体重と力を込めてぐぐつと踏み込むと、マグロ男の頭よりも高く跳びあがり、

顔目掛け必殺の飛び蹴りを見舞う。

頑丈な着ぐるみを着こんでいたがために怪我はなかったものの、マグロ男の着ぐるみの中に入った士は、その衝撃で体勢を崩し、横倒しになって脇腹をこすりながらステージの奥へと姿を消した。

「仮面ライダーが勝った、勝ったわー！ありがとう、仮面ライダー

！」

「私の力じゃない。みんなが応援してくれたからこそその勝利だ」

「ありがとうライダー。さあ、みんなもライダーに拍手ー」

ありがとう、ありがとうと大手を振って仮面ライダーに感謝するお姉さん。

ステージの中央に立ち、サムズアップで子どもたちに感謝の言葉を贈る仮面ライダー。

ショーのクライマックスにふさわしいラストだ。

子どもたちの表情がクライマックスに似つかわしくない渋い表情をしていたのと、

仮面ライダーに贈られる拍手がまばらだったことを除けば、だが。

ショーが終わって10分ほど後。

土は暑苦しい北海マグロ男の着ぐるみを脱ぎ、

ステージの裏で体に籠った熱気を逃がしていた。

「いててツ、本気でやるのはいいが、こっ派手にやられちゃあ世話ねえな」

いくら寸止めされたとはいえ、実際に蹴り飛ばされてしまったのは、痛みを感じずにはいられなかったのだ。

土はひりひりと痛む患部を右手で優しくさすりつつ、左手で近くにあった団扇うちわをつかんでぱたぱたと振った。

親父さんッ、それは一体どういうことですか！

どうもこっもねえ。終わりになんだよ、このショーも、わしら

もな！

そんな中、ステージ裏に響き渡るしゃがれた声のどでかい罵声。

おおっ、なんだか面白そうな話が展開してやがるな。

士は抜き足差し足忍び足で『スタッフルーム』と書かれた扉の前で聞き耳を立てた。

どういうことだと詰め寄ったのは、

血気盛んな仮面ライダーのスーツアクター、『藤岡タケシ』。

そんな彼を冷めた目つきで見つめ、淡々と話す初老の男性、

親父さんこと『平山トウベエ』。

タケシをなだめようとするトウベエの娘で司会のお姉さん担当の『ルリコ』に、

シヨツカー戦闘員を演じた若手のスーツアクターたちもそれに続く。

「理由……理由はなんです！ちゃんとした理由がなきゃ納得できません！」

「そつよお父さん。タケシさんもジロウさんもセイジさんもエイトクさんも、

私たちがみんな頑張ってきたじゃない！いきなり終わりなんて誰も納得しないわ！」

「どうもごうもねえだろう。」

仮面ライダーシリーズが終わって早十年以上。子どもの興味は戦隊にウルトラ、

スーパーヒーローシリーズに移っちまって、もう目もくれない。

今の子供たちが求めているのはもう、仮面ライダーなんかじゃねえんだよ」

トウベエの言葉に、皆重々しい表情で言葉をつぐんでしまう。
『仮面ライダーは古い』という言葉を確認たくないからなのか。
娘のルミコが拳をぎゅっと握りしめ、トウベエに食ってかかった。

「ひどい……ひどすぎるわお父さん！」

みんなが、タケシさんがどれだけ仮面ライダーに入れ込んでたか、知ってるくせに！」

トウベエは顔を下げ、彼女たちに見えない角度で顔をしかめて唇をぶるぶると震わせた。

馬鹿野郎、そんなことは分かってんだ。

誰が好きでこんなこと言わなきゃならねえ。

そう言えばどれだけ楽だっただろう。だが、言うわけにはいかなかった。

これはもう決定事項だ。自分の力じゃどうしようもない。

トウベエは自分ひとりが矢面に立って、
彼らの憤りと悲しみを受け止めようとしていたのだ。

そんなトウベエの気持ちを知ってか知らずか、タケシは一人、うなだれ、うつろな表情のまま出入り口のドアに手をかけた。

「おいタケシ、どこに行くつもりだ」

「少し、外の空気を吸ってきます」

ちよつと待ちな。

聞き捨てならねえ台詞だな、ああ？お前らちよつと、そこに座れ。

聞き耳を立てていたのにドアを開ける輩が現れたからか、

彼らの話に得心がいかず、堪忍袋の緒が切れたのか、士は部屋を出て行こうとするタケシの前に立ちはだかり、ずんずんと部屋の中央部に押し入った。

「お前は……、今日入った新入り！」

「親父さんになんつつ口のきき方だ」

「あんまり舐めた口聞いてっつと」

士は三人のスーツアクターの言葉を無視し、手で軽く押しのと、トウベエの前に立って口を開く。

「話はドア越しに聞かせてもらったぜ。

そりゃあ人気の出ねえもん金は出せない。当然だな。

だが、お前らはそれでいいのか？”ライダーだから”、”ジャリ番だから”と罵られ、

自分たちが大好きだったものに折り合いつけてやめなきゃならないんだぞ。

それで、本当にいいのかよ”

上から目線に小馬鹿にしたような物言い。トウベエは士の言葉に怒りを覚え、

彼の胸倉を掴んで抑え込んでいた感情を彼にぶちまけた。

「ンなこたあ分かってんだよ。誰が好きでこの仕事辞めたいなんて言った。

だがな、今や”仮面ライダー”なんて過去の遺物なんだ。時代遅れなんだよ”

彼の言い分をかき消すかのようにまくしたてるトウベエ。

士は胸倉をつかむ手を軽く引き剥がすと、鋭い目つきで切り返す。

「そう、そこだ。アンタの言い分が一番気に入らねえのはな。過去の遺物？時代遅れ？大いに結構じゃあねえか。」

「ならどうして、その時代遅れで古臭いものを”流行らせよう”しない？」

「そんなもの……できるものならやって」

「はっ、どうだか。お前らはただ現実から逃げてただけなんじゃないのか？」

”ライダーは時代遅れ”だって現実から目をそらしたいだけだったんじゃないのか。

過去の栄光にすがってないでちったあ前を試してみる。

目の前に広がっているのは残酷な現実だけじゃない。

お前らの夢や情熱だって、その中に混ざっているんじゃないのか？」

そうか、確かに、そうかもしれない。

自分の言い分を押し通そうと怒鳴り続けていたトウベエが押し黙る。士の言葉で少しだけ冷静さを取り戻したのだろうか。

心に迷いが生じ、押し黙ったトウベエを見て、

士は今だとばかりに、どんと壁を叩いて一拍置いた後に言う。

「確かあんたらがステージを畳む前にあと一回公演があるんだっただ。そこで、だ。」

そいつをこの俺が預かる。ステージ、演出、宣伝……その全部を仕切らせてもらう。

ああ、脚本はいい。そっちは俺が即興アドリブでなんとかする」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。あんたの言いたいことは分かった。わかったが、何故そこまでしてくれるんだ？」

タケシの問いに、士はふんと鼻を鳴らし、

ライドブッカードから一枚のライダーカードを取り出して答えた。

「愚問、だな。俺も……『通りすがりの仮面ライダー』、だからに決まっているだろ。」

仮面ライダーが時代遅れだの過去の産物だって言われて馬鹿にされるのはしゃく」

はあ？

ここで、士が全く予期せぬ事態が起こった。

カードを見たタケシが、つられてそれを見たトウベエとルリコが、皆素っ頓狂な声を上げたのだ。

「おい、おいおいおいおい。なんだその人を小馬鹿にしたような反応は」

「だって……」

「なあ？」

「お前なあ、そのどこが”仮面ライダー”だって言うんだ？」

ああ、そういうことか。

士は手に持つ『ディケイド』のカードを見て思い直す。

自分で言うのは何だが、ディケイドを見て『仮面ライダーだ』と思うのは、

当の本人ならまだしも、そうでない一般人にはちと厳しい。

士は気を取り直し、ライドブッカーからもう一枚のライダーカードを取り出した。

「ああわかった。確かに初見でこれは厳しいな。なら、こっちはどうだ？」

『仮面ライダークウガ』。超古代の力を得て、未確認生命体から人間を守る戦士。

これが仮面ライダーでなくて、何が仮面ライダーだと言っのか。だが意外にも、それを見る三人の表情は渋い。

「なんだなんだ。これを見ても仮面ライダーじゃない、ってのたまうつもりか？」

「そりゃそうだろう。こりゃあ”クウガ”だろ？ 『オーバーソウルジャー 超古代戦士』の」

「はあ？」

今度は士が素っ頓狂な声を上げた。

自分の全く知り得ない単語が出てきたのだからしょうがない。

聞き慣れない不可思議な単語に困惑する士は、

ライドブッカーから他のライダーカードを取り出し、トウベエやタケシ、ルリコに見せた。

「じゃあ、これはどうだ？」アギト”に”龍騎”だ」

「へえ、懐かしいなあ。『ゴッドグレイド 神超人アギト』の主人公だろ、これ」

「『カード 駆斗ヒーロー龍騎』よね？この鉄仮面のヒーロー。」

押し入れにアドベントカードあったかしたら。あれ、結構集めてたのよねー」

なんてこった。

この世界で自分たちの常識は通用しない。士ははっきりとそう認識した。

そうと分かればいちいち愚痴るのはお門違いで時間の無駄。

士ははあとため息をつくと、手で皆を御しながら言う。

「もういい、わかった。『そういう世界もある』ってことで理解する」

「世界？何の話だ？」

「そんなことはどうでもいい。とにかくだ。今から今日最後の公演

まであと4時間ある。

俺に任せればその公演、観客大入り満員で、拍手喝采のステージにしてやる。必ずな。

あとはお前たちのキモチとやる気次第だ。どうする？やるのか、やらないのか！」

「親父さん。彼に、任せてみませんか？」

「なッ！何を言うんだタケシ！こんな馬の骨とも知れぬ若造に舞台を仕切らせるなど」

当然の答えだ。今日入った新人に、ずぶの素人に、

自分が今まで続けてきた舞台を仕切らせるわけにはいかない。

だからこそ、同じ思いのはずのタケシが、自分の考えに刃向う。

トウベエはそのことに動揺してしまったのだ。

タケシは深呼吸して一拍置くと、彼にその理由を話し始める。

「俺……『納得』がしたいんですよ。興行がうまくいかないんじゃないしょうがない。

そんなこと、言葉の上じゃあ分かっているんです。でも、でも！

俺の心は、俺の気持ちは！そんな言葉や書類なんかじゃ納得できない！

ガキの頃からずっとずっと仮面ライダーに憧れて、この道に入ったんです。

スーツアクターになるころには、いつの間にかライダーも終わってましたけど、

おやっさんがここでライダーをやらせてくれるって言うてくれて…

…、
すごく嬉しかったんです。

だからこそ半端な気持ちで終わるなんて俺にはできない！

たと思いつきりコケようと、時代遅れだって罵られようと、

俺は納得してステージを降りたいんです。自分の夢に、嘘はつきたくない」

そうか。お前はそう思っているのか。ならトウベエは渋い顔で頭を掻くと、土を軽く睨みつけながらこう言った。

「分かった。だが、できるのか？君みたいな若造に」「俺に苦手なものはない。写真を撮ること以外は、な」

土は”親父さん”の顔をびっと人差し指で差して、自信ありげにやりと笑った。

時は、満ちた。

今こそ、この穴ぐらを後にし、我々の存在を愚かな人間どもに知らしめる頃合！

仲間たちよ、生え抜きの精鋭よ。集え、我が元に！”首領閣下”の元に！

偉大なる組織『シヨッカー』の旗の元にッ！

イイッ！！

地下に造られた大広間の中で、黒タイツ黒マスクの戦闘員の叫び声が響く。そんな彼らの決起の叫びを、屋根裏からにやにやと笑いながら見つめる一人の青年がいた。

「平凡な世界でつまらないかと思ったけど、なかなか面白そうなお
とをしているね。
多くの改造人間を擁する秘密組織『シヨツカー』、か。君たちのお
宝、いただくよ」

青年・海東大樹かいとう だいしきは、見張りの戦闘員から奪ったマスクをかぶり、
アジトの奥へと消えてゆく

「大決戦！超ウルトラ8兄弟」という映画がありました。

ウルトラマンが存在しないパラレルワールドで、
ティガ、ダイナ、ガイア、ウルトラマン、セブン、ジャック、エー
ス、

ついでに別世界からやってきたメビウスが怪獣たちと大決戦を繰り
広げる映画です。

ある意味「ディケイド」の前身みたいなお話ですね。

では、それをライダーでやったらどうなるか？

そういうイメージでリ・イメージネーションしたのが、このお話です。

途中から「すごいよマサルさん」のとある話を出したくなって、
少しずつブレていったような気がしなくてもないですが。

結局”ホンモノの”ライダー1号も、”顔面バーコード男”も出て
いなくてごめんなさい。

次回はそう、遠くないうちに。

ライダー1号誕生！怪奇顔面バーコード男 後篇 【原作：仮面ライダー】

はあ。なんで俺はこんなことをしているんだろう。

「すっげー！本物のクウガだー」

「くうがー、こっち向いてー！」

「あ、ああ」

「こらこら、んなひきつった顔してねえでちやきちやき働け」

「今の俺の顔見てそんなこと分かるのかよっ」

「そりゃあお前は……」クウガ”だし、な”

「わけわかんねえよ、もう」

「はい、アイスコーヒー二つ、お待たせしましたあ」

「さあさ。遊園地で遊んだ記念に写真を一枚。」

今ならフレームも選び放題ですよお」

「あ、”ファンガイアハンターキバ”の『キバ美ちゃん』だー」

「ちっちゃいけど、すっごくやらかいよ。ほーら、ふにふにー」

「あれやってよあれー」きばばばーっ『って」

「あん、もうッ！変なところ触らないでってばッ！

子どもって遠慮も節操もなくてキライ！」

仮面ライダーショーを終え、昼時となった光写真館は、

「お休み処」と看板が掲げられているせいか、

はしやぎ疲れた子どもやその親たちであふれかえっていた。

もちろん、写真館一行にそんな面倒なことをする気も理由もなかったのだが、

シヨールから帰ってきた土が言葉巧みに彼らを誘導し、
気がつくとならば土によって言いように使われることとなったのだ。
クウスケはクウガに変身して目をきらきらと輝かす子どもたちをあ
やし、
栄次郎は入園記念の家族写真撮影に追われ、
夏海はメイド服を身に纏って、お客様のアイスコーヒー準備に大忙
し。

中でも悲惨なのはキバーラで、子どもの掌にすらすらすつぱり収まるそ
の体は、
彼らの格好のオモチャであり、あんなことやこんなことを強要され
ていた。

そんな中、ひとり写真館の前で”ピラ”を配っていた土は、
滴る汗をタオルで拭くと、残ったピラの束をクウガに押し付けて言
った。

「残りはきつかり100部。後はお前に任せた」

「おい、どこに行くんだよ土」

「準備だ準備。俺がないからってサボんなよ」

「なんの準備だっただよまったく」

ピラを押しつけ、遊園地の中心へと向かう土を、
クウガは不満げな顔と態度で見送った。

彼の足元に、麦わら帽子の良く似合う小さな男の子がやってきて、
クウガの膝小僧をつんつんとつつく。

「ねえねえクウガさん。このチラシはなあに？」

「あ、ああ……これかい？俺もよくは知らないんだけど、

す……ごくカッコいいヒーローが見られるんだってさ」

「す……ごくカッコいいの？クウガさんよりも、もっと？」

「あ、ああ……。俺よりも……。もっと、たぶん」

見たことも聞いたこともない仮面ライダーを褒めるのも大変だと、ユウスケはクウガの仮面の中で深くため息をついた。

「ユウスケ！落ち込んでないでこっち手伝ってください！

アイスコーヒー、Aテーブルに3人前、Bテーブルに4人前です！」

「あん！もう！いやん！助けて！助けてユウスケエ！」

「ちくしょう！落ち込んでいる暇すらなしかよッ！ああもう！」

光写真館一行が、子どもやその親たちを相手に客商売をやっていたその頃。

士は遊園地の奥に立つ『大ホール』に、彼らを招き入れていた。

大舞台で演技をしたことのないスーツアクターたちは、

ゆづに700人近くは入るほどの円形の客席に、クーラー付きの屋

内ホール、

幕やトランポリンに加えて、アクション用のワイヤーや、

映像投影用のプロジェクターを完備した、

最新鋭の設備のホールに目を丸くし、ただただ圧倒されていた。

「おいおい、こりゃあすつげえな」

「大舞台を用意するとは聞いていたが、ここを押さえられるなんて」

「おい、新入り。一体どんなカラクリを使っただんだ？」

自分たちのような人気もない金食い虫に何故こんな場所が借りられ

る？

彼らが考えるであろう当然の問いに、土はふふんと鼻を鳴らして答えた。

「そんなの簡単だ。」平山トウベエ”名義で、この公演を大入り満員にできなきゃ、この遊園地から出ていくつて、経営者たちに言っただけだ。貸与料も前借りだ」

なんだつて？

この大ホールで、どんな素晴らしい演技をしてやるうかと、期待に胸を躍らせていたスーツアクターたちから、タケシやルリコやトウベエの顔からさつと血の気が引いた。

かろうじて平静を保っていられたタケシとルリコは、訳を問いただすため土に掴みかかる。

「なっ！門矢君、なんてことを！」

「そんなの！無理に決まってるじゃない！正気なの？」

今更なんだ今更。まったく、度胸のねえやつらだな。

土は二人の手を強引に引き剥がすと、

決意と覚悟に満ちた目で彼らを威嚇し、口を開いた。

「お前たちは俺に賭けた。それこそ、何もかも全てをな。だから俺は、それ相応の舞台を用意してやっただけだ。だったらもう、女々しいことは言いつこなしだぜ」

「そうは言うが、勝算は…！勝算はあるのか！？」

「負けたら私たち、何もかもを失っちゃうのよ？」

「そんなこと俺が知るもんか。」

それを決めんのはお前ら全員の頑張り次第だつてことを忘れるなよ。俺はあくまで、” 相応の場 ” を用意してやっただけなんだからな」

「親父さん……！親父さんはどうなんですか！？」

「そうよお父さん！自分の名義でこんなことされて」

助けてやると言いつつ、この横暴で無謀な態度。

タケシとルリコは自分たちの後方で、

腕を組んで仁王立ちをしているトウベエに助けを求めた。

しかし、彼は目を閉じて姿勢と表情を崩さず、何も答えようとはしない。

「さすがに冷静だな、あんたは」

「勘違いするなよ若造。こんな横暴、許せるわけがないだろう。」

俺一人がどうにかなるならまだしも、あいつらを全員巻き込まれたらな」

「じゃあ、何故反抗しない」

「それでも、俺は君に賭けたからな。」

ただ堕ちてゆくしかないこの状況を” 壊そう ” とする君の考えに、な。

しかもその上で” 全てを取り仕切る ” とまで言ってきた。

そうなりや俺に出来ることはもう、その行く末を見守ることしかねえだろうが」

分かってんじゃねエか。助かるぜ。

士は腹をくくつたであるトウベエの険しい表情に、

仲間を想つ気持ちと、統率者としての覚悟を読み取り、舌を巻いた。

「アンタ、こんなところで経営者やってるよりもさ、

ギャンブラーや教師でもやってた方がサマになるんじゃないかねえのか？」
「余計な御世話だ」

「そりゃそうだ、っと。さっ、時間がないぞ。いつもとは勝手が違うんだ。」

動きも声の張り方も音響もしっかり慣らしておけよ」「

自分たちの”親父さん”、平山トウベエが信じると言った。

この男を。こののっぴきならない、崖っぷちぎりぎりの状況を。文句を言わんとするスタッフは、誰もいなくなっていた。

士はぱんぱんと手を叩き、スタッフを四方に散らせる。

シヨ一の始まる午後5時まで時間の残りも少なくなっていた。

「セイジ。お前は今まで以上にオーバーリアクションで行け。

広さも奥行きも、今までのステージの倍以上だからな。

ジロウ、バック転でライダーの攻撃をかわせ。

お前のその巨体で宙返りなんか、客はできっこないって思うだろうしな。

エイトク、お前の足技も重要だぞ。しっかりと練習しておけ」

照明・演出・小道具などは事前の口添えでなんとかなるが、

ステージに合わせた演技はそうはいかない。

士は三人のスーツアクターに対し、直接演技指導を行っていた。

そんな中、仮面ライダーのマスクを片手に、

藤岡タケシが士に声を掛けてきた。

「なあ、門矢君。なんで君はそこまで俺たちにしてくれるんだ？」

「お前たち、じゃねえ。お前 のためだ」

俺の、ため？

タケシはなんでそうなるのかと首を傾げた。
そんな彼を尻目に、土の話は続く。

「そうだ。アンタのあのアクションだ。俺はあのアクションに惚れ込んだ。」

ありやあただ長く続けて身に付くようなもんじゃない。
心の底から 仮面ライダー が好きでなきゃできるものじゃない。
それが誰にも知られずに消えていくのが、たまらなく惜しいと思っ
た。それだけだ」

夢なんて、当の昔に捨てたはずだったのにな。
それでもまだ、捨てきれないのか、俺は……。
まったく、女々しいやつだよな。俺ってやつは

タケシの頬を、一筋の涙が伝った。

「ありがとう、な」
「なんだよ、柄じゃあねえぜ。そんなナリして泣いてんのか？
大の男がんなとこで泣いてんじゃねえよ。
ほら、次はお前のアクションを見る番だ。手抜きなんかしたら承知
しねえからな」

タケシは言葉の代わりに、持っていたライダーのマスクを深々と被
り、
見得切りのお決まりのポーズを取って、土に自身のやる気を誇示す
る。

それを見た土はにやりと笑ってタケシの肩を軽く叩いた。

「その意気だ。しっかりやるうぜ、”相棒”」

「ほえーっ、最近のヒーローショーってのはすごいんだねえー」
「なんか分不相応って感じですね」

ショーの開幕15分前。

”バイト代”と称して土から渡された入場券を片手に、
夏海と栄次郎は、ショーの行われる大ホールへと足を運んでいた。

彼女たちが驚いたのは、ホール内の”人の入り”だ。

700人近く収容できる大ホールの中が、親子連れでいっぱいにな
っており、

皆一様に、ヒーローの登場を待ちかね、幕のかかった舞台を見つめ
ている。

「はあ、はあ、はあ……、間に合った？」

「ユウスケ。そんなに息を切らして、どこに行ってたんですか？

あ、そうだ。土君が、ユウスケが来たらこれを、って言ってました
けど」

「おおっ！」オロナミンQ”じゃん！サンキュー、夏海ちゃん」

ユウスケは手渡されたオロナミンQをぐぐいっつと飲み干し、
溢れる炭酸を咳払いで吐きだして、彼女の問いに答えた。

「どこも何も……、この遊園地全部を回ってたんだよ。

聞いてくれよ夏海ちゃん。急に土から電話がかかってきてさあ。

”ビラを増刷したから、遊園地中を回って配ってこい”って言うん
だぜ。

しかも、”クウガのまま”でなんていうから、いやもう、疲れた疲
れた」

「人遣い荒いですね。いつものことですけど」

「まっ、もう慣れたけどさ。それで、士は？」

「ええ。士君は」

時を同じくして、ホール裏の楽屋の中。

門矢士はスーツアクターや裏方スタッフたち全てを集め、

開場前の最終チェックを行っていた。

「ここは音響の設備も使える機材もあの小さな舞台とは全然違うからな、

それに合わせて俺が少し台本の中身を脚色させてもらった。

声は事前に俺が吹きこみ済みだし、アクションはさっき合わせた通り。

アンタらがやるべきことは今までと何も変わらない。

これでコケたら全て終わりだからな、各々悔いのないよう存分に動くこと。

何か質問はないか？準備はいいか？覚悟は……聞く間でもねえよな」

「ちょっと待ってくれ。この台本……『敵』の名前が書いていないぞ。

いや名前だけじゃない。台詞すら真っ白じゃないか。一体これはどういうことだ」

一人高らかに手を上げる藤岡タケシ。士は面倒くさそうに彼を指で差し、答えた。

「ああ、ああ。言い忘れていた。

せっかくの晴れ舞台に『北海マグロ男』じゃカッコ付かないだろ。

敵の方は俺が演る。台詞も織り込み済みだから何の問題もない」

「しかし、こちらにも手順が……」

「それこそ問題ない。お前が壇上でやることは”敵を倒す”ことだけだ。
いちいち手順なんかにとらわれる必要なんてねえから安心しろ。
ああっ、と。それともう一つ。各自、ヘッドセットを頭につけてお
けよ。」

公演中俺が適宜指示を出すからな」

さ、さ。散った散った。

士は話を切り上げると、両手をぱんぱんと叩いて
皆をステージ内各所に追い払った。

「本当に……大丈夫なんだろうか」

タケシは仮面ライダーのマスクを被り、小さくため息をついた。

午後5時丁度。観客たちの大きな拍手と共に、
最後の「仮面ライダーショー」が幕を開けた。
幕の中から司会のルリコが姿を現し、
下手をすればこれが最後なるかも、という辛さを微塵も感じさせな
い、
明るい笑顔とはきはきとした声でショーは始まる。

「みんなあー！今日は仮面ライダーショーに来てくれてどうもあり
がとう！
最初っから最後まで楽しんでいってねー！」

ふは、ふははははははは

「何！何なの！？この声は……」

場内全てのスピーカーに轟く謎の声。

ルリコは大げさに上下を見まわし、体を震わせる。

楽しむ、だと……？そんなことは俺が許さん。この……、

「『大シヨツカー』」大幹部”の、『顔面バーコード男』がなッ！」

もうもうと立ち上るスモークの中から現れた謎の怪人。

ピンク色に黒い縞の入った、緑色に輝く複眼。

はた目から見てみると、奇妙なことこの上ない。

裏方のスタッフが、視界のルリコが、大入り満員の大観衆が静まり返った。

一瞬の間を置いて”あれは一体何だ”というひそひそ話が会場内で渦を巻く。

”デイケイド”の姿を何の準備もなく見たのだから、仕方のない話ではあるのだが。

なお、少し疲^{たん}が絡んだようなこの声は、土本人の裏声である。

おいおい、そこまで引かなくたっていいだろうが。

デイケイドはバーコード顔の仮面の下でため息をつくと、

腰に差した二本の短剣を、先ほど自分が録音した声に合わせて構えた。

もちろんそれは『ライドブツカー』ではない。

第一、このような場でそんなものを振り回せるわけがない。

ここで行われているヒーローショーの小道具を一つ失敬して来たのだ。

ディケイドは変身前に頭に装着したヘッドセットを用い、小声でルリコに促す。

司会進行役までもが口をあんどりと開けていられては話が進まないからだ。

「馬鹿ッ、何ぼけーっとしてるんだ。台詞、台詞」

「あ。ああ……ッ。か、かか、顔面バーコード男ですってエー!？」

「ふん、飛んで火に入る夏の虫とはこのことだな。丁度いい。

ここにいる奴らは全て、この俺の配下『バーコードジン』にしてくれる!」

えええー?

バーコードジンって、あの怪人とおんなじになっちゃうのぉ?

いやだよー、そんなのいやー!

「ふははははは!まずは貴様だ女!お前をバーコードジンに改造してくれるッ!」

「きゃ、きゃーっ!いやーっ!!誰か…誰か助けてエー!」

くそう……あんにやろうどもめ…ッ、好き放題言いやがって!子どもを怖がらせる怪人としては最高の評価を受けたものの、ライダー個人としては最悪の評価を大入り満員の大衆に受けたディケイドは、

短剣を小刻みに振りながらじりじりとルリコの前に迫る。

ステージの右端に追い込まれ、ぶるぶると体を震わせるルリコに、それをかわいそうだ、なんてやつだと罵る子どもたちの罵声が飛び交う会場。

ディケイドは短剣を折らんばかりの勢いで拳を強く握りしめ、
なんとか怒りを抑え込んでいた。

待てッ！！

そこに響く若い男の高らかな叫び声。

ルリコが、観客の子どもたちが、声を吹きこんだディケイドまでも
が、
何が起こったかと声のする方向へと顔を向ける。

「そこまでだ怪人顔面バーコード男！

貴様のその狼藉、この”仮面ライダー”が払ってくれようぞ！」

白いスモークの中から颯爽とその姿を現し、

異様かつおぞましい怪人からルリコを守らんとする正義のヒーロー。
子どもはおるか、一緒に来ていた親たちも、

仮面ライダーの登場に惜しみのない歓声と拍手を送った。

「親父さん……見てくださいよこれ」

「こんな拍手と歓声……。ここ10年ぐらい聞いたことがない！」

「ああ、すごい、すごいぞこれは！」

裏方たちはステージの後ろから、そんな観客の様子を愛おしげに眺
めていた。

特にトウベエはその様子に目を細めて、少し涙を浮かべてすらいた。

くそ……う、自分から言い出したこととはいえ、何だこの敗
北感は！

だが、そうなると気分が悪いのは皆に罵倒されるディケイドだ。

彼は手に持った短剣を壊してしまいかねない勢いで大きく振ると、ベルトの脇に添えられた、首のスピーカーのスイッチを入れた。

「やはり来たな、仮面ライダー！」

ならば、お前からバーコードジンにしてくれるッ！」

「いいだろう、やってみるがいい」

仮面ライダーは両手を突き出して構え、

ディケイドは両手の短剣をびゅんびゅんと、音がするほどの勢いで振り回す。

今まで嘲りや笑っていた人々は押し黙り、その行く末を固唾を呑んで見守る。

死ねエ、仮面ライダー！

痰の絡んだ歯切れの悪い叫び声と共に、ディケイドが動いた。

仮面ライダーの体を挟み込むようにして斬りかかる。

だが、ライダーは半円を描くようにして腰の動きだけで難なくそれをかわし、

ディケイドの脇腹に必殺の右ストレートを叩き込む。

わっ、と子どもたちのけたたましい歓声が上がった。

ぐ……ッ！まだまだア！

変身している以上、常人の攻撃など意に介さないが、

ディケイドはわざと大げさによるけ、仮面ライダーの強さを演出。

が、すぐに体勢を立て直し、ライダーの体に両の短剣を叩き込んだ。もちろん、手加減に手加減を重ねて、だが。

「ふはははは！どうした仮面ライダー！この程度かッ!？」

「さすがは”大”シヨツカーの”大”幹部！一筋縄ではいかない…

…か。
なら、出し惜しみはナシだっ！」

仮面ライダーは一旦距離を置き、右足先でちょんちょんと地面を小突いた。

それを見た裏方スタッフがボタン操作で床をスライドさせ、床下から小さなランポリンがせり上がった。

ライダーア、フライングチョップ！

それを見計らってランポリンに乗ったライダーは、
ディケイドを飛び越すほどの高さまで飛び上がり、
彼に左腕から繰り出す強烈なチョップ攻撃を浴びせた。

たまらず足をぐらつかせるディケイド。だがライダーの攻撃は止まらない。

ライダー、フライングニーキック！

チョップ後の着地時にもう一度ランポリンの上に乗り、
ディケイドの顎を捉えて繰り出される膝蹴りに、

ライダー返しッ！

さらにランポリンを踏みこんで飛び上がり、
回転しつつすれ違いざまに頭を掴んでの、強引な投げ技。

ライダー、スクリューキイック！

着地と同時にまたも地面を小突き、ランポリンを出すよう促し、
うつ伏せになり、起き上がるうとするディケイドを狙って放たれる、
必殺の回転キック。

身に纏うその装甲のおかげで効きはしないものの、
こつも連続で攻撃されてはたまったものではない。

立ち上がるうとした際に喰らったスクリューキックで、
デイケイドは地面を擦って吹っ飛び、仰向け大の字で床に叩きつけられた。

ああくそ、痛ってエなあもつ。

デイケイドは背中をさすりながら、ヘッドセットで仮面ライダーに促した。

「タケシ、タケシ！連続技はもういい！次だ次」

「つい本気でやってしまったんだが……大丈夫か、門矢君」

「俺のことは気にしなくていい。」

それより次は戦闘員相手の大立ち回りだ。氣イ引きしめてかかれよ」

「おのれ……イ、出てこい、大シヨツカーの兵士たち！」

デイケイドは右手を大きく広げ、

ステージの裏で待機している戦闘員たちを呼びつけた。

その、はずだった。

「あれ？」

「なんだ？どうした？何故誰も来ない」

待てども待てどもステージ裏からは誰も来ない。

聞こえなかったのかともう一度台詞を流すも、反応はない。

一体、どうしたというのだろう。

ふふ、ふははははははは

「何だ!？」

「何だッ」

地面の下から声がする。いや、声だけではない。心なしか『揺れている』感じすらある。二人は驚き、視線を地面に移した。

ははははは。はーっはっはっは！

その時だった。

不気味な地鳴りと共に床を突き抜け、何者かが飛び出して来た。そしてそれと同時に、ステージ裏から数人の戦闘員たちが現れた。タケシの知り合いの者ではない。彼らと同じ格好をした別の誰かだ。

地面の下から現れた何か。

ぬめぬめとした水色の体表に、両手と背中には流線形のヒレ。

”イルカ”のような顔をしたその『生物』は、

二人のライダーを前にし臆することなく口を開く。

「俺様は偉大なる”シヨツカー”の精鋭怪人『イルカイド』！
喜べ人民達よ、貴様らは選ばれたのだ！偉大なる”シヨツカー”にな！

貴様らは皆シヨツカーの改造人間となるのだ！

大人は戦闘員に！子どもは頭に爆弾を埋め込んで人間地雷にしてくれようぞ！」

突如現れた謎の怪人・イルカイド。予期せぬ事態にざわつく観客。だが、不測の事態にざわついているのはシヨの関係者も同じであった。

「門矢君、あれも君の演出の一つか？」

「なわきやあるか。たかだか数時間であんなもんを新造できるかっての。」

と、なるとこいつらは……」

二人は顎に手を当て、こいつは何か、この状況は何なんだと思案する。

その結果、二人は同じタイミングで、同じ結論に達した。

本物の”改造人間”、なのか？

「あいつが本当に改造人間だとしたら、どうするんだ？ ショーを中止して、観客を逃がすか？」

「待て、こんな大人満員の中でんなこと言ってみろ。」

無駄に観客の動揺と混乱を煽って大惨事になっちまう」

「だが、このまま放っておくわけにも……」

「そうだ。その通りだ。だから」

「だから？」

デイケイドはタケシの言葉を遮ると、

首に取り付けられたスピーカーを引きちぎり、

腰を落として悪ぶった態度を崩さないままイルカイドに斬りかかった。

「シヨツカー？シヨツカーだあ？ハッ、小せえ小せエ。」

笑わせんなよ、世界を征服するのはこの”大シヨツカー”だ」

「大”シヨツカー”だと？そんな派閥、聞いたことがない！

貴様、偉大なるシヨツカー首領に与えられたその力を、

くだらない下剋上などに使おうというのかッ！」

「俺はお前らみたいなのるい組織に収まるようなタマじゃねえ。」

せつかくだ。ここでお前をぶっ倒して、宣戦布告でもしてやるかね！」

「何を！」

ATTACK RIDE 「SLASH」

ディケイドは持っていたおもちゃの剣を投げ捨てると、

腰のライドブッカーをソードモードにして構えて再び斬りかかった。

しかし、どうしたことだろう。

ディケイドの攻撃は全て空を切り、かすりもしない。

左右に振り抜く斬撃は全てヒレで受け止め、受け流され、

斬撃を囷にした拳の一撃も、全て紙一重でかわされてしまうのだ。

「な、何だッ！」

「はっはっはっはっ、このイルカイド様に同じ手が二度も通じると思ってたか！」

人間の他では猿と同等、いいやそれ以上に発達した知能を持つイロカ！

その脳を人間の脳に移植し、さらなる思考能力を獲得したのがこの俺様！

貴様の攻撃のクセなど、一度見さえすれば覚えてしまえるのだよ！

これでもくらえイ！イルカイドブレードッ！」

イルカイドはディケイドを壁まで追い詰め、

両腕の鋭利な”ヒレ”で、彼の腕関節を突き刺した。

突き刺さったヒレはイルカイドの体を離れて、新しいものと取って代わり、

ドリルのようにきりもみ回転をしてディケイドを壁に釘付けにしてしまっ。

「く、くそっ！自分のヒレを飛び道具にするなんて、イルカのすることじゃねえだろ！」

「言ってる言ってる。これで分かったらうバーコード男。」

”シヨツカー”という器は貴様などでは満たせないことがな！
さあ、ゆけい戦闘員！人間どもを狩り尽くすのだア！」

イルカイドは左手を振り上げ、
一緒にやってきた戦闘員に、再び観客狩りを促すが、

させるかッ！！

正門を勢いよく開け放し、飛び蹴りと共に”クウガ”が戦闘に介入。
徒手空拳で並みいる戦闘員を薙ぎ倒すと、
壁に釘付けにされたディケイドにサムズアップを決めた。

「ユウスケか！」

「事情は何となく分かった！俺にも一枚かませろ」

「だが……」

「分かってるよ、お前の考えぐらい！」

「会場のみんなには指一本触れさせない！」

クウガは並みいる戦闘員たちをちぎっては投げ、
手すりの棒を抜いてドラゴンフォームに変身し、
ロッドを叩きつけて戦闘員を客席からステージ下に追い返した。

「助太刀するぜ仮面ライダー！一緒に戦おう！」

「あ、ありがとう。感謝する」

クウガと共に、戦闘員たち相手に大立ち回りを繰り広げる仮面ライダー。日本古来の特撮によくある”助っ人戦士”の介入に、会場のちびっ子たちは大盛り上がり。

ディケイドは、もうしょうがないとばかりに、

ヘッドセットを使いステージの隅で本当に震えているルリコに指示を与えた。

「ああ、もう！しょうがねえなあ！ルリコ！お前も働け！」

「えっ！？あ、あたし？」

「こうなったら煽れ！煽れるだけ煽っちまえ！それが一番だ！」

異常事態の中、急に話を振られて困惑するルリコ。

だが、自分だってプロの司会者なんだと勇気と声を奮い立たせ、台本にない台詞を即興で作り、観客たちに呼びかけた。

「すごい！すごい！クウガよ！オーバーソールジャー超古代戦士クウガが助けに来てくれたんだわ！」

でも、安心してはいられない。会場のみんなー！

みんなもクウガに力を貸してあげて欲しいの！手伝ってくれるおともだちはー？」

はあーい！

はい！はい！はあーい！

ぼくもっ、ぼくも！

あたしもー！！

クウガ、がんばってえー！

観客の多くは純真無垢な子供たちだ。この呼びかけに応じないわけがない。

皆この事態がシヨーであると信じ込み、会場は二大ヒーローへの力強く、暖かな声援で包まれた。

あねさん、見てるか？

俺も……、子どもたちに声援を送られるようになったんだぜ。

ユウスケはクウガの仮面の下で頬を濡らし、ずずつと鼻をかむと、

「来いッ、シヨツカーの戦闘員！」

手に持ったドラゴンロッドを威勢良くぶんぶんと振り回し、戦闘員たちをばっさばっさと薙ぎ倒して行ったのだった。

「ぐ、ううッ！ここにきてまた反乱分子かッ！者共、かかれ、かかれーっ！」

だが、声援で火がついたのはシヨツカー陣営も同じであった。

イルカイドは激昂し、地下の戦闘員たちにさらに増援をかける。

今やシヨーの壇上とその下の踊り場は、

仰向けに寝っ転がる戦闘員たちで埋め尽くされていた。

そんな中、仮面ライダーは自分に襲い来る戦闘員二人を、

ドロップキックで強く蹴り飛ばして距離を取ると、

再び壇上が上がって、戦闘員を指揮するイルカイドに向かっていった。

「おい、何をしているんだタケシ！」

「ここまで歓声が上がっていて、助っ人が来ていて、

シヨ一の主役が何もしないんじゃないじゃ、カツコ付かないだろう？」

「馬鹿、逃げる！こいつはお前の手に負えるような奴じゃない！お前の気持ちは分からなくはないが、今は……」

「ここまでお膳立てさせられて逃げちまったら……、

”仮面ライダー”にも、君たちにも、合わせる顔が、ないんだ！」

うわああああああつ！

仮面ライダーはイルカイドに向かった。
ディケイドやクウガが、眼前の怪人が、
人の手におえるようなシロモノではないと知っていたいながら。

ライダーア、パンチッ！

裏方のトランポリンせり上げを待たずして放つ、
地を強く踏みつけてのライダーパンチ。

しかし、イルカイドは意に介さないどころか、
ライダーの存在に気付いてすらいない。

ライダーチョップ！

仮面ライダーは困惑するよりも先に、
着地と共にイルカイドの脇腹目掛けて渾身の右チョップを見舞った。
が、これも効果なし。

ライダーア……、ドロップキック！

しかし、立ち止まるわけにはいかない。
仮面ライダーは思いつきり体重を掛けて踏み込み、
両の足でドロップキックをイルカイドに叩きこんだ。

いくら改造人間とはいえ、身の丈は人間と同じぐらい。
ライダーの体重に押し込まれたイルカイドはよろけ、
地面に片膝をついてしまった。

うおおおおおっ！

「うるさいやつだ、そこで寝ている！」

イルカイドは血気溢れる仮面ライダーの拳を軽くかわすと、
攻撃を外し隙だらけの右腕を掴んで、
力を込めて腕の間接とは逆方向に強く捻った。

仮面ライダーは、石膏をハンマーで砕いたかのような音と共に、
低いうめき声を上げて前のめりに大きくのけぞった。

「邪魔者めっ、少し寝ている！」

その上でイルカイドは、自身の右手の鋭利なヒレで、
仮面ライダーのベルトを通し彼の腹部を 串刺し にした。
ヒレを引き抜かれた仮面ライダーは、腹から背中から、
ポンプのように間隔を空けつつ体内の血液を噴出させて地に突っ伏
した。

タケシさんッ！！

ルミコは溢れ出る涙をとめることができなかった。
気遣いの言葉をかけてあげられればどれだけよかつたろう。
抱きとめられればどれだけよかつたろう。
だが、そうするわけにはいかなかった。

ヒーローが怪人に負けて地に伏し、

あまつさえ腹部から血を噴き出しているこの状況下、
司会である自分が激情に駆られて彼の身を案じれば、
観客はこの事態がショーではないと気付き、パニックに陥ってしま
うからだ。

そこで彼女は考える。

ならば今、自分はどうするべきなのか、と。

司会としてこの場に立つ以上、その答えはひとつしかなかった。

「大変……、仮面ライダーが大ピンチになってしまったわ！会場の
みんなー！
ライダーに、仮面ライダーに声援を送ってあげて！みんなの力が必
要なのッ」

ルミコは鼻声になっているのも気にせず、マイクにかじりつかんほ
どの勢いで叫ぶ。

彼女の思惑が、表情が功を奏し、
本当にこれはショーなのかと不安がっていた者も含め、
観客の盛り上がりは最高潮に。会場は頑張れ負けるなの大合唱と相
成った。

だが、声援で事態が好転するわけではない。

デイケイドは両手に刺さったヒレを引き抜かず、
仮面ライダーは仮面の中で青い顔をして荒い息を吐いているばかり。

「くそッ、なんとか、なんとかならないのかっ」

何もしてやれない不甲斐なさに舌打ちをするデイケイド。

そんな中、彼の頭上に刺さったライドブッカーから、一枚のカードがはらりとこぼれ落ちた。目一杯手を伸ばし、落ちてきたカードを握るディケイド。

「なんだこりゃあ？『ベルト』……か？」

カードに描かれていたのは、中央に風を取り込む”風車”のような機関のついた、真っ白で飾り気のない『ベルト』だった。

この世界を訪れる前のディケイドなら、なんだこれとは首をかしげる所だっただろう。

だが今の彼は知っている。これが『誰の』もので、『何のために』使うものなのかを。

全てを悟ったディケイドは、突っ伏して虫の息になった仮面ライダーにヘッドセットを介して呼びかけた。

「タケシ、聞こえるかタケシ！いや、この際聞こえてなくてもかわない。

お前は本当に”仮面ライダー”になりたいか？

仮面ライダーってのは、お前が思ってるほどいいもんじゃあないぜ。守るべき人々からは迫害されて、怪我したって保険も降りねえ。

この歓声だって、いつ罵詈雑言に変わったっておかしくない。

お前は、そんなヤツに、本当になりたいのか？」

彼は、一体何を言っているんだ？

タケシには土が何を言わんとしているのか分からない。

しかしその中で一つだけ、自信を持って回答できるものがあつた。タケシは、腹部からあふれ出る血を左手で抑え、右手に力を込めて体を起こすと、残った力全てを振り絞って叫ぶ。

当たり前だ！

「そうかい。それを聞いて安心したよ。後で後悔すんなよッ」

ATTACK RIDE 「タイフーン Typhoon」！

ディケイドがライドブッカーにカードを挿入すると、イルカイドによって貫かれ、砕けてしまったはずの、変身ベルトが再びタケシの腹部に巻かれた。

「なんだ……何をしたんだ門矢君」

「どうもこうもねえ。それを腹に巻いたんなら、やることは一つしかねえだろ。やれよ、早く！」

タケシは左手で腹部を押さえ、よろよろと立ち上がる。ぐらつく体を気合と足に込めた体重で抑え込むと、

左拳を握りしめて腰の横に置いて、

右腕をぴんと張って左肩の前まで伸ばし、

そこから半円を描くように右肩まで腕を戻し、

握りしめた左拳をといて、同じ要領で左腕を右肩のところへと伸ばす。

仮面ライダーの変身ポーズだ。

ライダー……変身！

「むっ！？な、なんだッ、なんなのだ」
「まぶ……しっ」

ベルトの風車が光を放って回る、回る、回る。
光の中からその姿を現した仮面ライダーは、
緑の仮面が青色に、赤色の複眼がピンク色に、
全体的に舞台映えのしにくい、暗色の姿へと変貌していた。
作品創生期、テレビの前にはじめてその姿を現したときの姿だ。

「な！？き、貴様は開発中の”バツタ男”！どうしてここに！」
「バツタ男……、俺のことか？」

「お前以外に誰がいるというのだ。丁度いい、お前も手伝」
「やなこつた。俺はお前らとは違う、断じて違う！俺は……」

この大舞台の上で、怪人たちの目の前で。
こんな状況の中で、俺がこれをやれるのか。
叶わぬ夢だとあきらめていたはずのものを。
たまらない。本当にたまらない。

感謝するよ、門矢君。

仮面ライダーは人差し指をイルカイドに突き立て、
万感の思いを込めて、会場一杯に聞こえるほどの声で叫んだ。

「俺は正義の戦士、仮面ライダー！
怪人イルカイド！罪なき人々を改造人間にしようとする貴様の計画、
お前を倒し、阻止してくれる！」

「何イ？同じ改造人間の分際で生意気なッ！やれ！やれーっ！」

お決まりのように大勢の戦闘員をけしかけるイルカイド。
だが、仮面ライダーを名乗りし男に、

その力を自分の者にした男に対してそれは、あまりにも無謀で愚かな行為であることに、彼は気付かなかった。

トオッ！！

仮面ライダーは並みいる戦闘員たちをちぎっては投げ、死角を取る相手には、周囲の空気が切り裂かれるかのような後ろ蹴りを、

眼前の相手には一瞬で意識を刈り取る強力な拳の一撃を与え、吹き飛ばす。

戦闘員などでは、彼の相手をするなどできないのだ。

「おい、おい！大見得も切ったし、

戦闘員もバツバツと薙ぎ倒したんだからもういいだろ。

俺を助ける俺を」

「あ、ああ。すまない」

仮面ライダーはディケイドの両腕に刺さったヒレを軽々と引き抜いた。

ようやく自由の身となったディケイドは両腕と両肩を回し、伸びをする。

「しかし、これは一体どういうことなんだ？」

「んなの、お前が」この世界の仮面ライダー”だった、ってだけの話だ」

「ますます意味が分からん」

「分かる必要はねえ。なっちまったんだからよ」

「そうか。そりゃあそうだ」

「それに。今俺たちがすべきことは、あれをぶっ倒すことだけだろ

？」

「違くない。だが」

ディケイドはうろたえるイルカイドを指差し、親指を下に向けて挑発。

挑発に乗ったイルカイドは二人に向かってきたが、

仮面ライダーはディケイドを左手で制止し、彼にこう言った。

「ここは俺に任せる門矢君。俺に考えがある。

さあ来いイルカイド！この仮面ライダーが相手だ！」

「いいだろう。一対一で勝負をつけてくれる！」

貴様の動きも先の戦闘員共との戦いを見て 覚えた ！

お前が俺に勝てる確率は、ゼロだッ」

「ならば！俺が勝つてそいつを番狂わせにするまでだ」

「コシヤクなッ」

挑発に乗り、仮面ライダーに飛びかかるイルカイド。

仮面ライダーはイルカイドのヒレによる攻撃をかわしつつ、

拳で、足で、掴みかかって攻撃を加えようとするが、

イルカイドへの致命傷には成りえない。

「ふふふ、弱い、弱い弱い！弱すぎるぞ仮面ライダー！

そおれっ、イルカ投げ！」

隙を見たイルカイドは、仮面ライダーのベルトの両脇を、

まるで相撲取りが回しを取るようにして掴み、

そのまま思いつき振り上げた。

このままでは、ライダーは天井に激突してしまう。

ダメージはもとより、瓦礫による観客への二次災害も危険だ。だが、

それを、待っていた！

ライダー、ポイントキイイック！

イルカイドに投げ飛ばされた仮面ライダーは、空中でひらりと宙返りをしてみせると、

そのままイルカイドの鼻先目掛け必殺の飛び蹴りを見舞った。

イルカイドは鼻先から、目からはちばちと火花を散らしてうずくまってしまう。

「ば、馬鹿な……貴様の技も！速さも！全て分析できていたというのに！

なぜだ！なぜ効かないッ！」

「残念だったなイルカイド。俺のベルト『タイフーン』は、風力エネルギーを体に取り込んで、力にすることができ。

今の俺の力も技も、貴様が取ったデータより格段に強化されているというわけだ！

貴様の分析・学習能力、この仮面ライダーが破ったぞ！」

「おのれ、なんてやつ！」

敵に攻撃されてもパワーアップできるってか？卑怯だなあオイ。

「デイクイドは”改造人間”の持つ力に舌を巻き、ふうとため息をついた。

「ぐぐっ、ならばこじは一旦退き……ぬおっ！？」

三十六計逃げるに如かず。

自慢の分析能力を封じられたイルカイドは旗色悪しと判断し、自身が開けた穴から、アジトの中に逃げようとする。

デイケイドと仮面ライダーはあわてて彼を追おうとするが、イルカイド自身も、穴の中から出てきた”何者か”に阻まれ、ステージの上に押し戻された。

「な、何だ？」

「お前は、”海東”！」

穴から飛び出し、ステージの中央に現れた謎の存在。

色の三原色・シアンで塗られた青い体に、
バーコードに近いデイケイドとは異なり、
某有名ゲーム機を象ったようなアーマー。

50口径はあろうという物騒な銃器を腰に提げたその姿は、

デイケイドたちとは別に世界を巡り、

その世界のお宝を盗んで回るもう一人のライダー、

「仮面ライダーディエンド/海東かいとう 大樹たいき」に他ならなかった。

「やあ、士。見たまえ、これがこの世界のお宝、『マシンディエンダー』さ」

「お前それ、また盗つてきやがったのか。この下のアジトから」

「面倒くさい連中ばかりで難儀したが、ゲットの喜びもひとしおさ。白い外装が気に入らないが、これは後で塗りがえればいいしね」

ディエンドは自らが体を預ける白地のオフロードバイクを、
愛おしそうにすりすりときさすって言った。

仮面ライダーでありながら、常用のバイクを持たない彼にとって、
自身のバイクを手に入れられて、よっぽど嬉しかったのだらう。

だが、そのバイクを見て驚いたのはディケイドではなく、壇上で戦いを続ける怪人とライダーであった。

「それは！話がショッカーが独自に開発していた新型マシン！」

「なんてこつた、これは仮面ライダーのバイク『サイクロン』！」

「君たちは何を言っているんだ。これは」

なるほど、ねえ。

ディケイドは仮面ライダーのことを知らない。

だが、ディエンドが”ショッカーから盗んだ”と豪語し、

イルカイドがこのバイクを見てうろたえる様、

仮面ライダーがこれは”自分のものだ”と話す様を見て、

あのバイクが何であるかを理解した。

ATTACK RIDE 「BLAST」

ディケイドはライドブッカーをガンモードに変え、ディエンドを撃ち抜く。

とつさのことに驚いたディエンドは、

あっけなくバイクの上から叩き落とされてしまった。

「なッ、何をするんだ土！」

「奴がひるんだ、今だッ戦闘員共、マシンを奪い返せェ！」

「ぐう……ッ、覚えておきたまえ、土！」

ATTACK RIDE 「INVISIBLE」

ディエンドはすぐさま体勢を立て直し、再びバイクにまたがろうとするも、

イルカイドの放った戦闘員軍団に阻まれ、逆にバイクから離されてしまう。

ディエンドはディケイドへの恨みを残したまま、

”インビジブル”のカードを用い、その場から立ち去ってしまった。

「おい門矢君、今のは君の知り合いじゃあ」

「こまげえことは放っておけ。それよりもトドメだ。一気に決めるぞ」

「あ、ああ」

ライダー、キイイイイック！！

FINAL ATTACK RIDE 「De・De・De

- DECADE」

ディケイドはこの一件であっけにとられるライダーを促し、バツクルにカードを装填。

仮面ライダーは天井を突き破るほど高く跳び上がり、

同じくあっけに取られたイルカイド目掛け、

両方向から必殺の『ライダーダブルキック』を見舞った。

二人の一撃を受けたイルカイドは、脆い床を軽々と貫通し、

床を突き破った先にあっけ”シヨツカーのアジト”の、

誰か大物が座る椅子のようなオブジェに叩きつけられた。

「ばっ、ばか……なっ！！俺が…、改造人間であるこの俺がッ！

だが、シヨツカーの恐ろしさはまだまだ、こんなものではない！

偉大なるシヨツカーに……栄光あれーッ！！」

イルカイドは自らを生み出したシヨツカーに対する讃辞を述べたあと、

ライダーキックによる外装及び内部駆動機関の崩壊によって、アジトもろとも爆発四散した。

怪人の消滅と爆発は地震にも似た衝撃によって伝わったらしく、観客たちは仮面ライダーの安否を思い、誰もが固唾を呑んでステージの中央を見つめた。

トオッ！

よっ、と。

仮面ライダーは生きていた。

二人のライダーは爆発の勢いに乗って飛び上がり、怪人とアジトの爆発に巻き込まれずに済んだのだ。

もちろん、ケチのつけどころのない大団円に観客たちは大盛り上がり。

大音声の声援と惜しめない拍手が会場を包んだ。

藤岡タケシはこの大歓声を聞き、観客たちの笑顔を見つめ、

仮面ライダーの仮面の奥で、ひとり静かに涙で頬を濡らしていた。

「よお。何泣いてんだ？」

「ははは、何を、馬鹿な。泣いてなんか」

「このショーの主役はお前だ。好きなだけ泣いとけ泣いとけ」

”この先”、泣いてなんかいらなくなるだろうからな。

デイケイドはそう付け加えようとしたが、

彼もまた、この大観衆の中で”それ”を彼に伝えるのは野暮と思い、口をつぐんで観客たちの拍手と声援に静かに耳を傾けることにした。

新生・仮面ライダーショーは、観客総立ち大盛り上がりの中、

静かに、静かに幕を下ろす
はずだった、のだが。

あれー？おつかしいなー？
おかしい、おかしいよー？

沸き立つ会場の中、どこかの誰かが発したさりげない一言。
だが、その一言は一瞬にして場内に流布し、観客たちに一つの疑念
を抱かせた。

確かに、”シヨツカーの”怪人は仮面ライダーの活躍で倒された。
だが、このシヨーには、もう”ひとり”怪人がいなかっただろうか？
全身ピンク色で黒のシマシマ、”バーコードジンにしてやる”など
と、
とても迷惑なことを口走った。 ”大”シヨツカーの怪人が。
観客たち、とりわけ子どもたちはそのムジュンに気づき、声を張り
上げた。

なんで、”顔面バーコード男”は倒されてないのー？

「あ」
「ああ。 ああー」

そういえばそうだ。 ディケイドと仮面ライダー、
加えてステージの下で観客同様ライダーたちに拍手を送るクウガは、
顔を見合わせてうなずいた。
予期せぬ闖入者の登場のせいで、そこまで頭が回っていなかったの
だ。

仮面ライダーは腕を組んで考えると、

ディケイドひとり分ぐらいの高さまで飛び上がり、

ライダーキック！

「うおっ！？おおおおおおあああっ」

彼の胸部に必殺の飛び蹴りを見舞い、ステージ上から吹き飛ばした。不意を突かれたディケイドは情けない声を上げながら横転し、ステージ左端の壁を突き破ってフェードアウトしてしまった。

「みんなの応援のおかげで無事、バーコード男も倒されました！
ありがとう仮面ライダー！ありがとう会場みんな！」

ルリコは仮面ライダーが取った行動の意味をすぐさま理解。
またも即興で台詞を作って、

観客の興が覚める前に強引に幕を引いてしまうこと相成った。

ステージ上に残った戦闘員たちは皆幕の中に引きずられ、
途中飛び入り参加のクウガも観客たちに手を振り幕の中へと去って
行く。

「俺はこのショーじゃあ悪役だ。そんなことは分かってる。
分かってるんだが……、やっぱり胸クソ悪いもんだな、ちくしょう」

ディケイドは場内の湧き上がる歓声と拍手を聞きながら、
会場脇の”男子便所”の小便器に顔を突っ込んで水浸しになりなが
ら、

自分の扱いの悪さについてぶつぶつと文句を垂れていた。

「はあーい！みなさん、お疲れさまでしたー！」

「かんぱーい！」

「かんぱーい！」

ショーが終わって数時間後。

後片付けを終えたトウベエたちは、

「お休み処」となっている光写真館の中で打ち上げを行っていた。

”乾杯”と謳ってはいるが、彼らが飲んでいるのは、

遊園地内のレストランで出されるソフトドリンクである。

様々なアトラクションが集う遊園地内では、

むやみにアルコール類を販売できないからだ。

「ふうふう。まったく、遊園地のお客さんが出払って、

ようやく休めると思ったのに、土君も人使いが荒いねえ」

「まあそう言うな。最高のショーを見せてやっただろう」

「いやいや、あれはお昼の分で帳消しに……って、ああっ！」

土は栄次郎のお小言を聞き流し、

連れ立ってドリンクを呑むトウベエに声をかける。

彼の周りも彼自身も、憑き物が落ちたかのような表情を浮かべ、
楽しそうに笑いあっているのが印象的であった。

だが、だからこそ、言いだしづらい話題なのだが。

「本当に、やめちゃうのか？ここでのショーを」

「ああ。やめるよ。せいせいしたんでね。本当に、もう」

借り物であった大ホールの床や壁をさんざんぶち抜き、

本来そこでやるはずの戦隊もののヒーローショーを、

数か月ほど休止に追い込むほどの損害を出したトウベエ一向。

自分たちのような日蔭者が、遊園地の花形ショーを休止に追い込んで、

無事で済むはずなど、なかったのだ。

「いくら稼いだところで返せるような額じゃあないさ。仕方がない」
「だが、それは」

「シヨツカーの仕業”だつてのか？そんなこと誰が信じる。俺たちは子どもたちの『夢を作る』仕事をしてはいるが、自分たちが『夢を見る』ようなことはしないし、できない。

明日の朝には俺たちの不祥事か何かとして、内々で処理されるだろうよ」

「しかし」

自分のせいだと落ち込む士に、トウベエは彼の肩を叩いて答えた。

「勘違いするなよ若造。俺たちや別に、

ここで演れなくなつて悔しいとはこれっぽちも思つちやいねえよ。そりゃあ、まあ…、あの大舞台を去らなきゃならないのは残念ではあるが、

それを補つて余りあるものを見られたからな。お前のおかげで

穏やかな目で彼に礼を言うトウベエに、タケシとルリコも続く。

「私たちのことなら大丈夫よ。ありがとう、門矢君」

「これからはみんなで、のんびり地方巡業でもしてやってくさ。本当にいたつていう”シヨツカー”を倒すつて目標もできたしな」

「そうか。なら俺も女々しいことはもう言わねえよ」

「そうだそうだ。ここは祝いの席だ。じゃんじゃん飲んどけ。」

ああそうだ、お前も俺たちと一緒に働くか？怪人役、なかなか良かったぜ」

「悪いがそいつは却下だ。俺の旅のスケールは、アンタたちのよりずっとでかいんでね」

「そうかい。そりゃあ残念だ」

「どこに行くんだい門矢君」

「ちよつと夜風にあたってくる」

女々しいのは俺も一緒だな。情けねえ。

士はそれ以上タケシたちと顔を合わせるのが嫌になり、ひとり写真館の玄関を出ようとしたのだが、

「待ちたまえ士」

「あ？……何の用だ海東」

先ほど、シヨ一の壇上で退けたはずの海東が現れ、阻止された。彼は見るからに不機嫌そうな顔で士にまくしたてる。

「何の用だはないだろう。君の罪を数えたまえ士」

「俺の罪？何かやったか？」

「ふざけるのもいいかげんにしろ！

僕のお宝ゲットを邪魔した罪に決まっているじゃないか！」

「ああ、ああ。そういやそんなものもあつたな。忘れていた。まあ、あれは確かに俺にも比がある。それは認めよう。

だからこそ、詫びの代わりがてら、お前に渡したいものがある」

「渡したいもの？それはなんだ？」お宝”か？」

「お前がそう思うんならそうなんだろ。お前の頭ン中ではな。ちよつと待ってる。すぐに持ってくるから」

しめた。

士は海東から見えない角度でにやりと笑い、写真館の中に引っ込んだ。

それから数分後、士はひとかかえもある段ボール箱を持ってきて、不機嫌そうな顔をした海東に手渡した。

「なんだこれは」

「”お宝”だ」

お宝だと言われ、中身を確認する海東。

中に入っていたのは、士やそれ以前の先達たちの汗と埃にまみれた、”北海マグロ男”の着ぐるみであった。

海東は激昂し、勢いよく段ボール箱を床に投げつけてまくしたてる。

「ふざけるのもたいがいにしたまえ！こんな汗臭い布の塊のどこが」

士は彼が投げつけた段ボール箱を拾い上げ、

わざと嫌味つたらしくふふんと鼻を鳴らして答える。

「お前、”怪盗”のくせに、お宝の観察眼は養われてないようだな」

「僕を侮辱するつもりかい、士」

「事実を言ったまでだ」

これが一体なぜ、お宝たりえるのか。

士はこぼんと咳払いを一つして口を開いた。

「お前はあのバイクを”シヨッカー”から奪う時、

あの怪人共相手に”難儀した”だとか言ってるやがったな」

「そうさ。たかが雑兵のくせに無駄に力があつてね。」

だが、それがなんだと？」

「まだ分からないのか？やつらの強さのヒミツが、やつらは怪人から戦闘員に至るまで、何かしらの”衣装”を身に纏っている。

あれは何だ？正体を隠すためか？感情を隠すためか？違う、そうじゃあない。

あの衣装はな海東、”自らの体を強化する”ためのものだ」「な、なんだ……と」

「あいつらが身に纏っていた衣装。

あれには人間の脳内の闘争本能を活発にさせると同時に、体の中に眠る身体能力を限界まで引きだす作用がある。

その力は俺たちライダーにも勝るとも劣らない。

あんなふざけた格好の野郎共に圧倒されるのには理由があったわけだ」

突拍子もない説明に、目を丸くし、頷きながら聞き入る海東。士は必死に笑いをこらえながら、話を続ける。

「そして、こいつだ。この”衣装”はそんな奴らの中でも、”選ばれた者”にしか着用を許されない、禁断のスーツ。

目を閉じ、耳を塞ぎ、動きをも抑制する制約の多いものだが、それに打ち勝ちさえすれば、さらなる力を引き出すことができる。

俺がショッカーのアジトからぶんどってきたものだ。苦労したんだぜ」

「それを……僕に、くれるというのか？」

「ああ。今回の件はさすがに俺も悪かったしな。

遠慮せずに行ってってくれ、海東」

落ちた、な。

海東は先ほど自分で無価値だと言った段ボール箱を、とても大事そうに抱え込み、土に背を向けた。

「ふ……ふん、こんなもので僕の怒りが収まると思ったのか土！
だが、今日はこのくらいで勘弁しておいてあげるよ。
よいしょ……っと、これでいいのかい？土」

「ああ、完、璧、だぜ、海っ、東」

だが海東は、ここで土も予期せぬ行動を取った。
彼の話に感化されたのか、段ボール箱から着ぐるみを取り出し、服の上からおもむろに着出したのだ。

土はこみ上げる笑いを必死にこらえ、着ぐるみのチャックを閉めた。
日も落ちた暗がり、かつ写真館内の光が逆光になっていなければ、
海東もすぐさま土の表情とその意図に気付いたのかもしれないが。

「さらばだ土、また次の世界で会おう」

海東は北海マグロ男の着ぐるみを”着たまま”、
嬉々として暗がりの中を駆けて行く。

両腕のヒレがぱたぱたとかわいらしく小刻みに揺れていた。

「土君」

「土」

「何だよ二人して」

「なんだか……輝いてますね、大樹さん」

「俺、海東のこと、初めて”かわいそう”って思ったよ」

「そうか？そりゃあよかった。くふっ、はははははははは」

三人は思い思いの表情で、宵闇の中に消える海東大樹の姿を見送った。

ちなみにこの時、笑いのツボなしに楽しそうに笑う土の姿を、夏海は感慨深く思いながら見つめていたという。

「おおーいみんなー！写真撮るぞー」

「栄次郎さんが、集合写真撮ってくれるってよー」

そんな三人を呼び止め、リビングに戻るよう促すトウベエ。

栄次郎が打ち上げの最後に、集合写真を撮ってくれるのだと言う。

「なんだかんだ言いながら、いいところあるじゃねえかじいさん」

「おっし、行こうぜ土、夏海ちゃん」

「はいっ」

「門矢君」

「なんだ？」

背景ロールの前に向かう土を、ふいに呼び止めたタケシ。

カメラのレンズの逆光で、どんな表情なのかはうかがい知れない。何を言おうとしたのかと疑問に思う土だが、

彼は恥ずかしそうに踵を返して話を切り上げた。

「いや、やめておくよ。”今は”。

いつかまた君に会える日まで、この言葉は取っておくことにする」

「そうかい。それもまた、いいんじゃないの？」

さて、と。お前は主役だろう。前に行け前」

「おい、ちょっと！押すなって！わわっ」

藤岡タケシが俺に対し、”取っておく”と言った言葉。それが謝辞になるか、憎悪をぶちまけるものになるのか。今はまだ分からない。誰にも分からない。

だけど今は。今だけは。

はいッ、チーズ！

今だけは、いいよな？皆、笑顔のまままで終わったってよ

後篇の掲載が遅くなりまして申しわけありませんでした。

ディケイドで「ウルトラ八兄弟」をやる！とかなんとか言ってましたが、

結局こんな落とし所に落ち付いてすみません。

スムーズに執筆を終えるためにここ最近は、

「台詞だけ先に起こして、あとから描写を加える」

やり方を採用しているのですが、

なんかそのせいで最終的にどれくらいの長さになるのか、

自分じゃさっぱりで、結局馬鹿長くなったりしちゃって困ります。

前半があんなにさくつと終わったのにこっちで水増ししてどうするよ。

そのくせ個々のキャラの掘り下げは薄いしさ。

海東ですが、最初からああいうオチにしたかったので参戦させました。

今後彼が出てくることになっても、ああいう扱いになるのでしょうか。

そういえば本チャンのあつちの小説ではまだ書いてなかったなあ、

海東。

6月の時点では前半分しか掲載していなかったのに、

お気にいり登録していただきありがとうございます。皆々様。

今度からはある程度書きためてから出そうと思います。ごめんなさい。

しかし次回以降何しよっかな。

「ウルトラゼブン」とか、リクにあった「ゴセイジャー」か、最近ホットな「Angel Beats!」でもいいし…」。

幕間・『食わず嫌い王決定戦の世界』

実 食！

「ぐ……ぐろう、ま、参りました」

「御粗末様でした」

ああーつと！またも実食前の”参りました”！

挑戦者、門矢士！これで通算20回目の敗北になります！

「いやあははは。さっきまではつまらなかったけどさあ、

こつもさくさく負けていくと、このままどこまで記録を伸ばせるか、そつちの方が気になつちやうよね」

「さ、さ。次の罰ゲーム。何にする？」

「うるさい！うるさい！うるさい！

幼馴染に裏切られてショックを受ける左翔太郎のマネ、いきます」

「また負けちゃったんですか、士君」

「俺ですら10回目で勝つたつてのにだらしねえなあ」

「あ、ちなみに私は4回で」

「アタシは6回よ〜ん。あはははっ」

士は彼らの悪口ともとれる一言を全て聞き流し、

がつくりと肩を落とす、青ざめた表情でつぶやいた。

「悪いな、お前ら。俺は、俺の旅は、どうやらここで終わりらしい」

「ちよっ……、何を言い出すんですか士君！ ナマコが食べられないぐらいで」

周囲を熱く、明るく照らすライトの数々。
スタジオの中に組まれた和風のセット。
テレビカメラが回り、様相が全国中継される中で、
様々な挑戦者たちが現れては消えてゆく。

目の前に三品の好物と、一品の”食わず嫌い”な食べ物が置かれ、
両者共に相手の”食わず嫌い”なものを当てる競技。

このスタジオでは、”食わず嫌い王選手権”が行われていたのだ。

士は20戦目と、敗北後の罰ゲームを終えて、

光写真館の面々が待つ、挑戦者の控室に戻ってきていた。

写真を撮ること以外に苦手なことがない彼にとって、

この連続敗北は異常事態にも程があり、動揺を隠せない。

士は控室の座イスに頭を抱えて腰掛け、自身を鼓舞するかのように、
荒々しい口調で周囲にまくしたてた。

「だってお前、この”食わず嫌い”とかいう勝負に勝たないと、
この世界から出られないっておかしいだろ、理不尽だろ、不可能だ
ろ！」

「そりゃあ、理不尽ではありませんけど」

「悪いのは士だけ。俺、控え室で見てたけど」

対戦相手にナマコを指定されたところで、既に青い顔してればそり
ゃあ「

”食わず嫌い”の品を決める前に、対戦者は出された4品を順々に
食し、

その際の反応で食わず嫌いを圧して測るものなのだが、

士は”ナマコ”を相手に指定された時点で、
ある時は尋常ではない量の冷や汗をかき、

ある時は震度2の地震と間違っつて観測されるほどの貧乏揺すりをし、
またある時は青い顔をし過ぎて医務室に運ばれることすらあったの
だ。

これではもう、相手に”選んでください”と言っているようなものである。

しかし、だからと言ってこの勝負を投げるわけにはいかない。

この世界における彼の役割は、選手権の”参加者”。

負けてバカバカしいリアクションを取っても、引き分けに持ち込んでも、

何の反応もないとくれば、勝たなければこの世界を抜けることはできない。

そう、ここにいる誰もが判断したからだ。

「んなこと言っつたつて、食えないもんは食えないんだよ。

別にいいだろ。ナマコが嫌いだからつて実生活で困ることなんかねえし」

「今ものすごく困ってるじゃないですか」

そんな中、控室天井の通風孔から、海東大樹が顔を出した。

彼は緑字に黒の唐草模様の入った風呂敷包みを肩にかけ、
嬉々とした表情で士に話しかけた。

「まったく、だらしないねえ士は。まっ、士が負けてくれているから、
ら、

彼らの書く色紙や、持ちよつたお土産をもれなく手に入れられて、

僕は万々歳なんだけどね。もっと負けてくれたまえよ、士」

「ンの野郎……、負けは今回限りだ！次行くぞ次！対戦相手出てこい！」

自分がいつも馬鹿にしている相手に氣遣われる。これ以上ない屈辱だ。

士の怒りはとうとう頂点に達してしまった。

士は参加登録書に今一度サインを交わし、顔を真っ赤にして控室を出て行った。

「士君も頑張るねえ」

「まあ、勝たなきゃ旅を続けられませんから」

「しかし、よくまあこうも連続で続けられるなあ。腹の方は大丈夫なのか？」

「そりゃあ士君は、ナマコを指定されたところで、相手に看破されて負けてばかりだから、食事なんて碌に食べられてませんし」

ま、参りました。

お粗末さまでした。

門矢士、21回目の敗北！どこまで続くか！この連敗はーッ！

信じていた姉に裏切られて絶叫するフィリップのマネ、やります。

「また負けてますね」

「もう、どうしようもないねえ」

「土じゃないけどさ、本当に、俺たちの旅も終わりかもなあ」

と、
食べる機会がないからとか、見つけたら避ければいいやなど

なんだかんだと理由をつけて、自分の好き嫌いを正当化してはいけません。

誰かに扶養されている間はまだしも、
社会に出たら何が自分の敵になるのか分からないのです。

この小説を読んでいるみんなも、
好き嫌いとはきちんとかき合い、早めに治しておきましょう。
門矢士との、仮面ライダーディケイドとの約束だ！

ちなみに、士はこの後28連敗を重ね、
今後誰にも破られることのない、『50連敗』という大記録を打ち立てて、

ようやくこの世界を後にすることができたそうです。
ナマコが嫌い、という弱点だけは克服できなかったそうですが

幕間・『食わず嫌い王決定戦の世界』（後書き）

ライダー一号編があまりにも遅くなったので、その辺のお詫びも兼ねての一本。

及び6月某日の、”とんねるずのみなさんのおかげでした”にキュアブロッサム/水樹奈々が出演してた記念。

最初っから読み物として成立させる気がないので、どこまでも適当でやまなしおちなし意味なしです。

本編でナマコと出会う機会のなかった土ですが、実際に出会ったらどんな反応をしたんでしょうねえ、という疑問もちょっと考えましたが、やっぱり適当です。

変身しないもんが幕間でいいのかと思いましたが、これは合間合間に読むものなので、どうでもいいやと割り切りました。

まあ、実際ナマコと出会う人なんてそうそういないとは思いますが。

今後、この更新は『リイマジもの』 「幕間」 『リイマジもの』 という形で更新していく所存です。今後ともよろしくお願いいたします。

「あの。本当に、大丈夫なんですか？」

「練習通りにやりやあ問題ねえ。信じる。お前を信じる俺を」

「無理ですよ。まだ知り合ってから30分と経ってないんですよ？」

「今さら泣き言を言うな。ほら、幕があがるぞ」

大観衆の声がよく通り、よく響く屋内の大ホール。『ガールズ・デッド・モンスター』と活きの良い字体で書かれ掲げられた幕の下では、あふれんばかりの若い男女がホールを埋め尽くし、幕の中のアーティストの登場を今か今かと待ち構えている。

そんな観衆の期待と高揚に応えるがごとく、幕は勢い良く上がった。まだ何も始まっていないのに、幾人かの観客はこらえきれずに騒ぎ、手を叩き、声を上げる。会場の高揚感は最高潮だ。

だが。そんな彼らを待っていたのは、そんな彼らの目に飛び込んできたのは。

待たせたなお前ら！さあ、振り切るぜッ…………。

終止符ししおとの向こう側へなッ！

大観衆全てが啞然とし、声を失った瞬間だった。

「……は、どっだ？」

話は数時間前に遡る。さかのぼ 門矢士が目覚めたのは、日が落ちきったグラウンドの上だった。地面をならす石のローラーや、石灰粉が詰まった白線を引くための器具が、片付けられることなく無造作に転がっている。

「学校のグラウンド……か？ 俺、なんでこんなところにいるんだ？ 次の世界に移動して、様子を見てくると一人で写真館を出て……そこから先が思い出せん」

士は今あるこの状況を把握すべく、二日酔いのサラリーマンのようにだらけ切った体に鞭打ちゆっくりと起き上がるうとするのだが、紫かった髪色に、赤色のカチューシャがよく似合う、おかつぱ頭の少女に頭を鷲掴みにされ、思いつきり地面に叩きつけられた。

「馬鹿ッ、何してるの！ 危ないから伏せてなさい」

「何しやがんだこの野郎！ 訳はともかく理由を言えッ」

「いいからもう少し大人しく這いつくばってなさい。死ぬわよ」

「人の頭を地面にしこたまぶつけといてなんだその言い草は！」

「うるっさいわね……。そんなに言うなら前をご覧なさい」

少女に促され、首を動かして彼女の指差す方へと視線を向ける士。鬼が出るか蛇が出るか。警戒し身構えた士の視界に飛び込んできたのは、自分の肩ぐらいの背格好の小さな少女だった。

隣に立つ彼女の制服はセーラー服だが、学校が違うのだろうか、

近づいて来る少女は白が基調のブレザーを身に纏い、可愛らしい緑のリボンを襟首に結んでいる。

命がないと言う以上、もつと何かおどろおどろしいものを想像していた士は、拍子抜けして当たり散らす。

「あれのどこが危険なんだ？」

「顔を上げないでって言うているでしょ。誰かを守りながら戦えるほど、あたしは器用じゃないのよ」

紫の髪の少女はそう言うと、どこからともなく自分の肩ほどもある長尺のライフル銃を取り出し、

銃身に『手のひらにすっぽり収まるほど』大きな弾丸を込めて、無防備に歩いて来る少女に向けて狙いをつけた。

士には彼女が何をしているのか、眼前の少女が一体何なのか、さっぱり分からない。

「なんだかよく分からねエが、そんな物騒なものを出して何をすつつもりだ。っていうかそれ、本当に撃てるのか？」

「あなたってば、本当に何も知らないのね。あぁっ、もう！ 邪魔……しないでッ」

士の説得と妨害も虚しく、彼女は眼前の少女目掛け無慈悲に銃弾を放った。電動式の強力なものだったらしく、風よりも音よりも早く突き抜け、銃弾に綴じ込まれた炸薬が破裂し、轟音を響かせて周囲を爆煙と砂埃で包みこむ。

士は人に向かって銃を向けることよりも先に、理由に不相应な物騒な重火器を使うことに対し、激しい口調で非難した。

「なんつう物騒なもんぶつ放してやがんだ、くそッ！」

「物騒？ 馬鹿言ってるのはあなたの方よ。天使がこんなもので倒れるわけ、ないでしょう？」

天使 だあ？

事情の説明と思しき彼女の言葉に、士はますます困惑した。

透き通るように白い肌に、暗闇の中でも光を放っているかのよう

に輝く、艶のある白銀の髪。イメージとしては悪くない。確かに『彼女』は天使と言えなくもないとは思う。

だが、それと物騒な銃器を彼女に向けるという突拍子もない考えはどう結び付くと言うのか。士は事態を全く把握できずに頭を抱えた。

「ほらっ、ぼさっとしてないで……。逃げるわよ」

「逃げるって、何からだ」

「決まってるじゃない。天使からよ」

しかし士はまもなく、紫の髪の少女が行ったことの意味を嫌でも痛感することとなる。

天使 と呼ばれた少女は先の爆発など意にも介さず起き上がり、何を考えているとも知れない目付きで逃げる二人を見据えた。それだけでも十分すぎるほどの衝撃を士に与えたのだが、特筆すべきはその後だ。

変身。

天使はか細く小さな声で『変身』と呟く。瞬間、周囲は目が眩むほど強烈な光に包まれた。

思わず目を背けてしまった士が再び同じ場所を見据えた時、そこに立っていたのは。

「おいおいおい。なんだあありゃあ」

白い、『アギト』か？

かつて『アギトの世界』で出会ったライダー、“アギト”。別の世界の“アギト”だからなのだろうか、本来“金色”であるべき、胴体の装甲や頭部の角が白く染まり、その代わりに金色に輝く複眼が、内心穏やかではなかった士の目を引いた。

「なんだこいつはッ」
「さつきから言っているでしょ、天使よ『天使』。早く逃げないと、首から下を切り落とされるわよ」

Hand Sonic、Ver.1

『天使』は”ハンドソニック”と短く呟き、胸の前で腕を十字に組むと、両の手に儂げに青く輝く 刃 を纏わせた。

それを研ぐようにして擦り合わせ、地を強く蹴って土たちの方へと飛びかかってくる。

「なんだ、ベルトからじゃないのか？まあいい、やる気なら容赦しねエぞ」

土は降りかかる火の粉を払うため、『デイケイドライバー』を取りだそうとブレザーのポケットに手をつ込むが、

「変し……あ、あれ？ バックルが……ない！」

両のポケットに内ポケットをも探るが、ドライバーは出てこない。気絶している間に落としたのだろうか。このままでは目の前の驚異に対応できない。どうしたかかと顎に手を当てる土だが、ユリはそんな彼の襟首を掴んで走りだした。

「ああもう、ほらっ！ さつさと逃げる！」

「うるさいぞおかつぱおてんば娘！」

「ユリ、音無ユリ！ だれがおてんば娘よっ」

抵抗して無駄だと判断した土はやれやれと頭を抱え、ユリと名乗る少女に手を引かれその場を去ろうとする。が、彼らの行く手を、

神の教えに反してはナラナイ。

輪廻りんねに身を委ねるノダ。

頭に蟻の頭部のような被り物をした黒ずくめの集団が集まって壁を成し、二人を取り囲んでしまう。

「こいつは……、アンノウン！　この世界にもいやがるのかッ！」

「くう……っ！　やっぱり出たわね、『神の徒！』」

「アンノウン？　何よそれ」

「神の徒ともがらあ？　なんだその胡散臭い名前は」

眼前の怪物に対する認識の齟齬そごに、それは違うと言い合うユリと士。だが今ここですべき事ではない。

ユリは膝小僧が見えるほど短めな青紫色のスカートを翻ひるがえらせ、太もものホルスターから拳銃を取り出して発砲し、士はねじ切られて足元に転がっていた鉄の棒を握りしめ振り回し敵を威嚇する。効き目が無いことは重々承知。相手の動揺と隙を誘って逃げるための行動だ。

そしてそれは二人を襲おうとしていた『天使』も同じであった。彼女は青色の手刀を振り回し、次々に蟻の化け物を八つ裂きにしてゆく。その隙にユリは士の手を引いて脱兎のごとく逃げ出し、ポケットにしまっていたヘッドセットを取りだして頭に取り付ける。

「こちらユリ、こちらユリ！　戦線　の新メンバーの保護に成功。

しかし天使及び徒と接触し交戦中。

誰か、校庭まで救援をお願い！」

慌てて走っていたこともあり、余裕のない口調だったが、逆にそれを聞いて返すオペレーターの声は冷静そのものだった。

「ユリっぺさん心配は無用です。既に野田さんと椎名さんがそちら

に向かっています」

おらおらおらーッ！覚悟しやがれーッ！

浅はか也。^{なり}

そしてその瞬間、棒の先に斧がついた”ハルバード”を振り回す紫髪の少年と、両手にナイフのような短剣を構え、襟巻を巻いた少女が、二人して蟻のアンノウンの前に立ちはだかる。通信の中にあつた援軍とは、彼らのことなのだろう。

「確認したわ。ありがと」

ユリはどこまでも暴力的な野田のハルバード捌きと、無表情な仮面の下で何を考えているのか分からない椎名の殺陣を眼下にのぞんでため息をついた。二人に目くばせをしたユリは、土の手を引き、促す。

「何はともあれ、今のうちに逃げるわよ」

「あ、ああ。しかし、何でお前は俺を助けた？ こう言うのは何だが、俺たちはただの他人だろう」

土の問いに、ユリは彼の着ている制服を指して答える。

「そんな服着てて何を言うのよ。徒たちからこの世界を守るために戦う 死んだ世界戦線 のメンバーでしょう？ リーダーとして、当然のことをしたまですよ」

「リーダー、ってお前が……か？」

指摘され、土は改めて自分の服装を見込む。薄茶色のブレザーに緑色のネクタイ。暗くて分かりにくいのが、右肩には”SSS”と書かれたエンブレムがついている。この世界における”役割”と何か関係があるのだろうか。

しかし、土がその疑問を口にするよりも早く、2、3人ほどの豹^{ヒョウ}の毛皮を頭から被つたような、筋肉質で野性味あふれるアンノウンが二人に襲いかかる。

しかしそれも、土と同じ制服を着た青髪の青年と、黒い学ランに

学帽を目深に被った青年の二人組によって阻止された。

二人は銃撃でアンノウンの注意をそらしつつ、ユリに声をかける。
「っと！ 助けは必要かい？ ユリっぺ」

「お待たせしました音無さん、あなたの直井、ただいま参上です」
「日向君、直井君！ どうしてあなたたちまで」

「ヒーローは遅れて登場するものです。音無さん、僕はあなたのヒーローですから」

「なあにドヤ顔でクサイ台詞吐いてやがる。ユリっぺに待機命令出されたとき、一番そわそわしてたのお前だろうがよ」

「なッ……、貴様のような虫ケラと一緒にするな！ 僕は最初から音無さんの無事を祈って指令室のイスを守っていた。心配だから様子を見に行こうと泣きついて来たのは貴様ではないか」

傍から見るとテレビの笑えない漫才のようなやり取りを繰り返す直井と日向。ユリは声を上げて二人に制止を促し、何故ここにいるのかを問うた。

「ああもう！ そんなことより、指令室はどうするつもりよ！」

「問題ねえよユリっぺ。松下五段が見張ってるぜ、指令室の机の上で肉うどん食いながらな」

「なるほど。納得」

ユリは呆れ顔で顔に手を当ててため息をつく、土の手を強く引いて、後者の中へと入って行った。

四人の仲間の活躍によりアンノウンの襲撃を逃れたユリと土は、長い廊下を渡り、死んだ世界戦線の指令室があるという、南校舎の校長室へと向かっていた。夜の校舎は真っ暗で不気味だが、幸いな

ことにアンノウンの姿や気配はない。

「ずいぶん静かだが、やつらは襲ってこないのか？」

「あいつらにとつて迷惑なのはあたしたちだけだからね。一般の生徒や校舎には手は出さないみたい」

「しかしまあ、お前たちは何者なんだ？　しばらくここで厄介になる以上、何がどうなっているのかはきちんと知りたい」

「指令室に着き次第説明するわ。何も知らないんじゃないよこつちも困るもの。さて、着いたわよ。ここが指令室……」

ユリは扉を勢いよく開け放し校長室に入室するが、そこで待つていたのは彼女たちの仲間ではなく、得意気に笑って机の上に座る薄茶色の帽子をまぶかに被った青年だった。

「やあ。待つていたよ戦線のかわいいリーダーさん。それに、君も来ていたんだね。土」

彼の足元を見ると、土と同じ制服を着た恰幅の良い大男が横たわっていた。

彼にやられたのだろうか、両腕があらぬ方向にねじ曲がり、脂汗を額にためている。

「ま、松下君……！　あなた、一体何者！？」

仲間を痛めつけられて激昂げうきようしたユリは、すかさず太もものホルスターから拳銃を抜いて男に突きつける。

青年は怖がりも悪びれることもなく、自分に敵意と怒りを向けるユリを、薄笑いを浮かべて見つめていた。

「ま、ま。そう怒らないでくれたまえ。銃を突きつけられちゃあビビって話も出来やしない」

「何が”ビビって”よ！　あからさまに人を小馬鹿にしている顔じゃない」

「落ち着けユリ。このこそ泥の扱いは心得ている。下がってな」

「心外だなあ。僕は世界を股にかける　怪盗。こそ泥なんかと一緒ににしないでくれたまえ」

「俺にとつちやあどつちも一緒だ。で？ 何しに来たんだ？」

「もちろん、お宝のために決まってるじゃないか。とはいえ、この世界には僕にとつて目ぼしいお宝がなくてね。その格闘家君を軽くひねっていたんだが、ちょっと面白いことを聞いてね」

「面白い……こと？」

「説明するより見る方が早い。せつかくだ、見ていきたまえ土」

海東は床に転がる松下に一瞥いちへつをくると、机から降り、右手を乗せて念を込める。

すると、まるでレゴブロックの造形物が形を変えるかのように、机は何か別のものに変質してゆく。

土が呆気にとられている間に、校長室のどつしりとした机は、青色に輝く大型のバイクへと姿を変えていた。

「どうだい土。この世界の不思議の一つさ。知識を持つ有機生命体が無機物に触れるとそいつが望んだもの、それこそ何にもでも変えることができる。そうして作った僕のスーパー・マシン。名付けて『マシンディエンダー』。さてと、僕はここで失礼するよ。

まだ見ぬお宝が僕を待っているからね。縁があつたらまた会おう諸君」

嫌味たらしい笑みを浮かべ、アクセルを吹かしてその場を去ろうとする海東。

そしてそれと同時に土は目を疑った。彼は何の前触れもなく忽然と校長室から『消え失せた』のだから。

海東大樹 ”仮面ライダーディエンド” は、自分の体を消す『インビジブル』のカードを所持している。とはいえ、ディエンドに変身せずにそれを使えるはずがない。そもそも、使った素振りすら彼は見せていない。

土はどうしたことかと辺りを見回すが、ユリは海東のことなど意にも介さず、残されたバイクを元の机に戻して、床に横たわる松下に声をかけた。

「松下君、大丈夫？」

「すまない、腕の間接を外された。柔道五段の肩書きが泣くな……」
「気にしないの。あたしたちにとって重要なのはあなたの肩書きじゃない。あなたのその力と、経験よ」

「音無さん！ ご無事ですか！？」

「なんでもないので飛び込むなようつとおしい！」

「おおユリっペエ！ やつら全部片つけて来たぜエ！」

「ただ今戻った」

物音を聞きつけて直井と日向が駆け込み、アンノウンたちを蹴散らして逃げてきた野田と椎名が校長室に戻ってきた。

「みんな、戻ったわね。それじゃあ……ええつと、あなたは」

「土。門矢士だ」

「変わった名前ね。まあいいわ。じゃあ門矢君。今からあなたに説明するわ。あたしたちが知っている限りのこの世界のことと、”死んだ世界戦線”のことについて」

「信じられない話だろうけど、聞いてもらっし異論は受け付けないわ。ここはね、現世に未練を持って死んだ人間が、成仏して天国や地獄に行くまでの、言わば”玄関口”とも言っべき世界なの」

「死んだ……あ？ 馬鹿言うなよ。俺は死んでなんか」

”死んだ人間の世界”。その言葉に戸惑った土は大慌てで反論するも、すかさずユリが放った銃弾を右肩に受け、地面をころころと転がった。

「反論はしないこと。時間も推してるんだからぱっぱ、とね」

「てめえ、なんてことしやがるッ」

土は鬼のような形相で冷たい表情を浮かべるユリを睨みつける。しかし、彼は撃たれたと同時に気付いたことがあった。

肩から噴きだす血は体から床を伝い流れ出る。雷に打たれたかのような強烈な痛みが全身を襲う。だが、どうしたことだろう。

「なんだこりゃ。痛みはあるが、動けないほどじゃあ……」

土は肩の痛みを堪えながらではあるが、それ以外の負荷には一切苛まれずに立ち上がることができたのだ。

「気付いた？ とりあえずここがあなたの考える”現実の世界”ではないことに。この世界には”死”という概念が存在しないの。どんな重傷を負おうと、どんな激痛に苛まれようとも、絶対に死なない。見なさい。その傷だって、もうほとんど治りかけてる」

「そうかい。だいたい分かった。認めるよ、この世界のこととはな」
「理解が早くて助かるわ。話を続けるわよ。で、現世に未練を残して死んだ子は、この世界で 学生 として、現世で与えられなかった青春を謳歌^{おつか}して、満足すれば消える。何があつたか知らないけど、あなたの友達のあのこそ泥も、何かに満足したから消えた。……そういうことなの。現世で何も与えてくれなかったケチな神様の、せめてもの罪滅ぼしってところかしらね」
「なるほど。つまり、お前たちは……」

そこまで聞いて疑問に口を挟もうとした土だったが、ユリたちの暗い表情を見て口をつぐむ。

彼の申し訳なさそうな目を見たユリは表情を崩して話を続ける。

「あたしたちも、最初はその運命を受け入れて、この世界で与えられなかった青春を謳歌^{おつか}して成仏するつもりだったわ。同じような境遇の友達もたくさんいたし、NPCの人たちも優しくかったしね」

「NPC？」

「RPGゲームの村人みたいなものだと思えばいいわ。教会は村の端にありますとか、ずっと同じ台詞しかしゃべらない人みたいな。でも数カ月前。やつらが現れて、あたしたちを襲い始めたの。」

あいつらに殺されると未練のあるなしに関わらず無理やり 成仏させられてしまう。藤巻君、ひさ子さん、高松君、コードネームTK……。たくさんの友達を失ったわ」

士は コードネームTK という存在に疑問を感じたが、また撃たれても困ると頭の隅に放った。話は続く。

「で、お前たちを襲っていたやつってのが、アンノウンだった、つてわけだ」

「神の徒^{しもがら}。居心地のよかったこの世界に居座り続けたあたしたちを転生させようと神が送り込んだ掃除屋だと思っていたけど……。門矢君は何か知っているの？」

「行動原理のシンプルな、神の使い走りさ。なにかでかいものの意思を受け、”異能”の者を抹殺する。それ以外の人間は一人も殺さない。誰を恨もつたつて無駄だぜ。それが何なのか、誰にも分からないんだからな」

士の言葉に周りの空気が淀み、皆表情を強張らせ、悪態をつく。自分たちを消そうとしている輩が、実は自らの意思なき神の使い走りだった。そんな奴らに自分たちは消滅させられようとしているのか。現世で理不尽な思いをして死に、ここに来てなお理不尽に相反せねばならないのか。

やりどころのない怒りが、彼らの頭の中を堂々巡りしていたのだ。理由は違えども、それは士も同じであった。アンノウンは元々”アギトの世界”の怪人のはずだ。

それがまったく関係のないこの世界、しかも”死後の世界”で蔓延^{はひ}っている。

原因は間違いなく自分だ。自分がこの世界を”破壊”しているからだ。

こんな理不尽があつていいのか。こんな理不尽を許していいのか。士は自分の姿を鏡に映して考え、口を開いた。

「せっつかくだ、協力してやるよ。この世界でやるべきことも、出る方法も分らないしな」

この答えは半分本当で、半分嘘だ。この世界を立つ方法は分からない。が、自分のすべきことはただ一つ。彼女たちの”戦線”とやらに入り、アンノウンをこの世界から排斥すること。そう思い、士は彼女たちへの協力を自ら申し出たのだった。

「感謝するわ。じゃあ、改めて戦線メンバーを紹介するわね。あたしがこの戦線のリーダー、音無ユリ。隣の青髪の彼は『日向ヒデキ』君。あたしの片腕よ」

「日向でいい。よろしくな、新入り」

士は日向と名乗る青髪の青年と握手を交わすが、その隣にいた学帽の青年はユリの言葉に異を申し立てた。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ音無さん！ あなたの片腕はこの男ではありません！ この僕！ 『直井アヤト』以外にないじゃないですか！」

学ランに学帽の青年は、その場でわざとらしくくると回り、士を小馬鹿にしたような高圧的な態度で言う。

「覚えておきたまえ新入り。音無さんの片腕で懐刀、現人神あらいびとがみの直井アヤトだッ」

「彼が、直井君よ」

「だいたい分かった」

ユリと士は直井を無視し、彼女は右側の壁に寄りかかる二人の人物を指差す。

「で、このマフラーの女の子が『椎名リンゴ』さん。恰幅のいい男の子が『松下ユウキ』君。柔道五段の達人。どちらも我が戦線の大切な戦力よ」

自分よりもがたいが良く背も高い彼を捕まえて”男の子”と紹介するユリに疑問を覚えた士だったが、

彼がそれを口にする前に松下は彼の肩を抱き、右肩を軽く叩いて新たな仲間の加入を喜ぶ。

椎名は部屋の隅でその様子を無表情に見つめていた。

「俺が松下だ。よろしく頼むぜ、兄弟」

「……浅はか也」

二人は土に向かい軽く会釈。ユリはその次に、隣の部屋まで土を連れてゆき、中でコンピューターや無線をいじっている少女を彼に紹介する。

「それと、あたしたち戦線のオペレーターの遊佐ハツネさん」

「ユリっぺさん、少しお話が」

黄色の長髪を左右でくくり、赤縁の眼鏡をかけた遊佐と呼ばれた少女は、ユリに何かを伝えようとするも、彼女は遊佐の言葉を遮って話を続ける。

「そして、我が戦線にとって欠かすことができない、NPCの陽動部隊『ガルデモ』の……」

「ユリっぺさん話を聞いてください」

遊佐に耳を強く引っ張られ、ようやく彼女の言葉を気に留めたユリは、ひりひりと痛む耳たぶを優しくさすりながら彼女の言葉を聞き返す。

「どうしたっていうのよ遊佐さん」

「ガールズ・デッド・モンスター、通称『ガルデモ』。そのボーカル兼ギターの『岩沢ユイ』さんが、行方不明です」

「丁寧過ぎるご説明どうも……って、ええっ!？」

「各員楽器のチェックを終えてトイレに行っている時に」

「いや、いや! そうじゃない! 今! ?このタイミングで! ?」

「正確には20分前。ユリっぺさんたちが徒に追われている最中の出来事です。他のガルデモメンバーも学内を探し回っているのですが、良い返事は」

「そうじゃない! いや、それはそうだけど……そうじゃない!」

唐突に耳に入った危機の報に傍目から見ても分かるほどあわてふためくユリ。直井は日向を伴って彼女を抑え込んで落ちついてくさいと一言付け加え、遊佐は淡々とした口調で話を続ける。

「心配は無用ですユリっぺさん。こんなこともあるうかと、彼女のSSSエンブレムに”発信器”を取り付けておきました。今どこにいるのか、ばっちり分かります」

「そんなものがあるんならもっと早く言いなさいよ！ っていうか、いつの間にそんなものを」

遊佐はユリの言葉を無視して手に持ったノートパソコンを操作し、学校全体の簡単な見取り図を画面に映し出して彼女に見せた。

「これによると……現在のユイさんの居場所は、南校舎の裏、旧校舎の旧理科室、のようです」

「言いたいことはいろいろあるけど……これでなんとか動けるわね。ありがと」

ユリはそう言って佇まいを直すが、部外者である土には何が何やらさっぱり分からない。

彼は顎に指を当てて思案するユリに声をかけた。

「どうした？ 何をそんなにうるたえている。たかだかバンドの演奏だろう？」

「分かってないわね。ガルデモはカリスマ的人気を誇るバンドで、あたしたち戦線の”陽動”の要であり、オペレーション作戦開始のトリガーなのよ。ポーカーが行方不明じゃ、今後作戦を行うなんてとても無理よ」

「なるほど、ならば、俺はどうするべきか……」

土も同じく顎に指を当てて思案する。

いつも肌身離さず持っているはずのデイケイドライバーはない。

単純な戦闘能力だけなら、彼女たちの方が自分よりも上であろう。ならば、今自分がすべきことは何なのか、と。

少し考えた後、土は嫌味たらしい笑みを浮かべて、

「面白い。だったら」

それから数十分後。ユリ、日向、直井、野田、椎名の五人は、旧校舎校門前に集まり、作戦の最終チェックを行っていた。

「音無さん、本当に大丈夫なんですか？」

「ユイを救出するのは確かに大切だがよ、あれはちょっと無謀じゃねえか？」

「じゃあ聞くけど、あなたたちにはできるの？ あの大観衆を、あまつさえ大ブーイングの中で、臆せずに堂々と歌う、なんて」

直井と日向は渋い顔をして押し黙る。少し考えた後、直井は音無さんのご命令とあらば と言いかけたのだが、ユリの鋭い目付きに負けて縮こまった。

「まあでも、早く終わらせるに越したことはないわね。いい？ 今回のミッションの目的はガルデモのボーカル『岩沢ユイ』の救出、そして奪還。徒……アンノウンの介入があるかもしれないから、万全を期すため二手に別れて侵入しましょう。日向君と直井君はあたしと共に正面玄関から、椎名さんと野田君は校舎裏から侵入。最優先すべきはターゲットの保護。必要ならば味方を見捨てて先へ。助けに行くのはもつての他。有事の際は各自の自己判断を優先、いざとなったら一目散に逃げることに。分かった？」

ユリの言葉に皆首を縦に降る。それを見て少しだけ安堵の表情を垣間見せたユリは、最後にこう付け加えた。

「じゃっ。生きてたなら、また会いましょ。オペレーション：」ガ

ルデモ・ゲットバック”。スタート」

ユリの言葉に深く頷いた各員は、神妙な面持ちでそれぞれのルートへと向かって行った。

そして、話は冒頭へ戻る。「ガルデモ」の演奏を期待していた観客たちは、ノリノリで壇上でマイクを握る門矢土の姿を見て怒り狂い、会場はブーイングの嵐で荒れに荒れていた。

「やっぱり、ダメだったじゃないですか」

「無理ですよ。ガルデモの中に男性ボーカルが入るなんて」

「問題ない。演奏を始めろ」

観客の誰もが落胆し、会場を出てゆく中、土にそんなものは関係ないと一蹴され、始まった演奏。

いつもと違うラテン系の高揚感を煽る音楽に、観客たちの足が止まる。

徐々に高揚感を増してゆくバックミュージックに、土のヴォーカルが加わる。”自分に苦手なものはない。写真を撮ること以外は”と豪語するだけあり、歌唱力も天下一品の一言だった。

帰り支度をしていた観客たちの目が再びステージの方に向けてゆく。

Aメロを過ぎ、曲の中で最も盛り上がる激しい曲調のサビへ。ガルデモメンバーの円熟した演奏が観客を煽り、土の抜群の歌唱力がそれに合わって、NPCの心をつちりと掴む。会場を出て行くところとしていた観客は皆席へ戻り、割れんばかりの歓声を上げ、ライトを左右に激しく振っての大盛り上がり。出てゆくこうとする者は誰もいなくなつた。

門矢士が自分の持ち歌で会場を沸かせている最中。ユリと日向と直井は月も星もない宵闇の中、まさかここまでの歓声が上がるとは驚きつつ、手探りで校舎の中を進んでいた。

光源としてペンライトを所持してはいるが、人質の奪還を最優先しているがために、あえて使用していない。

「歓声……か。門矢のやつ、本当にやりやがったんだな」

「あたしの見込みに間違いはなかったってことよ」

「さすがは音無さん！ 素晴らしい先見の明ですっ」

直井の妙に強引なおぺっかに対し、「思ってもないことを」と軽く流すユリ。

その様子を横目に見ていた日向は、そんなわけがないと弁明する直井を遮ってユリに問いかけた。

「なあユリ。ユイをさらったやつらだけだよ、お前は『誰が』やったと思う？」

「徒……というか、アンノウンでしょ。他に誰がいるっていうの」「だからこそおかしいんだよ。今まで馬鹿正直に正面切って俺たちを消そうとしていたやつらだ。人質取って何かしようなんて、考えつくかあ？」

「あいつらは神の使いっ走りよ。あたしたちがやたらに抵抗するからやり方を変えようとしたんじゃない」

ユリの答えに「尤もだ」と頷きつつも、日向はそれがおかしいんだと言葉を返した。

「そう、そこなんだよユリっぺ。あんなチート使って生み出したような化け物を、それこそ無尽蔵に生み出せるようなやつなんだぜ？

なんでこんなまどろっこしくて、妙に姑息な手段を使う必要がある。そうまでして俺たちをここから消したいってんなら、もっと反則技だのなんだのを使っちまえばいいじゃねえか」

「何が言いたいの、日向君」

「あいつらとは別の何か……、俺たちやアンノウンとは違う何かがあるんじゃないか？ 俺はそう思う」

「何かって、何よ」

「俺は仮説を立てただけだ。分かるもんか」

「はッ、珍しく何かあるかと思つて黙つて聞いていれば……、時間の無駄だったな。これだから虫けらは」

「そこまで言うこたあないだろ、そこまで！」

「二人共、黙つて！」

ユリがそう言い放つた瞬間、直井と日向は言い争っていたことから忘れ、腰のホルスターに提げた拳銃を手にとって、殺気を持って周囲左右に銃口を向ける。

「音無さん、敵ですか」

「ええ、聞こえたわ。理科室前……、いや、もっと近いかも」

「何が来るんだよ」

ユリは目を瞑り周囲の音を聞き取るうとする。金属と金属が擦れ合い、ぶつかり合う音がユリの耳に響いた。

「わからない。これは、この音は……、斬り合い？」

「椎名や野田がやつらと交戦したのか？」

「違うわ。野田君のハルバードならもつと鈍くて重はずだし、椎名さんの短剣の、金属と金属がこすれあう音でもない。もつとこつ、刃と刃が激しく早くぶつかりあうような……、いけない！ 二人とも伏せてッ」

ただならぬ何かの音を聞き、何が来たかと思案を巡らせる三人の前、いや彼らの頭上を何者かが飛び越えた。

ユリは振り向きざまにポケットからペンライトを取り出して、周囲の様子を探る。彼女が最初に目にしたのは息を切らし、肩膝をついた白いアギトの姿だった。

「いつもとやり口が違つとは思つたが、こついうことか！」

「まさか、今回の犯人は」

「待つて。あの子が……」天使”がユイちゃんを誘拐したって言うなら、なんで彼女は、あいつらと戦っているの？」

ユリの言葉に、二人は先ほどまで見ていた方向に向き直る。予想通りと言っべきか、二体の怪人が視界の範囲内に迫って来ていた。暗がりのせいで、対する相手がどのような怪人なのかは判別できない。

三人は先んじて構えた拳銃を発砲するが、その音に気付いた”天使”は、彼らと彼らの銃撃の合間をぬい、再び怪人たちに組み合った。

「なんだ？ なんだッ」

「俺たちを……助けようとしてるのか？」

「なんでもいいわ。今がチャンスよ。総員、急いで理科室へ！」

「了解ッ」

「音無さんとなら、どこへでもどこまでも！」

三人は取っ組み合う 天使 と怪人の間をすり抜けて先を急ぐ。後を追う怪人は一人もいなかった。

「おう、ユリっぺ！ 無事か？」

「……ユリ」

「野田君に椎名さん。無事だったの？」

そんな中、自分たちの向かう先から、別ルートで侵入した野田と椎名が合流。

ユリの言葉に、椎名はあくまでも冷静に、野田は憤怒が入り混じった口調で当たり散らす。

「無事なもんか。椎名のやつに先を行かれたせいで、やつらに道を塞がれてどうなるかと思っただぜ」

「そんな馬鹿みたいに長いものを持ち歩くからだ」

「んだとオ！ 馬鹿見てエに暑そうなマフラーしているやつに言われたかねえ」

「言い方を変えよう。お前は馬鹿みたいではなく、本当の馬鹿だ」

「言ってくれたなこんにやろう！ 二回死ね！」

「浅はか也」

「もう！ 二人ともこんなところで喧嘩しない！ ほら、理科室が見えて来たわよ！」

いがみ合う二人をなだめ、ユリが指差した先。一団は入口から既に埃舞う、

ターゲットが幽閉された理科室へと辿りついた。

全員の表情が強張る。誰もが銃や剣を構えて臨戦態勢で扉の前に立ち、ユリが壁に耳を当てて中の様子を覗う。物音一つ立っておらず、周りと相反するかのようにしんと静まり返っていた。

ユリは壁に立ったまま、足先をドアの取っ手に引っ掛け、蹴り込むような形で強引にドアを開ける。

リーダーであるユリが真っ先に中に入ったことで、残りの四人が後に続く。

「見張りもなし、か。舐められたものね、あたしたちも」

「音無さんのすごさにやつらも怖れを成したんですよ」

「そうだといいいけど、ね」

「あ……ッ！」

否応なしに周囲の目を引く目に悪そうなピンク色の髪に、ユリたちの制服にパンクな装飾を施した小柄の少女。「岩沢ユイ」が理科室の隅で震えている。

日向ヒデキは真っ先に彼女の元に駆け寄った。

「おいつ、ユイ！ ユイ！ 大丈夫か！ 助けにきたぞッ」

「ふえ……え。日向センパイ……」

余程怖かったのか、ユイは日向の姿を見込んだと同時に、彼の体に抱きついて思いっきり押し倒した。

スカートの中から伸び出た悪魔の尻尾のような装飾が、かわいらしくぴこぴここと上下に揺れる。

「うえええええん、怖かった！怖かったよおおおお！」

「馬鹿！ やめろ！ 抱きつくなくて！ みんな見てるだろうが！」

「見るからダメなの？ 見てなきやいの？」

「そりゃあお前……って、何言わせようとしてるんだよッ」

「はいはい。愛情表現も甘酸っぱい青春タイムもそこまで。ターゲットの確保完了。とっとと撤収するわよ。退路はあたしが確保するから、急いでね」

ユリは理科室の机を片っ端から集めて一本の 柱 に変え、持っていたロープをくくりつけて皆にそう伝える。しかし人身御供ともとれるユリの発言に、真っ先に直井が異を唱えた。

「待ってください音無さん、じゃああなたは」

「心配御無用。適当にやつらを誘き寄せたらすぐに逃げるから」

「ですが……」

「このオペレーションの目的はユイちゃんの確保。それに仲間を置いて真っ先に逃げるリーダーがどこにいるのよ」

ユリはその言葉に急ぎなさいと付け加え、鋭い目付きと表情で促す。四人は仕方なく黙って頷くと、くくりつけられらロープを窓から垂らし、ガラスを割ってそこから逃げていった。

皆が逃げたのを見届けたユリは、太もものホルスターから拳銃を取り出し、ひと山を成して積もる灰のようなものを握りしめ、険しい表情のまま構えた。

「あの体……まさか、あいつらが……」

だが、血沸き肉躍るライブはそう長くは続かなかった。会場の扉

を突き破り、数体の怪人が人の波を割って入ってきたことで。まるで海を割るモーゼのように、NPCの人波をくぐり、怪人たちは士たち”ガルデモ”が立つステージへと歩を進める。

士は怪人たちを見据えたまま、予期せぬ事態に怯えて震えるガルデモのメンバーたちに声をかけて律した。

「うるたえんな。お前らは今まで通り演奏を続けていりゃあいいいいいな？」

「いいなって……門矢さんは一体どうするつもりなんです！」

「落ち着け。俺なら大丈夫だ。なんとかなる」

士は首に提げたトイカメラを握りしめ、思案する。

思い出せ。そして恐れるな。

海東は大型の机を使って”バイク”をこの世界に生み出した。

原理はよく分らんが、この世界では”無”から”有”を作り出せる。

机からバイクが出来るんだ。だったら……

士は首にかかったトイカメラを外し、両手に握りしめて念を込める。自分が今まで使っていたあのバックルを。『世界の破壊者』のキー足り得るあのバックルの姿を。

ピンク地に黒い縦縞の入ったトイカメラは、一瞬のうちに『デイケイドライバー』へと姿を変えた。

「思った通りだ。ってことは」

士はバックルを腹部に押し当てる。ベルトが伸長され、右腰に”ライドブッカー”がひとりでに現れる。すべて予想通りだ。

「さあて、第一部はこれにて終了。ここからは血沸き肉躍るヒーローショーだ。目ん玉かつびろげてよおく見ておけよ。地獄だろうが天国だろうが現世だろうが、こんなゴキゲンなショーはめつたに見られるもんじゃあないぜ」

デイケイドに変身した士はマイクに向かいそう言い放つと、ステ

ージを飛び降り、怪人たちに飛びかかった。

デイケイドは相手の攻撃をひらりひらりと空を切らせてかわしつつ、自分の拳を自分の蹴りを正確に相手に叩きこんでゆく。雑兵の一体や二体、数多くの死線を乗り越えたデイケイドの敵ではなかった。

敵の攻撃を一切受け付けず、ライトの激しい光に照らされて軽やかに戦うデイケイドの姿に、会場内のNPCは大盛り上がり。

残されたガルデモのメンバーたちはそんなデイケイドの戦う姿を見て、頭の中に流れてきた曲のフレーズを、楽器を伝って場内に流し込んでゆく。

思わず動きだしたくなるようなラテン系のアップテンポのミュージックに、場内の盛り上がりは再度最高潮と相成った。

「さあて、と。そろそろ決めるか」

ATTACK RIDE 「ILLUSION」

FINAL ATTACK RIDE 「De - De - D

e - DECADE」

デイケイドは『イリュージョン』と、「ファイナルアタックライド」のカードをドライバーに装填。

4人に分身したデイケイドがそれぞれ金色のカードを潜り抜け、必殺の『デイメンションキック』を怪人たちに浴びせた。

キックを受けて地面にめり込んだ怪人たちは皆、白い灰となって消滅していった。

会場中に溢れかえる歓声の中、デイケイドは一人立ちつくして思案する。

「アンノウンの次は、オルフェノクか。」

俺は……この世界には一体、何が起ころうとしているんだ？」

申し訳ございません会長。アギトを取り逃がしました。

気にするな。最初から上手くいくとは誰も思っていないさ。
やつのポテンシャルは十分確認できた。それだけでも良しとしよう。
アギトの力……この僕が必ず手に入れて見せる。必ず……

「Angel Beats!」編第一部。

元の作品がキャラクタと設定説明が異常なほど多い作品でしたので、いかにキャラを減らし、説明すべき説明を絞るかで頭を使いました。人員整理と音無の役割を土に振った関係で、直井が男好きじゃなくなつてすみません。

舞台が”死後の世界”であり、

”神”の存在がそこそこの話の根幹にかかわる作品だったので、作中の敵にはアンノウンを配置しました。当然の帰結でしょうか。

みんなだいき天使ちゃんは色々あつてアギトに変身しましたが、じゃあゆりは?となるのは当然の疑問ですよ。

一応考えてありますが、それはまた数話先のお楽しみに。

「こちら、直井。徒の他に新たな敵が出現した。諸君らには武器の増産を頼みたい。そう、早急にだ。……うろたえるなッ。お前たちは僕らに武器を送ればそれで良い。そうだ。拳銃十五丁に弾丸四箱、電磁砲を三丁に、ロケットランチャーも頼む。……できない、とは言わせないぞ。今日の夕方までには間に合わせる」

翌朝。死んだ世界戦線・リーダーのユリが戻らない中、直井アヤトは、SSSの支援部隊「ギルド」へ、武器の調達を電話で催促していた。

現実世界で、しかも自分たち高校生には到底出会えようがない武器の名前の羅列に、そんなものを用いて戦う自分たちに、直井は自嘲気味に鼻を鳴らす。

そんな中、見回りから戻ってきた日向が声をかけた。

「直井、ギルドへの連絡か？」

「武器の調達と同時に腰抜け共に喝を入れてやった。夕方までには何とかなるだろう」

「おうおう、怖いこつて。しっかし、物騒なもんだな。電磁砲ってなんだよ。朝になってもユリっぺが戻らなくて不安だからって、そのやつあたりはほどほどにな」

日向の言葉に、直井は「確かにその通りです」と言わんばかりに動揺し、顔を赤くして叫んだ。

「な……ッ！そんなことあるはずがなかるう！僕はサブリーダーとして今すべきことをしているだけだ。お前のように古株なだけの役立たずと違ってな」

「ああ？ 言わせておけば調子に乗りやがって」

「言いたいことがあるならかかってこい、この虫けらめ」

「はいはいストップ、すとーっぷ」

二人は怒りに顔をひきつらせ、おでことおでこをくっつけ合う。

一触即発の雰囲気校長室がSSS本部に漂う中、彼らを引き剥がしてぱんぱんと手を叩き、手打ちを促す音が聞こえた。

リーダー・音無ユリが帰って来たのだ。

「ユリっぺー！」

「音無さん！ よくぞご無事で！」

「あたしがあんなやつらにやられるもんですか。それで？ 状況はどう？」

「徒……アンノウンも旧校舎で俺たちを襲った奴らにも目立った動きなし。ユリっぺもいなかったし、みんな警戒しつつ校舎内で待機してるぜ」

「そしてその間にこの僕が、ギルドに物資の増強を命じておきました」

二人の報告に頷くと、ユリは表情を変えずに話を続ける。

「了解。二人とも御苦労様。そういえば、門矢君はどうしたの？」

「あいつならガルデモのメンバーと一緒に学食だ。夜が明けるまでNPCを引き付けてたんだ、休ませてやるうぜ」

「当たり前よ。所在を聞いておきたかっただけ。それはそうと日向君」

「なんだ？ まだ何かあるのか？」

「そっちの彼女……いいの？」

ユリは怪訝けげんそうな顔で日向の背後を指差す。

そこには顔を真っ赤に染め、歯をぎりぎり喰いしぼり、いかにも”怒り心頭”な表情を浮かべたユイが立っていた。

「ひいゝなあゝたあゝ！」

「なっ！ なんだよユイ！ 俺が何したってんだよ」

ユイはスライディングで日向をよろけさせると同時に、彼の左足

を自分の左足を絡めた上で、右腕の下を経由して自分の左腕を首の後ろに巻きつけ、背筋を伸ばす。

所謂「コブラツイスト」だ。

「ないもナイチチもあるかあ！ これ見るこれをオ！」

「これ……って、お前のギターのこと、か？ 文句言つなよ。あの時はお前をかついで逃げるだけで精いっぱいだったし、びえんびえん泣いてたお前にそういうこと言う資格あるのかよ」

「それはそれ、これはこれ！ これはなあ！ ひさ子先輩の遺してくれた大事なギターだったんだぞ！それをこんな、こんな……！ ぐつちよんぐつちよんにしてくれちゃつてえ！」

「だあーかあーらあー！ 悪かったとは思っけど不可抗力だったの！ 死にはしないが苦痛は感じるこの世界。小さい体からは想像もつかない力で締め付けられる日向は、

手で地面を何度も叩き”ギブアップ”を宣言するが、ユイの怒りは収まらない。

このままでは日向がこの次の戦いで使い物にならなくなってしまふ。そう思ったユイは、ユイの体を強引に引き離して手打ちを促した。

「ユイちゃんも日向君もその辺になさい。その件についてはあたしの責任でもあるし、作戦行動に支障が出て困るから。あとできちんとあたしが修繕しておきます。それで許してあげて」

「む、うう」

「ほら、ほらっ。日向君だって別に悪儀があつたわけじゃないわけだし、こうして頭を下げているわけだし」

納得いかないと言わんばかりに、子どものように頬をふくらますユイ。ユイはそんな彼女の行動を可愛いと思いつつ、日向の頭を何度も何度も強引に下げさせ、彼女に怒りを抑えるよう促した。

「わかりましたあ。ユリッペ隊長がそう言うならあ」

「うん。ユイちゃんが分かってくれて、あたしも嬉しい」

「でも先輩、一つだけ間違ってますよ」

「なあに？」

「ユイのことを呼ぶ時は”ユイちゃん”じゃなくて”ユイにゃ……”」

ユイが手首をを丸めこめかみの前に持ってきて何かを言おうとした瞬間、SSSの隊員の一人が息を切らせて本部へと駆けこんできた。その表情と焦り具合から、ユイは尋常なことではないと確信する。

「たっ、大変ですユリっぺさん！」

「あなたはガルデモの……。どうかしたの？」

「門矢さんが、門矢さんがッ！」

「と、言うわけで……。ライブ、お疲れ様でした！」

「お疲れ様です」

「おつかれです」

「あ、ああ。お疲れ」

その、少し前。

体育館における「ガルデモ」のライブ及びオルフェノクとの戦いを終えた士たちは、生徒たちからライブ参加料として受け取った学生食堂の”食券”を用い、券売機が隣り合う席にてやや早い時間の朝食を摂っていた。

「しかし、なんで人様から奪った券を使うんだ？ こんなことしなくてもその券売機で買えばいいだろ」

「ダメです。そんなことをしたら”健全な生活”をしていたと、あいつらに気付かれて、そのまま”成仏”してしまいますよ」

「何を馬鹿な。飯ぐらいでそんなことがあるか。俺が試してやる」

飯を買っぐらいで何が消える消えないだ。士は渡された”たぬきうどん”の券を机に置いたまま、

彼女たちに踵を返して食券を買いに行こうとする。

「門矢さん、やめてください！」

「消えちゃったら元も子も……っていかお金は」

「土くれでもその辺のごみからだって何でも生み出せるんだろ？」

そのこのスプーンからほら、500円玉だ」

士は二人の制止を聞かぬまま、食券販売機に歩を進め500円玉を入れようとする。

しかし、その隣でたどたどしくお金を入れて食券を買おうとする、『銀色の髪』に『金色の瞳』の少女のことが気になり、手が止まった。

昨日の夜、自分に襲いかかってきたあの「天使」とかいう少女だ。士の視線が気になったのか、天使は彼を見上げるようにして口を開く。

「なに？」

「いや、その……『激辛麻婆豆腐』だっけか？ それ、本当に買うのかと思ってよ」

彼女が手を伸ばしていた券売機の中央に表記されていたメニュー。蠟ろうで出来た完成品イメージを見ているだけで口の中が渴くほど、赤く毒々しい色の麻婆豆腐だった。

そんなものを食べて平気なのか。士の興味は天使が何者なのかよりも、この麻婆豆腐を食べようとする、彼女の覚悟と心意気に興味を持たずにはいられなかった。

「何を食べるかはその人の勝手でしょ」

「それはそつだ。否定はしない。続けてくれ」

天使は激辛麻婆豆腐の食券を買い、食堂のおばちゃんに手渡す。

おばちゃんは表情を変えることなく厨房で決められた食材を分量どおりに皿に盛り、数分後、マグマのようにぐつぐつと煮立った麻婆豆腐が天使の目の前に置かれた。

無言でおばちゃんに一礼すると、天使は窓際の端の席に腰を降ろし、白く大きな蓮華レンゲを使ってたどたどしく口に運んでゆく。

士は食堂で何かを買おうのをやめ、自分の席に戻り、料理の乗ったお盆に持って彼女の席に向かおうとするが、その途中でガルデモのメンバーたちに止められた。

「門矢さん、何をするつもりですか!」

「やめましょうよ! ユリッペさんに怒られますよ?」

「俺は協力してやるとは言ったが、SSSのメンバーになるとは言っていない。好きなようにやらせてもらうさ」

士は彼の身を案じるメンバーたちの言葉と制止を振り切り、お盆を持って天使の席のテーブルの向かいに腰を下ろす。それを珍しいと感じたのか、天使は向かい合って食事する士に声をかけた。

「なに?」

「一緒に飯を食おうと思ったただけだ。迷惑か?」

「べつに」

士に興味をなくしたのか、天使は再び顔を皿の方へと戻し、淡々と麻婆豆腐を口に運んでゆく。士の興味は高まる一方だ。

「それ……辛くないのか?」

「べつに」

「辛いというかそういうレベルじゃないだろ。腹壊すぞ」

「うまいわ」

自分とは感覚が違うのか。それとも味覚が欠落しているのか。士はマグマのように煮立つこの麻婆豆腐を黙々と口に運ぶ少女に、自分の知らない世界を見せつけられた気がして啞然とする。

それと同時に、少女の方も士の食べる料理に興味を持ち、話しかけてきた。

「あなたこそ、そんなのどうやって食べるの?」

「このことか?」

士が食べていたのは『カツカレーうどん定食』。うどんの上にカツとカレーが乗っており、茶碗に山盛りのご飯が盛られたこれまた珍妙な定食だ。

「カレーうどんをそのまま食べつつ、ルーが染み込んだカツでご飯

を食べるつもりなの？」

「カツカレーうどんを食った後にその残り汁をご飯にかけて、カレーとして食う、という手もあるぜ」

「なるほど、興味深いわね」

「だろ？」

士は彼女の得体の知れなさに少しだけ対抗できたと顔をほころばせ、カツカレーうどん定食を口に運んで行った。

天使はそんな士を興味津津に見つめつつ、麻婆豆腐に口をつける。「おいしい？」

「このカツの衣の湿った感じがなかなかいい。カレーはレトルトだが」

「ねえ、わたしのこの麻婆豆腐と」

「悪いがお断りだ。俺にはそいつは食べそうにない」

「残念」

天使が残念そうに自分のさらに視線を戻したのを見計らい、士はずっと疑問に思っていたことを口にする。

「ところで、お前は一体何者だ？何故”仮面ライダー”に変身できる」

「仮面……ライダー？”アギト”の力のこと？」

麻婆豆腐を口に運び続ける天使の手が止まる。”アギト”に変身できるのに、”仮面ライダー”とは何であるかを、彼女は知らないのだろうか。

「この世界に元々仮面ライダーはいなかった。ってことはお前、俺みたいに別の世界から来たのか？」

「違う。わたしはただの元・生徒会長で、SSSのメンバーよ」

そう言っつて、ボロボロになった”死んだ世界戦線”の腕章を土に見せる。昨日ユリが自分に見せたものと全く同じだ。嘘をついている様子もない。

だが、こうなると当然湧いてくる疑問が一つ。

「ちょっと待て。お前はあのユリとか言う奴の仲間、なのか？」

「そうよ」

「じゃあなんでお前はあいつらに追われているんだ。そんな物騒な力も持つてる。アンノウン共を相手にするなら、いちいち迫害しないで仲間につけていた方が楽だろうに」

「それ、は……」

そう言いかけて天使の口が止まる。彼女にもその理由が分からないのだろうか。土はますます彼女のことを気になり問い出そうとするが、それは叶わなかった。何故ならば。

そこまでよ！

連絡を聞いてやってきたSSSのリーダー・音無ユリが、土のこめかみに固く冷たい銃口を突き付けてきたのだから。

「おだやかじゃねエな。何のつもりだ」

「そいつはあたしたちの敵よ。危険だから今すぐ離れなさい」

「危険、ねえ。俺はこいつとちよいとお話をしていたが、犬みたいに真面目で従順。危険なんてもんとは程遠く見えるぜ？」

「これはSSSリーダーとしての命令よ。離れなさい」

「ごあいにくさま。俺は”協力してやる”とは言ったが、”仲間になる”と言った覚えはねえぜ」

土の人を食った態度に苛立ちを募らせたユリは、こめかみに突きつけた銃口に力を込め、まくしたてる。

痛みはあるが、土はそれに屈することなく飄々とした態度を崩さない。

「御託を並べるんじゃないの。あたしが離れるって言うてるのよ」

「俺はこれでも年上だぜ。年上には年上へと言葉遣いってもんがあるだろ。何故そこまでして俺をこいつから遠ざけようとする。訳はともかく理由を言えよ」

「メンバーでないあなたを知る必要はないわ。言うことに従わないと言うのなら、頭をぶち抜いて引き剥がしてあげてもいいのよ？」

気にせず食事を続けるNPCの中で、徐々に険悪になってゆく周

困の空気。ガルデモのメンバーたちが二人を仲裁しようとするが、聞きいれる気配はない。

食堂に多量の血が流れるのではないかと彼女らは心配するが、その空気を察したのか、天使は食べていた麻婆豆腐の皿を持ち上げ、一気に口の中に流し込むと、強引にそれを呑みこんで、口の周りをポケットティッシュで拭いながらユリに向かいこう言った。

「ごちそうさま。ユリ、邪魔してごめんなさい」

「おい、ちよつと待て。まだ話の途中……」

「ちよつと……」カナデ”ちゃん”

天使はユリの顔を複雑そうな表情で見つめると、トレイを持ち踵を返して食堂を出てゆく。その後ろ姿に声をかけようとするユリのことを無視しながら。

だが、土はユリが口走ったその言葉を聞き逃さなかった。

「カナデ。あいつの名前か？」

「そうよ。『神代カナデ』^{かみしろ}。それがあの子の名前」

「あいつもSSSの腕章をしていたぜ。仲間だったんなら、何故あも敵視する。何故今声をかけようとした？」

ユリは表情を曇らせ、土と目を合わせないようにし、消え入りそうな声で答える。

「仲間じゃないんら言う必要はない。あなたが言ったのよ」

「そうだな。違いない。だがその様子じゃあ他のメンバーにも言っていないな。誰にも言えない秘密をメンバーじゃないからと隠すのは卑怯じゃないか？」

言い負かすことはあっても言い包められるのは初めての体験なのだろう。土の返答にうまく言い返せず、ユリは言葉を詰まらせる。

事情は知りたいが、そこまで聞きだすのも意に反する。土はユリから聞いたことをあきらめ、トレイを片手で掴んで踵を返した。「もついい。お前からじゃあ情報は得られないだろうしな。俺はお前らの協力者であって仲間じゃない。好きにやらせてもらうぜ」

土は興味が失せたと言わんばかりに、左腕についた腕章を外してズボンのポケットに突っ込むと、
食器の載ったトレイを返却口へ帰し食堂を出てゆく。

ユリは曇ったままの表情で土が今まで座っていた席へと座り込み、歯を切りきりと食いしばって何かを思索していた。

「あの……ユリっぺさん、何か、食べます？」

そんな中、ガルデモのメンバーの一人が彼女を心配して声をかけてきた。ユリは気持ちを落ち着かせるため、平静を保つためにと、彼女たちの食券の束の中から一枚を掴み取りおばちゃんの元へと持っていく。

「おおよいらっしやい。何にするのかい」

「激辛麻婆豆腐。香辛料多めで頼むわ」

「はいはい」

「門矢くーん！ ちょっと待ってよ門矢くーん！」

煮え切らない表情で食堂を後にした土に、背中に背負った大仰なギターを左右に揺らし、

彼の肩ぐらいの背丈の艶やかなピンク色の髪の少女が声をかけてきた。

昨日ユリたちがオルフェノクから助け出したあの少女だ。

「お前は確か、ええつと……『平沢ユイ』。悪いな。昨日はお前のステージに乗っ取っちゃってよ」

「『岩沢』！ ユイ！ なんでそんな間違えるんじゃあ！ 呼ぶ時は岩沢さん！ もしくはユイにゃん、にゃん！」

手首を丸めてこめかみの横で左右に振るユイの動作を見て、土は

うっとおしそうに冷たい目つきで彼女を睨みつけた。

「ちよっ、何よなんでそこで引くのお」

「自分のその貧相な胸にでも聞いてみな。それはともかくだ。お前も一応SSSのメンバー、なんだよな？」

「一応って言葉が引つ掛かるけど……うん、ユイもメンバーだよ。作戦の邪魔にならないようNPCの興味を引き付けるために結成された、『ガールズ・デッド・モンスター』のボーカル兼ギターのねっ！」

「ご丁寧にどうも。だったらちよっと聞かせてもらえるか？ あの天使……神代カナデのことについて、だが」

『天使』 神代カナデのことを問いただそうとするが、ユリと同じく彼女も心苦しそうな表情のままうっむいて答えようとしない。「なんだよ。お前までだんまりか。隊の”タブー”か何かなのか？」「違う。そんなんじゃない。彼女はユイたちSSSの大事な大事なメンバーの一人。門矢君は昨日入ってきたから知らないのは当然だし分かってるけど、知らないでカナデちゃんのことを馬鹿にするとユイ、許さないよ」

「愚弄するつもりはない。俺はただあいつが何なのかを聞きたいだけだ」

土の目と気迫に気圧され、ユイは少し考えた後に口を開いた。

「何かって、そんな大したものじゃないよ。あの子もユイたちも、みんな現世で理不尽な生き方を強いられて理不尽に死んだだけ。せめてこの場所でのだけは理不尽じゃない生き方をしようって決起したのが、

ユリっぺ隊長とカナデちゃんだった、っただけ。あの徒たちと戦い、楽しかった学校生活を取り戻そうって決起したのが、あの二人だった、っただけ。どんな銃器でも軽々と使いこなして、狙った獲物は百発百中のユリっぺ隊長に、両手を刃に変えて戦場を駆け回り、颯爽と徒を切り崩してくカナデちゃん。今じゃ『徒に寝返ったあいつらの使い走り』って意味の”天使”ってあだ名……。あれ、本当は

白い髪に白い肌で戦場を駆け回る姿があまりにも綺麗だったから、日向センパイがそれを”天使”になぞらえてつけたあだ名だったんだよ」

「それを、ユリ自ら壊したと？」

「本当は違うのかもしれないけど、ユイにはそういう風にしか見えなかった。ねえ門矢……土君。ユイたち、一体どうなっちゃうのかなあ。このままじゃいつか、みんなばらばらになっちゃうよ」

ユイは今にも泣きそうな曇った表情で、すぐるよう目と口調で土に問いかける。が、今初めて内情を知ったうえに、自分から仲間ではなく協力者と言いつつ放った彼には、彼女の期待に添えるような行動や言葉など、取れるはずもなかった。

「悪いが俺はここに来たばかりのただの通りすがり。この世界の問題に深入りできはしねえよ。力になれなくて悪かったな」

「いいよ。ユイも言ってみただけだし」

そう言って表情を戻し、軽く微笑んで見せるユイ。口ではそう言っているが、曇った表情を正しきれていない。

二年C組、音無ユリさん。二年C組音無ユリさん。

至急「生徒会室」まで来てください。繰り返します

そんな中、校内アナウンスからユリを呼ぶ放送が流れた。土はようやくかため息をつき、ユイは何故なんだとろたえる。

「ええっ、ユリっぺ隊長が生徒会室にお呼ばれ！？ 何をしたんですか！」

「はっは。やっぱりそうだったか。食堂で銃をぶっ放そうとすりゃあ、生徒会長に御叱りを受けさせられるってのも頷ける」

「そうじゃない、そうじゃないの。よく考えてもみなよ。ユイたちを除けばほとんどみんな『NPC』なんだよ？銃を食堂で撃とうとしたからって、呼ばれるはずは」

「いやいや、そりゃあないだろ銃だぞ銃」

「あつても……っていうことは、そっか、そういうことかっ」
「何だ。お前だけで納得するな。俺に分かるように説明しろ」

士の知らない何かに気付き、自分の中で自己完結しようとすユイ。それでは分からないと両肩を掴み、ぶんぶんと上下に振る士。ユイは離してほしいと彼に懇願した後、よろめきつつ答える。

「えっとね、この学校、っていうかこの世界の生徒会長さ、カナデちゃんが抜けてから結構の間空位だったんだけど、先週新しい生徒会長が選出……っていうか立候補したんだよね。NPCの顔なんていちいち覚えてないけど、なんとなく変な雰囲気醸してる人だった。名前は……えっと」

そこまで言いかけて口ごもるユイ。

なんだ知らないのかと彼女を罵倒する士に、ユイはお世辞にもない胸を張って少し怒り顔で言葉を返した。

「覚えてないんじゃないの！ 読み方が分からないの！」

「分からない？ じゃあここに書いてみるよ。紙とペン貸すから」

「さんきゅー。えっとねー、”ひやく”に年の瀬の”せ”って書いて」

「なんだこんな漢字も読めないのか？これはなもも……」

「”もも”？」

ユイになんと読むか説明していた士だったが、口に出して読もうとしたその時、唐突に彼の脳裏を”ある人物”の顔がよぎる。

そして同時に”ユリが生徒会室に呼ばれた”この状況が非常にまじいことにも気付く。

「ちよっ、士君どこいくのさー」

「お前らの隊長さんがピンチだ！ 動ける奴に発破かけて生徒会室に寄越せ！ 繰り返す！ お前らの隊長が大ピンチだ！ ぼさっとしてねえでさっさと伝えて来い！」

「は、はあ!？」

「馬鹿らしい、なんであたしがNPCにお小言を受けなきゃならぬのよ」

ユリはむすつとした顔で廊下を進んでゆく。煩わしい、とつとと終わらせて今後の作戦を練ろうと、

お小言の中身など気にせず、心の中の苛立ちを隠そうとせずに。

門矢士から言われたことが、彼女自身にはよほどショックだったのだろう。

「二年C組、音無ユリ。参りました」

「御苦勞様。とりあえずそこに座ってください」

生徒会室についたユリは無感情無表情に挨拶と会釈を済ますと、役員と思しき生徒たちの言われるがままに椅子に腰かけた。

生徒会長は机に肘を寄せ、手を組んで顎を乗せて口を開く。

「よく来てくれたね二年C組出席番号三番、音無ユリさん」

「食堂の件ですか？ それならここで謝罪します。なんなら、反省文でも何でも書きましようか？」

「食堂？ 何のことかな。僕のところには何も報告は来ていませんよ」

「えっ？ じゃああなた、なんであたしをこんな場所に」

生徒会長はそんなことなど考えてもいなかったとばかりに、乱れたたたずまいを直して彼女の問いに答えた。

「ああ、そうだったそうだった。忘れるところだったね。うん、今君をここに呼んだのはね。あのさ、音無さん。君ちよつと、死んでくれないかな。ここで」

はあ？

衝撃的な言葉だが、面と向かってそう言う人間がいるとは。生徒会長の柔和な表情も手伝って、ユリは恐怖するよりも先に、素っ頓狂な疑問の声を漏らした。

「本気ですか？ 生徒会長」

「僕はやると決めたら決意は曲げない男だと自負しているよ」

「馬鹿馬鹿しい。あんたたちNPCがこんなに馬鹿げてたなんて。

謝罪は済みましたし、もういいですよ？ 失礼します」

「待ちなよ。僕の話はまだ終わっていない」

そう言っただけで生徒会長が右腕を振り上げると、待つてましたとばかりに数人の役員が出口を固め、ユリを取り囲む。が、当人は臆することなく太もものホルスターから拳銃を抜いて構えた。

「どうやら本気のようなね。だったらあたしも容赦しないわよ」

「銃を突きつけて……、まさか僕を殺すつもりなのかい？ ひどいなあ」

「NPCが死んでもすぐに補充されるし、そもそも人はこの世界じゃ殺したって死なない。あんただって知っているくせに」

怒りを込め、凜とした表情でそう答えたユリを見て、生徒会長はさも愉快そうに手を軽く叩いて口を開く。

「さすがはSSSとかいう組織のリーダーだ。賢いね。でもさ、そんなことはこの際どうでもいいんだよ。君を殺そうとすれば、必ず彼女は君を助けに来る」

「彼女……って、誰のこと？」

生徒会長はまだ分からないのかとつぶやく代わりに、顎の下で組んだ手を組み直して彼女の問いに答える。

「ここまで来てとぼけることもないだろう？ この世界にやってきて一週間以上、僕は僕なりに君たちのことを調べ上げた。そして分かったんだよ。君を痛めつけさえすれば、『神代カナデ』は必ず君を助けに来る」

”カナデ”……ちゃん！？

彼の言葉を、いや『神代カナデ』という名前を聞きとったユリは、先ほど食堂の中で見せたような表情を見せてうろたえる。

「あ、あんた、あの子をここに呼んで何しようっていうの。それに、あたしを襲わなくなつてあんたがここへ呼べばいいじゃない」

「そうしたかつたさ。だが君たちの組織を抜けた彼女は神出鬼没。確実に捕まえなきゃ意味がないのでね。何をしたいのかつて？それは」

^{アギト}”神”になるためさ。

生徒会長は息を深く吸い込むと、顔に『不可思議な模様』が現れ、同時に”虎”を模した灰色の怪物へと姿を変えた。夕ベユイを誘拐した怪物「オルフェノク」に違いない。

「アギト……ト？何のこと」

「神代カナデが変身したあの姿のことさ。人間も、もちろん僕たちオルフェノクをも超越した”神の力”。あれを持つていいのは神代カナデごときが持つていい力じゃない。アギトの力を得、全ての生きとし生けるものを従えるのは、この僕だ。この”百瀬シュウジ”が、アギトとなつてこの世界を支配するのさ！」

何よこいつ、ヤバい。ヤバいつてレベルじゃない。

ユリは生徒会長・百瀬の言葉に心の底からの恐怖を感じ、引き金にかけた指先に力を込め、撃ち放った。

しかし、百瀬は銃撃を浴びてなお悠然と彼女へと近づき、ユリの首根っこを鷲掴みにしてこう言った。

「こんなことをして何になるんだ？ 無駄なことはやめておきなよ。君は死ぬんじゃない。僕がこの世界の神となる、その”糧”になれるんだ。その名誉を胸に抱いて死にたまえ」

百瀬の左腕から薄気味の悪い触手がわきわきと蠢く。この触手で人間の心臓を一突きにしてエネルギーを注入し、オルフェノク因子を持った者をオルフェノクへと進化させ、そうでない者には即座に死を与える魔手だ。

「ユリッ、大丈夫か」

そんな中、出入り口を取り囲む役員たちを押しつけ士が生徒会室に入ってきた。

新しい生徒会長の名前をユイの口から聞いてすぐ彼の名前とその正体を思い出し、ユリの身を案じて駆けてきたのだ。

が、士の行動はわずかに一歩間に合わず、ユリの胸は百瀬の伸ばした悪しき触手により、無常無慈悲に刺し貫かれてしまったのだ。

「なんだ、これは」

だがここで、百瀬は何とも言えない違和感に気付く。自身の触手は確かにユリの胸を、その中にある心臓を刺し貫いたはず。

しかし、自慢のそれには『刺し貫いたと言う感触がない』のだ。その怪異は士の目から見ても明らかなものだった。心臓を串刺しにされていながら、ユリは一滴の血も流さず悲鳴も上げてはいない。なぜ、こんなことが起こったのだろう。

しかし彼ら二人がその謎を解くことはなかった。何故なら、恐怖と痛み能耐えかね、一時的に正気を失ったユリは。

あああああッ！

「な……にッ！」

けたたましい叫び声と共に「猫」を象った灰色の怪物へと姿を変えたのだから。

「まさか……ユリもオルフェノクだったのか！ じゃあなくて、やめろ、やめるんだユリ！ お前の敵う相手じゃない」

オルフェノクとしてのユリの実力がどの程度なのかは定かではないが、相手は自分も苦戦した強敵だ。少なくとも放つてはおけない。士は声を上げてユリに制止を求めるが、恐怖にかられて変身してしまった彼女はそれを聞き入れようとはせず牙を突き立て百瀬に襲いかかった。

「ただのオルフェノク風情が僕に盾突くなッ、生意気な奴め」
自分に牙を突き立てるユリをうっとおしいと感じたのか、百瀬は

左腕をさつと振り上げ、周囲を取り囲む生徒会役員たちに指示を飛ばす。

瞬間、彼らの顔には百瀬と同じような「模様」が現れ、灰色で多種多様のオルフェノクへと姿を変えた。

「お前たち、この女を始末しろッ！どうなっても構わん」

オルフェノクと化した生徒会役員たちは無言のまま、百瀬に掴みかかるユリを引き剥がそうと襲いかかる。そんなオルフェノクたちの中でもみくちやにされてしまいなながらも、必死にユリに制止を訴えかけるが、これでは届きようがない。

「くそッ、言っても無駄ってか。このわらわらしたものもじゃらくせえし、ああもう、しゃあねえな！」

KAMEN RIDER「DECADE」！

立ちいかない状況であることを悟った土は、昨夜ライブ会場であったのと同じように、首に提げたトイカメラをディケイドライバーのバックルへと変えて変身。

ライドブツカーをソードモードにして構え、オルフェノクと化した生徒会役員たちをいなし、斬り払った。

しかし、狭い部屋の中に多数のオルフェノクが蠢蠢いているうえ、個々の能力は決して低くないことも災いし、ディケイドはなかなかユリと百瀬に近づけないでいた。

「くそッ！邪魔だ！邪魔だっつてんだよお前らッ」

仕方なく刀を納め、徒手空拳で近づこうとするディケイドだが、部屋の人口密度の高さゆえに、殴りつけた相手はすぐにまた食っかかり、倒れ込んだ者はディケイドの足を掴んで動きを抑制するなど、百瀬配下のオルフェノクたちは前に進まんとする彼の邪魔を始めたのだ。

目の前のユリは百瀬に実力の差を見せつけられ、首根っこを掴まれて虫の息だというのに、ディケイドは近寄ることすら適わない。

彼女たちは”自分たちは殺しても死なない”と言っていたが、別の世界から来たアンノウンの攻撃をその身に受けると”消える”とも言った。オルフェノクたちもアンノンではないが別の世界から来た怪物だ。

もしこの世界の人間がやつらに殺された場合は一体どうなるのか。分からないが、このままではユリが危ない。

しかしその時。生徒会室側面部の扉を突き破って白銀の戦士がその雄姿を現わし、百瀬の腹部を殴りつけて、生徒会室の窓から彼を叩き落とした。

ユリの元・親友であり、百瀬の狙っていた「アギト」。神代カナデだ。

「カナデ！……か？」

「そうよ」

「お前、なんでここに」

白いアギトの姿をしたカナデは土の問いかけに答えることなく、意識を失って倒れ込んだユリの姿を見込んで無事を確認すると、彼女の体を土に預けて口を開いた。

「お願い、ユリを助けてあげて」

「助けて……って、お前はとうするつもりだ」

「あいつを始末する」

土の言葉や制止に答えることなく、カナデは生徒会室の窓から飛び降り、グラウンドに小さなクレーターを作って倒れ込む百瀬に襲いかかった。自分の友達を傷つけられた怒りをぶつけるかのように「あいつ……しかし、ま。今はこいつらを蹴散らす方が先ってか」

FINAL ATTACK
RIDE 「De - De - De -
e - DECADE」

ディケイドはライドブッカーを再びソードモードにして構えると、続けざまにファイナルアタックライドのカードを挿入し、必殺の『ディメンジョンスラッシュ』でオルフェノクを全て蹴散らす。

周囲が爆炎と白い灰だらけになったのを確認したデイケイドは、
気絶したユリの左首筋辺りを軽く叩いて彼女の意識を確かめた。

胸が上下に緩やかに動いており、呼吸音がする。命に別状はない
ようだ。

「よお S O S のリーダーさん。生きてるか？」

「ええ、なんとかかね。S O S じゃなくて S S S よ、あたしたち」

ユリは”異形”であるデイケイドの姿を見込み、驚くことなく臆
することなくそれを土と認識し、言葉を返した。

自分自身が”異形”であることがそれを容易にしているのだと、

デイケイドは心の中で勝手に納得していた。

「でも、ありがとね。助けてくれて」

「残念だが、お前を助けたのは俺じゃない。あそこで灰色の化け物
と戦っているお前の友達さ。まあでも、化け物なのはお前も一緒か」

デイケイドは窓の方を指差し、彼女にそれを見るよう促す。グラ
ウンドの上では、体育の授業中だった生徒たちを観客に、両腕を「
ハンドソニック」に変えたカナデと、鋭い鉤爪でそれをいなす百瀬
の斬り合いが演じられていた。

デイケイドの言葉とこの惨状に、返す言葉もなくうなだれるユリ。
何かに怯え、何かをひた隠しにしようとしていることは容易に読み
取れたが、彼はそんなものなど関係ないと言わんばかりに言葉を続
けた。

「結局、だ。お前は一体何なんだ？」

「あなた、言ったわよね。」自分は協力者だが仲間じゃない”つて。
仲間じゃないんなら、あなたに話すつもりはないわ」

「都合のいい奴だ。が、そうは行かないぜ。俺もこの争いの関係者
だからな」

「”関係者”？」

「今お前を襲い、お前のダチと戦っているやつは俺の知り合いでね。
お前やあいつがそうだった理由も、もしかしたら分かるかも知れん」

「でも、それは……」

「うだうだ言ってる場合かよ。引いたりしねえからほら、言えって」
意を決して口を開こうとしたその瞬間、ユリは窓の外から伸びた触手に絡め取られて引っ張られ、

戦場と化したグラウンド上に連れて行かれた。

デイケイドにユリの真意を伝えまいとしてやったことではない。
百瀬がカナデを確実に仕留めるためにそうしたことだ。

「何のつもり？ そんなことをしてもユリは」

「分かっているつもりで分かっているなあアギト。僕は『オルフェノク』の”王”だ。こんな雑魚一人、殺してやることも、従順な下僕にしてやることだって造作もない。分かるかいアギト。彼女は今、この僕が握っているんだよ」

彼の言葉に確証はない。今締めつけているユリだって、たとえ体がねじ切れようとも、肉片の塊になろうとも、時間さえかければ修復されて元の姿に戻る。

そんな彼女を殺すことができるか？ 従わせることができるのか？ その確証はどこにないしこの場の誰にも立証できないであろう。

しかしカナデは武器を下ろし、膝を突いてその場になだれた。
両腕を両足を締め付けられ、首の骨がみしみしと音を立てて、じよじよに砕けそうになっているのを見ていられなかったのだ。

「そうそう。そうしてくれると助かるよ」

カナデが膝をついてうなだれた瞬間、百瀬は彼女の腹部を殴りつけて意識を刈り取ると、

触手で絡め取ったユリをその場に放り投げ、元の小さな少女の姿に戻ったカナデを肩に乗せると、グラウンドに降りてきたデイケイドを見込み、声をかけた。

「誰かと思えば君は”通りすがりの仮面ライダー”じゃあないか。
スマートブレイン学園ではお世話になったね」

「学園……？ ああ、そういえば」生きてた頃”も生徒会長だったか。世話をした気もされた気もないんでね、とりあえずそいつを下ろして消えな」

「脅しのつもりかい？この世界でそんな脅しは何の役にも立たないよ。ま、君はそこで見ていたまえ。僕が”神”^{アキト}になる、その瞬間を」
「ざけんな。ここで逃がすと思ってるのか」

ライドブッカーを構えて斬りかかろうとするディケイドに、百瀬は臆することなく高らかに右手を振り上げ、配下のオルフェノクの集団を呼び寄せた。

彼曰くこの世界に来て数日経っているだけあり、その数もかなり多い。斬り伏せるも、撃ち落とすにしても百瀬の壁となってディケイドを阻み、彼の逃亡を阻止することは叶わなかった。

「んなるツ！ なんて数だツ！ 直井、後ろのやつらは任せた！」

「僕に命令をするな！ 自分の後ろぐらい自分で守れ馬鹿者！」

「それができりゃあ苦労しないっての！」

そんな中、オルフェノクの大群を銃撃と体術で割って、日向と直井の両名がディケイド彼らとの中に押し入った。

ユイからの伝聞でユリの聞きを知り、ガルデモのメンバーから、”土のこと”を聞いていた二人は、臆することなくピンク色の戦士に声をかける。

「お前、門矢だろ？ 大丈夫かよ」

「この際貴様のことなどどうでもいい。音無さんは、音無さんは無事だろうな！？」

「ようやく増援か。安心しろ、ユリの奴は無事だ。すぐに目覚めるさつさとここを抜けるぞ。ユリの事を大事だと思っなら、俺のために作戦司令室までの退路を開け」

「退路を開けつつあって、どうするってんだよこの状況」

「この数を相手にしてそんなことができるものか！ だいたいなぜ貴様だ！ 音無さんのお姫様抱っこはこの直井の役目」

直井がそうデイケイドに文句をぶつけた瞬間、デイケイドは彼の背後に迫っていたオルフェノクを、

”ユリを片手で抱きかかえながら”、ライドブツカーで斬り伏せた。ユリを支える左腕は微動だにせず、斬られたオルフェノクももう立ち上がらない。直井はデイケイドが相当な達人であることを直感し、たじろいだ。

「ここまでのことがお前に出来るなら喜んで変わってやるよ。それに退路を開けるかだったな。それこそ問題ねえ。騒ぎはすぐに収まる」

そんな馬鹿な。この軍勢だぞと、二人はデイケイドの言葉に首を傾げる。

しかし彼の言葉の正しさを証明するかのように、黒色の”蟻”のようなアンノウンがオルフェノクに飛びかかり、手に持った斧でオルフェノクの体をずたずたに引き裂いた。

「あれは……アンノウン!？」

「なんでオルフェノクを襲っているんだ？ 仲間じゃないのか!」

「お前、あいつらが仲間同士に見えるのか？ アンノウンの行動理念はあくまでも、”進化した『人間』の抹殺”。オルフェノクは今はどうあれ元は人間だからな。もれなくあいつらの抹殺対象になるってことだ。さ、行くぞ」

デイケイドはユリを担いだままブツカーを振るって道を切り開く。直井と日向はそれに続いて後ろから迫るオルフェノクを撃ち抜きつつ、この地獄のような惨状の中を駆けて行った。

「とりあえず、こんなところだ」

それから一時間後。SSS指令室である校長室に全てのメンバーが集められ、先ほど生徒会室及びグラウンドで起きたことを彼らに

伝え、今やアンノウンに次ぐ脅威と化した『オルフェノク』のことについて、唯一彼らとの戦い方を知る士を中心に、今後の動きと対策を練っていた。

百瀬によって手傷を負ったユリはすぐさま保健室に搬送され、今もベッドの上で眠っている。誰も病まず傷つかないこの世界には、“病院”という施設が存在せず、意識回復は本人の生命力と時間次第なのだ。

「細かいことをお前らに説明してもしようがないから、掻い摘んで話す。あいつらはなんらかの形で”進化した新・人類”だ。手持ちの武器や全身から伸びる触手で心臓を突いてエネルギーを送り込み、それに耐えられる肉体を持ち得る者を自分たちと同じ怪物に変え、そうでないものは即座に灰に変えて抹殺する。俺たちを襲った奴はみんなNPCが変異したもんだろ。お前らはみんな”死人”だからな。やられりゃあ確実に変質と見て間違いない。NPCのやつらはみんな親玉に従っていたが、お前らが変化するとどうなるかは、正直、なってみないことには分からん。以上」

アンノウンとはまた違った恐怖を備えた怪物に、SSSメンバーの緊張が高まる。が、そんな恐怖を紛らわすためだと、日向は手を上げて士に問うた。

「耐久力はアンノウンと比べてどうなんだ？俺たちの武装でやれるのか？」

「いい質問だ。やつらは強くなったとはいえ人間の一步上っただけの存在。対してアンノウンは神の徒。どっちが堅てえかなんて分かりきったことだろ」

「戦えない相手じゃない。そう見ていいんだな？」

「今までアンノウン相手にドンパチやっていたんだろ？今更何を恐れることがある」

日向の判断、彼の問いは正しかった。強力な相手だが、戦えないわけではない。

それが分かりさえすれば士気は上がるしいくらでも対策を講じら

れる。が、皆が安堵に胸をなで下ろす中、直井だけは神妙な面持ちで土に食ってかかった。

「やつらのことは分かった。分かったが……、何故音無さんを襲ったんだ。お前の話ではオルフェノクは天使の力を狙っていたそうじゃないか。襲われる理由がない」

「そんなこと俺が知るかよ。俺はあいつを助けようとしてオルフェノク共を斬り裂いただけだ」

「ふざけるな！ お前がもっと早く辿りついてさえいれば！ 音無さんは傷つかずに済んだというのに！」

「俺だつて奴の存在に気付いたのはついさっきだったんだ、無茶を言うな。」

お前のその、ユリを溺愛する気持ちも分からんでもないが」

「ぼつ、僕のこれは溺愛などではない！ 『純愛』だあッ！」

頬を赤らめ、声を荒げて叫んだ直井の発言に、周囲の空気が一瞬にして凍りつく。

土はそんな直井の表情を肴にしてくすくすと笑い、他のメンバーは皆口をあぐりを開けて呆けていた。

そんな空気を察していたのかどうなのか、オペレーターの遊佐が指令室へと入ってくる。

「お取り込み中のところ申し訳ございません。皆さん、ユリっぺさんが意識を回復しました」

遊佐がそうつぶやいた瞬間、凍りついていた室内の空気は氷解し、ユリの安否を気遣う声や安堵のため息が漏れる。そんな中土は一人、彼らの中心に立つてこう言った。

「どうしてこうなったかと聞いたな。せつかくだ、ご本人の口から聞いてみたらどうだ？ 俺もいろいろと、あいつに聞いてみたいことがあるしな」

そう言い残すと土は先んじて校長室を後にし、ユリがいる保健室へと向かっていった。

本当は前・中・後の三編で済ませたかったのですが、
どうにもこうにも自分の中の構想では三編では足りなくなったので、
四編構成で行かせてもらおうと思います。

……10月の終わりには終わるかなあこの作品。

AB本編において”二人のヒロインを動物に例えらる？”と考えた
時、

奏は『飼い主（音無）の言うことに従順な”犬”』のイメージがあ
つて、

じゃあその真逆となるゆりは？と考えた時、

真っ先に浮かんだのが”猫”でした。だからこそその猫フェノク。

百瀬については本編においてかなりキャラが薄かったので、
その分ガンガン変えてしまってます。

『”アギト”が”オルフェノク”の先にあるもの』という設定は、
裏付けも何もない自分の妄想の産物なのですが、
同時期にそう言った話題を取り上げたライダーの二次創作を呼んで、
”これはいける！”と思い突っ込みました。

なんでカナデが”アギト”で、ユリが”オルフェノク”なのか。
半分過ぎて折り返しになった今後は、そこがテーマになりそうです。

そういえばディケイドの『555の世界』で”百瀬”を演じた俳優
さん。

彼、『000』のアンクと同一人物なんですな。
言われるまでまったく気づきませんでした。

宵闇よいぢみが空を覆い、満月の光だけが夜空を照らす中、北校舎二階奥の学生食堂前には、ガルデモ・オールナイトライブ会場 と書かれたやや粗末な立て看板の前で、全校生徒が列を成し入場開始の時間を今か今かと待ち構えていた。

最終リハーサルを終えたユイは、突貫工事で客席に改造された食堂の中を、物憂げな表情でステージの上に座り込んで眺めている。

「よっ、調子はどうだ？ユイ」

「日向……センパイ。うんっ、もう絶好調！ この調子とテンションなら、オールナイトだって余裕、余裕！」

「そっか。そいつぁ頼もしい」

そんなユイに背後から日向が声をかける。彼は熱々の缶飲料をユイに手渡し、彼女と同じようにステージの上から観客席を見下ろしてつぶやいた。

「しかし、よ。あいつはすげーよな。この舞台、たった6時間で作ったんだぜ？」

「しかも学校中の生徒を集めちゃうっていうんだからもうオドロキだよな。ま、それだけ気合が入るってものだけどさ、ユイにもっ」

そう言って日向から渡された缶のプルタブを起こしてそれを口にするユイ。口の中で絡み付くほどの甘ったるさと小さくころころとした粒が、彼女の口を、喉の中を支配した。

「ちよっ、何これえ！ おしるこでしょ！ これ絶対おしるこでしょおー！」

「今から歌うやつに冷たいものはよくねえしよ。人の親切は素直に受け取っとけっ」

「これのどこが親切だったのよこれが！」

ユイのことを心配して声をかけて茶化した日向だったが、彼女が

普段通りにぎゃあぎゃああと喚いているのを確認すると、なら大丈夫だと微笑み返して背を向けた。

「よし。じゃあ俺持ち場に戻るわ。成功させようぜ、作戦もライブもよ」

「ふんっ。言われなくともっ。日向センパイ……しくじらないでね」「誰に物言つてんだ誰に」

死なないでね、日向センパイ。

死ぬんじゃないぞ。ユイ。

日向は背中越しにそう告げると、一言も交わさぬまま食堂を出て行き、ユイは心配してないと言いつつもその背中を不安げな表情で見つめていた。

時は日が高く昇った昼下がりに、SSS（死んだ世界戦線）のメンバーが保健室に集結したときまで遡る。ベッドの上で横たわるユイを見込んだ瞬間、直井は彼女の元に駆け寄って肩を上下に激しく振った。

その方がかえって体に障ることを知らぬままに。

「音無さん、音無さんッ！ ご無事ですか！？ どこか痛いところはある！？」

「耳元で騒がないでようっとおしい。平気よ平気。怪我也何もきれいさっぱり消えてるわ」

それを聞き、心の底から安心したと言わんばかりに、安堵の表情のままため息を漏らして崩れ落ちる直井。ユイはその隙に彼の腕を引き剥がして距離を取らせた。

「無事で結構。なら当然、俺の質問にも答えられるよな？」

「門矢……君。何よ、質問って」

それと同時に病人をいたわるとは思えないほど冷たい目付きで、門矢士が彼女の前に立ちはだかった。今の二人に隔たるものは何もない。

士はそんな直井を尻目に割って入り、自身の知りたいことを単刀直入に言い放つ。

「とぼけるなよ。俺がお前に聞きたいことはひとつしかねえ」

お前は何故、オルフェノクなんかになったんだ？

瞬間、ユリの無事を喜び、和気あいあいとしていた保健室内の空気が凍りつく。ある者は戸惑いを隠せずにつるたえ、ある者はそんなはずがあるかと土に食ってかかる。

しかし士はそんな声や自分に振りかかるものを軽々と振り払い、目線を外してうつむくユリの顔を両手で掴み、自分の目の前に引き寄せた。

「ここまで来て逃げるこたあねえだろ。ちゃんと話して理解を求めろべきだ」

「そんな、みんなの前では……」

「何故そうも暗い顔をする必要がある。何故そうも思いつめた顔をする。お前はこのならず者たちのリーダーなんだろう？ リーダーが隠し事をしてちゃあ、部下のこいつらに示しがつかないってもんだ。違わないか？」

もう、逃げようがない。

ユリはこれ以上隠し通すことなどできないと悟り、誰にも目を合わせようとせずうつむいて口を開いた。

「ねえ、みんな……二ヶ月前のあの日、『オペレーション・トレジャーハントオブギルド』のことは覚えてる？」

ユリの唐突な問いかけに、分かったと手を叩いて日向が真っ先に口を開く。

「ああ、あれだろ？ お前と天使……カナデが中心となって、ギルドのさらに地下にあるっていう”お宝”を回収しに行こうってミッ

シヨンだろ？ あの時は大変だったよなあ。ギルド側に連絡を入れるの忘れててトラップが解除されてなくてよ、みんなトラップに引っかかって足止め食っちゃった。結局辿り着いたのはユリとカナデだけだったんだよな」

日向の言葉にユリは黙して頷き、直井と士は何故今そんな話を振るのかと問う。

「ですが音無さん。あの時は”何も見つからない”と言っていたではありませんか」

「骨折り損のくたびれ儲け、ってことか。それで？ そのかわいい探検ごっこがなんだって言うんだ？」

空を舞う雲のようにつかみ所のない話に困惑する士。何故今さらそのような話をするのかと疑問を口にするSSSの面々。

埋めがたい認識の齟齬^{そご}は彼らの疑問を高める一方であった。ユリの何ともしがたい話は続く。

「ううん。見つけていたのよ、あたしたち二人は。あの後、更に深部で不思議な空洞を見つけて、二人で入ったの。中に埃かぶって古そうな宝箱があって、それを二人で開けたのだけれど……。その時あたしたちの体を、目が潰れそうなほど強烈な”光”が襲ったの。あたしはヤバいって思ってたさつと飛びのいたけど、カナデちゃんはそれすらできず、その光を体全体で浴びて意識を失ったの。で、気を失っている間にみんなに助けられた、ってわけ」

「ふうん……。で、それがどうしたってんだよ」

「話が繋がりませんよ、音無さん」

「まだ。まだ続きがあるのよ。ゴメン、何か飲み物ない？」

「あ。スポーツドリンクでよければここに。人肌に温めてください」

「うん。すごい迷惑。でもまあとりあえずいただくわ」

ユリは直井の差し出した温まったスポーツドリンクに口をつけて一息つくくと、喉元で押し留めていた言葉を無理矢理引きずり出して

ゆっくりと口を開いた。

「それで……ね。ある日突然自分たちの体の変化に気付いたの。それも別々に。カナデちゃんは真っ白鎧で長身の戦士に、あたしは毛むくじやらで灰色で、なんだか獣みたいな怪物に。人間じゃあなくなっただんだけって、すごい力を持ったってのは分かったんだけど、とても怖かったの」

ユリは自分の肩を抱いて震え始めた。空調の温度が低いわけではない。この言葉の先に何か、罪の意識を感じてのことだろう。しかしそれでもなお、彼女は絞り出すような声で話を続けた。

「怖かった……本当にそれだけだったの。SSSのリーダーが化物だなんて知れたら、みんながあたしの元から離れてしまう。そんなことあるはずないって自分の中で言い聞かせようとしたけど……。血の通っていない真っ白でふさふさな掌うらを見たら、否いやでもそう思わざるを得ないじゃない！自分ですら恐ろしいと思うのに！カナデちゃんはあたしも変身できることを知らなかった。けど、あたしはそれを知っていた。だから、だから……あたしは……」

みんなの目の前で言ってやったの。

「カナデちゃんは神の使い走りになった」。あたしたちを裏切った」。

”あの子はあたしたちの敵だ”って。

「二人して化け物になったのなら、いずれどちらかの口からそれがバレてしまう。カナデちゃんのことを信じてはいたけど、あの子は嘘をつけない優しい子。だから、だから……傍に置いておけなかったの。惨めでしょ？馬鹿みたいでしょ？ほら、笑いなさいよ！あーっはっはっは！って！馬鹿じゃねえのって！誰か笑いなさいよ！何よ！何なのよ！？何だつてのよ！何なの……よお」

怒りも通り越せば何とやら。今の彼らにユリを攻めることはでき

なかった。今まで泣き言一つ言ったことのない彼女が言い放った真実に、みな打ちひしがれ、言葉を失っていたのだから。

戦線メンバーの誰もが頼り、安心して命を預けていたその背中が、とても華奢きゃしゃでか弱いものに見えた。

ふざけんな！ふざけんなふざけんなふざけんなあああああ
っ！

だが一人だけ、そんなユリに怒りをあらわにして掴みかかる者があつた。カナデのことを案じ、ユリの動向に疑問を持っていた岩沢ユイだ。

彼女はツインテールとスカートの下から覗く悪魔の尻尾を激しく揺らし、ユリをベッドの上に押し倒して襟を左手で掴み、右腕で強烈なピンタを見舞った。

「なに、なにするのよユイちゃん」

「ユリっぺ隊長が辛かったのは分かった。分かったけど……、でもカナデちゃんは隊長以上に酷い目にあつてたんだよ！何も知らないでみんなに責められて、自分だけ全部知ってるくせに責めて！あんたはそれでよかつたかもしれない、けど、カナデちゃんはどうなるの？」

襟を掴んで激しく振り、大声でまくし立てるユイに対し、ユリは彼女と目を合わせようとせず、うつむいてか細い声で言葉を紡ぐ。

「分かつてた、分かつてたわよ。そんなこと……」

「分かつてたつて何！今まで何もしてこなかつたくせに！カナデちゃんがどんな気持ちでいたのか知らないくせに！」

目に涙をためながら頬を引っ叩き、力を込めて爪を立てて、ユリの顔を薄く赤く染めてゆく。こうなるとさすがに黙ってはいられない。

とはいえ、形ばかりの外傷が原因ではないようだが。

「知つたような口でいけしゃあしゃあと……じゃああなたには分かるの？カナデちゃんがどんな気持ちだったのか！カナデちゃん

じゃないあなたに分かるって言うの!？」

黙っていられないのはユイも同じだ。ユリの言葉に触発されて更に声を荒げる。

「わかんない。わからないけど……そんなのただの屁理屈じゃん！カナデちゃんの気持ちはカナデちゃんだけのもの、誰にも分かるわけないのに！」

「じゃああなたが言っていることだって勝手よ！ 知ったような口でいい加減なこと言わないで！」

「どっちがいい加減だったのよどっちがッ」

一発のビンタとそれ以上に鋭い言葉の一撃を皮切りに、かたやビンタの、かたや引つ掻きの虚しい争いが始まった。

いつもなら落ち着けと引き剥がしていさめられるものであったが、SSSの面々は誰一人いさめることも言葉を発することもなく、ユリとユイの争いを見つめている。

発端が発端だ。長い付き合いである彼らに二人を止めることなどではししない。少なくとも彼らには。

「よおしよし、女々しい争いはそこでストップだ。ニュートラルコーナーに戻れ」

ただ一人、SSSのメンバーではない土は、叩き合い引つ掻き合う二人の少女を力づくで無理矢理引き剥がし、二人に落ち着けと何度も促した。

怒りからかれ、それでもなお双方ともに食ってかかろうとするが、土の凍るような冷たい目付きに怯み、縮こまって落ち着きを取り戻したようだった。

「ようやく落ち着いたかじゃ馬共。話はだいたい聞かせてもらった。どうやらその問題はお前たちだけじゃあどうやっても解決しそつにないな。エゴとエゴ、怒りと憤りをぶつけ合うことを”話し合い”とは言わん。そこで、だ。通りすがりのこの俺が手っ取り早い解決法を提案してやるう。」

乗るか乗らないかはお前ら次第だが」

「手つ取り早い？」

「解決法？」

いきなり出てきて何を言うのか。彼になだめられた二人の少女は士の言葉に首を傾げた。

「やつらに連れ去られた天使……、カナデの奴を救い出し、こいつら全員の前で ごめんなさい と謝ることだ。当事者がいないのに加害者と首謀者が争い合っても何の意味もねえ。そうだとユリ。それにそこでばおつと見ているお前らもだ」

「ちょ、ちよつと待ってよ！ ユイも加害者だつて言うの！？」

ユリがこの騒動の発端なのは間違いないが、なぜ自分たちまでも責め立てる。

SSSの誰もが戸惑う中、ユイは一人士の制服の襟首を掴んで問いたですが、士はそんな彼女の両腕をひよいと掴み返し、怒りを鎮める怒りを鎮めると、「万歳」の恰好をさせてぶらぶらと左右に振った。

「じゃあ聞くが、お前はあいつのために何かしてやれたのか？ 迫害されるあいつに対して手を差し伸べたことがあるのか？ ないんなら、お前もユリやあいつらとなーんにも変わらねえ。ただの加害者だ。違うか？」

冷やかな口調でそう語る士に、SSSの誰もが反論できないでいた。ユリに従い、カナデを追い立てていたのもまた事実だったからだ。

「話を戻すぞ。あの生徒会長はカナデをさらって、自分が アギトになる だとか抜かしてやがった。

カナデからアギトの力を分捕るかコピーするか……、何をしでかすかはわからんが、そこに”生かす”選択肢はねえだろう。自分以外のアギトなんざ邪魔以外の何者でもないからな。さあて、この場合どうする？ みんなの頼れるリーダーさんよ」

ややいたずらっぽい口調でユリに話を振る士。ユリは弱々しく肩

を振るわせ、自信なさげに口を開いた。

「それは分かった。分かったけど……。あたしにどうしろって言うのよ！ さっきの生徒会の役員たちみたいにかくさんのオルフェノクを準備して、あたしたちを待ち構えているに違いない！ あれぐらいの数を相手にしていても相当苦戦していたのに、今以上ともなったら勝ち目なんてあるわけないわ！ それに」

ユリは今にも泣きそうな顔でSSSのメンバーたちを見つめた。誰もが疑念と奇異、そして異怖を込めた表情でユリを見ている。少なくとも、ユリの目にはそう映った。

親友を裏切り貶めてまで隠してきた秘密が明るみに出してしまったのだ。仕方のないことと言えよう。

「手伝ってもらえるわけ……。ないじゃない。無理よ。もう、無理なのよ」

とうとう堪えきれなくなり、ユリは大粒の涙をぼろぼろと流しながら泣き出した。虚偽も見栄もなかったただ子どものように泣きじやくるユリの姿に、メンバーはみんな押し黙り、二の句を継げずにいた。

ユリも悪いが彼女の命令に従って動いてきた自分たちも同罪だ。彼女に何かを言えるだけの道理を彼らは持たなかったのだ。

しかし彼は、一人この世界を通りすがった士だけは違っていた。彼は泣きじやくるユリの頭に、指を髪の毛に軽く絡ませながらそつと撫でると、先ほどまでとは打って変わって穏やかな口調で言葉を紡ぐ。

「ようやく曝け出せたみたいだな、本当の自分 ってやつを。部下に秘密抱えたようなやつなんか人にの上に立つことはできねえ。そうだ、それでいい。ったく、しょうがねえなあ。力を貸してやるよ。死んだ世界戦線……。だっけ？お前たちのチームにな」

士の口から出た、あまりにも唐突で信じがたい一言。あまりの唐突さにユリは呆けた顔をして士に問うた。

「えっ、なんで今さら……」

「そりゃあお前、何考えてるかも知れねえやつがリーダーのチームに、手なんか貸せると思うのか？ なくとも俺は嫌だね」

「あなたが戦線に入りたくないって言ってた理由って……、まさかそれだけ？」

「それだけだ。得体の知れないものに手を出して、あげく利用されるのは性に合わないからな。オルフェノクの大群なんざ、俺なら瞬きする間に皆殺しにしちまえる。何の問題も障害もねえ。さあ、どうする？」

人差し指を突き立てて自信満々に言い放つ士に、ユリは震える手で人差し指を伝って彼の手を握り、手以上に震えた声で言葉を紡ぐ。

「あたしを……助けてくれるの？」

「はッ、誰がお前を助けるもんか。俺はお前がカナデにきちんと謝るところを見ただけだ。救出するのはお前の仕事だぜ。俺はただ手助けするだけだ。そこをはき違えられては困る」

「それでも、それだって構わない。お願い、助けて。助けて……ください」

目に溢れんばかりの涙のため、手を握ってすがりつくユリに、士はもう片方の手でそれを握り返し、膝をついて頭を下げた。こう言った。

オーライ、仰せのままに。リーダー。

「さて、俺はこのリーダーにつくぜ。この先どうするかを決めるのかを決めるのはお前たち自身だ。どうする？ あ、その他大勢のいじめっ子たち？」

新入りの上に生意気なこの男がユリのために戦うと言い、頭を下げる。ユリへの疑念は晴れていないが、先んじてこんなことをされ

てしまつては、古株メンバーたちは黙つていられない。

「ユリ、俺は……」

「音無さん！ 僕がリーダーと認めお慕いするのは未来永劫あなただけだ。あなたが化け物だろうとなんだだろうと関係ない！」

他の誰よりも先に口を開き、賛同すると言おうとした日向だったが、その言葉は大声でまくしたてる直井によつて遮られた。

日向は自分も戦うと大仰にアピールする直井を強引に押しつけ、言わんとした言葉を今一度口にする。

「ああくそつ、何も俺を押し退けてまで言うことじゃねえだろ直井い。ユリ、カナデが今こんな目に遭っているのはお前だけの責任じゃあない。メンバー全員の責任だ。なら俺たちは何をすべきか。考える間でもないだろ？」

「直井君、日向君」

「リーダーが化け物？ へっ、面白いじゃねえか。かえつて戦線の名にハクがつくつてもんだ。なあ？ 下五段！」

「右に同じ。それもまた一興」

「野田君、松下君」

「浅はか也」

「椎名さん」

古参の二人が賛同するとなればあとは野となれ山となれ。堰を切つたように残りのメンバーたちも手を挙げた。

しかし、先ほどまでカナデのことで取っ組みあっていたユイだけは、手を挙げることなく、床を見つめてうつむいたままであった。

「ユイちゃん……。あなたは」

「ユリっぺ隊長は……カナデちゃんに酷いことしたから嫌い。これ以上作戦オペレーションに参加するのはイヤっ」

そう言つてユリに背を向けるユイ。彼女の気持ちを考えるとしょ

うがないことだと落胆するユリだったが、だがその直後、ユイは自分の中の迷いを振り切るかのように、いつものような笑顔で振り向きこつ言った。

「けど……、カナデちゃんを助け出すためだつて言うなら、大賛成！」

「ユイちゃん……」

「ちよつ！ 何するのユリっぺ隊長！ 苦しい！ くるじいよおー」
心の底からの”ありがとう”を込めて彼女を抱きしめるユリ。

気持ちが強すぎて苦しがるユイと、それを見て笑い合うSSSの面々。根本の問題は解決できてはいないものの、

決まり手、だな。

士は軽く微笑みながらそうつぶやき、一人保健室を出て行った。

さらに時間は進み、日も落ちかけた夕刻。士を含む全てのSSSメンバーが校長室へと集められ、

来るべき「神代カナデ救出ミッション」のための作戦を練り始めていた。

「これよりカナデちゃん救出ミッション、オペレーション……、名称は面倒だからパス。各自で勝手に設定して。それじゃ、始めるわよ」

ユリが校長室の机の前に座りこむと同時に、彼女の背後の壁がまるでシャッターのように左右に開くと、【読み込み中】と書かれた画像の後に、SSSの紋章が描かれたモニター画面が現れる。

「まずは、オルフェノクたちへの対策と人員の配置を……」

「いや、待て待て待て。まだあいつらがどこにいるのか分からないだろっ」

相手への対策と人員の配置を早々に決めようとするユリに、士が

異を唱えた。ユリはそう来ると思ったとでも言いたげな顔で、目線を土に向ける。

「あなたはさつき言ってたわよね。生徒会長……あのオルフェノクは、”何かしらの手段を使って”カナデちゃんから”アギトの力”を分捕るって」

「言ったな。だがそれがどうした？」

ユリは自信ありげにふふんと鼻を鳴らして指揮棒を振って答える。「この世界では望みさえすれば無から有を作りだすことが可能よ。でもそれは、その物の”構造”を知っていなきゃ、完璧なものにはならない。ガワだけ作れるかもしれないけど、ただのハリボテになることだってあるわ」

ユリの口から漏れ出た爆弾発言。死後の世界だからとはいえ、何もかもを好き勝手に作れるわけではないのだ。

なんでもありの世界の中で偏屈な事実を突き付けられ、土は戸惑いを隠せない。

「おいおい初耳だぜ、それは」

「そもそも今まで気付かないでやってたの？ そっちの方が驚きよ、あたしは」

「それによ、だったらお前らの物騒な武器はどうやって量産してるんだ？ 生きてる間にどこそこの国の傭兵だった……ってことはないよな？」

「いい質問ね。もちろんあたしたちは傭兵でも派遣自衛隊でもない。普通の男の子女の子の集まりよ。生きてた時はね。そんな子たちがどうしてあんなものを用意できるのか？ 答えは簡単よ。学園の”地下”に『武器工場』を作って、そこで生産しているの。あたしたちは『ギルド』って呼んでるわ」

「工場……だあ？」

ユリがぱちんと指を鳴らすと、瞬時にモニターの映像が切り替わった。体育館と思しき施設のその地下に縦穴が掘られ、ぐんぐんと下に伸びている。これは一体何の図解なのか。

「体育館の下に大規模な穴を掘ってその中に施設を作ったのよ。あたしたちの仲間にはミリタリーオタクやガンマニアの子たちがいるから、その子たちに銃やその他を生産して、ここに送って来てもらってるってわけ。最近はやアンノウンなんて物騒なものも出てきたし、そいつらとやり合うために、びっくりドッキリなメカの構造を知っている子も武器生産に回ってもらってる。そして、生徒会長はあたしたち戦線のことを事細かに調べていた。とくれば、あとは……」

「ああ。だいたいわかった」
まったく同じことを考えていたのか、土とユリは声を揃えてこう言った。

カナデからアギトの力を抜き取るために、生徒会長はそこを突いてくる。

「そういうこと。っていうかそれ以外に思い当たるところがないしね。それ、と。遊佐さん、どう？」

ユリの言葉に、遊佐は手持ちのノートパソコンを叩きながら答える。彼女のディスプレイには、体育館内をサーモグラフィで映し出したかのごとく、建物の中で異質な熱源体が多数いることと、今なおそれが増え続けていることが示されていた。

「ユリっぺさん、ビンゴです。体育館の中に見たこともない高エネルギー反応を確認。なおも増殖中」

「ほおら、裏付けもきちんと取れた。画像を主モニターに回して」
ユリの申し出に黙ってこくりと頷き、主モニターの画像出力部にノートパソコンを繋ぐ遊佐。

先ほどノートパソコンに映った画像がSSSメンバー全てに伝えられ、その数と赤く輝くエネルギー反応に、皆驚きを隠せない。

土は物怖じすることなくそれを眺め、言葉を口にした。

「ってことは、俺たちが攻めてくるのは想定範囲内ってわけか」
「そりゃあ、あたしたちの施設を使っているわけだし。アギトの力が手に入るまでの足止めになればいいんでしょうね、きつと」

相手の居場所、その戦力についてはだいたい分かってきた。

士は顎に手を当てて軽く思索すると、モニターの前まで歩を進め、手に持った油性マジックペンを使って説明を始めた。

「よし、今から作戦とそのための人員の配置を発表する。各人、耳の穴かつぽじつてよく聞けよ。」

体育館の地下へと突撃は俺とユリ。直井と椎名の四人で行く。日向と野田、それに松下は『食堂』で行われるガルデモのライブの護衛を頼む」

「ちよつと！ それを言うのはリーダーであるこのあたしでしょ！？」

「それにライブって、この状況で何故ライブをする必要があるんだ！」

リーダーであるユリが仕切るものだと思っていたからか、士の出張りとその説明に反発するSSSの面々。

いきなり出張ってまとまるはずがないと分かっていたのかいないのか、士はモニターを勢いよく叩き、反論反発の声を押し込めた。

「俺は怪物狩りのプロだ。五体満足のままカナデを救出したけりやプロの言うことは黙って聞いとけ。それにこんな時になんでライブを？ とも聞いたな。体育館を張って俺たちが来るのを手ぐすね引いて待ち構えているのは間違いない。だが、やつの目的はアギトの力を奪ったうえで邪魔な俺たちを始末することだぜ？ こつちもそうだが、相手も負けるとは微塵も考えてないだろう。だからといって自分の手駒を全部投入してくるとは考えにくい。それに、旗色が悪くなってこようものなら、NPCをオルフェノクにして仲間を増やそうと考えるやもしれん。こちらの頭数は増えないんだ。相手の数が増えたら勝ち目がない」

士の言葉を聞き、彼の意図を読み取れた日向が手をぼんと叩いて声を上げた。

「そうか、だからライブ！」

「学校の中であればやらけられては守りきれないからな。事を荒立て

ずにNPCを一か所に集めるには最良の方法ってわけだ。既に食堂に場所を確保してある。あと二時間もあれば設営は終わるだろ」

「終わるだろ……って、お前いつの間にそんなことを」

「お前たちが作戦決行だなんだって言っている間に。のろのろだからやってるのは嫌いなんでね。それと」

士はそれと同時に、部屋の隅の段ボール箱を、これ見よがしに机の上に置いた。中には大砲に機関銃、金色に輝く剣など、現実の世界では到底お目にかかることのない、物々しい武具が無造作に詰め込まれている。

「こっちは対オルフェノク用の武器だ。お前らの物騒なものもいいが、ぱっぱと倒して行くんならこっちの方が楽でいい。まずはライブ会場防衛担当の日向。お前にはありったけの重火器をくれてやる」

士が日向に手渡し、いや抱えて寄越したのは、鈍く青色に輝くガトリング砲と、緑色に縁取られ、日向の体格では振り回すどころか持ち上げることすら厳しい重火器であった。

「お、重たッ……、こんなもんどうやって使えってんだよ」

「その場を動かないで敵を狙い撃ちにするんだ。その辺に置いて使えばいいだろ。片手で使える武器が欲しいってんなら、こいつもあるが？」

こんなものが使えるかと不満を漏らす日向に、士は「両手で支えないと引き金を引けない」ほど大口径の拳銃を手渡す。もっと自由に扱えるものをくれよと言う日向の言葉を無視して、彼に輸送用の台車を与えると、今度は直井の方に向き直って段ボール箱を探る。

「そして直井。お前にはこいつだ」

彼が士から手渡されたのは、柄の部分のコウモリを象った装飾が目を引く、金色に輝く大剣だ。厳密に言えば、彼の目を引いたのはコウモリの瞳に輝くルビーの宝玉だったのだが。

「なんだ、この金メッキ塗装のごてごてとした剣は？　こんなものを使って僕に戦えと言うのか貴様は？」

日向は銃器で自分は剣。しかもこれ以上自分に別の何かを渡すと

いう空気でもない。遠回しにこれはないぞと土に突つかかる直井。

土はそんな直井を見て嫌らしくにやりと笑うと、剣を掴み返してこう付け加えた。

「いいのか？ こいつはある国の王が使っていたという呪われし魔剣。ダイヤモンドをも豆腐のように斬り裂く究極の剣『ザンバットソード』。しかもこいつは使用者を選ぶ。選ばれなかった者は即死亡の危険な代物だ。お前はその魔剣を軽々と振り回すことができる。魔剣に選ばれたんだぜ？ 似合いの武器だと思ったんだがな……仕方がない、返してくれ」

土は説明を終えると同時に箱の中に剣をしまおうとするが、直井は柄の部分を掴んで離そうとしない。

「なんだよこの手は。返せよ。いらねえんだろ」

「確かに物騒で金メッキでござってとした剣だ。だが、扱えるのが僕だけとなると……無駄にするのももったいないし、しょうがないな。僕が使つてやるから、ありがたく思えッ」

格好と相応の理由をつけて剣を手にする直井だが、変に上ずった声とにやけてひきつっている顔のせいで台無しだということに、「彼は」気付いていない。

メンバー全員がくすくすと笑う中、土は椎名を呼びつけ机の前に立たせた。

「椎名にはこいつだ。クナイと銃を兼ね備えていて、柄の部分を引きげば斧にもなる。お前ほどの身のこなしなら、重たい武装や防具を持たせるより、こつちの方がサマになりそうだからよ」

土が椎名に手渡したのは、赤を基調とし銀色で縁取られた、銃とも斧ともクナイとも取れる『カブトムシの角』を模した武器。

彼女は柄を握って軽く振り、握り心地と使いやすさを確かめると、あるうことか土の首筋にクナイの刃を向けた。

「な、なんだよ。ご不満だったのか？」

「いや、感謝する」

そう言つて土に背を向ける椎名。本気で来るはずないと高をくく

つてはいたが、

無口は無表情な彼女の行動には土も驚きと疑問を隠せなかった。

「なんなんだ、あいつは……」

「それに、椎名つちが無愛想なのはいつものことだぜ。軽く振って使い心地を確かめたんじゃねえの？」

「まあ、いい。じゃあ次は松下だ。お前は野田と共に食堂出入口を固め、日向が撃ちもらったオルフェノクを仕留め切れ。最終防衛線になってもらう」

「それはいいが、これは作戦と何の関係があるんだ？」

「何かに軽く当てて音を出させたら額に当てる。そうすりゃ分かる」
松下に紫色の”音叉”を渡した土は、そのままユイの方へと歩を進める。

「なに？ なに？ ユイにも何かくれるの？」

「ガルデモのやつらから聞いたぜ。お気に入りのギターが破損して使えなくなっただったってな。だからこいつをくれてやる」

彼がユイに手渡したのは、鋭角的な意匠の鈍く緑色に輝く『エレキギター』。

本当はギターではなく『弦』なのだが、ユイはそれに気づかない。というよりも女の子には分不相応な大きさと重さに四苦八苦し、そんなことになど注意が回らないようだ。

「なっ、こっ、これは……。ずいぶんとガサツ……。いや、無骨？」

これ、女の子が使うものじゃないでしょ？」

「そいつの名前は『音撃真弦・烈斬』おんげきしんげん れつざん。お前が使うには少し不恰好だが、それでも一応軽量化はしたんだぜ。アンプに繋がられるよう改造も施してある。物は試した。一回弾いてみるよ」

「ううん。じゃあ失礼して……」

ユイは土から専用のピックを受け取ると、机の上に腰を下ろし、物は試しと軽く弾いて音を鳴らす。轟く雷鳴の如き荒々しい音色と

キレのある響き、何より手にしつくりと馴染む感触が気持ち良かったのか、軽く弾くだけのつもりが、いつの間にか周囲の迷惑になるほどの音声を上げてかき鳴らしていた。

「わおっ！ 素敵！ 超クール！ いいじゃんっ、いいじゃん！
ありがとーっ！ いつものもいいけどこれもイカしてるじゃん
！」

「だろ？ そして、こっちが揃いのマイクだ」

与えられたギターに目を輝かせて喜びをあらわにするユイ。土はこれも持っていていと箱から特製の『マイク』も彼女に手渡すのだが。

「これ……マイク？」

「マイクだ」

「マイクだ、ってこれどー見ても小刀」

「お前にはそう見えるのか？ 俺にはマイクにしか見えない」

ユイが戸惑うのも無理はない。土はマイクだと言い張って聞かず、確かに音を拡散させる部品らしきものが『』についてはいるが『、どう見てもこれはマイクではなく、鋭い刃がついた小刀である。

「冗談じゃないでしょ！ こんな使って歌えるわけないでしょー

っ！ □怪我しちゃうじゃないのーっ！」

「じゃあ刀身にカバーでもなんでもかけとけばいいだろ」

「あつ、今”刀身”って言ったあ。やつぱりこれマイクじゃないん

じゃん！」

『マイク』用のカバーを放ってユイとの話を打ち切ると、リーダーであるユリの下へと歩を進める。

「そしてユリ。俺がバイクに乗って正面の敵を蹴散らすから、お前は側面や残りの奴をこいつで吹っ飛ばせ。少々雑でも構いやしねえ」

自分と同じく体育館に殴り込むユリに土が与えたのは、赤い猛牛を模した大仰なバズーカ砲。

一見すると玩具には見えないその武器にユリは一抹の不安を覚えて不満を漏らした。

「な、何この赤くてでかくてだっさいの……」

「モウギユウバズーカ」だ。おおお、危ねえ。こっちに銃口向けるなよ」

砲口を自分の方へと向けるユリに、やめるとややオーバーに拒んで見せる土。ふざけているとは決して思っていないものの、彼女の抱いた不安はより一層深いものとなった。

なにはともあれ、メンバー全員に武器が行き届いたのでと、土は彼らに次の指示を飛ばそうとするが、一人土から武器を貰っていない野田が異を唱えた。

「おい門矢。俺は？俺の武器はないのか？」

「必要ないだろ。そんな馬鹿みたいにでけえ得物振り回しているお前には」

「そつだな。ただでさえ普段から持ち歩いてるしな」

「邪魔なことこの上ない」

「むしろ存在自体が邪魔だ」

「アホですねっ」

「浅はか也」

「くっそお……みんなして好き勝手なこと言いやがって！馬鹿にすんな！馬鹿にすんなよお……ちくしよお……」

土の至極もつともな意見に触発され堰を切ったかのように、野田への不満や罵詈雑言が飛び出す。野田は大声で我が身の不憫さを嘆くと、目に涙をためて床に突っ伏した。

「よし、作戦とその際の配置と武器の準備は以上だ。作戦決行は夜の十時。各人、作戦決行の三十分前まで、ゆっくりと体を休めておけ」

土の言うことに従い各人が体を休めようとする中、彼は一人山のように積まれたチラシの束を持ち上げて出て行くこととする。

そんな彼の行動を不審に思ったユリは土を呼び止めてその真意を問う。

「休めておけ、って。あなたはどうするのよ門矢君。そんなチラシの束なんて持って……」

「いくらライブ会場を豪華にしたって客が来なきゃ意味ねえだろ？
ちよいと呼び込みとビラ配りに行って来る」

それを聞いたユリは馬鹿にしてくれるじゃないと、土の持つチラシの束の半分を引ったくった。

「何だよ、休んでろって言ったろ」

「そこまでしてくれているのにあたしが働かないなんてズルいじゃない。二人でやれば半分の時間で終わるわ。さ、行きましょ」

リーダー直々に広報活動を手伝うとあっては、他のメンバーも黙ってはいられない。

ユリに続き、悪魔の尻尾をぴこぴこ揺らしてユイが高らかに手を挙げた。

「ユイもユイもー！ 宣伝ならユイが直接言った方が早いですって！ 遊佐っち、校内放送使えるようにかけあつてきてよー」

「了解しました。すぐに手配します」

「やりたくはないが、音無さんが働いているのに、自分だけ休んでいるわけにもいかない。ビラを寄越せ門矢」

「じゃあねえなあもう、やってやるよ。これで半分の半分だ」

次は直井と日向だ。二人はユリと土のチラシをさらに半分持つてゆく。負担は最初の四分の一にまで減った。

「俺たちはビラよりも会場の設営の方に回るとするか。なあ松下五段」

「そうだな。手伝えば飯ももらえるかもしれんしな」

「で？ みんな何かするって言っているが、椎名は……ありゃ？」

「あなた方よりも先にビラを持って部屋を出て行きましたよ」

「なにい？ くっそあ、こうしちゃあいらねえ、行こうぜ松下五段」

「はいはい。悔しいのは分かったから落ち着けって」

何を出し抜かれたのか定かではないが、憤慨した野田は松下の手を引いて、設営中の食堂へと向かってゆく。

土はそんな彼らに対し、大人しく休んでいれば良いものを悪態を

つくが、そうして動く彼らのことを内心嬉しく思ってもいた。

一度崩れかけたチームが、ひとつの目的のために、今まで以上の結束を伴って復活しようとしている。

そうして奮闘する様を見るのがとても楽しかったからだ。

そしてそれは、”この作戦は成功する”という確信にも繋がった。

「門矢君、なにぼーっとしてるのよ。さっさと行きましょ」

「お、おお。悪いな」

そして、作戦決行の十分前。誰もが通信用のヘッドセットを頭に付け、体育館前で、ライブ会場の舞台袖で、その周辺の出入り口前の物陰で、皆、リーダーであるユリの号令を固唾を呑んで待っていた。

前代未聞前人未到のガルデモのオールナイト公演に、会場に集まった観客たちの熱気は、開始前から高まる一方。

ボーカルのユイ直々の校内放送も手伝い、学内ほぼ全ての生徒が集まった食堂は足の踏み場もないほどに混雑している。

熱気にあふれた雰囲気と歓声を体育館の出入り口前から感慨深く眺めつつ、ユリは大きく深呼吸をひとつし、決意と覚悟を秘めた表情のまま口を開く。

「あたしは、一組織のリーダーとしてやってはならないことに手を染めました。これはその罪滅ぼしです。あたしのエゴでしかありません。それなのに、こうしてみんなが集まってくれた。あたしのため、いや、カナデちゃんのために。あたしはそれが、本当に嬉しい。」

突撃班の門矢君、直井君、椎名さん。ライブ会場防衛の日向君、野田君、松下君。そしてガルデモのみんな。あたしの……いや、こ

の作戦への協力、心から感謝します。あたしからの通信はこれで終了。ここから先はあなたたち独自の行動に委ねます。だから最後に一つだけ、一つだけ言わせてください。

みんな、五体満足のまま絶対に帰ってきなさいよッ。誰か一人でもやられたりなんかしたら……許さないんだからッ」

とめどなく押し寄せる感謝と悲しみの感情に苛まれ、話終わるころにはすっかり聞き取りづらい涙声となり、通信は終わる。

ユリは溢れだす涙を制服の袖口で拭くと、再び先ほどまでの凜とした表情を戻すと、今一度大きく息を吸って無線を取る全ての隊員に対し、作戦開始の大号令を告げた。

オペレーション・スタート！

全四部構成を目指して書いてきた本作ですが、

どうやら全五部構成でないと終わりそうにありません。

毎回毎回自分の見立ては自分にアマイよなあと切に思います。

戦闘らしい戦闘がないので話としては地味ですね。

士の説教が本気で説教臭い上にセリフだらけで疲れます。

一章から張ってきた伏線「ユリはオルフェノクである」ということを、

ようやく作劇に引っ張り出してきましたが、これまたカタルシスがないなあ。

もっとオドロキのある展開にできなかったのかと悩みます。

ここ最近ではセリフを先に列挙してから地の文に取り掛かるので、

状況説明の足りなさや文章の稚拙さが目立ってきました。

もっと勉強しないとなあ。どうすべきかわからなくなってきましたぞ。

「アレ」と同時進行で書いているのでまだまだ完結は遠そうですが、お茶を飲みながらしばらくお待ちくださいませ。

幕間・『ハートキャッチプリキュア』の世界

バイバイクーン！

「くう……ッ」

「デザトリアアン！そのバーコード顔をやっちゃんいなさあい！」

3階建てのビル並みの大きさで暴れまわる、

仮面ライダー555ファイズの世界に登場する可変ビークル、

”オートバジン”のような二足歩行の巨大な化け物と、

我らが主人公、仮面ライダーディケイドとが、

互いの存亡を賭け、激しい戦いの火花を散らしていた。

仮面ライダーディケイドと戦いを続けるこのバイクの化け物。

名を『デザトリアン』と言い、その背後で高みの見物を決め込む、

褐色の肌の腹部が大きく開いた衣装を身に纏った女性、

砂漠の使徒の”サソリーナ”によって生み出された怪物である。

このデザトリアン、人間一人ひとりの心の中に咲く”こころの花”
が、

悩みや憎しみ、苦しみなどの感情を覚えると萎れ、

砂漠の使徒によって奪われ、何らかの物体と融合させることで誕生
する。

そのままにしておく周囲の被害はもちろんのこと、

奪われた人間の心が”砕かれ”、二度と目覚めなくなってしまふ。

そんなデザトリアンに今回選ばれた哀れな人間は……、

バイバイクーン！

イイナーイイナーズルイナー！

オレダツテ、土ミタイニ、カツコヨク主人公シターイ！

オレダツテツヨイゾカツコイインダゾ！

クウガノ世界ジャ、グロンギ相手に負ケナシダツタンタゾ！

主人公ニ、ナリターイ！

バイバイクーン！

門矢士にカツコいいところを全て奪われ、

毎回毎回損な役回りしか回って来ないことを妬んだ、

『小野寺ユウスケ』とその愛機『トライチエイサー』だった。

「ちくしょ……このツ！大人しくしやがれ！」

バーイ、バイ！クーン！

もちろん、士にデザトリアンのことなど分かるはずはない。

だが、彼が不可思議な力で怪物に変えられ、

小さな水晶玉のようなものに閉じ込められた所を見た彼が、

ユウスケを助けられないわけにはいかなかった。

しかしそれも一筋縄ではいかない。破壊活動のためか、

デザトリアンは憑依したところの花の持ち主の力を忠実に再現するが、

そこで「仮面ライダークウガ」に変身できるユウスケだ。

能力を用いて情け無用で向かってくるとなると、

本気を出しきれないディケイドは分が悪い。

腕力とリーチの違いをつけこまれ、

ディケイドは息を切らせて地に肩膝をついた。

「馬鹿な、んなわけあるかよ。ユウスケが……こんなに強いなんて」

「いい、すごくいいわぁん。

しおっしおでいつ枯れてもおかしくないところの花。

これならプリキュアだってイチコロよねん、イ・チ・コ・ロっ」

デザトリアンの強大な力に、サソリーナは高笑いでご満悦。

今までプリキュアに邪魔されてあまりいいところがなかったから尚更か。

しかし、想定不可能な出来事が彼女を襲う。

俺八正義ノ味方ナンダツ！

「おごほっ！？な、何するのよ 안타」

才前ミタイナ悪党八、俺ガヤツツケテヤル！

偶然この世界に通りすがったこの青年のことを、

この世界の悪の組織の幹部が知る筈がない。

デザトリアンになってなお、ユウスケは”クウガ”として、皆の笑顔を消そうとする輩に力を振るったのだ。

バイクのハンドルグリップが変化した拳が彼女の腹部を刺す。

サソリーナは衝撃でくの字に折れた。

「ちょ、ちょっと！なんてことするのよ！

赤ちゃん産めなくなったらどうす……おごぶ！」

気合で立ち上がるうとするサソリーナに、

腰を落としたアッパーカットで再び腹部を抉るデザトリアン。

たまらず、もんどりうって仰向けに叩きつけられるサソリーナ。

ミンナノ笑顔ハ……俺ガ守ル!

「じゃ、じゃああたしの笑顔もまも……ぐえっ!」

サソリーナが何かを言い終わらないうちに、

デザトリアンの拳が三度彼女の腹部を襲った。

腹部を狙った連続攻撃に、とうとう意識が刈り取られ、

彼女は亀裂の中心で泡を吹いて戦闘不能と相成った。

キーキーと鳴く数人の戦闘員に担がれて去ってゆくサソリーナを、
ディケイドは仮面の中でぽかんと口を開けて眺めていた。

「っと、ぼけっとしている場合じゃねえな。

今度は俺があれを受け止めなきゃならないってのか」

サソリーナが消えた以上、自分がこれを何とかするしかない。

ディケイドは覚悟を決め、ライドブッカードを構えた。

「悪いなユウスケ、痛みは一瞬だ……ってこれはあいつの台詞か」

FINAL ATTACK RIDE 「De - De - D
e - DECADE」

ディケイドは地を強く蹴り上げ飛び上がると同時に、

「ファイナルアタックライド」のカードをドライバーに装填し、

バイクのデザトリアンを頭の前から股の先まで一気に切り裂いた。

「バイクごと一刀両断、か。ユウスケになんて言おう……」

ライドブッカードを腰に納め、デザトリアンに背を向けるディケイド。
だが、デザトリアンは真つ二つに切れた自分の体を、

腕で強引に引き付け、再びディケイドに襲いかかってきた。まるで、”斬られた”という事実などなかったかのように。

「嘘だろ！？爆発すらしねえのかこいつ！なんて世界だ」

手詰まりだと逃げを決め込むディケイドだったが、

余程士に恨みがあるのか、自身が主役に躍り出たいのか、デザトリアンは執拗にディケイドを追い回す。

自分の中の哀しみを吐露しながら。

バイバイクウーン！

士ア、俺二モ出番ヲ……、活躍ノ場ヲクレヨ！

俺ダツテ欲シインダヨ！オ前ミタイに目立ツテ、

怪人タチヲバツサバツサト薙ギ倒スシーンガ！

「ああもつうるせえなあ。俺に言わんで制作者に言え！

”仮面ライダーディケイド”は俺が主人公でお前はあくまで脇役。

お前が俺より目立つことなんて、できるわけがないだろう」

しかしそうは言っても、

世界を崩壊から防ぐ旅の主役はあくまで自分。

ディケイド 門矢士にとっては至極どうでもよい問題だ。

一介の世界の住人が、主役を張れるわけがない。

そういう気持ちでデザトリアンに言葉を返したディケイドだったが、

そんなことはありません！

ディケイドのその言葉に反応したのかどうなのか。

突如、曇りなき青空から『何か』が流星のように降ってきて、

バイクのデザトリアンを吹き飛ばし、川に叩きつけた。

何だ何だと辺りを見回すと、先ほどまでデザトリアンが立っていた場所に、

コミックマーケットなどでよく見かける奇抜なファッションに身を包んだ、

凜とした出で立ちの二人の少女が立っていた。

一人は桃色基調のドレスにピンク色の髪で、膝まで伸びたブーツ。もう一人は水色基調で、青髪に、ショートブーツとニーソックス。二人はすうっと息を吸い込むと、息を吐く代わりに大音声でびしっとな乗る。

大地に咲く、一輪の花！『キュアプロッサム』！

海風に揺れる一輪の花！『キュアマリン』！

ハートキャッチ！プリキュア！

二人の少女が変身したプリティでキュアキュアな戦士、プリキュア。この世界における”中心”的存在である。

二人はなぜか、眼前のデザトリアンではなく、

わざわざ茫然としているデイケイドの方へと向き直り、人差し指を突き立ててこう言った。

「主人公かどうかなんて関係ありません！

人は、努力さえすれば誰だって一番になれるんです！

それを頭ごなしに否定するなんて……私、堪忍袋の緒が切れました
！」

言いたいことは分かるが、余りにも見当違いだ。
デイクイドはキュアブロッサムという言葉に突っ込みを入れる。

「何？何だ？俺が悪いのか？俺がいけないのか？」

「あんた以外に誰がいるつてのよ」

怒りの沸点が分からないと頭を抱えるデイクイドに、
刺々しい口調と態度でびしやりと答えるキュアマリン。

「しかし、しかしだなお前ら。俺は主人公で、あいつはその相棒。
どうやったってあいつが俺より出張るなんて無理だろ？な？」

「むっっ！この後に及んでまだ言い訳する気なの？」

海より深いあたしの心も、ここらが我慢の限界よ！

ブロッサム、一気に決めるよ！」

「望むところです！」

ダブル、プリキュアキイイイック！

二人のプリキュアは地を強く蹴り込んで飛び上がり、
デイクイドに向けて渾身の飛び蹴りを叩き込もうとする。

「くそっ……何も分からないのに倒されてたまるか！」

しかし、理由すら良く分からないで倒されるのは御免だと、
デイクイドもライドブツカーを抜いて構える。
プリキュアの蹴りが、デイクイドの刃が交錯

サンフラワー・イーゼス！

「うそおっ！」

「きゃああっ！」

「なんだッ!?」

することはなかった。

二人の間に金色に輝く”ひまわり”花のようなシールドが展開され、両者共にはじき返されてしまったのだ。

「ブロッサム!マリリン!今はそんなことをしてる場合じゃないですよっ?」

両者の間にはいつの間にか一人の少女が立っていた。

腹部の大きく開いた露出度の高い金色の衣装を身に纏い、衣装以上に金色の長いツインテールが特徴的な、三人目のプリキュアだ。

「何だ、お前もプリキュアって奴か?」

「陽の光浴びる一輪の花、”キュアサンシャイン”!」

素性を聞かれサンシャインは、自分の愛らしさを誇示するかのよう

に、その場でくるっと回って、名乗りと共にポーズを決める。

なんだ、こいつもそこの二人と同じような奴かと、ため息をつくデイクライド。

「サンシャイン!」

「むう!邪魔しないでよ」

「あのデザトリアンが暴れているのはこの人のせいなのかもしれない。

でも今私たちがするべきは、元を断つよりデザトリアンを断つこと

「よ

「あ

「そ、そうでしたね。そうですね！」

サンシャインに促され、ブロッサムとマリンはデザトリアンの方へと向き直る。

「可愛そうな人……、その心の闇、私の光で照らしてみせる！
私がデザトリアンを抑えるから、二人はトドメを！」

彼女の言葉と手の合図にうなずいたブロッサムとマリンは、
デザトリアンの側方に飛び退き、必殺技を放つために必要なアイテム、

『フラワータクト』を構えた。

サンシャインは先んじて手に持っていた『シャイニータンバリン』
を、
バイクのデザトリアンへ向ける。

プリキュア・ゴールドフォルテバースト！

サンシャインの掛け声と共に、無数のエネルギー光弾がデザトリアンを襲う。

光弾はデザトリアンに接触すると同時にひまわりの花のような形状に変化し、
体を包み込んで自由を奪う。

「今よ、ブロッサム！マリン！」

「はい！」

「やるっしゅー！」

集まれ！二つの花の力よ！

プリキュア！フローラルパワー……フォルティシモッ！

そこに、側方で待機していた二人がタクトに力を込め、自身らも赤と青のオーラを纏い、デザトリアンに突撃。

必殺の『プリキュア・フローラルパワー・フォルティシモ』だ。

ただのデザトリアン相手なら一撃必殺の代物で、それでなくとも、サンシャインのバックアップまである。ここにいる誰もが、プリキュアの勝利を確信したのだが。

バイバイッ……クーン！

「きゃあああっ！？」

ユウスケの心を媒介にしたこのデザトリアンは、サンシャインの拘束を力技で押し返し、必殺技を放ったブロッサムとマリンを力押しで吹き飛ばしたのだ。

エネルギーを必殺技に集中していた三人は、変身を強制的に解除させられ、それぞれのイメージカラーをあしらった、ノースリーブのワンピース姿となって地面に倒れ込む。

「そんな……あたしたちの技が効かないなんて！」

「なんて恐ろしい……なんて強い私怨の力なんでしょう」

「目立ちたい、そのことにここまで執着しているなんて」

バイクのデザトリアンと、その媒介のユウスケについて、

三人は思い思いの意見を述べると、その発生を誘発したであろう、後ろで茫然と彼女たちを見つめるディケイドをきつと睨みつけた。

「何だよ……俺か？やっぱり俺なのか」
「当然でしょ」

「ああもう、分かった！分かったよなんとかすればいいんだろ！
なんか……何かないか？この状況を何とかできそうなものは……」

三人の少女に促され、デザトリアンの攻撃をかわしつつ、
ディケイドはライドブツカーの中をああでもないこうでもないを探
る。

ふいに、一枚のカードが引っ掛かった。

ディケイドはライドブツカーをガンモードに変えてデザトリアンを
撃ち抜くと、
そのカードを引っ張り出してまじまじと見つめる。

「ハートの絵、ねえ。……いいだろう、なんとかしてやる」

ディケイドはカードの映った柄を見て思案した後、
プリキュアに変身していた三人に声をかけてゆく。

「そのの、茶髪の……ああ、サンシャイン、だっけか？」

「いえ、僕は『明堂院イツキ』ですけれども」

「ああ、そう。とりあえずそこ。そこに立ってる」

「で、次……。ピンクのお前。名前は？」

「わたし、ですか？『桜ツボミ』、です」

「そうか。ならツボミ、お前はイツキの左側。そこに立っている」

「最後だ。そのの背の低いお前。名前はなんだ？」

「エリカ。『海風エリカ』っ」

背の低さを指摘されたエリカは憤慨して嫌味たらしく土に返答するが、

彼はそれを無視してエリカをイツキの右隣に立たせる。

一体、何をしようと言うのだろうか。

「うしっ、一直線に揃ったな。さて、と。ちょっと、くすぐりたいぞ」

「えっ？」

「へ？」

「何すんの！」

FINAL FORM RIDE 『HE・HE・HE・
HEARTCATCH』

デイケイドは『ハートの絵』が描かれた金の縁取りカードを装填。それと同時にイツキの両隣に立つツボミとエリカの肩を掴み、そのまま二人をイツキに”叩きつけた”のだ。

何がなんだか分からないと困惑する三人だったが、赤・青・黄色の光に包まれ、中から出てくる頃には、さらに訳の分からない事態に発展していた。

「えっ……うそ、嘘ッ!？」

「何これ……何これエっ！」

「これが……わ、わたし？」

結論から言うと、彼女たちはプリキュアの姿に戻ることができたのだが、その姿は異様そのものであった。

容姿はキュアサンシャインを基調としているものの、ツインテールの右側はウェーブのかかった青色に、右肩は水色に変化して青のリボンが付与。

左側はサンシャインよりもやや長いピンク色に、かつ左肩はピンク色のリボンと共に桃色に変化。

腹部の開いた衣装、へその下部分にはひまわりの装飾と、それを取り囲む青のハートとピンクのハートがあしらわれた、仮面ライダーのベルトのようなものが付与されている。

ブロッサム、マリリン、サンシャイン。

三人のプリキュアがディケイドの力によって”融合”してしまったようだ。

「赤、青、黄色……か。バランス良く混ざったなあおい。名づけてキュアしんごう……」

ディケイドが”キュア信号機”と言いかけた途端、融合した三人は覚悟を決めて大見得を切り、彼の言葉を遮った。

大地の力！海の力！太陽の力！

三つの心が起こした奇跡！

キュア、エクストリーム！

「キュア……エクストリーム？」

「「「キュアエクストリームです！たああああああっ」「」

キュアエクストリームはデザトリアンの攻撃を片手で難なく受け止

めると、
もう片方の手で握りこぶしを作り、強力な一撃を見舞った。
もんどりうって吹き飛ばされ、川の水を激しく噴き出させるデザトリアン。
必殺技を叩きこむなら今だ。

輝け！煌めけ！舞い踊れ！エクストリーム・タクト！

キュアエクストリームがそう叫ぶと、

彼女の両手に青、黄色、ピンク色に光る”タクト”が現れた。

タクトを×字に構えて、エネルギーを充実させる。

ピンク、黄色、青のエネルギーが混ざり合い、巨大な光の玉となった。

プリキュア！エクストリームウェーブ……フォルテッシモ！

向かい来るデザトリアンにエネルギーの塊をぶつけるキュアエクストリーム。

エネルギー弾は三色に輝く花の形となってデザトリアンに取りつき、その動きを完全に封殺した。

はぁああああああああつ！

キュアエクストリームはタクトの中央にある「クリスタルドーム」を、

もう片方のタクトのクリスタルドームに接触させて激しく回す、回す。

本来自らの手で回すもののだが、両の手にタクトが装備された彼女は、

こつして回すことしかできないのだ。

ほわほわ、ほわわ〜ん

ブロッサム、マリリン、サンシャイン。

三つの力と心が一つになっただけあってその力は絶大。

バイクのデザトリアンは安らかな表情を浮かべて浄化されていった。

「……俺、何もやってねえ」

デイケイドは茫然としたままプリキュアたちの戦いを眺め、変身を解除。

戦いの仕様上、彼にはどうしようもなかったのだが、

何も出来ないまま終わるのはあまり後味の良いものではなかった。

デザトリアンは消滅し、紫色のガラスの中に入れられたこころの花と、

ユウスケの常用マシン、トライチェイサーが残される。

戦いの終わりと共にエクストリームから解放された三人は、

こころの花と、その近くで転がっていた水晶玉を拾い上げた。

中では、苦悶の表情を浮かべたユウスケがうずくまっている。

「よおっし、いつちよあがりつと」

「さっ、早く彼の心の花を戻してあげないと」

ブロッサムはユウスケのうずくまる水晶玉に、こころの花を突き刺す。

こころの花は瞬く間に水晶の中に吸い込まれてゆき、

水晶玉はまばゆい光を放って割れ、ユウスケが中から飛び出した。

「大丈夫、ですか？」

「……あれ？俺、何を、していたんだっけ」

意識がもうろうとしたままのユウスケにブロッサムが声をかける。デザトリアンとなって暴れていたことなど、彼は知る由もなかった。だが、そのことを”夢”として認識していたユウスケは、何があつたのかとその場に座り込んで頭を抱えた。

「でも、なんでだろう。なんかすっごく嫌なことをしてた気がする。主人公になって活躍したいとか、なんとかか。

ははっ、何言ってるんだろっとな、俺。できるわけ……ないのに」

「そんなことありません。人は誰でも美しく輝けるんです。

”レンギョウ”の花言葉は『希望の実現』。

あきらめずに努力しましょう。ね？」

「そうか……そうだよな。俺頑張るよ！やってみる！」

「はいっ」

ユウスケの言葉に、ブロッサムはにこりと微笑んだ。

と同時に、今まで物陰に隠れていたと思しき、

二体の妖精が彼女たちの前に現れる。

「ブロッサム！マリリン！サンシャイン！大丈夫ですかあ？」

「シプレ！」

「コフレ！」

「じっ、『こころの種』が生まれそうですう……」

瞬間、ピンクを基調としたチェックの妖精、”シプレ”が、

まるで哺乳類のお産の時のようにぶるぶると震えてうずくまった。

”こころの種”。浄化された人間のこころの花から生まれ、プリキユアたちが守る”こころの大樹”の栄養分となる不思議な種だ。

彼女たちの妖精であるシプレヤコフレから産まれるもので、ユウスケが悩みを振り切ったまさに今、彼らのおしりから産まれようとしていたのだが、

「いや、無理だろそれでも。」

お前はいい加減自分の立ち位置と言うものをわきまえろって
「ちよ、ちよっ!?!」

士はそんなことなどこ吹く風だと言わんばかりに、決意を新たにするユウスケに対し辛らつな言葉を投げかけた。
”仮面ライダーディケイド”という作品の形態を考えると、当然のことであるし、彼自身にも悪意はなかったのだが、今回ばかりはそれがいけなかった。

「この際だ。はっきりと言わせてもらっせ。お前は……」
「ま、待ってください!今は……今はダメです!」

「はっ……っつ!?!」
「ど、どうしたんですうシプレ!」

こころの種を産もうとしていた妖精・シプレが、その言葉とユウスケの落胆に呼応するかのようになり、その場に倒れ込み、苦しみ出したのだ。

「っ、っつ……」詰まった”ですっ”

「ええっ!？」

「いざ”産まれそう”って所でまたこのころの花が萎れちゃったから、おしりの中で止まっちゃって、出なくなっちゃったですよ！」

予想外の事態に、皆口をあんどぐりと開けて茫然としてしまう。

が、誰よりも先に立ち直ったエリカが、土の襟首を掴んでまくしたてた。

「んもー!あなたは最初っから最後まで!責任取りなさいよ！」

「責任つて……俺に何をしろと！」

「シプレの中から種を取り出しなさい!いますぐに！」

「無理だつて!出来るかって！」

「なんとかしなさあーい!あなた、主人公なんですよ!？」

数時間後。

このころの種は土の手により無事にシプレの体の中から摘出されましたとさ。

めでたし、めでたし。

「なあ、土」

「なんだよ」

「大変なんだな……主人公になるつのも」

「当たり前だ」

暮れなずむ街並みをのぞみ、水道でしきりに手を洗う土を見つめ、ユウスケは何も言わずに彼の右肩に自身の手を乗せた。

幕間・『ハートキャッチプリキュア』の世界（後書き）

思い付きと酒の力で2時間半でやってしまったアレな一作。

ハトプリとデイケイドのクロスは、

どこかでいつかやろうと考えていたのですが、

クロスするだけの旨味が思いつかなず、

かつ長編にするだけのプロットがなくて、今まで放置していました。

とりあえず『ユウスケが主人公になりたい』という理由でデザトリアンになるというアイデアを考えついて、

そこからキュアエクストリームの案が出てきた感じですね。

だれかイラスト化してくれないかなあ。

……が、そこでネタが尽きてしまい、

それ以上面白い方向に書き進められませんでした。

一体どうするべきだったのでしょうか。

諸事情によりこのような中途半端な位置に掲載されてしまいました。小説家になるうのシステムの都合上、直そうとすると面倒なことになるため、

申し訳ございませんがこのままです。

いえーい！あたしたちガルデモの、

” オールナイトライブ” に来てくれてどうもありがとう！
その名の通り朝までみっちり生ライブ！誰も寝かさないよ

お！

さあて、と。準備はいい？それじゃあ、おっぱじめるよー

！！

音無ユリの作戦開始の大号令と共に、ガールズ・デッド・モンスター
のライブは華々しく幕を開ける。

岩沢ユイ率いるガルデモの任務は、集まったNPCの大観衆を自
分たちの歌と演奏で熱狂させ、誰一人としてこの場所から生徒を出
させないこと。

となれば手段を選んでいる場合ではない。ユイは初っ端の景気付
けにと、重たい音撃真弦・烈斬おんげきしんげんを目標一杯かきならし、自分の一番の
持ち歌を唄い始めた。彼女の選曲はすぐさま功を奏し、会場の盛り
上がりはいきなり最高潮。

怒号にも似た荒々しい歓声が場内を包み、席を立とうなどと考える
人間はひとりもない。

ユイ、精一杯頑張るから。最後までやりきるから。

だからお願い。必ず助けてきてね、門矢君、ユリっぺ隊長。

「おおっ、と。早速おいでなすつたなこんちきしょう。野田、松下
五段！ オルフェノクだ、やつらが向かって来やがったぜ」

溢れんばかりの歓声が会場から漏れ出る中、体育館側のグラウンドから、象やサイ、ペリカンや牛など、灰色の体の異形の生物が校舎を目指して進行を始める。

校舎の屋上から双眼鏡で様子を探っていた日向はいち早く敵の進撃を察知し、校舎内で待機している野田と松下に無線で檄を飛ばす。ガルデモのオールナイトライブの報は校内放送や地道なビラ配りなどが功を奏し、ほぼ全ての生徒を集められたものの、当然そのことをオルフェノク側が知らないはずがない。

土の話では数が減らない限りこちらを襲うことはないということだったが、先に自分たちを潰して突撃部隊の戦意を削ごうと考えたのだろう。オルフェノクは両手両足で数えても足りないほどの物量で校舎に攻め込んできていた。

「おおっ、怖じ気づいてる場合じゃねえよな。んなろっ！」

しかし、そこで指をくわえている日向ではない。彼はアタッシュケース型に収納された武器『GX-05』に認証コードを入力して、ガトリング砲の形に組み直すと、校舎に向かい来るオルフェノクの軍団目掛けて引き金を引いた。

大量の薬莖やせいと共に道路舗装の地ならしのような、荒々しくけたたましい音が周囲に響き渡り、オルフェノクの体に次々と風穴を開けてゆく。

「日向さん、あなたの頭上、十六時の方向をオルフェノクが通過します」

「肉眼で確認したよっ、くそッ」

そんな日向の耳に遊佐の淡々とした声が届く。翼を持ったオルフェノクが彼の銃撃を縫って校舎に向かうとの報に、日向はすぐさまサブマシンガン『GM-01』をGX-05を連結させて構え、上空のオルフェノクに狙いをつける。

「逃がさねえぞ、おらぁ！」

GX-01より放たれたロケット弾はオルフェノクの翼を穿ち、

バランスを崩して空から叩き落とすことに成功した。

「へへっ、ざまあみる！……っつて、おおわっ！」

だがロケット弾による一撃も、オルフェノクを倒すとまでは行かなかった。

落下してきたオルフェノクは日向の姿を見るや否や飛びかかり、両の腕で彼の首を絞め始めたのだ。

「くそお……やられて、たまるかッ！」

日向は首を絞めつけられて窒息しそうな中、自身の周囲を探って、『GK-06』とナンバリングされた小型のコンバットナイフを逆手に取ると、オルフェノクの首筋目掛けて横一線に切り裂いた。

首筋を切り裂かれたオルフェノクは、傷口から血の代わりに灰を撒き散らすと、豚のような悲鳴を上げ、日向の体に覆いかぶさるようにして絶命。日向は白い灰に咳ばらいをし、両手で払って立ち上がった。

ガトリング砲の雨が止んだ隙に校舎の中へ続々とオルフェノクたちが入ってゆく。自分の身を守ることはできたが、その代償はあまりにも大きかった。落ち込む前に無線を使い、日向は下駄箱近くの廊下に待機する野田に連絡を入れる。

「すまねえ野田、やつらの侵入を許しちゃった！ そっちで仕留めてくれッ」

「謝ることはない。むしろ感謝したいところだ。退屈過ぎて校舎を壊しかねないところだったからなあ。さあて、どこからでもかかってきやがれ、化け物共お！」

野田は校舎に足を踏み入れたオルフェノク目掛け、力任せにハルバードを振るう。

人間離れた馬鹿力で振るわれた刃は、オルフェノクの腕を足を胴体を易々と千切り飛ばし、

下駄箱の周りを肉片だらけの灰色の砂場へと変えてゆく。

「はっは！ 見たか化け物共お！ すげえ武器がなくなっただって俺は強ええ！ 最強に強ええんだよ！ ざまあみる！」

次々に倒れてゆくオルフェノクを見下ろし、自分の力を誇示せんと高笑う野田だったが、

「俺は強い！ お前らは弱いっ！ ははははーっ！ …… ははは、はあ！？」

同じ調子で振るったハルバードの刃は、カブトムシを象ったオルフェノクの鎧に弾かれた拳げ句、逆に捕まれて叩き折られてしまった。

「う、嘘だろお……冗談じゃねえっての！ うわ、うわあああっ！」

唯一の武器であるハルバードを失っては、怪力自慢とはいえ成す術はない。野田はあつという間に五、六体のオルフェノクに囲まれてしまった。

成すすべのない野田の頭上に、オルフェノクの鋭利な爪が、刃が迫る。

うりやああああああああっ！！

だが、それが野田の体を切り裂くことはなかった。

隣の教室の壁を突き破って現れた『紫の体の鬼』が、野田に襲いかかるオルフェノクを千切っては投げ、手から伸びる鋭利な爪で切り裂き、口から火を吐いて、その全てを蹴散らしたからだ。

「おお、おおおおおっ！？ おっ、おっおっ、鬼い！？」

自分を救ったには違いないが、その姿に恐怖を覚えた野田は、折れたハルバードの刃を掴んでぶんぶんと振り回して精一杯威嚇するが、彼を助けた鬼はやめる落ちつけと声を発して野田の元に近づいてくる。

その声に聞き覚えがあったのか、野田は恐る恐る近づき、鬼に言葉を返した。

「その声……、お前まさか、松下五段か？」

「ああ、俺だ。門矢がくれたあの音叉を軽くぶつけて額に向けたんだが、そうしたら炎と共にこんな姿に変わってしまったなあ。見てくれはこうだが、なかなか便利だぞ。火も噴けるし筋肉もモリモリ

だ。あぁとそうだ。お前に届けものだぞ、野田」

鬼と化した松下は、野田に身の丈ほどもある、青い柄に金色の刃の『薙刀』なぎなたを手渡した。野田は松下の姿にびくつきながらもそれを受け取り、まじまじと見つめる。

「なんだこりゃ」

「門矢の奴が配置につく前に作って持ってきたお前のための武器さ。お前は先走ってこの場所に待機してたからな、代わりに俺が預かっておいたんだ」

松下の言葉に軽く頷くと、野田は渡された薙刀を軽く振って心地を確かめる。空気を切るほどの鋭さと鳥の羽のような軽さに、野田は口元をにやりと歪ませた。

「なんだよなんだよ。こんなにもんがあるんならとつとと出せつてんだよ。これなら堅い鎧もすぱつと行けそうじゃあねえか。っしやあ、かかってこいやあ！」

「野田さん、松下さん。上の階にオルフェノクが向かっていきます。阻止してください」

オルフェノクに向かって大見得を切った瞬間に入る遊佐の通信。

そう。空を飛ぶオルフェノクは一人だけとは限らないのだ。

「あぁと、こんな時につ！ 松下五段、下駄箱前は俺が守る！」

二階の廊下の方はお前に任せてもいいよな！」

「あぁ、任された！」

鬼の姿をした松下は風のように廊下を駆け、野田は青色のハルバードを軽やかに振るい、オルフェノクを蹴散らしてゆく。

自分たちの周りだけでこの数だ。

突撃部隊である士たちは一体どれだけの数を相手にしているのだろうか。

彼らは、無事に帰って来られるのか？

一抹の不安を胸に秘めたまま

「くそつ、なんて数だ！ 斬っても斬ってもキリがない！」

「浅はか也。ぼやく暇があるなら口よりも動かせ直井」

「そりゃそうだ。しつかり働けよ直井」

「僕に命令するな！ 僕に命令していいのは音無さんだけだッ」

「ああ、もう！ 何やってるのよあなたたちは！」

野田たちの抱いた不安は現実のものとなっていた。オルフェノクの頭目・百瀬が潜伏している体育館を襲撃した士たちは、四人全員の指で数えても足りないほどのオルフェノクを相手にし、体育館の中に入ることができないでいた。

「ええいくそ、一人一人は、雑魚の癖にッ」

鋼鉄をも豆腐のように切り裂く黄金の魔剣、『ザンバットソード』を振るい、オルフェノクを切り刻む直井に、

簡単操作でクナイ、銃、斧にと変形する万能武器『カプトクナイガン』を用い、クナイですれ違い様に敵の首筋を裂き、相手が反応するよりも早く斧を振り抜き、中・遠距離のオルフェノクを銃で牽制する椎名。

士から預かった大砲『モウギユウバズーカ』を、反動も意に介さず撃ちまくり、オルフェノクを散らして回るユリ。三人とも決して足手まといになっていないわけではないのだが、敵の数が多すぎて対応が追いつかないのだ。

このままではラチが開かない。ディケイドは周囲を見回して考えると、ヘッドセットの周波数を四人のものに合わせた。

「総員に告ぐ！ このままではじり貧は免れん。作戦変更だ。俺とユリで地下に向かい、カナデを奪還する。直井と椎名はオルフェノクの侵攻を水際で食い止めてくれ」

四人全員で突っ込むよりは、二人を援護に回して群を散らし、そこを一極集中させた方が突破できる可能性は高い。

だが、仲間のことを第一に考えるユリが、そのユリを大切に思う直井がそれを承服するはずもなかった。

「無茶よ！ 仮にそうやって突破できたとして、二人はどうするつもり！？」

「だいたいなんで貴様と音無さんなんだ！ 彼女を守るのは僕の仕事だぞ！」

ユリはバズーカで敵を散らしながら、直井はわざわざディケイドの元に駆け寄って彼の提案を否定する。

だが、彼が背を向けたその一瞬の隙を突き、直井の背後から六七体のオルフェノクが飛びかかってきた。直井一人に御しきれぬ数ではないばかりか、虚を付かれて対応に遅れ、手にしたザンバットソードを構えて防ぐことすら叶わない。

オルフェノクの爪が降り下ろされかける中、万事休すか、と目を瞑る直井だが、

ATTACK RIDE 『SLASH』

ディケイドは直井の肩を抱き寄せて、オルフェノクの一撃から彼を守ると同時に、『スラッシュ』のカードをドライバーに装填し、並み居るオルフェノクを横一線に切り裂いた。

切り裂かれたオルフェノクは物々しい悲鳴を上げ、瞬く間に灰の塊へと姿を変える。

片手で、しかも人ひとり抱き寄せたまま、あの数を一撃で。次元が違いすぎる、と直井は呆けて口をあんぐりと開いた。

「敵陣の真っ只中で背を向けてんじゃねえよ、大丈夫か？ これで分かっただろ。お前にこれぐらいの芸当ができるってんなら、俺も喜んで代わってやるぜ。じゃなきゃただの足手まといだ」

直井は何も言わず、ディケイドの言葉に首を横に振った。プライドが高く、ユリ以外の人間を見下してばかりいる彼も、ディケイドのけた違いの強さを目の当たりにし、自信を喪失してしまったのだらう。

ディケイドはオルフェノクを斬り払いながら進み、地ならしの口

ローラーの元に駆け寄り、手を乗せた。

「どうやって？　と言ったな。こうすりゃあ楽勝だ」

デイケイドがそう言った瞬間、地ならし用の大きなローラーは、右腕の4連装バルカン砲、左腕の6連装ミサイル砲を備えた、可変大型兵器「サイドバツシャー」へと姿を変えた。

「ライブに似合いの花火を打ち上げてやるぜ。お前ら、伏せるッ」

デイケイドは姿が変わったと同時にマシンのコクピットに乗り込み、右腕のバルカン砲で近寄るオルフェノクに風穴を開け、左腕のミサイル砲で遠方で群を成すオルフェノクを吹き飛ばす。

その威力はユリの持つバズーカとは比べ物にならないほど強大だ。たった一撃で海を割るモーゼのように、体育館までの道が一直線に開いた。

「よし、道が開けた！　行くぞ、ユリ」

しかし、それでもなおオルフェノクの大群は留まるところを知らず。集まりきる前に抜けようとユリに向かい手を伸ばすデイケイドだが、当の本人はうつむき、その手を取ろうとはしなかった。

自分たちが行ってしまったら、彼らは一体どうなるというのか。

迷いを見せるユリに、直井と椎名は声を上げた。

「行ってください音無さん！　ここは僕たちにお任せを」

「私の意思が介在しないのは気になるが、同意だ。行け、ユリ」

「直井君、椎名さん！　でも……」

「この作戦の目的は神代カナデの奪還のはず。ならば、こんなところできずきずきしている場合ではないはずですよ！」

「でも、あなたたちをこの中に残しておくわけには」

一体一体は大したことはないが、二対大多数。しかも相手は人間を灰化ないしオルフェノクに変える力を持っているのだ。ユリが躊躇^{ためら}いを感じるのも無理はない。

だからこそ直井は声を大にし、ユリに向かってまくし立てた。

「音無さん、僕たちの力がそんなに信用できませんか？　徒^{ともがら}……、アンノウンと戦って死線を潜り抜けてきたのは、あなたや神代カナ

デだけじゃない。僕たちSSSの面々だつてそうだ！ それとも何ですか音無さん、あなたは僕らを仲間だとは思っていないと……、そうおっしゃるおつもりですか？」

直井の言葉に当てられたのか、椎名も冷静な口調で続く。

「浅はか也。私たちはお前の心に賛同し、自分たちの意思でここにいる。誰もお前を責めはしないし、過保護なのは迷惑だ。安心しろ。こんな木偶人形相手に遅れを取るような、柔な鍛え方はしていない」ヘッドセットを介してユリの耳に響く覚悟と決意の秘められた二人の声。その覚悟に心えなくてはと、ユリは唇をぎゅっと噛みしめ、手を伸ばすデイケイドに言葉を返した。

「門矢君、道筋は私が案内するわ。お願い。あたしをカナデちゃん
の所まで連れて行って」

デイケイドは周囲を見回して、ようやくかため息を一つすると、ボタン操作でサイドバツシャーを砲撃形態からサイドカー形態に組み換え、彼女に助手席に乗るよう促した。

「お安い御用だリーダー。全速力で突っ切るぜ、舌噛むなよっ」

黙って頷き、サイドバツシャーの助手席に乗り込むユリ。彼女は振り向くことなく、自分たちの背後で戦っている直井と椎名に言葉を送った。

「なら、絶対に死なないで帰って来なさい。命令よ」

二人は大丈夫だと言葉を返し、首を縦に振って頷いた。

エンジンフルスロットルで発進したサイドバツシャーは、目にも止まらぬ早さで、近寄るオルフェノクを轢き散らし、体育館の鉄の扉を突き破って進んでゆく。

体育館前のグラウンドにはオルフェノクの大群と、それに囲まれた直井と椎名のみが残された。

「さて、いよいよ窮地に追い込まれたな。尻尾巻いて逃げて誰も責めないぞ、直井」

「馬鹿言つな。音無さんの命令だぞ。たとえ勝ち目がなかるうが最後の最期まで戦い抜くに決まっているだろう」

「聞くだけ野暮、だったな。私の足手まといだけにはなるなよッ」
「貴様がなッ！」

二人の戦士は不敵に微笑み、オルフェノクの大群の中へと突っ込んでゆく。ユリの命令を胸に秘め、勝てるかどうかわからないままに

オルフェノクを蹴散らして体育館内に侵入し、ステージの下のパイプ椅子などをしまう空間を抜けたディケイドたちを待っていたのは、巨大な掘削機が何かで地中を大雑把に削り取ったごつごつとした深い深い空洞だった。

サイドバツシャアの乗り捨て、地下へ地下へと進むディケイドたちを待っていたのは、救急車のかき鳴らすサイレンのような音が反響を続け、土の泥臭い臭気と共に、常温で何日も放置した生肉のような鼻を突く腐敗臭。ユリはたまらないと袖口で鼻を覆い、ディケイドは口呼吸に切り替え気を入れ直す。

「ひでえところだな。お前らは毎回こんな場所を行ったりきたりして武器を調達しているのか？」

「警報が鳴るのはあたしたち以外の外敵がギルドに侵入してきた時だけよ。同時に部屋全体に超高温のレーザーが張り巡らされたり、硫酸のたまった落とし穴が開いたり、大玉鉄球が転がってきたり、刃物が飛び交ったり……。トラップが起動して外敵を排除しようとするの」

「なるほど、ね。ってことは……、百瀬の野郎はそのトラップを掻い潜って、自力で最下層まで下っていったのか。この様子から察するに、かなりの数があいつにやられたか、オルフェノクにされたか、ってところだな」

「鉄球や刃物、レーザーを受けてもびくともしないって……、あな

たの知り合いつてのは、一体どんなやつなのよ」

「お前と同じ、ただの化け物さ。上昇志向が強すぎるだけのな」

自分と同じという言葉に怒り、ユリはディケイドを鋭く睨みつけるが、彼は別段謝る様子もなく、黙々と彼女の後につき、暗がりの中を進んでゆく。

だが、ユリとしてもそんなことはどうでもよかった。数t近い重量の鉄球を受けても、人の体よりも数倍も大きな斬撃を浴びようとも、鉄の塊をも焼き切るほどのレーザーを受けようとも歩を止めない百瀬と言う存在に、彼の言う野望とやらに尋常ならぬ恐怖を覚え、それどころではなかったからだ。

長い長い洞穴を抜け、二人は大きな工場のような場所に出る。しかし、百瀬や連れ去られたカナデの姿はそこになく、それどころか中で働くSSSの面々は一人もおらず、本来稼働してしかるべきベルトコンベアや熔鉄の機械などの一切がその動きを止めている。

「誰もいねえぞ。ここがギルド、とやらじゃなかったのか？」

「ギルドで間違いないわ。でもここは”大量生産セクション”。銃だの剣だの弾薬だの、戦いにおける消耗品を大量生産するためのものよ。ここにいないとするなら、『研究開発セクション』を陣取っているはず。案内するわ、ついて来て」

研究開発セクション。新たな脅威である徒……、アンノウンの戦いに対し、通常の戦力では太刀打ちできないことを悟ったユリが、人知を超えた出鱈目奇妙奇天烈な兵器を生産させるために設けたセクション。

SF作品や特撮作品などに明るいメンバーを集め、彼らに現代科学では実現不可能な武器を形にさせ、それを基盤に大量生産する。今のSSSにとってなくてはならない場所であり、人材だ。

カナデからアギトの力を抜き取る。

オルフェノクである百瀬にそのような力はない。となると、それ相応の機械が必要になるのは目に見えている。当たり前と言えば当

たり前かとデイケイドは相槌を打った。

湾曲した鉄の棒や引き金のひしゃけた拳銃、使途の分からない鉄屑を、引きちぎれ、鉄臭いにおいを発して放られた腕や足を踏み越え、二人は敷地の中でも異彩を放つ自動スライド式の扉の前に辿り着く。

目の前に立つても扉は開かない。中からロックされていると見て間違いないだろう。

「ここが開発室か？」

「そうよ。さあ、乗り込みましょう」

モウギユウバズー力を構え、血気盛んに扉を蹴破ろうとするユリに、デイケイドは彼女の方を掴んで待てと言って押し留めた。

「何よ、急がないとカナデちゃんが」

「百瀬相手に大砲じゃ分が悪いだろ。使いやすいものをくれてやる」

そう言っつてデイケイドが彼女に手渡したのは、黄色い羽のような装飾に、赤い宝玉の嵌った、

柄の部分が異様に長い銃のような武器だ。

「こいつは”イクサカリバー”」。そのまま引き金を引いてもいいし、柄の部分を押し込むことで剣にもなる。取り回しの効く武器の方がいいだろ」

「イクサカリバー……ね」

ユリは感触を確かめて引き金に軽く手を触れた後、魔物である自分が退魔の武器を持って戦うのかと自嘲気味に笑った。

「感謝するわ門矢君。さ、行きましょ」

「おう。とつとと終わらせてメシにしようぜ」

デイケイドはそう言っつて仮面の下でにやりと笑うと、施錠されたドアを蹴破ってユリと共に開発セクションに強引に押入った。

「なんだ、ありゃあ……」

「何よ、なんなのよ……これ」

全面が白いタイルで覆われた窓のない部屋に押し入り、二人の目

に最初に飛び込んできたのは、チャックを開けて顔と両腕だけを出した死体袋の中に入れられ、青ざめた顔をしたカナデの姿だった。

両腕にはワイヤーが幾重にも巻かれて固定され、耳を覆うようにしてヘッドホンのようなものが被さり、側部についた電極のようなものから何らかのエネルギーが放出されて、隣の席でふんぞり返る百瀬の席へ供給されて赤く輝いている。

百瀬はここで二人の侵入者のことに気づいたらしく、額に青筋を走らせ、席を立って明らかに不愉快そうな声でまくしたてた。

「くそッ、やっぱりやってきたか……！ やはり人形同然のオルフェノクなんかじゃあダメだ。アギトだアギト。神の力だ！それを手に入れて僕は最強の存在になるんだ！ 邪魔は、邪魔立ては……させない！」

「そいつはそつちのセリフだぜ死に損ない。俺がきつちりと地獄に送ってやる」

「あんたのことなんてどうでもいい！ カナデちゃんは返してもらおうわ！」

二人は百瀬が構えを取り、オルフェノクに変身するよりも早く駆け出し、デイケイドは百瀬を狙い、ユリはイクサカリバーを構えてカナデの元へと向かう。

「んんっ！ 何だお前らっ！」
「門矢君！」

しかし、二人の思惑は成功することなく寸止めを余儀なくされた。部屋の奥に潜んでいた大量のオルフェノクがデイケイドの体を羽交い締め、ユリ一人で百瀬と対峙せざるを得なくなってしまうからだ。

「馬鹿め。僕が考えなしにこの場所でふんぞり返っていると思ったか。ここの持ち主たちは全部、僕の忠実な部下に生まれ変わったんだよ。やれッ木偶人形共！ 倒さなくてもいい、たっぷりと時間稼ぎをするんだ」

百瀬の号令と共に一斉に襲いかかるオルフェノクたち。

デイケイドにとつてのそれは物の数ではないが、羽交い締めにされて集団で襲いかかられては、抜け出すことは容易ではない。

「門矢君！」

「君の相手は僕だぞ。余所見をしている暇があるのかッ」

デイケイドがオルフェノクに襲われている以上、タイガーオルフェノクに変身して飛びかかる百瀬の標的は、必然的にユリに振られることとなる。

ユリはモウギユウバズーカを撃とうと彼の眼前に構えるが、百瀬はそれよりも早く彼女の懐に潜り込み、右腕の鋭利な爪でバズーカの砲口を切つて払いのけ、同時に左手を振り上げてユリの柔肌を襲う。

「なめんじゃ……ないわよ！」

だがユリも負けてはいない。左手に握ったイクサカリバーの引き金を引いて百瀬の左手の軌道を反らせ、飛び退いて人二人分ほどの距離を取ると、イクサカリバーのグリップを押し込んでカリバーモードに切り替えて、体勢を崩した百瀬目掛けて叩き込んだのだ。

「逃げるどころか、手向かうか！ 面白い、実に面白いが……無駄なことだ！」

しかし、ユリの降り下ろした刃は百瀬を斬ることは叶わず、易々と掴まれてしまう。その上相手はオルフェノク。人間の力でそれを押し込むことはできず、降り下ろした刃は次第にユリの眉間へと向かってゆく。

「馬鹿め。オルフェノクである僕に！ 人間である君が刃を降り下ろした時点で！ 勝敗は決していたんだよ！ くだばれえ」

「そうね。人間なら、ね。だったら……これはどう！」

そう言った瞬間、ユリの顔に不可思議な模様が浮かび上がり、一瞬のうちに猫を模したオルフェノクへと姿を変えた。

カリバーの柄にかかる力は一気に強まるが、百瀬はそれだけかと鼻で笑い、刃を受け止める右腕にさらに力を込めた。

「人間を捨てれば勝てると思ったのか？ 甘い、カルピスの原液よりも甘い！ 高位のオルフェノクである僕と、君みたいな成りたてで出来損ないのオルフェノク！ 僕が君に負ける要素なんか、どこにもないんだよ」

そう言つて高笑う百瀬だったが、どうしたことだろう。窮地に陥つたはずのユリもおかしくてたまらないとばかりに笑っているのだ。「何がおかしい！」

「あなたに力勝負で勝てるだなんて、あたしも考えてないわよ。でも、これならどう！」

そう言つた瞬間、ユリはカリバーに込めていた力を抜いて、同じく力を込めていた百瀬の体勢を大きく崩してよろけさせ、イクサカリバーを逆手に握つて右足を軸に強く踏み込み、腰を強く捻つて百瀬の背中にカリバーの刃を刺して床に押し倒し、体から貫通した刃を地面に突き刺して釘付けにしたのだ。

しまったと舌打ちをしても後の祭り。彼女の目的は最初からカナデの奪還ただ一つ。倒すのではなく、動けなくできさえすればそれでよかつたのだ。

ユリは百瀬の尻を踏みつけ一瞥をくねると、地を強く蹴つて跳び上がり、カナデの吊るされている袋に取り付いた。そこから耳のヘッドホンを無理矢理外して砕き、腕のワイヤーを解いて千切り、鋭い爪と牙で黒い死体袋を破つてカナデを引きずり出し、彼女を抱きかかえて床に着地した。

「カナデちゃん！ しっかりしてカナデちゃん！」

左手で彼女の頭を支え、まるで赤子を抱き抱える母親のような形を取るユリ。誰かに抱かれて安心感を得たのか、力を吸い取る機械から解放されたからか、カナデはゆっくりと目を開き、自分の体を抱く人物を見据える。

「ユ……リ？」

「よかつた、気がついたカナデちゃ」

ユリは言葉を止め、カナデを抱く腕を強張らせる。

気付いてしまったのだ。オルフェノクのままカナデを抱き抱えていることに。だが、同時に彼女はある違和感に気づき、うるたえるよりも先にカナデに問いかけた。

「まって……、なんで、なんであたしのことを”ユリ”って」

「どれだけ一緒にいたと思っっているのユリ。声を聞けば一発で分かるわ。それに私と同じ光を浴びて、あなただけがそのままだなんておかしいじゃない」

言われてみれば当たり前前のことだ。何故そんなことに気付かなかつたのだろう。

ユリは震える声で謝ろうとするが、カナデはそんな彼女の唇を人差し指で撫でるように触って言葉を続ける。

「謝らないで、ユリ。私、分かってた。全部、分かってたから。あなたはSSSのリーダーだもの。言えなくて当然。相談する相手がいなくて当然。辛かったわよね、ユリ」

カナデはユリの頬を軽く撫で、震える声で言葉を継ぐ。

「でもね。辛かった。それは私の独りよがりな願望なんじゃないかって。ユリは本気で私をこの世界から追い出そうとしているんじゃないかって。ずっとずっと、恐かったの。だから、だからこそ、こうして迎えに来てくれたことが何にも代え難く嬉しい。ありがとう、ユリ」

カナデはそう言って、オルフェノクと化したユリの体を抱き返す。岩肌のようにごつごつとした表皮と、羽毛のようにふさふさとした首周りの毛並み。温もりを感じられない寒々とした体であったが、それでも構わないと、今まで出来なかった分を返すように、ただただぎゅっ、と力を込めてユリの体を抱き返した。

ユリはもう何も言えなかった。目から零れ落ちる大粒の涙を、口や鼻からあふれ出る嗚咽を止めることなど出来ないのだから。

いつしか人間の姿に戻ったユリは、カナデの体を強く抱きしめ、遠方で争い合うディケイドたちにも聞こえるほど大きな声で泣きじ

やくつた。

「かぁーっ。わんわんわん泣いてやがる。犬かあいつは。って、そんなこと言ってる場合じゃねえよな。一気に決めるぜ」

FINAL ATTACK RIDE 「De-De-De
- DECADE」

二人の少女が泣きながら抱き合う所を大群の合間から見知ったディケイドは、いい加減うつとおしいと、ライドブツカーをガンモードにして構え、ファイナルアタックライドのカードをドライバーに挿入。

自身を取り囲むオルフェノクの集団に向かってピンク色に輝く極太の光弾を放ち、その全てを灰の塊へと変えた。

「ユリ、カナデ！ 二人とも無事か？」

「かどや……くん」

「あなたは……、カツカレーうどん定食の人？」

ディケイドの鎧を身に纏っているとはいえ、名前すら覚えていないのか。

仮面の下でため息をつくと同時に、彼は二人の無事にほっと胸をなで下ろす。カナデは肩を落としてうなだれるディケイドに声をかけた。

「あなたがここまでユリを導いてくれたのね。ありがとう」

「よせよせ。俺は別に何もしちゃいない。ユリは自分の意思でここに来たんだ。強いて言うなら、俺は迷っているあいつの背中を押しただけさ」

ディケイドのぶっきらぼうな言葉に、カナデはくすくすと笑って言葉を返す。

「それってすごく大きなことよ。自分で言ってるて分からない？」

「世の中で大切なのは結果だけだ。過程なんかどうだっていいんだよ。それに、礼がしたいってんなら、こっちを手伝ってもらっぜ」

そう言っってディケイドが指差した先を見たカナデと、彼女を抱き

抱えるユリの表情が強張る。

ユリの手によってうつ伏せのまま地面に釘付けになっていた百瀬が、刃を無理矢理砕いて立ち上がってきたのだ。

「貴様ら……貴様ら貴様ら貴様らッ！ よくも僕にこんな屈辱を！絶対に絶対に許さんぞ！ 服従させてやる、心の底から屈服させてやる！」

彼女らにされたことがよほど屈辱的だったのか、生気を感じさせない灰色の瞳に青い炎が灯らせ、天を仰いで一吠えする百瀬。

それに呼応するかのように、彼の両腕両足は丸太のように太くなり、デイケイドたちよりも一回りも大きい、四足歩行の化け物へと姿を変えた。

戦闘に特化したオルフェノクの強化形態・『激情態』だ。

「ああ、ああ。やつこさん本気で怒ってやがる。カルシウムが足りてないんじゃないかね。こりゃあ俺一人じゃあ骨だ。ユリ、カナデ。泣き疲れに弱り気味の所悪いが、手伝ってもらうぜ」

二人は彼の要請に応える代わりに、唇をぎゅっと結んで立ち上がり、デイケイドの両脇に並び立つ。百瀬を許せないのは二人も同じなのだ。

しかしそれだけでは物足りないと、デイケイドは一抱えもあるジュラルミンケースをユリに向かって投げて寄越した。

「何よ、これ」

「一人だけオルフェノクつてのも格好がつかねえだろ。変身ベルトだ。中のベルトを腰に巻き、携帯電話の5キーを3回プッシュしてバックルに挿し込め」

「いや、だからこれは何だっけって言うてるの」

「今のお前なら使いこなせるはずだ。自信を持って」

「だからあ、そうじゃなくて、これは……ああ、もう！」

ユリはもうこうなればヤケだとケースを開けてベルトを取り出して腰に巻き、言われた通りにコードを入力し、携帯電話を思いっきりバックルに挿し込む。

カナデはその様子を見つつ微笑み、ユリと同じタイミングである言葉を口にする。

変身ッ！

変身ッ。

ユリの体を赤く発行するエネルギーラインが包み、カナデの体が眩い光の中に吸い込まれてゆく。

二つの光が収まる頃には、ユリはギリシャ文字の” ”を模した顔に、全身に赤色のエネルギーラインが駆け巡る戦士、『ファイズ』に、カナデは白い体に金色の瞳が目を引き戦士、『アギト』へとその姿を変えていた。

「よし、三人がかりで仕留めるぞ。ついてこい」

姿を変えた二人の少女に後に続けと声をかけるディケイドだったが、当の二人は私たちに任せてと、彼の前に立って百瀬に大見得を切った。

「カナデちゃん、無理なら下がってもいいわよ？」

「何を言ってるのユリ。あんなの、私たち二人で、わけないわ」

「それもそうね。じゃあ、行きましょっ」

Hand Sonic、Ver.5

二人は自分たちに襲い来る百瀬の両腕に向かって駆け、カナデは右腕を大剣に変えて、ユリは自分の足でそれを捌いて弾き返した。

腕を弾かれて大きく体勢を崩した百瀬だったが、後ろ足で踏ん張ってその反動を逆に利用し、

二人に噛みつかんと大きく口を開けて襲いかかる。

だが、二人はそれにも臆することなく拳を握り締め、両側から体重と勢いの乗ったストレートを叩き込む。

相手の勢いを利用したカウンターは百瀬の頑強な顎を砕き、噛みつきを無力化させ、彼の顔を床に叩きつけるほどの威力を誇った。

「アギトにファイズう……、僕を、なめるなッ！」

しかし百瀬も負けてはいない。すぐさま体勢を立て直すと、爪を立てて肉を引き裂き、頭を噛み千切ろうと飛びかかる。変身しているとはいえ、力だけなら彼女たちよりも何倍も上だ。

「たかう、能がないわね。あんたも！」

「潰して、あげる」

百瀬の突撃を見越したユリは、身を屈めて彼の攻撃をかわすと同時に、カナデはユリの背中を馬跳びの要領で踏み台にして百瀬よりも高く跳び、すれ違い様に彼の背中をハンドソニックの刃で切り捨てた。

バランスを崩し、再び床に叩きつけられる百瀬。カナデは着地と共に振りむき、ユリと共に百瀬を挟み込んで見下ろす。

「一気に決めるわよ、カナデちゃん」

「もちろん、そのつもり」

Exceed Charge

ユリはベルトの右腰にはまったポインターを外して足にセットし、携帯電話のエンターキーを押しこみ、カナデは気合を込めて地を強く踏み込む。

バックルにはまる携帯電話を起点とし、赤いエネルギーラインが彼女の右足に、その先のポインターの中へと満ち満ちてゆき、強く踏み込んだカナデの足元には、金色に輝く『アギト』の紋章が現れ、右足首のリングの中へと満ちてゆく。

だああああっ！

やああああっ！

掛け声を合わせて二人の少女は同時に飛び、百瀬を目掛けて必殺の飛び蹴りを見舞う。飛び込むようにして放たれるカナデの蹴りが彼の背骨を砕き、ユリの右足のポインターから放たれる円錐上の光が百瀬の体を捉え、彼女の姿が一瞬掻き消えたと同時に、百瀬の体に” ”のマークが浮かび上がる。

百瀬の体を潜り抜けてカナデの隣に着地し、ユリは並び立って百

瀬に背を向けた。双方向からの同時攻撃だ。これで倒せないはずはないと振り向く二人だったが。

「まだまだ！ まだまだまだまだまだ！ アギトオ……アギトアギトアギトお！」

背骨を砕かれ、風穴を開けられようと、百瀬は立ち上がり、彼女たちを見据えて構える。

貪欲なまでにアギトの力を求め、何度でも立ち上がるその姿に、二人はどうやっても倒せないのかと心の底から恐怖を感じた。

この状況に、遠巻きで見つめているだけだったデイケイドが動いた。

「まあ、こうなるんじゃないかとは思っていたぜ」

「カツカレーうどん定食のひと」

「門矢君！ どうか、できるの？」

「任せておけ。ここで働いておかねえと、何のために来たのかわからないからな」

デイケイドはベルトの右腰のマゼンタを基調とし、黒縞模様が目を引く、『タッチパネル式携帯電話』を模したツールを外し、ライドブツカーから「10人のライダーの紋章」の入ったカードを取り出して装填。

K U U G A ! A G I T O ! R Y U K I !

F A I Z ! B L A D E ! H I B I K I ! K A B U T

O !

D E N - O ! K I V A !

F I N A L K A M E N R I D E 「 D E C A D E 」 ! !

九つの仮面ライダーの紋章を指でなぞり、最後にデイケイドの紋章を押し込んで、バツクルを外してそのツールを代わりにはめ込んだ。

瞬間、彼の胸部に9人の仮面ライダーのカードが並べられ、盛り上がった頭の上にデイケイドのライダーカードが填まる。

仮面ライダーディケイドの最強形態、『コンプリートフォーム』だ。

「出血大サービスだ。しつかり受け取れ」

AGITO KAMEN RIDE「SHINING」

FAIZ KAMEN RIDE「BLASTER」

ディケイドは画面を見ないままにアギトとファイズの紋章をタッチ。

瞬間、二人の前にライダーカードが出現して彼女たちの体を通り抜け、カナデを最終進化形態「シャインングフォーム」に、ユリをファイズのバージョンアップ形態「ブラスターフォーム」へと変化させた。

「な、何よこれ！ 体が、真っ赤に染まっちゃったじゃない！」

「私も……それよりもあなたのその格好がださい」

「俺の格好はどうだっていいだろ。ほら、一気に仕留めるぞ」

FINAL ATTACK RIDE「a-a-a-A

GITTO」

FINAL ATTACK RIDE「Fa-Fa-F

a-FAIZ」

FINAL ATTACK RIDE「De-De-D

e-DECADE」

突然の変化に戸惑うユリとディケイドの格好を笑うカナデをいさめ、ディケイドは黄色く縁取られた三枚のカードをドライバーに装填。

ユリの手には巨大な銃が、カナデの手には二本の剣がそれぞれ渡り、カードの影響からか、そのどちらにもエネルギーが満ち満ちてゆく。

最初に動いたのはカナデだ。先ほどまでの攻撃で動けないでいる百瀬目掛け、エネルギーで満ち満ちた刃を幾重にも振り下ろし、切り刻んでゆく。

次にユリの持つ「ファイズブラスター」から放たれた朱色の光弾が、ふらつく百瀬の腹を抉り、吹き飛ばす。

「悪いなユリにカナデ。トドメは俺がもらったぜ」

完全に無防備となったところに、上空より十枚のカードを潜り抜けての、デイケイドの「デイメンションキック」だ。

カナデの斬撃を受け、ユリの光弾を浴び、デイケイドのキックを受けた百瀬は、頭から天使の輪のような光を発して爆散し、” ”のマークをその場に残して消え去った。

E v e r y o n e o n e f o r o n e f o r e v e r y o n e . M

11/07/30 更新

「小説家になろう」規約改正のため、歌詞に当たる部分を削除しました。

その関係で一部表現が抽象的になっていることをご了承ください。

「やったの？ やったのね……」

「今度こそ消えたぜ。完全に」

「そう……よかった」

ユリはファイズブラスターにはまった携帯電話を外して変身を解除し、同じく変身を解いたカナデの手を差し出した。

「さあ、帰りましょうカナデちゃん。あなたが戻るのをみんな待ってるわ」

「みんなが、私のことを？」

「ええ。あなたを助け出すために協力してくれたの。みんながいなければ、あたしたちはここに来ることは出来なかった。早く知らせてあげたいの、カナデちゃんは無事なんだって」

「そう。じゃあ急がなくなちゃね。ユリ、肩を貸して」

「それくらい、お安い御用よ」

ユリはにこやかに微笑むとらカナデの小さな肩に、脇から自分の腕を支えに回して立ち上がる。

もうこいつらは大丈夫だろう。一人そうつぶやいたデイケイドは、バックルからカードを引き抜いて土の姿に戻った。

後は外で奮戦しているSSSの面々にそれを伝えるだけ。誰もがそう思った瞬間だった。

「ただだ、まだ……、終わっていないッ！」

「馬鹿な……ありえねえ！」

「嘘……うそでしょ!？」

「そんな……」

三人の口から驚きと恐怖の声が上がるのも無理はない。

やっとの思いで倒したはずの百瀬が灰の固まりから形を成し、しぶとく立ち上がってきたのだから。

とはいえ、その姿は人間として産まれたままの姿に、パンツを穿いただけの貧相なもので、肌の色はくすんだ灰色、右腕に至ってはもはや骨のみとなり、今にも砕けてしまいそうなほど儂げだ。

だが、それでもユリとカナデは恐怖にうち震えて後ずさる。カナデの持つアギトの力を求め、ただそのためだけに、灰となった体を再生させて立ち上がったってきた執念の男。彼女たちは彼のその執念が何よりも恐ろしかったのだ。

「くそッ、俺が、俺が甘かったか……」

この世界には 死 という概念は存在しないの。

どんな傷を受けようと、どんな激痛に苛まれようと、決して死なない。

士は舌打ちをして立ち上がらんとする百瀬を睨み付ける。

彼の脳裏に、SSSの作戦指令室でユリに襲われた時のことがよぎり、同時に士は自分が大きな誤算を冒していたことに気付く。

今までアンノウント、百瀬によってオルフェノクに変えられた、いつでも代えの利くNPCを相手に戦っていた彼は当然、百瀬も同じように倒されて消えるものだと思い込んでいた。

だが、それは大きな間違이었다のだ。住む世界は違えども、彼もまた、『死んでこの世界にやってきた』ユリたちと同じ迷える魂だったのだから。

音無ユリはこう言った。『現世で辛い思いをした魂はここで幸せな暮らしを送り、充足感を持つことで消える』のだと。

今の百瀬はアギトの力を欲するがあまり、無理矢理体を再生させるほど飢えに飢えた魂だ。消えてなくなるはずがない。このまま再び倒したとしても結果は目に見えている。

打つ手はもう何もないのか。ユリと士は足を引きずり、まるでゾンビのように向かい来る百瀬を睨み付けて舌打ちをする二人だが、カナデは何を思ったか、ユリの腕を振り払って彼の元へと歩を進める。

「カナデちゃん!?」

「お、おい、カナデ！ 一体どうするつもりだ！」

カナデは二人の制止に耳を貸さず、百瀬の眼前に立って目を閉じる。無防備となった彼女を百瀬が放っておくわけがない。

百瀬はカナデのか細い首の根を掴み、うつろな目のまま口角を釣り上げてにたと笑い、カナデの腹部に自分の左腕を突き刺した。風穴の周りからポンプ運動のように赤味の薄い血が流れ出し、彼女の首の根を掴む百瀬の右腕が金色に輝き始めた。

信じられない話だが、機械を用いずにカナデの体から、直接アギトの力を吸収しているらしい。

なんとしてもアギトの力を得たいと願うその欲望が、百瀬の体に新たな変化を及ぼしたというのか。

だがカナデはそのことに怯えることもためらいも見せず、振り向いて背後で驚き戸惑うユリと土に声をかけた。

「ごめんなさい、ユリにカツカレーうどん定食のひとつ。彼を止めるにはもうこの方法しかないの。 もう、終わりにしましょう。」

こんな馬鹿げた真似」

カナデは自分の腹部を刺し貫く百瀬の右腕にそつと手を重ね、目を閉じる。

金色の眩い光と共に、カナデの体は光の粒子になり百瀬に吸い込まれてゆく。二人はそれを、ただ黙って見ていることしかできなかつた。

「やった、とうとうやったぞ！ これで、これで！ アギトの力は僕のものだ！」

カナデを吸収しアギトの力を得たからか、百瀬が手を天に掲げると同時に、腰にアギトと同じベルトが現れる。万感の思いを胸に秘め、もはや噛み合わなくなった顎を無理矢理噛み締め、彼はベルト両側部のスイッチを押した。

「来た……きたきたきたきたきたーッ！」

バックルから発せられる金色の光に包まれた百瀬は、カナデ同様、

いや上半身の筋肉が異様に盛り上がった『アギト』へと姿を変えた。彼の欲望を満たすだけのものが、とうとう彼の手に入ったのである。しかし同時に、土とユリは唐突に理解する。何故二人の制止を振り切つてまで、カナデがこんなことをしたのかを。

百瀬がアギトの力を得て高笑いをした瞬間、彼はまるで煙のようにこの場所から忽然と消え失せたのだ。

「これ、つて……」

「ああ、お前が以前言った通りだ。百瀬はアギトの力を得たことで満足したんだよ。だから、この世界から消えた」

「でもあいつ、アギトの力を手に入れて神になるとかって」

「俺たちの攻撃であいつは一回死んでいる。それでもなおアギトの力を求めて、体を作つてまで立ち上がってきたんだ。力を得て何かをしようなんて考えるほどの余裕なんてもう、あいつにはなかったのさ」

「なんて……なんて執念なの……」

一度死んでいるというのに、この執念。もうこの世界から消え去つたというのに、二人は彼の、百瀬という存在に改めて恐怖し身震いをした。

だが、それもほんの一瞬の出来事だ。彼らはそのために神代カナデという大きすぎる代償を支払ってしまったのだから。

ユリは糸の切れた人形のように、手をつき膝をつき大粒の涙を流して頂垂つなだれた。

「聞いた？ 百瀬に取り込まれる瞬間にあの子、あたしに ごめんね っつて言ったのよ。そう言いたかったのはあたしの方なのに！ ずっと辛い思いさせてごめんって！ 痛い思いをさせてごめんねって！ カナデちゃんは何も悪くないのに……、なんでこんなことにならなきゃいけないの？ 返してよ……カナデちゃんを返してよ！ 返してッ」

感極まったユリはカナデを返せと土に掴みかかって泣き喚く。検

討違いであることは分かっている。分かっていたが、気持ちを抑えつけられないのだ。

どうにかしてやりたいと思うのは土も同じだ。二人を再び引き合わせるために尽力してきたのにこの仕打ち。黙っていられるものか。土は破壊者であって神ではない。一度死んだどころか、天に召された人間を蘇らせることなど、それこそ奇跡でも起こらない限り不可能だ。

俺にはもう、何もできないのか。土は唇を噛みしめ、自身の非力を呪った。

「なんだ？ これは」

腰に巻かれたディケイドライバーが、いや左腰に差したライドブツカーが熱い。土は何事かと開いて確認しようとするが、それと同時にひとりで一枚のカードが飛び出し、彼の手のひらに収まった。このカードが一体どのような効果を及ぼすかは分からない。だが、一つだけはっきりしていることがある。こうして現れたカードは、幾度となく彼の窮地を救ってきたということだ。

土はカードを握りしめたまま、ユリの右肩に優しく手を置いて口を開く。

「知っているか？ ユリ。奇跡つてのはな、『起こらないから奇跡』なんじゃねえ、『起こすからこそ』奇跡」なんだ。お前はカナデを救うという目的のために精一杯戦った。もう十分だ」

「門矢君……何を、言ってるの？」

「その努力が、こんな馬鹿みたいな結果に終わっていいはずがねえ。お前の頑張りを無駄にはさせない。起こしてやるよ、奇跡つてやつをな」

ATTACK RIDE 『アブソorb』

土はベルトのバックルを開き、現れたカードを装填するが、何も

起こらない。起きないからこそ奇跡という言葉が、ユリの心に深く重く突き刺さる。

「門矢君……やっぱり、無理よ……カナデちゃんは」

「あきらめるな。今のお前、いや俺にだって出来ることはない。何にだっていい。なんだっていい。祈れ、祈るんだユリ。お前が今までしてきたことを無駄にしたくないだろう、大切な友達を助けたいんだろう、謝りたいんだろう！」

あきらめかけ、沈み込んでいたユリの心に響いた土の言葉。そうだ。自分は今までカナデを救うために戦ってきたではないか。一人では決して手の届かない場所にいた彼女が、SSSの仲間たちや門矢土のおかげで、今は手の届く距離にまで近づけている。

ここであきらめたら自分どころか、彼らの頑張りまで無駄になる。今の自分にできることが祈るだけだというのなら、それを全力でやるだけだ。ユリは顔の前で手を組んで静かに目を閉じた。

神様、どうかあたしの願いを聞いてください。

あの子は、カナデちゃんはあたしなんかをかばってこの世界から消えました。

あたしよりもずっと辛かったのに、ずっとここにいたかったはずなのに。

お願い……、おねがいします、神様。カナデちゃんを返してください。

あたしに、あの子にもう一度謝るチャンスを、罪を償うチャンスを下さい。

おねがい……です……

両の手のひらから血が滴り落ちるほど強く握りしめて祈り続けるユリ。

彼女の祈りが通じたのか、土のカードの効果が表れたのか、外の光が一切届かない地下でありながら、淡い金色の光の玉がまるで初

雪のように彼女たちの元に降り注いでゆく。

その光景は、さながら北極の夜空を染める光のオーロラのようなようだった。

「これは……なんだ？」

「分からない……けど、とても、あたたかい……」

降り注ぐ光は二人の傷を癒し、彼女たちの周りに積もってゆく。

ユリの膝の上に暖かな感触が伝わる。何かと思いい目を開けると、今にも消えてしまいそうなほど儂げな”何か”が、自分の膝を占拠しているのが目に見えた。

”何か”は降り積もる度に徐々に輪郭を持ち、形を持ち、人の姿を成し、最後には神代カナデへとその姿を変え、彼女の膝の上に横たわった。

「カナデ……ちゃん？」

「なあに？」

「あなた、本当にカナデちゃん？」

「ユリがそう思うのなら私はカナデなのでしょうね。あなたの中では」

「その皮肉めいた台詞。やっぱりカナデちゃんだ」

ユリは自分の膝の上のカナデを抱き寄せ、頬と頬を擦り合わせた。

「ちよつ、ちよつと。痛い、痛いわよユリ」

「ごめん……なさい。今までごめんなさい、カナデちゃん」

「いや、だから、謝らないでって」

「お願い、今だけは……せめて今だけは、ね」

「そう」

唐突なその行為に戸惑うカナデだったが、耳元から漏れ出るすすり泣く声を、そんな声で必死に謝るユリを感じ、

彼女を強く抱き返す。言葉はもう必要なかったのだ。抱き合う二人の顔に、穏やかな笑みが浮かぶ。

今度こそ全てが終わった。少なくとも二人はそう思ったのだが。

「おおい、お取り込み中のところ悪いがね、とっど行くぞ」

士は一人、周りの機材からバイク「マシنديケイダー」を作り出し、二人分のヘルメットを放ってユリとカナデにここを出るぞと促した。

「行く？ どこによ」

「お前なあ。自分で自分の言ったことを忘れたのか？この作戦の目的は”神代カナデの奪還”。カナデはここに戻ったが、今はまだそれだけだ。お前には、お前たちには、帰るのを待っている奴らがいるだろうが」

その言葉を聞き、はっとなって顔を見合わせる二人。

カナデを取り戻すことが出来、和解し合えたことで、大切なことを忘れていたようだ。

「そ、そうだった！ 急がなきゃ……急がなきゃ！」

「今の今まで忘れてたのかよ。外でキバってる奴らが聞いたら大泣きするぜ。とっどとそのヘルメット被って乗りな。外まで連れてってやるからよ」

ユリとカナデは互いに頷き、ヘルメットを被ってディケイダーの助手席に乗り込んだ。

腕が上がらない。心の臓が張り裂けそうだ。

こんな人形相手に遅れを取るとは、笑い話にもなりはしない。

体育館前のグラウンドで大多数のオルフェノクと戦い続けている直井と椎名は、

蓄積した疲労に加えて、体力の限界が上乘せされ、立っているのがやっとの状態になっていた。

彼らの持つ武器の刃には凝り固まった灰がまるで血のりのように

こびりつき、岩を豆腐のように切り裂けたその切れ味はもはや見る影もなく、一撃二撃でオルフェノクを斬り伏せることはもはやできなくなっていた。

「音無さんは危なくなったら逃げるとおっしゃっていたが……、この状況では逃げる方が危険、だな」

「お前と初めて意見が合ったな。私もそう思う」

「なら、お前はとうするんだ、椎名」

「決まっているだろう。逃げられないと言っなら」

戦って戦って戦い尽くすまで！

二人はそれでもなお、剣を松葉杖にし、気合と根性で踏ん張って、死に物狂いでオルフェノクと戦い続ける。作戦終了の号令が出ていない以上、隊員である自分たちが勝手に休むわけにはいかないのだ。

しかし、死後の世界でさえも現実と言うものは非情なものだ。立ち上がるための支えをなくした二人の体は、糸の切れた操り人形のように地に伏して動けなくなってしまふ。

何とかして立ち上がるうともがく二人だが、その周囲には群れたオルフェノクが迫る。直井と椎名はユリとカナデの無事を祈り、あつけなさすぎる自分たちの末路を呪った。

だが、どうしたというのだろう。うつ伏せになって立ち上がれない人間が二人もいるというのに、オルフェノクたちの注意は彼らにではなく、空を覆う黒い影に向けられた。

奴らが自分たちを襲わないことに疑問を持った二人は、体を起こすのをやめて顔を上げて空を見据える。

エノクの子ニヨツテ生マレシ哀レナ魂ヨ。コレ以上ウツシ世ヲ彷徨ウナ。

オ前タチヲ戻スコトハデキナイガ、セメテソノ穢レノナイ魂ダケハ……。

行キナサイ、才前夕チ。彼ラノ哀シキ魂を救ウノデス

突如として空を覆った黒い影の主は、純白の翼を背に生やし、ある者は槍をある者は剣を手にしたアンノウンの大群であった。

一目見たただけだが、その数はオルフェノクたちに勝るとも劣らない。

彼らは男とも女ともとれない不可思議な声に導かれるかのように四方に散り、無秩序に暴れまわるオルフェノクたちを圧倒的な力で次々と斬り伏せていく。

椎名は口をぽかんと開け、何がなんだか分からないという顔をするが、直井は逆に　そういうことか　と頷いた。

「これは、一体どういうことだ、それにお前はっ！　何を一人で頷いている」

「門矢のやつが言ったこと、まさか忘れたわけじゃないだろう？　徒……アンノウンはこの世界において　異なる者　を消している、と。死んだ人間から生まれるというオルフェノクもそれに当てはまる、というだけのことだ」

「そう、なのか？　いや、この際そんなことはどうでもいい。私たちの身が危ないことには変わりがないじゃないか」

何故アンノウンがオルフェノクを襲うのかは分かっていたが、それで事態が好転するわけではない。二人も彼らの抹殺対象であり、その上満足に動けないときている。敵が増えた分状況はなお悪くなったと言える。

だが彼らを襲うオルフェノクは、マシンディケイダーを駆って地下より舞い戻ってきた士たちによって蹴散らされ、直井と椎名は無事に救出された。

士は自動操縦でついてきた『サイドバツシャー』を直井と椎名の前に停め、彼らに肩を貸して起き上がらせる。

「無事かどうかは……聞く間でもないな。免許はあるか？ いや、これもこの際どうでもいいか。乗れ。とつとつここを脱出するぞ。あぁとそうだ。屋上の日向に校舎内の野田と松下。指令室の遊佐も拾って行かないとな」

土は直井を強引にサイドバスシヤアの運転席に、椎名を助手席に座らせ、一方的に話を進める。

直井はこれは一体どういうことかとユリに答えを求めるが、彼女も深くは知らないと言を横に振った。

「ほらほら、何を渋い顔してるんだ。しっかりとハンドルを握れ。さあ、てと。かつとばしていくから振り落とされんなよ」

「いや、だから。あたしたちはどこに行くのよどこに」

ユリの問いに、土は子供のような楽しげな笑みを浮かべてこう答えた。

決まってるんだろ、ピリオドの向こうへだ！

「はあい、みんなあ、どーもお、ありがとお」

一方、食堂を改装した大型ライブ会場では、岩沢ユイが丁度十二曲目を歌い終え、ファンの声援に応えるべく、疲労困憊を押しして手を振ったところだった。

高校生どころか小学生にも見間違えられるほどの小さな体で、戦線メンバーの無事を祈りながら、自分にできることを精一杯やろうとしたのだ。体力と精神力の限界が来ても何の不思議もない。

「ユイちゃん……、ここで一旦インターバル入れようよ」

「このまま歌ってたら、ユイちゃん倒れちゃうよ……？」

彼女の体調を見て心配そうに声をかけるガルデモのメンバーだったが、ユイはそんな声と差し延べられた手を振り払って言った。

「ダメ、ダメだよ……門矢君も、ユリっぺ隊長も、SSSのみんな

が、カナデちゃんを救いだすために命懸けで戦ってるんだよ？ ユイだけ寝てちゃみんなに悪いもん。ユイはユイで、出来ることをしなくちゃ」

ユイは両手で頬をぴしゃりと叩いて気合を入れ直すと、唇を固く結び、凜とした表情で再びギターを構える。

十三曲目が始まる。まさにその瞬間だった。

どおけえ、どけどけどけーッ！！

堅く閉ざされた食堂の出入り口の扉の奥から、けたたましバイクの排気音が鳴り響き、それに一步遅れて、どけどけどけと叫ぶ土の声がユイの耳へと届く。

一体何が起こるのか、その全てを知ったわけではないが、少なくとも何か大変なことになると悟ったユイは、会場のNPCに対し大声で伏せてと叫ぶ。

ユイの直感を信じた行動は大当たり。彼女が会場中に伏せてと言った瞬間、土たちの乗るマシンデイクイダーがドアを轢き飛ばしてステージの上に突っ込み、直井、椎名、野田、松下、遊佐の乗るサイドバツシャーがそれに続いたのだから。

彼女の呼びかけと土たちのコントロールのおかげで、怪我人は一人も出なかったものの、ユイは心臓の動悸を無理矢理抑えつつ土に食ってかかった。

「何よ何よなんなのよこれー！？ 死ぬとこだったよ？ ユイ死ぬところだったんだよ！？」

「この世界じゃあたとえ死んだってすぐに生き返るんだろ？ 文句言うなよ」

「そういうことじゃないでしょー！？ 何するのよ何しようってのよー！」

土は悪魔の尻尾を跳ねさせ怒りをあらわにするユイを無視して、デイクイードライバーをベースギターとマイクに変えると、彼女ではなく、戦線メンバーに、観客全員に向かってこう言った。

「てめえら、待たせたな！　ここから先はオールナイトの第二部、死んだ世界戦線メンバーによる今夜限りの特別ライブだ！　耳の穴かっぱじって、しっかりと聞いて盛り上がれよッ！」

「ええ、ええええええええっ！？あ、あた、あたしたちのオ！？」

「貴様アふざけるな！僕たちに歌えと、そう言うつもりなのか！？」

「俺、カラオケじゃ五十点以上取ったことねえよお」

「誰がやるかッ！そんなバカみたいな真似を！」

「私もですか？門矢さん」

「あさかは、なり……」

観客やガルデモはおろか、それを行う当人たちですら想定範囲外の事態に、皆口々に土への不満を口にする。

が、当の本人は罵詈雑言などど吹く風とだと言いたげな顔で、彼らが持っていた武器を次々に楽器やマイクに変えてゆく。

「ここまで来ておいてケツの穴の小せえやつらだな。覚悟を決める覚悟を。それに見るよあいつらを」

土はそう言つて、ステージ隅の方を指差す。

彼が指を差した先では、カナデがベースギターのストラップを首に回し、いつでも弾けるようにとピックを構え、その近くでは、響鬼に変身したままの松下が、音撃棒を構えてドラムセットの前に軽く座つて、叩き心地を確かめていた。

「ちよ、ちよつと……なにやってるのよカナデちゃん」

「松下五段も……まさか、やるつてののか！？」

「っていうかこいつ、松下五段なのか？どう見ても鬼だる鬼」

SSSのメンバーたちの声に、カナデは楽しげに微笑んだ。

「一度やってみたかったの、こういうの」

「それにこの歓声だ。ガルデモのおかげでせっかくこれだけ温まっているのに、ぽつと出の俺たちが冷まさせちゃあ彼女たちに申し訳

が立たないだろうよ」

ユリや日向の問いに、カナデはにこやかな笑顔で、松下は楽しげな声で答えた。

確かにそうだと気付いたユリは林檎のように顔を真っ赤に染めながらも、迷いを振り切るように首を振って、土の手からマイクをひたたくって叫ぶ。

「ああもう！ やるわよ！ やってやるわよ！ 覚悟……覚悟しなさいーい！」

緊張のしすぎで裏返った声で精一杯叫ぶユリを見て、参加を渋っていた他のメンバーもとうとう重い腰を上げ、土の用意した楽器やマイクを手にとってゆき、ガルデモの面々は土の目を見て軽く頷き、ステージの脇へと下がって行った。

「門矢君！ それで、何を歌うつてのよ!？」

「俺に任せるのか？ いいぜ。だつたらな……」

土がマイクを構え息を大きく吸い込んだのと同時に、ラテン系の高揚感を煽るバックミュージックが流される。

枯れかけていた会場に新たな熱気が生じたのを見た土は、メインボーカルのユリと共に、自身の持ち歌の第一節を口にした。

「オペレーション成功とオールナイトライブの無事終了を祝してー！ それじゃあみんなー！ かーんぱあーい！」

夜も更けて、お日様が顔を出しかけた早朝。

オールナイトライブを終えたSSSの面々は、会場となっていた食堂を占拠し、食料貯蔵庫から果物や揚げ物など、料理せずに食べられる食材をかつぱらってテーブルに並べ、ライブと作戦の成功を祝しての打ち上げパーティーを行っていた。

土はコーラの瓶の栓を開けてらっぱ飲みをしつつ、食堂の中を見て回る。

「椎名つちのギター、とおーってもかつこよかったよー」

「ひさ子さんも抜けて勢いが落ちてきてたし、せつかくだから入ってみない？ ガルデモのベース担当で」

「ええっ、あ……、あしやはか……なり……」

「あしやはかなり、だつてー！ かわいいー」

左脇のテーブルでは、椎名がガルデモのメンバーに持て囃されていた。

口々にかっこいい、可愛いと言われ頬を赤らめ、どうにもできずに縮こまっている。

士はそんな顔もできるんだな、と軽く冷やかして笑った。

「なあ、門矢。これを見てくれないか」

「どうした松下。何か問題でも？」

「いやな、野田の奴がさ、ライブが終わってからおかしいんだよ。なんとというか、毒気というか覇気というか……。そういったものが抜け落ちたみたいで、何を聞いても話しても上の空なんだ」

右脇のテーブルでは人間の姿に戻った松下と、にこやかな微笑みを浮かべた野田が、鳥の唐揚げやピザの切れ端を口に運んでいる。

響鬼に変身した松下のドラムを直に受けていたからか、”音撃”によって悪しき心を浄化されてしまったのだらう。士はそれを承知の上で、

「よかつたじゃねえか。その方が静かだろ」

「それはまあ、そうなんだが……静かすぎるのは逆に怖いぞ」

「安心しろ、二三日放っておけば治る。人の欲望はすぐに増長するからな」

松下は意味が分からないと首を傾げるが、士は笑って手を振り、彼らのテーブルの前を後にした。

「無事に終わったから良かったものの……貴様の演奏は聞くに堪え

んな」

「初めてだからしょうがねえし、って言うかお前だって同じようなもんだろ！」

「貴様の素人丸出しのお遊戯と一緒にするな！ 少なくとも貴様には勝っている！」

「何がお遊戯だ馬ア鹿！お前の方がお遊戯臭かっただろうがよ！」
「言わせておけば調子に乗りやがって……表に出るッ！」

士の背後に位置する入口手前のテーブルの前では、直井と日向が各々の演奏の出来を巡って口論を繰り返していた。しょうがないかのため息をつき、仲裁に入ろうとする士だったが、

「落ちついてください直井さん、日向さん。ド下手同士が言い争っても無意味です。”ドングリの背比べ”ということわざをご存じですか？あれは……」

「なんだとッ！横からいきなり何を言うか遊佐！」

「事実を言ったまでです。私よりも素敵な演奏が出来るのであれば別ですが」

士の代わりに二人の間に割って入った遊佐の毒舌に、二の句を告げず押し黙る直井と日向。

未経験者の中で一番演奏が上手かった彼女に言われてしまった以上、彼らにはもう何も言う資格はないのだ。

落胆する男二人と、それに構わずテーブル上のモンブランに手を伸ばし、美味しそうに頬張る遊佐をけらけらと笑って眺めつつ、士は食堂中央、ユリとカナデが寄り添って食事をするテーブルへと足を運んだ。

「打ち上げパーティは楽しめてるかいいお二人さん。おっと、お邪魔だったか」

「門矢君。ううん、全然平気よ」

声をかけられたユリは、手元のサンドイッチを皿に盛って彼に手渡すが、士はいらないと手を振り、皿をテーブルの上に戻した。

隣でサンドイッチを頬張っていたカナデは、それならばと厨房の中に消え、レトルトの”麻婆豆腐”を温め、インスタントのご飯を温めて茶碗に盛りつけ、トレイの上にそれらを載せて土の前に差し出した。

「なんだこれは」

「激辛麻婆豆腐定食。好みのおツピングにしてあるわ」

土は改めて彼女の差し出した麻婆豆腐をまじまじと見つめる。

これはレトルト食品のはずだ。じゃあこのマグマのような色合いは何だ。見ただけで口の中の唾液が渴くのはどうということだ。

彼女が日常的に食すというこの定食に恐怖を覚えた土は、青ざめた顔をしてトレイをカナデの元に突き返すが、これは彼女なりの善意から来たものらしく、カナデも決して譲らない。

ユリはその様子を見て屈託のない笑顔を見せた。

「もらっておきなさいよ門矢君。カナデちゃんが大好物の麻婆豆腐定食を誰かに譲る、すごく珍しいことだし、あなたを戦線のメンバーとして認めた証でもあるのよ」

「俺を……戦線のメンバーに認めた、なあ？」

彼女の言葉に対応し、こくこくと小さく頷くカナデ。ユリは彼の前に右手を差し伸べて言葉を述べる。

「あの時は通過儀礼的に済ませてしまったからもう一度。死後の世界によろこそ、門矢土君。あたしたち”死んだ世界戦線”は、あなたの入隊を歓迎します。一緒に戦いましょう、土君」

仲間になつてほしいと右手を差し出すユリ。土はその気持ちをその行動を嬉しく思いながらも、心底残念そうな表情を浮かべ、ユリの手を彼女の胸元へと軽く押し返した。

「悪いな、ユリ。俺は死人でも、ましてやこの世界の人間ですらない。俺の使命は数々の世界を巡り、滅びてしまっような世界を救うことだ。お前らの気持ちに伝えてやりたいのは山々だが、俺一人がここに留まるわけにはいかないんだよ。仲間が俺の帰りを待っていてい

る。この世界にいた二日間、短かったが、それなりに楽しかったぜ。ありがとよ」

ユリは驚きに顔を引きつらせ、突き返された右手を固く握りしめる。戦線加入を断られたことにはない。彼のなんともし難い言葉にだ。

「待つてよ門矢君。それって一体、どういうことなの」

やめてよ門矢君。それって、別れの言葉みたいじゃない。ユリはそう言葉を続けようとするが、彼女の言いたいことを理解しているのか、土はユリに背を向けてぱんぱんと手を叩き、食堂全体に聞こえるほどの声で言った。

「おおいお前ら、作戦とライブ成功の集合写真を撮ってやるから、ステージの方に集まれ、集まれ。きびきび動かねえと入れてやらねえぞ」

いきなりなんだとざわつくが、土に急げ急げと促され、戦線のメンバーはまだ片付け終わっていないステージの壇上へと上がる。

中央にユリとカナデ、左側にガルデモのメンバーと椎名。右側に日向、直井、松下、野田と続く。

「おいおい、こっちはレンズの小さいトイカメラなんだぞ。もっと詰める詰める。あぶれても知らねえぞ俺は」

土はトイカメラを覗き込みつつ、横並びの戦線メンバーに詰めると指示を飛ばす。

皆が詰めたことで、必然的に男性陣で一番左側に立つ日向と、女性陣で一番右側に立つユイの体が密着することとなった。

「あ、あつ……悪りいなユイ」

「いいっていいって。むしろもっと密着した方がいいかなーって」

「馬ア鹿。こんな時に何を言ってるんだお前は」

「えへへっ」

二人して頬を赤らめるユイと日向に、それをやし立てる戦線の面々。

実はそうしなくても誰もが十分にフレーム内に入りきったのだが、

士はこうなることを見越して、あえて詰めると言ったのである。

彼らがそれに気付いたのは、それから少し後のこと、だったのだが。

「ちよつと待ってよ門矢君。そのカメラで撮影するの？ あなたはどうするのよ」

皆の距離と約二名の距離が詰まり、ようやく撮影かと思つたその時、中央でカナデと寄り添って立つユリが異議を申し立てた。

「カメラならその辺のテーブルやいすを使ってパパツと作れるんじゃないの？」

「そりゃそつだ。何にせよ一番手に馴染んでいるものを使うのがいいだろう」

「そついうことを言ってるんじゃないわよ。そのカメラで撮るってことは、あなたがこの写真の中に入れない、ってことじゃない」

士の所持する二眼レンズのトイカメラにはタイマー機能がない。

そうなれば撮影者はこの写真の中に入れない。当然の帰結だ。

だが当の本人はそうなることを理解しているのか、なんだそんなことかと鼻をふんと鳴らして言葉を返した。

「さつきも言つたる。俺はこの世界の人間じゃない。こいつらはお前たちの記念、門出の写真だ。部外者のことは気にすんなつての」

「でも、あなたがいなければ何も」

「ほらほら。そんなしょぼくれた顔を記念の写真に残すつもりか？ 胸を張れ笑顔を作れ凜としろ。お前はこの荒くれ者たちの総元締めだろうが」

彼の言葉と表情に気圧されたユリは、納得できないものの、カナデの手を握り、それなりの笑顔を作つて胸を張つた。恩人の頼みを無碍にはできなかったのだろう。

士はしょうがないかと軽く息を吐くと、再びトイカメラを上から覗き、ピントを合わせてシャッターに手をかけた。

「よおーし、それじゃあ撮るぞー。いい顔しろよー。せえのっ、は

い、ちいー……ずっ！」

士の掛け声に合わせて、皆一様に笑顔やきめ顔を作ってレンズを見据える。

誰もがレンズの先を見つめていたからなのだろうか、門矢士がトイカメラを残してこの世界から消えたことに、しばらくの間、彼らは気付くことが出来なかった。

「あれ？ 門矢は？ 門矢はどこに行ったんだ！？」

「あいつめ！ 僕たちの写真を撮ると言いながら、どこに消えた！」「トイレじゃねえの？ トイレ」

「いや、門矢君が首に提げてたカメラはここに落ちてるし……おかしいよ」

「学校全体を検索。門矢さんの制服につけた発信機、反応がありません」

門矢士は煙のように食堂から、いやこの世界から忽然と消え失せた。皆が皆、士を探して辺りを見回すが、彼の姿はどこにも見受けられない。

だが士の言葉を聞いたユリだけは、先ほどの彼の言葉と行動を照らし合わせ、一人目を閉じて納得していた。

やっと分かったわ。死んでいないあなたがこの世界に来た理由。

あたしを、壊れかけていたSSSを救おうとしてくれたのね。

あたしたちは救われた。あなたはそれを見届けた。だから……。

理不尽で自分勝手な人。お礼くらい、言わせてくれたっていいじゃない。

ユリは晴れやかな表情を浮かべたまま、隣に立つカナデの手を握る。

これは何だと問うカナデに対し、彼女と顔を見合わせ瞳に決意を宿して答えた。

「徒、ともからいやアンノウンの脅威はまだ去っていない。土君はもういない。だから、今度はあたしたちが守らなくちゃね。彼の分まで、ずっと、ずっと」

「そうね」

カナデは言葉を返す代わりにユリの手を握り返し、天井を見上げて微笑んだ。

土君！ 土君！ 起きてください！もうすぐ夕御飯ですよ！土君つてば！

「んん？ ああ……、ああっ」

食堂で写真を撮っていた門矢士が再び目を覚ました場所は、ぼつと淡い赤い光のみが周囲を照らす暗室の中だった。

誰かが自分の肩を揺すり、目を覚まさせようとしている。気だるさと眠気が覚醒を阻害するが、士はそれらを振り切るように、軽く首を回して声を漏らした。

「ああ、やっと起きた。もう夕ご飯出来てますよ。キバーラもユウスケもお腹を空かせてテーブルの前で待ってるんですから」

「ユウスケ？ キバーラ？ 何を言っているんだ？ いや、ちよつと待て。お前、夏みかんか？」

「そうです夏みかん……ああ、いや夏海です！ ここは私の家ですよ。他に誰がいるんですか」

「お前の家？ ここが、か？」

「じゃあ、どこだつていうんですか。写真真館の暗室ですよ、暗室」夏海は一体何を寝ぼけているんだと、わざと棘のある口調で答える。しかし士からすれば、いきなり場所も人物も転換されてしまっ

ただ。戸惑わない方がおかしい。

土は霞のかかった頭を精一杯回転させ、この不可思議な現象を整理する。

俺は今まで、学校の食堂で写真を撮っていたはずだ。

それが今は写真館の暗室でうたた寝をしているだと？

ってことはなんだ。今までの夢だったということか？

夢にしちゃあ迫真すぎるし、内容もはっきり覚えているぞ。

俺は夢を見ていたのか？それとも今夢を見ているのか？

さっぱりわからん。わからんぞ。

考えども考えども答えは出ず、彼の疑問は自分の頭の中を堂々巡り。

うたた寝から起きたかと思ったら、今度はひとりでうんうんと唸り始めた土を疑問に思った夏海は、彼の座っている場所と所持しているものを指して話を振った。

「そういえば、”あのフィルム”の件はもう解決したんですか？」

「あのフィルム”？ なんだそいつは」

「それも忘れちゃったんですか？ さつき大騒ぎしてたじゃないですか。買ったばかりのフィルムに、”一枚だけ”撮影済みの写真が残ってるって。封を切ったばかりのものになんで撮影済みのものがあるんだって当たり散らして、だったら俺が謎を解いてやるって、暗室にこもって現像して……。で、日が落ちても戻って来ないし、夕御飯も出来たから土君を呼びに来たんですよ」

土は悪いがそんなものは知らんときっぱり言い張るが、右手には写真を掴むためのピンセット、座っている椅子の前には薄まった硫黄のような臭いのする、現像用の定着液の注がれたトレイが置かれている。

写真の現像をしていたことは間違いなさそうだ。

「それ……定着液に入れてあるってことはもう現像し終わってるんですよね？　せつかくですし、見てみたらどうですか？」

「そうだな。ちよっくら覗いてみるか」

定着液に浸されている一枚の写真をピンセットでつまんで水で洗い、土は上がってきた写真をまじまじと見つめる。

「なんですか、これ？　何かの『集合写真』に見えますけど」

それが何の写真であるか理解できず、首を傾げる夏海。逆に土はその写真を見て笑みをこぼし、水切り用の落下傘の洗濯バサミに写真を挟むと、立ち上がって暗室の出入り口のドアに手をかけた。

「ちよ、ちよっと！　どうしたんですかいきなり！」

「もう夕飯だって言ったな。腹が減ったから飯を食う。俺たちの旅はまだまだ続くんだ。しっかり食って体力をつけないな」

「いや、だから。何があつたんですか土君」

「そんなことはどうでもいい。それより夏みかん、今日の夕飯のメニューは何だ」

「何って……”麻婆豆腐”ですけど。激辛の」

「……げきからの？」

「はい。激辛です」

夕御飯のメニューに落胆しつつも、夏海と土は暗室を出てユウスケたちの待つリビングへと向かう。

『並び立つSSSの面々』の中に背を向けた土が映り込んだその写真は、そんな彼自身を慰めるように風に乘ってゆらゆらと揺れていた。

これにて、このお話は終了となります。

三部構成の予定が全五部になってしまいもうしわけありませんでした。

三章〜五章において語るべきことが多くなりすぎてしまったため、細かい話はこちら)<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/70986/blogkey/110941/>に記しておきましたので、どうぞご覧ください。

中途半端な時期に幕間を思い付いたせいで変なところに挟まってしまっ
て申し訳ありません。

それでは、また。

それでもわたしは、魔法少女だから・そのいち【原作：魔法少女まどか マギカ

ここだけをご覧になられている方にはあけましておめでとうございます。

『相棒』とか「ゴセイジャー」とかのコラボをリクエストでもらっているんですが、書くのはあえてタイムリーなアニメ作品。募った以上リクに答えたいとは思うのですがうむ、うむ。

夢と希望の魔法少女物語になるよう、精一杯頑張らせていただきます。

それでもわたしは、魔法少女だから：そのいち【原作：魔法少女まどか マギカ

もう、何と形容してよいのか分からない。そこはただ異様としか言い表せない空間であった。

巨大な何かが空を黒く覆い尽くし、精根尽き果てたマゼンタの色の戦士と赤き体に赤き目の戦士が地に伏し、黒い衣装を身に纏った少女がただ一人、傷付いた体を圧して黒い影の前に立ちはだかつている。

しかしそれもまた風前の灯。いつ倒れてしまってもおかしくないほどに疲弊している。

彼女一人が頑張ったところで、結果は同じ。みんなあの魔法の餌になる。全滅は避けられそうにないね。悲しいことだけだ。

「そんな……！　どうにか、ならないの!？」

顔にまだあどけなさを残した桃色の髪の少女は、耳の穴からさらに長い耳を生やした、白い猫のような生き物に問う。

その生き物は口を動かすことなく、テレパシーを用いて少女の心に直接呼び掛けた。

その答えは、既に君自身が分かっているんじゃないのかい？　君が内包する力は僕にも計り知れない。その力を解放すれば、この状況を打開できるかもしれないよ。

「わたしが……わたしなら……」

思い詰めた表情で悩んだ後、少女は意を決して白い猫のような生き物の目を見据えた。

「決めたよ キュウベえ。お願い、わたしを……わたしを『魔法少女』にして」

とうとうその気になったんだね カナメ。ならば聞こう。魔法少女になるために、君が望む『願い』を。

「いいじゃないですかそれぐらい！ 否定する意味が分かりません」
「問答無用で笑いのツボをかますお前の方が意味が分からねえぞ！
なんてことしゃがるッ」

二人の言い分は全く噛み合わず、店の前で言い争う土と夏海。
残されたユウスケは「営業妨害になるから」と二人をなだめようと
するが、彼らは一切聞く耳を持たない。

だからこそ、彼らは気付くことが出来なかった。

「あ、あれ？ ここ、どこですか……」

「これは、一体何だ？」

「動く…… 壁画 ！？」

今まで 街 だと思っていた場所が、知らぬ間に奇妙キテレツな
空間へと変貌していたことに。

迷路のように複雑に入り組み、飛び越えられそうにないほど高く
硬く白い壁に、その壁の中で楽しそうにはしゃぎ回る真っ黒な少女
たちの姿。

何かがおかしい。間違いなく普通じゃない。土とユウスケは夏海
を囲むようにし、背中合わせに立った。

そんな彼らの耳に轟々とした足音が届く。何かの大きなもの群れ
を成して向かってくる音だ。

響く足音は徐々に大きくなって行く。何か は明らかにこちら
を指して向かって来ている。

「来たぞ！ 油断するなユウスケ」

「分かってるッ」

土はデイケイドライバーを腰に巻き、ユウスケは腹部からベルト
の アークル を呼び出して構える。彼らの気迫を感じ取ったかの
ように、分厚い壁を破って 何か がその姿を現した。

「なっ……、なんだこりゃあ！ む、む、ムカデえ！？」

「にしちゃ、随分と不気味な面あしてんじゃねえか、おい！」

彼らの前に現れたのは、全身黄色で18の節を持ち、足の全てが

人間の手の形をし、巨大な大砲のような顔を持った、文字通りの化け物。

未だかつて出会ったことのない得体の知れない怪物を目の当たりにし、二人は思わずたじろいでしまう。

変身することを躊躇った二人を、化け物は自慢の腕で掴んで壁に叩きつけ、押し潰さんと力を込める。このままでは変身できない。絶叫する夏海の声も虚しく、土とユウスケは化け物の手の中で肉団子に……。

させるかよっ、この化け物があッ！

おお、りゃあああああッ！

にはならなかった。化け物に握り潰される寸前、二人は視界の外から現れた赤と青の閃光によって腕が斬り落とされ、握る力が失われたからだ。

何かなんだか分からないと辺りを見回す二人の前に、鮮やかな赤の長髪に、上はノースリーブ、下は純白のフリルがついたスカートの煌びやかな衣服を身に纏った少女と、青のショートカットに白く長いマントを羽織り、胸元が開き短めのスカートを穿いた少女が、それぞれの武器を地に突き刺して立っていた。

「まあ、性懲りもなく。軽くぶっ飛ばしてやりましょうかね！

あたしは右の方をやるから サクラ、あんたは左側をお願い」

「誰に命令してんだよ ミキ。ま、倒せさえすればどうでもいいけどなっ。こいつの『グリーンフィード』はアタシのもんだ！」

腕の一部を斬り裂かれて狂った豚のような雄叫びを上げる化け物に対し、二人の少女は並び立って正面から突っ込んで行く。

赤髪の少女は手にした槍を振り回して化け物の左側の足を次々と斬り裂いた上で、槍の形状を三節棍のようなものへと変えて残った足を縛り上げ、

青髪の少女は目に止まらぬ速さで右側の足を斬り捨てて駆け、動きの止まった化け物の頭に刃を振るい、全体重をかけてそれを斬り落とした。

「おっし、あとはトドメだけっ。まったく歯応えのねえ魔女だなっ
「ふん、どうだか。あたしが手伝ってあげなきゃあんただって」

「んだとお？ こんなやつアタシ一人で楽勝だっつーの！ 余計なお世話なんだよてめえは！」

「余計なお世話って、つくづく口の聞き方を知らないのねあんたは
ッ」

「事実だろ事実。だいたいな、魔法少女ってのは元々一人で獲物を狩るもんだ。他人の助けなんざ必要ねえんだよ」

「はっ、その割には トモエさん の家にも入っつも入り浸ってるくせに、えらっそおに！」

「んだとお！ やるかあ!？」

「やってやるうじゃないの!」

『槍』の魔法少女 サクラ と『剣』の魔法少女 ミキ は、目の前の倒すべき化け物を無視し、いがみ合っつて戦いを始めてしまう。似たような性格だからこそ反りが合わないということが。

「おいおい、あのくだらねえ三流漫才はなんだ。んなことしてる場合じゃねえだろ」

「そんなこと俺に聞かれたって……」

俺たちはこんなやつらに助けられたのか？

彼女たちに助けられ、体を起こして立ち上がった土とユウスケは、呆気を取られてその様相を見つめていた。

「あ、あのっ！ そのお二人…… ああいやお三方。ご無事ですか
っ」

そんな二人の前に現れたのは、桃色の髪を赤いリボンでくくった短めのツインテールに、あどけない顔付き、ユウスケの肩くらいの背丈で、どこかの学校の制服を身に纏った少女だった。

化け物と戦う二人とは違い、頭髮が薄い桃色をしている以外は、普通の『女子中学生』に見える。

「見て分からねえか？ 無事だよ無事」

「俺たちは別にいいんだけど、あの二人は何で、君は一体何なんだ

「？」

「詳しくお話しします。けどその前にこちらに。ミキちゃんとサクラちゃん、結界を張ってくれていますから」

少女は夏海を含めた三人を、赤と青の格子で囲まれた空間へと彼らを誘導した。

「これで大丈夫……。あ。ええっと、わたし『円カナメ』って言います。見滝原中学校の二年生で、ええっと」

「お前の自己紹介はこの際どうでもいい。あの化け物は一体何で、それと戦うあいつらは何なんだ」

「そう、でしたね。あれは『魔女』。人の心に絶望を撒き散らす怪物です。普段は固有の結界に隠れていて滅多に姿を表さないんですけど……」

「だいたい分かった。それで、あの二人はなんなんだ？」

「彼女たちは魔女とは逆に、希望を振り撒き、魔女を狩るために戦う『魔法少女』です。京極サクラちゃんと彩花ミキちゃん。二人ともわたしの友達で」

「だいたい分かった。で、お前はその『魔法少女』とやらではないのか？」

「あの……さつきから、ワザとやってませんか？」

「何の話だ。言いがかりはよせ」

カナメはこの人と言い争っても無駄だと溜め息をつき、視線を落として答えた。

「わたしはただ事情を知っているだけです。叶えたい願いがないわけじゃないし、みんなに任せっきりにするのだって本当は嫌でも……、怖いんです。あんな化け物と命懸けで戦うのが、わたしのドジでみんなを危険に晒してしまうことが」

カナメは目に涙をため、鼻声で言葉を継ぐ。

「わたしって……ヒキョウですよ。手を伸ばせばできることを、怖いからやるうとしないなんて……」

聞きもしないのに勝手に話して落ち込むカナメに対し、士は項垂

れた彼女の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「んなもん誰にも分かるもんか。てめえの行いに善し悪しを付けられるのは自分^{てめえ}だけだ。だいたいな、戦う気も戦った経験もないやつが手助けに入ったって邪魔なだけなんだよ。落ち込んでめそめそする暇があるんなら、あれ をなんとかしろ」

「あれ？」

士に言われ、彼の指差す方向に目を向けるカナメ。魔女が顔の大砲を発射していることに気付かず、未だに言い争いに終止するミキとサクラの姿があった。

「ちよつ、ちよつとつ？ 危ない、危ないよつ二人ともツ」

「何よカナメ。今取り込み中」

「これはアタシとバカミキの問題なんだ、第三者はすっこんでな！」
意図あつてのものではなく、二人は本当に気付いていないらしい。危ない、避けてと叫ぶカナメの声も虚しく、二人の魔法少女に向け、隕石のように大きな鉛玉が放たれる。

「それには、及ばないわ」

だが、その鉛玉がミキとサクラを吹き飛ばすことはなかった。

鉛玉が彼女たちに当たる瞬間、どういうことか二人の少女は何者かに抱えられ、高台の上へと移動していたからだ。

虚を突かれ唖然とする二人の魔法少女たちに、自分たちを抱える腰まで伸びたキメ細やかな黒髪に端正な顔立ち、右腕に円形の盾を付けた少女が、気だるそうに口を開いた。

「まったく、あなたたちは何故そうも愚かなの？ 毎度毎度助けるこちらの身にもなってもらえないかしら」

「てめえ……焰^{ヒナ}アケミ！ 何しに来やがったア」

「余計なお世話だつての！ あたしたちなら二人……いや、一人でも十分やれたつてのに！」

助けられたことが相当に不服らしく、アケミ と呼ばれた少女に対し、彼女に抱えられた暴れて文句を垂れるサクラとミキ。アケ

ミは二人の脇腹をつねって黙らせると、足や顔を再生させ、再び唸り声を上げる化け物の方へと向き直った。

きょうこ……、ほむら……、さやか……、……まど……か
しかし、並び立った彼女らを見た化け物は、噁り泣く声で彼女たちの名前を呼び、次元の裂け目へと消えていった。

化け物が裂け目の中に消えて言ったのと同時に、不可思議な壁の空間は消え、その場にいた誰もが元いた通り道へと戻っていた。

さらに激しい戦いが繰り広げられるかと思っただけで、アケミは、呆けて抱えた二人を落としてしまう。

「痛ッ、何すんのおアケミ！」

「ちきしょう、降ろすんなら静かに降ろせよッ」

怒って詰め寄る二人を無視し、アケミは物憂げな表情を顔に浮かべ踵を返した。

「ちよつと、謝りもしないでどこ行こうってのよ」

「あの魔女は”私たちの名前を呼んで”消えた。本来魔女はそれほど高度な知能は持たないわ。明らかに今までは違う……。早急に対策を立てなければいけない」

「だったら、アタシたちも一緒に」

「あなたたちは邪魔。顔を合わせるたびに喧嘩をされては何も出来ないわ。魔力の消費だって馬鹿にならないんだし、”寝床”で休んでいなさい」

「そう言い残し、音もなくどこかへと”消え去ってしまおう”アケミ。知覚できないほどの超高速か、はたまた何らかのトリックかは分からない。これが彼女の能力ということか。」

しかし当人たちからすれば、そんなことなどどうでも良いこと。アケミに役立たず扱いされたミキとサクラは、先程まで自分たちがけんかをしていたことすら忘れて憤慨し地団駄を踏んだ。

「なによ、なによあいつう！ スカしちゃってさあ！ あたしたちだってやるときゃやるってのに」

「すっげーム力つく！ マジでム力つくッ！ あいつに先を越され

てたまるかったの」

「オツケー、一時休戦ねサクラ」

「アケミのやつよりも先にあの魔女の攻略法見つけて、あいつの鼻を明かしてやるうぜ」

拳と拳、声と声を合わせ、二人の少女は打倒焰アケミを目標に掲げ去って行く。今まで喧嘩していたのが嘘のようだ。

残された士たちと、取り残されたカナメはその様子を呆けた表情で見つめていた。

「なんとというか……ゴーカイなやつらだな、お前と同じ年なんだからあいつら全員」

「ええ。あの二人はいつもあんな感じですよ。でも、後数分もしたらまた喧嘩してるんだろ？ なあ。はあ……なんで仲良くできないのかなあ、サクラちゃんとミキちゃん」

「あれはあれで十分仲が良さそうに見えるが」と突っ込む士たちであったが、カナメは「そうだといんですけど」と目線を落とす。不安げに不安げにつぶやいた。

「アケミちゃんにしたってそうです。協力し合わなきゃ勝てない相手だっただくさんいるのに……」

「人の主張は人それぞれ、その行動に是非を問えるのは世界のどこを探したって、それをやったやつしかいねえんだ。お前はあいつらと同じ土俵にすら立っていない。お前の言葉なんざあいつらにとっちゃ余計なお世話だと思っせ」

「そんな……わたし、そんなつもりは」

正論でありながら非常に厳しい士の言葉に、カナメは目に涙をためてうつむいてしまう。

「ちょっと土君、女の子を泣かすなんて……。こんな絶対おかしいですよ」

「そうだぞ士。いくらなんでも、こんなのとてねえよ」

「馬鹿言え、むしろ優しいと言ってほしいな。間違っただけ先に進んで泣くよりよっぽどマシだ」

カナメを泣かす土を糾弾するユウスケと夏海に、それは違つと弁解する土。彼らの論議は和解の妥協案なく平行線を辿ると思われたのだが、

「やあ、世界の破壊者『デイケイド』。この世界に現れたんだね。」

「……誰だッ、おい、今のは何だッ」

突如土の耳に届いた、妙に落ち着いた少女とも少年とも取れない若々しい声。

自分を破壊者と呼ぶその声に疑念を抱き辺りを見回すも、声の主と思しき存在は見当たらない。

僕はここにはいないよ。辺りを見回したって駄目さ。

「くそッ……、どっから見えていやがる。何者だ」

そんなことどうでもいいじゃないか。それよりも今、この世界に大変なことが起きている。君の力が必要なんだ。” 並行世界の平和”を護るためにね。

「デイケイドのことだけじゃなく”世界”のことまでも……姿を現せ、お前は一体何を知っている」

はやる土に声の主は「落ちついたまえ」と一言かけた上で言葉を継ぐ。

それよりもまず、君に会ってほしい人がいる。僕のことも世界のこと君のこと、話はそれからだ。

「ずいぶんと面倒臭いやつだな。いいだろう、お前の誘いに乗ってやる」

「おい、土。お前一体誰と話しているんだ」

「さっきからぶつぶつぶつぶつ。正直気持ち悪いです」

「お前からこそ何を言っている。聞こえないのか？ この胡散臭い声が」

この声を聞き取れているのは土だけらしく、ユウスケと夏海は土が誰と話しているのかと顔に疑問符を浮かべている。

ならば説明するのも面倒だ。土は二人に「そいつの面倒を頼む」と言伝した上で、頭の中に響く謎の声に従って、街角を抜けて行った。

それでもわたしは、魔法少女だから：そのに〔原作：魔法少女まどか マギカ〕

この作品の構想は、まどかマギカ本編・第九話終了時ぐらいから始めていました。

この頃はまさか「 が魔女を生むなら、みんな死ぬしかないじゃない！」なんて台詞が出るとは全く思っておらず、図らずもそのような展開になってしまい、申し訳ない気持ちでいっぱいです。

誰にとって？ 黄色いあの人に。

「あなたは……。街中探し回ってもやつたの気配は見つからなかった。今は小休止」

士の姿を見、彼をすり抜けて去ろうとするアケミ。そんな彼女の右肩を掴み、士は「ちよつと待てよ」と呼び止めた。

「あなたと私は何の関わり合いもないわ。離してくれないと警察を呼ぶわよ」

アケミの反応は冷やかだ。とっとと離せと言わんばかりに、自身の肩を掴む士の手に乗せ、物が軋む音がするほど力を込める。

こいつと小手先で話をしても、無駄に平行線を辿るだけかと理解し、「なら言葉を変えよう」と言っアケミの肩から手を離れた。

「今俺の頭の中に響いてくる耳障りな声。そいつの言う”相応の人物”ってのはお前か？ 魔法少女さんよ」

”魔法少女”、”相応の人物”、”頭に響く耳障りな声”。どれに反応したのかは定かではないが、士の言葉を聞いたアケミの右眉がぴくりと動く。

こいつは何かを知っている。士は一旦離れた手で、逃がさないよう今度は彼女の右手首を掴んだ。

「動揺したな。俺の目は節穴じゃあない。お前は何か知っている、そうだろうか？」

この男の前に誤魔化しや虚勢は通用しない。諦めを感じたアケミはだるそうにため息をついて振り向いた。

「見たところ普通の人間だし、少女……。のほろほろ。となると、あなたは一体何者？ 何故”キュウベえ”の声を聞くことが出来るの？」

「へえ。キュウベえっていうのか、この耳触りな声の野郎は。そんなことはどうだっていい。そいつの言っていた”この世界のことを知っている”人物ってのはお前だな。人々に絶望を振りまく魔女と、そいつを狩る魔法少女のこと。知っていることを話してもらおうか」

瞳をぎらつかせてまくし立てる土にを睨みつけ、アケミは彼の行為を「不作法ね」と一蹴し踵を返した。

「おい待て。黙んまり決め込んでそっぽ向くこたねえだろう」

「立ち話で済むような話じゃない。いい店を知ってるわ、キナ臭い話はそこでもしょう」

「キナ臭いねえ。まあいいだろう。案内してくれ」

門矢士がアケミに連れられてやってきたのは、街外れにひっそりと佇む煤けた赤色の屋根の喫茶店。

外観こそ古ぼけてはいるが、店の中はそれなりに整頓されており、店内を流れるスローテンポのジャズ・ミュージックが、落ち着いた印象を与える「隠れた名店」と言うような店だ。

メインストリートの煌びやかな飲食店と毛色が違いすぎるからか、単に交通面で不便なだけか、客は今入ってきた士とアケミの二人だけ。

二人は店の奥の小さな丸テーブルの前の席に腰を降ろし、寄って来た男性店員に「ブレンドを」と注文してカウンターの中へと下がらせた。

「さて、そろそろ聞かせてもらおうか。この世界とは何で、お前らはい体何と戦っているのかを」

「その前に。あなたこそ何者なの？ 素性が明らかでない者と話をするつもりはないわ」

「素性つてお前、だったらお前から」

「名前だの職業だのは尋ねた側が先に説明すべき事でしょう。学校で習わなかったの？」

その言い方には腹が立つが尤もだ。士は出されたお冷を飲み干すと、自身が知る全てのことをアケミに話す。

アケミはそれに対して笑うことも呆れることもなく、無愛想な顔で彼の話に相槌を打った。

「俺から話せることはこれで全部だ。今度はお前の番だぜ」

「そうね。何から話せばいいのかわからないけれど……」

アケミは土の身の上話の間に運ばれてきたコーヒーに、軽く口を付けて答えた。

「あなたの言ってた声の主、そいつと”契約”して戦う力を得たのが私たち魔法少女。あいつは私たちが望んだ”願い”を何でも一つだけ叶えてくれる。人が一生、どれだけあがいても叶えられないような願いでもね。魔法少女になることで得られる唯一にして最大の利点がそれよ」

「『何でも』……？ なんでも、の度合いがよく分からねえな。どういうこった」

「それこそ”何でも”よ。世界一の億万長者にだってなれるし、不治の病に冒されていても立ちどころに元気になる。地震や津波を起こして、人類の数を億単位で減らすことだって可能よ」

アケミはそこまで言って一旦口をつぐみ、悲しそうな表情を浮かべて「でも」と言葉を継いだ。

「希望と絶望は差し引きゼロ。願いを叶えてもらう代わりに私たちは、あの魔女ほけものと一生戦い続ける義務を負わされるの。魔女との戦いは命懸けで、逃げる場所はどこにもない。やめたくなくてもやめられない。残りの一生分、出口のない迷路を彷徨い続けるようなものかしら」

喉の渴きを潤すべく、再びコーヒーに口を付けたアケミを見据え、土は「そうか」と他人事のようにに呟いた。

「魔法少女なんつうメルヘンチックな生き物のくせして、とんでもなくシビアな生活送っているのな、お前らは。そりやまあ、徒党を組んでなきややってられないか。そうだよな」

芳しい香りを楽しんだ後、コーヒーの中に角砂糖を三つも入れて啜る土に辟易としつつ、アケミは「馬鹿言わないで」ときつい口調で言葉を返した。

「自分たちの欲にかまけて、勝手に魔法少女になったような子たちなんか、仲間だなんて思っていない。私は円力ナメを護れさえすれ

ばいい。そのことで誰かを頼るような真似はしたくないし、あの子たちを仲間だなんて思ったことはないわ」

「おおおお。ずいぶんな言われ様だな。だが、本心は違うんじゃないのか」

土はアケミが席の横に置いていた紙袋をひったくり、勝手に中身を開けて言う。

「ちよつと、返しなさいっ」

「これ、さっきの紅茶店で買ったもんだろ？ オレンジペコ、アツブルティー、アールグレイ、ハーブ……こんなにたくさん茶葉、まさか一人で全部飲み干すってわけじゃないよな」

苦虫を噛み潰したかのような顔をし、アケミはうつむいて何も答えない。

土は茶葉の入った缶を丁寧に紙袋の中に戻して彼女に戻し、嫌らしげな笑みを浮かべた。

「憎まれ役を演じるのは本意じゃない、ってところか。”一人ぼつちは寂しくてたまりません”って、面と向かって言えばいいのによ。面倒臭いやつだ。それはともかく。お前の話の中で、腑に落ちない点が一つある」

「何」

「世界がどうか仮面ライダーがどうか、よくもまあこんな浮世離れた話を受け入れるなあ思っつてよ。その上で自分たちの秘密までぺらぺらと、お人好しにも程がある。じゃなけりや何か、考えあつてことだと思っつんだが……本当のところはどうなんだ、ええ？」

それを聞いたアケミは土を厳しい目付きで睨み付け、湯気も出切つて温くなりはじめたコーヒーに一口つけて言葉を返す。

「あなたって鋭いわ。そうね、その通り。でもその前にはつきりさせておきましょう。門矢土」

「なんだよ、まだ何かあるのか」

「あなたは私たちの敵？ それとも」

きつい目付きにきつい口調で問い掛けるアケミに対し、土は「や

めとけよ」と手で御した。

「そいつはお前の対応次第だ。何もしなけりやお前たちに危害を加えるつもりはないが、俺や俺の仲間たちに何かしようってんなら容赦しねえ。それだけだ」

自分以上に鋭く、冷たい目つきでこちらを見て話す土の声と言葉に、自分と似た何かを感じ取ったのか、アケミは視線を外し「そう」と短く呟いた。

「あなたの人となりは分かったわ。その前に私から質問させて頂戴。この世界で今、『何か』が動き始めている。今までこんなこと一度もなかったし、この先どうなるか、私にも何一つ分からない。いくつもの世界を巡る破壊者 デイクイド。この世界で今、何が起ころうとしているの？」

自分以上に突拍子もない質問をするアケミに土は首を横に振り、コーヒーの中にもう一つ角砂糖を入れて溶かした。

「俺には過去の記憶がない。世界を股にかけて襲ってくるやつらが俺に何を求めて戦いを挑んでくるのかも知らん。俺はただ、デイクイドの力で自分に降りかかる火の粉を払っているだけだ。振り払った火の粉のことなんざ一々覚えていられるか」

土の言葉に対し、アケミは煮え切らない表情で彼を睨み付ける。

土は「分からないんだから仕方ないだろう」と付け加えた上で、アケミに向けて人差し指を突き立てた。

「さてと、俺は答えたぜ。今度はお前が答える番だ。おっと逃げようだったってそうは行かねえぞ。約束は守れよ、約束は」

これでは情報の引き出し様がない。かと言って約束してしまった以上、質問に答ええない訳にも行かない。アケミは片手で頭を軽く押さえ、大きく溜め息をついた。

「分かったわ。どうせ信じてもらえないだろうけど」

信じる信じないは俺の勝手だ。だが言わなきゃ何も分からないんだ。まずは話してみる」

アケミはすっかり冷えきったコーヒーを飲み干し、土の目を真正

面から見据えて口を開こうとするが、

悪いけどそこまでだディケイド。それにアケミ。

そんな彼女の言葉を得体の知れない謎の声が遮った。店内には彼らに気を留めることなく掃除を続ける寡黙な店員と、コーヒートを挽くことにしか興味のない店長しかいない。

先程アケミが言っていたあの キュウベえ か。

「今まで黙っていたくせに、この後に及んで何故止める」

「彼を 呼んだ のはあなたでしょうキュウベえ、なら邪魔をするのはやめなさい」

呼びつけておいて何だ。人に説明を丸投げしておいて何だ。勝手に話に割って入ってきたキュウベえに対し、何故だと怒る士とアケミ。

キュウベえは悪びれることなく、今までと同じ口調で「そう邪険にしないでよ」と言っ言葉を継いだ。

邪魔するつもりなんてないよ。むしろ迷惑しているくらいだ。この世界で今起ころうとしている”歪み”。その理由を知りたいのは僕も同じだからね。『魔女』が出たんだ。君たちが追っていた今までとは違う あいつがね。

「だから何。あの魔女ならミキとサクラが追っている。気にはなるけど、始末なら彼女たちにやらせればいい」

二人はもう戦っているよ。麻未トモエミキの家の前 でね。もちろん、カナメも一緒さ。

カナメも一緒にいる。その言葉を耳にした瞬間、今まで冷淡で無愛想だったアケミの顔に、初めて焦りの色が見えた。

ミキとサクラは魔法少女だが、カナメは戦う力を持たないただの女子中学生。魔法少女の”契約”を執り行うキュウベえの姿はここにはない。どこにいるかも分からない。何かの弾みで彼女が契約してしまつたら。カナメが自分たちと同じ修羅の道に入ってしまったら。

アケミは右手の薬指に嵌った指輪を”紫色の宝石”へと変え、
魔法少女”に変身すると、向かいに座る士の制止も聞かず、その場
から消え去った

「おいおい、なんてことをしてくれるんだ。あと少しで核心に迫れる所だったのに」

その件に関してはすまないと思っっている。だが今回の魔女は普段とは違うんだ。ミキとサクラ、それにアケミが加勢したとしても倒せるかどうか分からない。もしよかったら、君の力も貸してこないかな？ デイケイド。

「力を貸せだあ？ そいつはお前たちの世界の問題だろ。あいつらだけでなんとかすればいい」

言っただけだよ。彼女たちが戦っている魔女は普通じゃない。この世界に起こった”歪み”、その影響で産まれたんだとは思っけど、その力は未知数。言わば”君のせい”で生まれた異なる者なんだ。そういうものの管轄は僕たちじゃなく、君だろうか？

「そりゃあ……そうだが、それに俺は”トモエ”ってやつの家を知らないぜ」

そこまでは僕が案内する。危ないのはカナメたちだけじゃないんだ。君の仲間たちも、魔女の結界に閉じ込められて行き場をなくして困っているんだ。放っておくべきじゃないと思うんだけどな。

「何ッ！ そいつを先に言えよそいつを！ 何故言わなかった」

そりゃあ、”聞かれなかった”からね。急いでくれデイケイド。長々と説明しておいて一番重要なことは後回しか、と憤慨する士だが、目の前にいない相手に怒ってもしょうがない。

「お前に会ったら一発殴らせる」と悪態をつけて立ち上がり、士は二人分のコーヒー代を払って喫茶店から出て行った。

士が喫茶店を出る30分ほど前のこと。

ミキとサクラに置いて行かれたカナメと、土を見失った夏海とユウスケは、行き場をなくした者同士仲良く肩を並べ、カナメの案内に従って街の中をのんびりと歩いていった。

春先の暖かな日差しに、鼻をくすぐる穏やかな風。行き交う人々の活気に満ちた声。魔女なんて異質なものなど、まるで最初からいなかったかのようだ。

「さっきまでこの辺りで怪物が暴れ回ってたってのにのどかだよなあ、まったく」

「仕方ないですよ。魔女はこことは違う異次元空間に人を引き込みますし、倒して助けだせば、襲われた時の記憶は一切残りませんから。それに……何もないのならそれが一番いいと思うんです。こんな不毛な戦い、誰にもやってほしくないし、させたくないです」

何気なくユウスケが発したその言葉に、肩をすくめ消え入りそうな声で言葉を返すカナメ。

ユウスケは「俺が悪かった」と両手を顔の前で振って謝った。

「あ……ごめんなさい。小野寺さんたちの言うことの方が正しいわけですし、わたしはただの傍観者ですから。悪いのはむしろわたしの方で」

「いいんだよ、俺だって無神経だったんだ。そうだよな、中学生の女の子には辛いよな、そういうの」

互いの言葉に謝罪し合うカナメとユウスケ。

その様子を微笑みながら見つめていた夏海は、自身の視界の先に気になるものを見込んだ。

「あれは……確か」

「どうしたんだ、夏海ちゃん」

「あ、あれは。わたしたちが懇意にさせていただいてるケーキ屋さんです。とおーってもおいしいんですよ。先輩がお茶の時間の時、いつもあの店で買ってきてくれて……って、あれは」

ケーキ屋の簡単な説明をユウスケたちにしつつ、店内を覗き込んだカナメの目に映ったのは、レジの前で互いに怒り顔を突き合わせ

る、彩花ミキと京極サクラの二人の姿だった。

魔女探しを途中で切り上げたのか、二人とも魔法少女のコスチュームではなく、カナメと同じ学校の制服を身に纏っている。

「ちよつとちよつと何よそのチョコイス、いくらなんでもそりゃあおかしいでしょ。ショートケーキにチーズケーキ、ミルフィーユにアップルタルトときて、なんでもう一回”アップルタルト”なのよ。被ってんじゃない」

「なんだよ、アタシが選んだもんじゃケチつけようってのか？」

「ケチも何も、それあんたが食べたいもの入れただけじゃないの？今日は”そういう”目的で買っただけじゃないんだから、自重しなさいよ自重」

「分かってるよ、んなこと。林檎が嫌いな女の子なんていねーんだ！アタシが言うんだから間違いない。だからアタシのチョコイスは間違っていない」

「暴飲暴食好き嫌いなしのアンタ自身が根拠とか余計不安になるわ！ああもう、割り勘でなんて言わなきゃよかった」

「ほほお、言うじゃねえか彩花ミキセンセーよお。じゃあ何だ？アンタの選んだ”ザツハトルテ”ならあいつも喜ぶと？アタシとしては、その根拠が聞きたいんだけどなあ」

「あつたりまえよ。苦くて『黒い』オトナの味わいのチョコケーキ。まさにあいつそのものじゃない。これで合っていないって方がおかしいわよ」

「はッ、どんな根拠が出てくるかと思えば。自分の中のイメージを勝手に押し付けてただけじゃねえか。そんなんじゃもらった方もいい迷惑だぜ」

「なんですってえ！喧嘩売ってんのあんたは！」

「なんだよ、やるうってか？相手になるぜ」

周りの客や店員のこと気にせず、怒り顔で一切妥協なしの口論をひたすら繰り返すミキとサクラ。

このまま放っておいて店が壊れでもしたら事だ。カナメは二人の

間に割って入り二人とも落ち着いてと声をかけた。

「お客さんや店員さんたちも見てるんだよ、落ちついてよ二人とも、見苦しいよ二人とも！」

「止めんなカナメエ！ 悪いのはミキのやつだ。こいつアタシのチヨイスに一々ケチつけやがってさあ、今日という今日はとっちめてやらないと気が済まないッ」

「はア？ どう見ても悪いのはあんたでしょうが！ 耳貸しちゃダメよカナメ。悪いのはサクラ。あたしは精一杯みんなのこと考えているのに、こいつときたら自分の好きなものしか入れないのよ？ ひどいでしょ？ ひどいよね！」

そうは言うが、「独善的」という意味では両者共に同じではないか。仲裁に入ったカナメはおろか、ユウスケや夏海、その様子を見ていた他の客たちもそう思ったのだが、怒ってばかりの当人たちは全く気付いていないらしい。

二人をなだめつつ「またか」とため息をついたカナメは、何故喧嘩をする必要があるのかと、彼女たちが買おうとしていたケーキの方へと目をやる。

ミキとサクラが指定しているものは最後の一つを除いて双方共に同じ。二個目のアップルタルトかザッハトルテか。彼女たちが選んだ品を見たカナメは、二人のしようとしていることに気付き、手を叩いてにこやかな顔で言った。

「そっか、そういうことだったんだ！ 二人とも、”アケミちゃんのための”ケーキを選んでたんだね！」

「は……はあ！？ な、ななな、何言ってるのよカナメ！ 誰があるんな無愛想で電波なヤツなんかにケーキなんて！ これはそう、あんととトモエさん、ついでにあたしたちが食べる用に買ったの。ねえ、サクラ」

「そうだそうだ。全部アタシのもんだ。アケミのやつにもお前たちにも渡すつもりはないっ」

つんけんとした態度で、それは違うと憤慨する二人だが、カナメ

は直ぐ様それが照れ隠しの嘘であることを見破った。

「苦いものが嫌いなミキがビターチョコのザツハトルテを「自分の食べる分」に入れるはずがないし、サクラにしても大食らいではあるが、決してそれを一人占めするような人間ではない。」

口を開けば喧嘩ばかりのミキとサクラが、二人して彼女たちなりの方法でアケミに歩み寄ろうとしている。円カナメはそのことが嬉しくてたまらなかったのだ。

しかしこの二人のへそ曲がり具合ときたら相当なもの。一度口にした以上、違うと言いつもりらしい。すっかり困り果てたカナメを見かね、今度はユウスケが彼女らの間に割って入った。

「ま。ま。二人とも落ち着いてって。怒り過ぎはお肌に良くないよ」「お前、さっきの。何で知らないヤツにお肌の心配されなきゃなんねえんだよ!」

「ご忠告どうも。でもね、あたしたちは十代前半よ、ていーんなのよ? 心配されなくてもお肌なんてぴっちぴちに決まってるでしょ」

「いや、でも。若いうちからそんなにかりかりしてると……」「うるせえな、だいたいなんだよ! アタシたちのお肌が潤ってるかどうかなんか、てめえにや関係ねえだろうが! はっ倒すぞ」

ミキとサクラの両方に恐ろしい形相で凄まれたユウスケは、取り付くしまもなく退却し、力なく夏海にすがり付いた。

「夏海ちゃあん、怖ええよ、最近の女子中学生凄く怖ええよお。助けてくれよ」

「女子中学生相手になんて情けない。今までたくさん怪人たちが相手に臆することなく戦っていたくせに、八代さんが聞いたら悲しみますよ」

「まあ、お気持ちは分かりますけど……」

泣かされて帰って来たユウスケを情けないと罵る夏海に、仕方がないと彼に慰めの言葉をかけるカナメ。ユウスケはしょうがないじゃないか、怖いものは怖いんだと泣き言を口にしつつ考える。

怖い、確かに情けない。魔法少女として自分たちと同じぐらいの修羅場を経験しているとは言え、相手は女子中学生だ。泣かされてどうする、成すがままにされていてどうする。自分は二十歳の大人だ。こんなところで引き下がれるものか。

悩みに悩み、持ち物を探りに探って 何か を思い付いたユウスケは、目を見開き唇を固く結び、凜とした表情で再び彼女らの前に立ちはだかった。

「なんだよ、まだなんかあるのかよ」

「お説教とかされても聞く気ないんですけどー？」

「いや、いやっ。そういつつもりは一切ないから。でも喧嘩はよくないよ。君たち二人にも、君たちを心配しているカナメちゃんにも、この店のお客さんにもさ。仲直りして楽しくやろうぜ。もちろんタダでは言わないよ。その代わり」

「そのかわり？」

「君たちの買おうとしているそのケーキ、支払いは全部俺がするからさ、な？」

支払いは全部俺がする。その言葉を耳にしたミキとサクラの目が大きく見開かれた。嘘じゃないかと耳を疑い、聞き返して反芻するが、その言葉に嘘はない。間違いはない。

二人は互いに顔を見合わせて嫌らしく口元を歪ませると、肩を組み合ってユウスケに満面の笑顔を見せた。

「あந்தの言う通りだ。アタシたちが悪かった、もう喧嘩しないよ」
「あたしたちはきっかりはつきりすっかり仲直りっ。ねっ、さーくらっ」

「そうそう、その笑顔。似合ってるよ二人共」

楽しそうに肩を組む二人の笑顔を見て、安堵の溜め息を漏らすユウスケ。しかし彼女たちはささずその笑みを含みを持った嫌味たらしいものに変え、二人してユウスケの肩を鷲掴みにした。

「っわけで、今からアタシたちが選ぶケーキ、支払いの方宜しく頼むぜ、お節介焼きのおニイさん」

「えっ、ちょ、ちょっと待ってくれよ。買うケーキはこれで最後なんじゃ」

「あぁら何をおっしゃいますやら。あたしたちは『これだけしか買わない』だなんて一言も言ってますのよお。喜ばないかな、今日のティータイムは疑似ケーキバイキングよ！」

「ケーキバイキング!? 一体いくつ買うつもりなんだよ君たちはあ」

約束を交わしてしまった以上、後の祭り。ミキとサクラは自分たちの欲望のままにケーキを次々と選んで行き、夏海とカナメは彼にご愁傷さまと声をかけて慰め、その支払いをする当人は、次々と増えて行くケーキの数を目にしつつ、力なく肩を落とし、絶望し切った表情でその場に膝をついて頂垂れた。

街中から少し離れた場所にある14階建ての高級そうなマンション。

夏海とユウスケは円カナメたちに連れられて、マンションの七階に住む彼女たちの魔法少女の『先輩』麻未トモエの家へ向かい、エレベーターを登っていた。

ミキとサクラが儲かった、得したと笑い合っている中、彼女たちのケーキ全てを自腹で購入した小野寺ユウスケは、大型のケーキの箱を両手で持ち、青い顔をして何かをぶつぶつ呟きながら俯うつむいていた。

「冗談だろおい……。35個、35個……。女子中学生4・5人でそんなに食うわきゃねえだろ。冗談だろおい」

「あ、ああの。大変言いにくいんですけど、ミキちゃんもサクラちゃんもかなりよく食べる子だから、小野寺さんを気遣って、あれでもかなり遠慮してる方だと思います。サクラちゃんに至ってはいつも……」

「あああ、やめてくれやめてくれ! ききたくない、聞きたくない

ッ

あれで遠慮していたというのか、冗談じゃないぞ、女子中学生の胃袋は宇宙か何かか。

ユウスケは女の子たちの胃袋に只ならぬ恐怖を感じ、壁に頭をぐりぐりと押し付けた。

「まあ、でも良かったんじゃないですか。おかげであの二人、もうすっかり仲直りしてますよ」

「そうなってくれなきゃ困るよホント。俺の財布に一足早い冬が訪れちまったんだからさあ……」

ユウスケが辛気臭いため息をついて頂垂れる中、エレベーター内上部の階層を表示するランプが七階の所で止まる。

今日は豪華なお茶会だ、と楽しげにはしゃぐミキとサクラ。しかしエレベーターを出た先に広がっていた光景が、彼女たちのそんな浮わついた気分を吹き飛ばした。

「ちよつと待て、待てよ。なんなんだよこれは」

「嘘でしょ……。だってこんなの、あり得ないッ！」

エレベーターを出た彼女たちの目の前に広がっていたのは、高く白い壁が迷路のように張り巡らされた不可思議な空間。先程逃がしてしまい、行方を追っていたあの魔女のものだ。

遠方より何かが来る。大砲のような顔をした足が全て人の腕の、ムカデのようなあの化け物。アケミたちが先程逃がしてしまったあの魔女だ。

だがそんなことはありえない。家主の麻未トモエが有事に備え、特別強力な結界を張って備えているのだ（とはいえ、魔女の標的のほとんどは一般人であり、魔法少女が直接狙われた試しはないのだが）。たとえ結界を突破できたとしても、それにミキやサクラが気付かないはずがない。

「わけがわからねえ……わからねえけど」

「やるしかない、わね。おにーさんおねーさん、カナメとケーキ、しっかり守ってよッ」

難しいことを考えるのはやめだ。二人の魔法少女は変身すると共にエレベーターの周りに結界を張ると、各々の武器を構え魔女に向かって飛びかかった。

「まさかトモエさんの家までやってくるなんてね、悪いけどこれからお茶会なの。とつとと決めさせてもらおうわよッ」

「飛んで火にいる夏の虫だ！ 今度こそぶちのめしてやるぜエ」

ミキは疾風のように地を駆けて魔女の”腕”を斬り裂き、サクラは魔女の遙か頭上まで跳び上がると、自慢の”槍”を電柱程の長さまで伸ばし、槍投げの要領で魔女の”節”に突き刺した。

”脚”をもがれ、節を貫かれて地面に釘付けとなり、さながら暴風雨のような荒々しい悲鳴を上げる魔女と、本気を出せばこんなものよと、笑顔でハイタッチをする二人の魔法少女。

「ほえーっ。あれで中学二年生かよ。一瞬動きを追えなかったぜ」
「ライダーじゃなくてもあんなに強いなんて、すごい世界です」

彼女たちの戦う様を目の当たりにし、ユウスケと夏海は結界の中でただただ圧倒されていた。しかしその中でカナメだけは、その周囲に目をやりつつ複雑な表情を見せていた。

「どうしたんだカナメちゃん。あの化け物なら君の友達に任せておけば大丈夫そうだけ。そんなに暗い顔しなくてもいいんじゃないのか」

「いえ、あの。魔女やミキちゃんたちがというよりも、その周りが」
「周り？ 何かおかしいなところでもありましたか」

カナメの言葉と態度が気になり、結界に顔を近づけて辺りを見回すユウスケと夏海。

絵具をぐちゃぐちゃにかき混ぜたような気味の悪い色の空の下、飛び越えられそうにないほど高い壁が、迷路のように複雑に入り組んだ空間。ここまでは同じだ。

その中で、先程までと明らかに違うものが一つある。壁に描かれた”動く絵”だ。あの魔女が最初に現れた時のそれは、黒い影が縦横無尽に蠢くだけの簡素なものだった。しかし今はどうだ。そこに

写っているのは黒い影などではなく、楽しそうにはしゃぐ”見滝原の制服を着た”女学生の姿だった。顔にだけ黒い影が残され、それが一体誰であるのかは窺い知れないが、不気味なことに変わりはない。

このことがカナメに新たな疑念と不安を抱かせたが、それも些細な問題であった。何故ならミキが斬り落とした魔女の腕が、まるで沸騰寸前の熱湯のように泡立ち始め、見滝原の女学生の制服を身に纏った、顔がなく手足が腕の不気味な怪物へとその姿を変えたのだから。

「ミキちゃん、サクラちゃん、危ないッ！」

魔女の体から斬り離された化け物は一斉に二人の魔法少女に襲いかかる。カナメの声も虚しく、対応し切れなかったミキとサクラは化け物たちに羽交い締めになれ、自慢の腕で足や手をまるで雑巾でも絞るように締め上げた。

「ああもうっ、なんつう馬鹿力！ 手加減しなさいよ手加減」

「魔女の体から直接 使い魔 が出てくるなんて……聞いてねえぞっ」

剣を自在に呼び出せるミキと違い、手にした槍を魔女に突き刺しているサクラにはこの使い魔たちを引き剥がす力はない。サクラは使い魔たちを振り払おうと魔女に突き刺した槍を抜き、手に馴染む大きさに変えて握るが、それがいけなかった。

「馬鹿ッ、何やってるのよサクラ、前、前ッ」

魔女はその一瞬を見逃さなかった。サクラの手により槍が引き抜かれた瞬間、斬り落とされた腕を再び生やし、その腕で手下の使い魔もろともサクラを、亀裂が走るほどの衝撃を伴って壁に叩きつけたのだ。

自身に群がる使い魔たちを振り払い、サクラを助けようとミキはひたすら剣を振るい続けるが、魔女の腕から分離したそれは、斬られれば斬られるほどその数をさらに増し、彼女が剣を振るえば振るうほど事態はさらに悪化して行った。

疲れ果てて片膝をつくミキの前に、再び生やして伸ばした魔法の腕が迫る。ミキは飛び退いてそれをかわそうとするが、増えに増えた使い魔たちが彼女の足を掴む。これでは助けに行くどころか自分の身が危ない。打つ手なし。自分の力ではどうにもならないと悟ったミキは、左手に握った剣を降ろして目を瞑った。

こんなところで諦めるつもりなの？ 情けないわね、彩花ミキ。

冷淡な中に嫌味が入り混じったその声がミキの耳に届いた瞬間、彼女の周りの景色が一変した。自分やサクラを取り囲み、羽交い締めにする使い魔たちが爆炎の中に吞まれ、ミキを押し潰さんとしていた魔法の腕は、漫画に出てくる三角チーズのように穴だらけになって動きを止め、彼女の元には届かず崩れ去った。

何があつたかと辺りを見回すミキの目に、押し潰されて虫の息となったサクラを抱きかかえた『焰アケミ』が止まる。アケミは弱り切ったサクラを彼女の足元にゆっくりと降ろして踵を返し、背後のミキに冷やかな口調で言った。

「京極サクラはまだ生きています。あいつの相手は私がするから、カナメたちと一緒に結界の中で大人しくしていなさい」

「何よ、こんな時でもあたしたちを馬鹿にしようつての？ ふざけるのもいい加減にいなさいよ！」

「戦況というものがまるで見えていないのね。魔法と戦うことは誰にだってできる。けれど、サクラを治療できるのはあなただけなのよ、彩花ミキ。それにあなたたちがやられてしまえば、カナメたちを護る結界が解かれてしまう。復唱の要なし。分かっただらとっと行きなさい」

彼女の物言いには腹が立つが、言っていることは尤もだ。ミキは舌打ちを一つしてサクラを抱きかかえ、結界の中へと入って行く。

「ミキちゃん！ サクラちゃんは大丈夫なの？」

「大丈夫よ、想定内。すぐに治療するから、寝かせるの手伝ってく

れる？」

「想定内って……、なんかすげえ血が出てんぞ……大丈夫なのかよ、これ」

肺を傷つけられ、見ているこっちがもよおしてしまいそうなほどに血を噴くサクラ。

ユウスケは大丈夫なのかと彼女の体を揺するが、ミキは邪魔だとその手を払いのける。少し渋い表情を見せるユウスケに対し、横から割って入ってきたカナメがすみませんと一礼を入れた。

「サクラちゃんのことなら心配ご無用です。ミキちゃんは”癒し”の祈りを捧げて生まれた魔法少女。自分だけでなく、人の怪我を治すのだからお手の物なんです」

そんな馬鹿な。命にかかわる大怪我をしているのに、やっていることはただ患部に手を乗せているだけのミキの姿を、ユウスケは訝しげに見つめた。

しかしどうだろう。ただ手を乗せているだけだと言うのに、サクラの出血は瞬く間に治まり、苦悶に歪み蒼い顔だったものが、徐々に血色を取り戻してきている。

カナメの言っていることは本当らしい。ユウスケは驚嘆の声を上げると同時に、ミキとカナメに対しすまないと頭を下げた。

「しかしすごいな、魔法少女ってのは。こんなことまでできるのかよ」

「怪我の方はミキちゃんに任せておけば大丈夫ですけど、あっちの方は……」

不安げな表情で結界の外、魔女と戦うアケミの方へと目を向けるカナメ。

誰にも捉えきれないほどの速さで地を駆け、右手の手盾から取りだした拳銃や手榴弾など、おおよそ魔法少女らしからぬ武器を用いて果敢に魔女に挑むアケミだったが、（自身の魔力で強化されているとはいえ）拳銃や手榴弾程度では硬い外殻に覆われた魔女の鎧を砕くことはできず、戦いは平行線の一途を辿っていた。

このまま戦っているのは自分の体力も魔力も持たない。根負けしてしまうのは目に見えている。そのことを誰よりも痛感していたアケミは、振り下ろされる魔法の腕を巧みにかわしつつ、手盾の中から一抱えもある大口径大筒のグレネードガンを取り出して弾を込める。しかし相手もそう易々と撃たせてはくれない。アケミがグレネードの砲口を標的に向けるよりも早く、彼女に向かって腕を伸ばす魔法女。アケミは掌の中から腕が生え、その掌の中からさらに腕が伸びて行く不気味な光景に物怖じすることなく「でしようね」と呟き、その場から消え去った。

「弾さえ込められればこちらのものよ。消えなさい」

アケミの姿は魔法の遙か頭上へと移っていた。重力に従って落ち行く中、硬い外殻を持った魔法の唯一弱い部分である”節”に照準を合わせ、アケミはすかさず引き金を引く。

風を突き抜けて飛んだそれは魔法の頭から四番目の節に突き刺さり、轟音と爆風、狂った雄牛のような猛々しくも気味の悪い悲鳴を上げて破裂した、はずだったのだが。爆発に巻き込まれ悲鳴を上げて地面に叩きつけられたのは、どういうわけかアケミの方であった。「爆弾を投げ返してくる……なんて、一体、どういうことなの」

爆発の衝撃で体からはみ出た臓器を押し戻し、欠損した体の部品を魔力で補いつつ、自身の目に映った光景を反芻するアケミ。自分が狙ったのは人間でいう後頭部。視覚野から完全に外れた場所のはずだ。気付いて咄嗟に反応できるはずがない。

ならば何故こうなったのか。アケミの出てくる位置を予め予測していたとしか考えられない。

言葉を話し、結界を易々と越え、こちらの行動を予測したとしたとしか思えない行動を取る魔法女。あらゆる意味で規格外だ。負傷して殆んど身動きが取れない自分に向かって襲い来るこの魔法女に、アケミは今までにない、心の底からの恐怖を感じた。

そしてそれは、結界の中で見ていたカナメたちも同じであった。

「このままじゃアケミちゃんが……！ ミキちゃん、どうにかなら
ないの!？」

「助けたいけど、今あたしがここを離れたらサクラが……。ああん
もう、なんて時に怪我してんのよあんたはッ」

「助けたくないわけがない。しかし治療中のサクラを放ってはおけ
ない。ミキは二者択一に思い悩み、カナメは彼女たちに何もしてあ
げられない非力な自分を恨み、悲しみと悔しさに涙を溢した。

「このままじゃあの子が……。何やっているんですかユウスケ、助
けてあげないと」

夏海はアケミを助けるようユウスケに促すが、当の本人は空を見
上げてその必要はないよと言い、泣きじゃくるまどかの頭を撫でた。
「いっつもいい所で出てきて、おいしい所を全部かつさらうんだか
ら。大丈夫だよカナメちゃん、あいつが来た」

「あいつ……?」

FINAL ATTACK RIDE 「De - De - D
e - DECAD E」

アケミに襲いかからんとする魔女の頭上に、突如金色に縁取られ
た畳程の大きさのカードが幾重にも降り注いだ。そのカードの先
にはピンク色の何かがあり、まるで流星のように魔女の外殻に激突し
たそれは、魔女を地面に叩きつけ周囲に砂埃を舞わせた。

「ろくに説明もしねえで置いて行きやがって。場所ぐらい教えてお
けってんだ」

仮面ライダーディケイドは必殺のデイメンジョンキックで魔女を
蹴り飛ばした後、血だらけになってその場へ突っ伏すアケミに手を
伸べる。

魔女でも使い魔でも、ましてや魔法少女でもないそれに身震いす
るアケミだが、それが土の声であることを知り、伸べられた手をゆ
っくりと握った。

「なんでこの場所が……いや、そうじゃなくて、どうしてここに入

り込めたの。魔女の結界は人間が自発的に入り込めるような場所じゃないのに」

「俺は世界の破壊者だ。めんどくせえ理ことわりには縛られねえ、そういうこつた。行くぞ」

「待つて。まだ終わりじゃないわ。後ろッ」

立ち上がることでできないアケミをおぶってその場から立ち去ろうとしたデイケイドに、背後から蹴りつけられて怒りに燃える魔女が迫る。ライダーキックの力を持ってしても破れない頑強な外殻に、デイケイドは呆れ、アケミは恐怖に顔を引き攣くっらせた。

「なるほど、普通にやっても倒せないってタイプの化け物か。いいだろう、ならこつちにも考えがある」

デイケイドは背負ったアケミを壁にやさしくもたれかけさせると、ライドブツカーから一枚のカードを取り出してデイケイドライダーに装填し、バツクルを閉じた。

「デカブツの化けもん相手なら、こつちはそいつら退治の専門家だ」

K A M E N R I D E 「 H I - B I - K I 」

バツクルにカードを装填し、御魂のようなものが現れるのと同時に、青い炎に包まれるデイケイド。

体を覆う炎が描き消えると同時に彼は、紫色の筋骨隆々とした体軀に、二本角に隈取りだけで示された不気味な顔の『鬼』、”仮面ライダー響鬼”が立っていた。

「オニゴッコは終いだぜムカデ野郎。ああ、”鬼”は俺だったな」

デイケイドは一步も退くことなく、腕から飛び出した鋭利な爪で襲い来る魔女を抑え込み、その場に押し留める。人間離れた圧倒的な力に、その場にいた誰もが息を呑んだ。

デイケイドは力づくで魔女の体を押し上げて海老反りの体制に持ち込むと同時に、腕の猛攻を振り払って魔女の腹側に潜り込み、”ファイナルアタックライド”のカードをバツクルに装填。三つの御霊が彫り込まれた太鼓が魔女の腹にくっついて数倍の大きさに巨大化し、仁王像の顔を模ったと思しき不気味な石のついた撥はちがひとり

でに現れ、デイケイドの両手へと収まった。

FINAL ATTACK RIDE 「Hi・Hi・H

i・HIBIKI」

「んじゃ、一気に決めさせてもらうぜ。『音撃打・火炎連打の型』」

そう叫ぶと同時に手にした左右の撥はちで、太鼓をリズムミカルかつ威勢良く叩くデイケイド。

腹の底まで響く豪快さと、聴く者に安心感を抱かせる涼やかな音色が合わさった”音撃”は、一切の物理的な攻撃を防いできた魔女の体に確かなダメージを与えていく。

「鬼ゴッコも弱い者いじめもこれで終いにしようぜ、なあ！ そおらよっ」

清めの音撃を浴び続け、聴くも無残な悲鳴を上げ続ける魔女に、デイケイドはとどめの一発を叩き込む。魔女の体全体に有明の干拓地のようなひび割れと亀裂が走り、程無くして黄色い体液を噴出して吹き飛んだ。

魔女が倒されたことでこの異様な空間は煙のように消え失せ、彼らは皆現実世界の七階のエレベーター前へと戻っていった。

「そんで、なんだこいつは」

変身を解いて元の姿に戻った士は、自分の足元に転がっていたものに目を向ける。

彼が拾い上げたのは黒い棒のようなもので縁取られた、掌にすっぽりと収まるほど小さな黄色い（と呼ぶにはかなりくすんだ）宝石。魔法の破片も体液も、倒したことであの異空間ごと消え去ったはずだ。なのにこれだけはその影響を受けず、「こちらの世界」に転がって来ている。何か重要なものであることは間違いない。

士はそれを拾い上げ、アケミとサクラの治療を続けるミキの方へと歩を進めた。

「おおい、なんだこの宝石みたいなものは。お前らにとって大事な

ものなんじゃないのか？」

「ああ、”グリーンフィード”ね。ちょうど魔力が減って困ったの。ありがとう」

「ぐりーふしーど？ この”宝石”みたいなやつのことか。なんなんだこれは」

負傷者の治療に必死で、それが何であるか確認せずに受け取ったミキに代わり、カナメが土の前に立って口を開いた。

「あっ、グリーンフィードって言うのはですね。戦いや魔力の消費で穢けがれてしまったソウルジエムを浄化するためのものです。ソウルジエムは魔法少女になった女の子が生み出す宝石で、魔力の源。穢けがれて澱んでしまうと魔力をうまく引き出せなくなってしまつから、こうして魔女を退治して手に入れるんです。全部、麻未先輩の受け売りなんですけどね」

「なるほどね。それがお前たち魔法少女が魔女を狩る理由、ってわけか。しかしそのソウルジエムってのが穢けがれ切つたらどうなるんだ？」

「それは……見たことがないので、分かりません」

「ずいぶんと中途半端な知識だな。まあ知らねえもんはしようがねえけどよ」

説明されたが、肝心なところは分からず仕舞い。もやもやとした気分のため息をつく土に対し、彼から渡されたものを見込んだミキは、目を血走らせ土の首根っこを掴み怒りに任せて激しく振った。

「あんたちよつと……これは一体どういうことよ！」

「な、何だ。息が出来ねえ。離せ、離せっての」

「いきなりどうしたのミキちゃん！ 土さんにひどいことしちゃだめだよ！」

「カナメは黙ってて、あんた、これを見てもそんなこと言つてられる！？」

仲裁に入ったカナメを押し退けてなお土への怒りを露わにするミキ。なんでもと問うカナメに対し、ミキは先程土から受け取った宝石

を彼女と土に見せた。

「どうしてよ、なんでなのよ！　なんであんたがトモエさんの『ソウルジエム』を持つてるのッ」

「ああ？　んなもの俺が知るかつての。この宝石はお前らにとって大事なものなんだろう？　どうして化け物の腹の中から出てくるんだよ」

「そんなのあたしが聞きたいくらいよ！　あんた一体何をしたの、トモエさんに何をしたってのよ！返してよ、トモエさんを返しなさいよ！」

なんで　と土を問い詰めてはいるものの、その理由にミキも薄々感付いて来ていた。魔法少女がソウルジエムを手離すはずがない。手離して無事なわけがない。そうなると答えは限られてくる。手離さざるを得ない状況に追い込まれたか、もしくはソウルジエムごと『喰われた』か。

しかしそれを認めるわけにはいかない、麻未トモエは自分たちよりにずっと優秀な魔法少女で、憧れの先輩なのだ。魔女に喰われて死んだなど、信じられるはずがない。彼女はただ、その苛立ちを土にぶつけているだけなのだ。

「落ち着けよ。お前がいくら騒いだところで、そいつが戻って来るわけじゃないだろう。それよりもだ、結局これは何なんだ。何故そうも取り乱す必要がある」

肌身離さず持ち歩くほど、この宝石は彼女たちにとって大事なものであることは土にも理解できた。とはいえミキのこの取り乱し様はなんだ。これが今自分の手の中にある。それが意味することとは何なのか。彼にはさっぱり分からなかった。

そしてその問いに答えたのは自分を糾弾するミキでも、満身創痍のアケミでも、ましてやただの女子中学生のカナメでもなく、何処からともなく聞こえてきた謎の声であった。

魔法少女の文字通りの　魂。　そしていずれ『魔女』と言

う名の蝶になる前の蛹……。それがソウルジェムよ、デイケイド。
不意に土の耳に届いた謎の声。不気味なほど妖艶な声に、頭では
なく直接耳に響くこの感触。あの『キユウベえ』のものではないこ
とは明らかだ。

一体何だと振り返った土の眼前に、薔薇の花のような頭に妙齡の
女性の顔が貼り付いたかのような奇妙な顔をし、全身朱色で体の線
がはっきり浮き出るほどぴっちりとしたタイツを纏い、背中に蛇と
何か絡まったかのような不気味な紋章の刺繍の入ったマントをは
ためかせた、土たちと同じぐらいの背丈の、不気味な怪人が立っ
ていた。

その不気味な風貌に誰もが驚いて声も出ない中、怪人は変わった
形のソウルジェムを持つ土に手を伸べた。

「私は『大シヨツカー』の科学技術研究班主任　ドクター・ケイト
。そのソウルジェムはまだ本採用前の試作品なの。悪いけど返し
ていただけないかしら？」

「悪いけど聞いたことねえな。この世界限定の組織のくせして、何
故俺の名前を知っている」

土の問いに、ドクター・ケイトは人差し指を突き立て軽く振って、
彼をやや小馬鹿にしたような口調で答える。

「ずいぶんとスケールの小さい話ねえ。今やこの世界どこかあの
世界もその世界も大シヨツカーの支配圏にあるというのに。もしか
して、知らなかったのかしら？」

「ごちゃごちゃうるせえ。喧嘩を売ってえってんなら喜んで相手に
なるぜ」

彼女の言葉に苛立ち、デイケイドライバーを腹部の前に構える土。
しかしそんな彼らの間に彩花ミキが割って入り、ケイトに剣を向け
た。

「世界がどうか組織がどうかは知らない。けどアンタ、そのソ
ウルジェムを……トモエさんをどうしようっての？」

「あらあら。私は今、デイケイドと話をしているの。邪魔しないで

「ただけるかしら、お嬢さん」

「質問してるのはあたしよ、斬り刻まれて青菜の塩漬けになりたくなかったら、ちゃんと答えなさい」

「血の気の多い野蛮な魔法少女さんだこと。まあいいわ。どうするかって、決まっているじゃない。研究よ。魔法少女を魔女に『変える』には穢れけがが足りない。だから研究所に戻すのよ。たっつぶり穢れを吸い取らせてその子を完全な魔女にするのよ。お分かりいただけたかしら？」

「理解はできたよ。けど！ そんなの、あたしが許さないッ」

魔法少女を魔女にする。そんなことできるものか。わけが分からない。しかし、この怪物は麻未トモエのソウルジェムを使って何か善からぬことを企んでいる。それがなんであろうと許しておいていいわけがない。ミキは怒りと苛立ちを剣に込めて思い切り振るった。しかし激情に任せた太刀筋ほど先の読みやすいものはない。ケイトは右に左に体を捻り、ミキの必死な様子を嘲笑いつつ易々とかわしていった。

「単調な剣捌きね。欠伸が出てしまいそうだわ。お節介かもしれないけど、そんなにかりかりしてちゃお肌に悪いわよ、お嬢さん」

「黙れ、黙れ、黙れッ！ お前、お前エ……トモエさんに、何をしたんだ！」

「飲み込みが悪いわね。私が魔女にしてあげたのよ。たあつぷりと穢れを与えて、この世の何もかもに絶望させて、ね。よく見るとあなたもなかなかいい目をしているじゃない。口で言っただけ分からないと言っなら、貴女もなってみる？ 魔女に」

そう言っって、背中に提げた薔薇の花がついた長尺の杖を構えるドクター・ケイト。何をするかは分からない。しかしその口振りから何か恐ろしい何かを仕出かすであろうことだけは読み取れた。

「ヤバい、何かヤバいぞ。ユウスケ、手伝えッ」

「あ、ああ」

変身！

変身ッ！

KAMEN RIDE 「DECADE」！

士は結界の中にいるユウスケに協力を仰ぎ、自身もバツクルにライダーカードを装填してディケイドに変身。ミキに何かしようとするドクター・ケイトを止めようとしたのだが、ケイトは想定範囲内だと不気味にやりと笑い、左手をさつと振り上げた。

「出でよ、ケイト親衛部隊！ 仮面ライダーを叩き潰しなさい！」
振り上げられた左手とケイトの掛け声に応じ、下りのエレベーターの中から、脇の螺旋階段から、連絡通路の向こう側から、薔薇の花を象った不気味な面をつけた全身タイツの 戦闘員 が山のように押し寄せ、変身したディケイドとクウガに襲い掛かる。一体一体の力は大了ことはないのだが、まるで通勤ラッシュ時の満員電車の車内のようにエレベーター前の狭い通路に押し寄せられては、さしものライダーも身動き一つ取ることができない。

「ちきしょう、邪魔だ、どけッ、どけッ！」

「ああくそっ、どうすればいいんだ……このままじゃ」

戦闘員たちによる足止めにより、ディケイドとクウガは一切手を出せない。ケイトはそれを見計らい、振り上げた右手の杖を振り下ろして叫んだ。

「未来を捨てよ、希望を棄てよ、絶望の闇に身を委ねるがいい！

喰らえッ 『魔女の口付け』！」

魔女・ドクターケイトの叫びと共に杖から黒々とした光線が放たれ、円状の塊となってミキの首をまるで雑巾を硬く絞るかのようにぎりぎり絞めつけ始めた。彼女は両手を使って引き剥がそうとするが、力を込めれば込めるほど、刺々しい形に変化し、自分の手に喰い込んで行く。

「何よ、これっ……力が、力が吸い取られてく……」

首に纏わりついたそれはミキに痛みを与えるだけでなく、魔力までも吸い取っていた。彼女の体から魔力を吸収すると共に徐々に形を成して行き、力を丸ごと吸い取られてミキが元の制服姿に戻る頃

には、光線はケイトの元を離れ、くすんだ銅の首輪となって彼女の首に嵌っていた。

「ミキちゃん！ どうしたの！？ 返事を、返事をしてよミキちゃん！」

「一体何が、何が起こったんですか」

カナメの言葉に答えることなく、ミキは意識を喪失してその場に突っ伏してしまふ。ミキのことは気がかりだが、今はそれどころではない。ミキとサクラ、二人の魔法少女が同時に倒れたことで、カナメたちを守る結界は完全に消失してしまったのだ。そしてそれをドクター・ケイトが見逃すはずがない。

「あらまあ。まだこの街に魔法少女がいるなんて。今日はツイてるわ。実験材料をこんなにもたくさん手に入れられるなんてねえ。さあ、あなたたちも喰らいなさいッ！」

ケイトは先程以上に力を溜め、杖を振り下ろしてかの光線を照射した。あれが一体何なのか、それは分からない。しかしミキのあの苦しみ様からして、魔法少女はおろか常人が喰らって無事で済むような代物ではないことだけは理解できた。

狭いエレベーターの中では避けようがなく、仮面ライダーの助けも期待できそうにない。このままでは全員がやられてしまふ。カナメは三人の身を案じ、皆を守るべく一人光線の前に立ちはだかったのだが、サクラに足を引つ張られて転ばされ、彼女を押し退けて前に出た夏海によって阻止された。

「逃げて……逃げてくださいカナメちゃん、アケミちゃん！」

「この化け物に捕まんのはアタシたちだけで十分だ。カナメ連れてとっとと逃げろ、アケミ！」

「夏海さん！ サクラちゃん！」

「二人の言う通りよ。逃げましょう、カナメ」

「待って、待ってよアケミちゃん……、夏海さんは、サクラちゃんは、ミキちゃんはどうするの！」

「今の私たちじゃあいつには勝てない。ここで全滅してしまつては元も子もないわ」

「でも、でもッ」

そんなことは分かっている。だが痛みを圧して立っているのがやつとの自分にはどうすることも出来ない。アケミは自分の非力さに唇を噛み締め、カナメの言葉も聞かずに彼女を連れてエレベーターの中から姿を消した。

「消えた？ あの黒髪の子は一体どこに……」

自分の視界から忽然と消え失せたアケミを、戦闘員たちがひしめき合うこの空間を見回して探すケイト。焔アケミはその戦闘員たちの中にいた。最後の力を振り絞って戦闘員たちを引き剥がし、ディケイドとクウガの手を握った。

「おい、一体どうなつてやがる。夏海は、お前の仲間たちはどうするんだ」

「助かりたかつたら黙りなさい。舌を噛むわよ」

「いや、そうじゃなくて！ 君の仲間も夏海ちゃんもあそこにッ」アケミは二人の言葉を無視して能力を解放し、この場から消え去った。ケイトもその部下の戦闘員も、行方を追おうと周囲を見回すが、彼女たちの姿はマンションのどこにも見当たらなかった。

見たことも聞いたこともない能力に脅威を覚えたケイトだったが、通路前に横たわるミキと、エレベーターの中で気を失っている夏海とサクラを目にし、にんまりと笑みを浮かべる。

「サンプルが三つも手に入つたし、良しとしましょう。この世界の魔法少女たちが持つ”力”。もうじきそれが私の……いえ、偉大なる大シヨツカーの物となる。もうすぐ。ふふふ、もうすぐ……」

ケイトは不気味な含み笑いを顔に浮かべると、夏海と二人の魔法少女を部下に運ばせ、戦闘員共々”光のオーロラ”の中へと去つて行った。

それでもわたしは、魔法少女だから：そのに〔原作：魔法少女まどか マギカ〕

・「虫」の魔女

その性質は”渴望”。埋まることのない寂しさを癒すべく、その腕で人を片っ端から捕らえて自分の結界の中に閉じ込める魔女。捕らえられた人間は魔女の体の中に取り込まれ、使い魔となって魔女の中で永遠に生き続ける。

”人”だった頃の記憶もおぼろげに残ってはいるが、そのことを語る口も、外界の物音を聞く耳も、物を見る目もこの魔女は持ち合わせていない。

結界の中の壁に描かれた画は、魔女の持つ数少ない”幸せだったころの思い出”。格好までは再現できても、顔まで再現することはできなかった。

この魔女を倒すためには、その寂しさを取り除き、癒すしかない。

・「虫」の魔女の使い魔。

顔と足に相当する部分が腕になっている、見滝原中学校の制服を着た使い魔。その役割は”捕獲”。

こいつに捕まった人間は魔女の体の中に取り込まれ、魂を喰われこの使い魔へと姿を変えられる。使い魔たちに意思はなく、ただ魔女のために人間を捕獲するのみ。

それでもわたしは、魔法少女だから・そのさん【原作：魔法少女まどか マギカ

説明しなきゃいけない設定が多い作品を二次創作化すると、必ずどこかで説明づくのしわ寄せが来てしまう……。今回はそんなお話です。

それでもわたしは、魔法少女だから：そのさん【原作：魔法少女まどか マギカ

”大食い”系少女。花も恥じらう奥床しき美少女が、実は相撲取り顔負けの大喰らいだった……、というような、一般人が考える美少女のイメージの逆をいったもの。

ただ美しいだけのキャラクタに一味加え、より個性的に見せるための設定であり、ライトノベルなどでよく用いられている。

フィクション以外ではそうそうお目にかかれない大層なものを、実際に目の当たりにした時の衝撃は凄まじい。

門矢士と小野寺ユウスケは、テーブルの上に並べられた料理すべてを、『たった一人』で平らげる焔アケミほむひの姿を目を点にして眺め呆けていた。

「こんなの絶対おかしいよアケミちゃん。っていうか、お腹大丈夫なの？ 館長さんに胃薬をもらった方が」

「それには及ばないわ円カナメ。こんなもの、私にとっては食べたうちに入らない……うえつぶ」

「今げつぶみたいなのが聞こえたよ。やっぱり無理してるんじゃない」

「円カナメ、あなたは優しすぎる。いいのよ、気にしないで。私のお腹も、この料理の支払いも」

「なあお嬢さん。残りはもうこの食パンしかないんだけど、どうするんだい？」

「頂くわ。ブルーベリーのジャム、あるかしら」

「いや、マーマレードのしかないけど、それでもいいかな」
「ええ」

士たちがドクター・ケイトの元から逃げ出してから、数時間経

過した。

アケミとカナメは土の口添えて写真館に匿われることとなり、身を潜めた上でケイトへの対策を練らんとしていたのだが、その途中で栄次郎が傷ついたアケミの姿を見て治療と「軽食」を出したことでおかしな方向へと進み始めた。

出された軽食を物の数秒で胃の中に落とし込んだアケミは、「治療など必要ないから、食べ物をもっと持って来て」と栄次郎に要求し、彼も嫌な顔をせずむしろ嬉々とした表情で料理を作って運び続けた結果がこれだ。

「なんでこんなに食べるんだアケミちゃん。やけ食いはよくないって」

「カナメじゃねえが、大丈夫かよお前。食った分はちゃんと代金を払えよな」

アケミはハンカチで口を拭い、二人の問いにげっぷをしたうえで答える。

「傷の縫合は容易く出来るけど、欠損した臓器の補充となると話は別。戦わなければいけない敵はたくさんいるし、魔力をそうそう無駄にはできないわ」

「だからって、吐きそうなほど飯を掻き込むのとそれと、何の関係がある」

「食べたものを魔力で直接体の中に摂り入れ、それを血肉に変えて臓器を補修するの。魔力で全て補うより消費は少なくて済むわ」

「理屈としては分かった。分かったけどよ」

土はむしろそちらの方が効率が悪いんじゃないかと突っ込もうとしたが、食べることに本[・]当に血色が良くなって行く様を目にした今、彼女に対してそれ以上継ぐ言葉を持てなかった。

「っていつか、のほほんとしている場合かよ。夏海ちゃんも、ミキちゃんもサクラちゃんもあの怪人に拐われてしまったんだぞ。なんとかしないと……」

士はアケミの大凡女おおよその子らしからぬ暴飲暴食おおよそぶりに呆れて溜め息をつき、ユウスケはそんな場合かよと士に食ってかかる。

士はそんなに目くじらを立てるなよと言い、ユウスケを手で御して引き剥がした。

「いいわけあるか。しかしな、アテがねえだろアテが。空間を捻じ曲げて異空間を作り出すような相手だぜ。闇雲に探し回ったって時間の無駄だつての」

拐われた夏海たちを救いたい気持ちは士も変わらない。しかし脇目も振らず逃げ出して来た彼らには、ケイトの居場所を示す手がかりがなかったのだ。

「そりゃアテは……ないけど、それだけで諦めるのかよ士。手がかりがないんなら足で捜して探し回るだけだろう。臆病風にも吹かれたか」

「んなわけあるか。普通に探しても意味がないから無駄だと言っている。何故それが分からない」

「いつもの土らしくない。それこそ、やってみなきゃ分からないじゃないか。お前、あの魔女のことが怖いんじゃないのか？」

「だから違っつて言ってるだろうが！ 喧嘩売ってんのかお前は」
不安から来る動揺に駆られ、落ち着けないのは士も一緒だった。

食ってかかるユウスケを宥なだめようとしたものの御し切れず、互いに胸倉を掴み睨み合う言い争いへと発展してしまう。

「落ちついてくださいお二人とも！ アケミちゃんもほら、手伝つてよお」

「あれはあの人たちの問題。私たちには止められないし、止める権利もないわ。放っておきなさいカナメ」

「争ってたって何の解決にもならないんだよ。止めなくちゃダメだよ」

カナメは仲裁にと二人の間に割って入ろうとするが、アケミにやるだけ無駄よと一蹴される。どうすればいいんだろうと、カナメが顔に戸惑いを浮かべ溜め息をついたところだっただろうか。その

”声”は何の前触れもなく彼女たちの頭の中に響いた。

”手掛かり”ね。ないことはないよ。そうだろう？ 焰アケミ。
「この……声は、まさか」

”キユウベえ”だな。どこにいやがるんだ、姿を見せろ”
頭の中に響き渡る少女とも少年とも取れない不可思議な声。未だに姿を見せようとしなない謎の存在、”キユウベえ”のものだ。

カナメと土はどこにいたるとばかりに周囲を見回すが、当然のようにその姿はどこにもない。そのことが分かっているのか、アケミだけは全く動じず、栄次郎が食後にと出したコーヒ^{すず}ーを啜っていた。

さつきも言っただろう？ 僕はこの場にはいない、探したって無駄さ。これは念話^{テレパシー}。声ではなく君の心に直接語りかけているんだ。そんなにいきり立って大声を出さなくても、心の中で念じさえすれば通じるよ。彼らに余計な心配をかけたくはないだろう？

「余計な心配って、どういうことだよ」

「きゆうべえ”って何だよ。土お前、誰と話しているんだ？」

「上向いて何を言っているんだい土君。ああ、上の方にキバーラちやんでもいるのかい？ いやいや、さつきからどこに行ったのか分からなくてさあ」

上ばかり向いている土に対し、ユウスケと栄次郎は誰と話しているんだと問いかける。”念話”だと言うのなら、当然彼らにだって聞こえているはずだと思っていた土は、自分が今とんでもない奇行に走っていたことに気付かされ頭を抱えた。

なんでもないと強引に押し切り、言い寄る二人を引き剥がすと、腕を組んで目を閉じ、キユウベえに生じた苛立ちを思い切りぶつ切た。

「なんでこいつらには聞こえていないんだ。どう考えてもおかしいだろ！」

僕の声は僕と出会ったことがある人間か、僕と契約を交わした

魔法少女にしか聞こえないからね。そんな君が僕の声を聞くことが出来るのは、君がこの世界から拒絶されているからだろ。異端の存在だからこそ、僕は”交信”に必要な君の”波長”を特定することが出来た。というわけさ。

「分かったような分からないような。それはまあ置いて、だ」「キユウベえ！ アケミちゃんが”手掛かり”を持ってるって話、本当なの！？」

士とキユウベえの会話に横槍を入れて割り込んだカナメ。

士は不愉快そうに目を閉じたまま眉間に皺を寄せるが、彼にとっても気になる事柄だったので直接言及せず流した。

キユウベえがそれに答えるよりも早く、先程から沈黙を守っていたアケミが口を（正確に言えば心を）開いた。

「私の持っているソウルジェム。当然、これのことよね」

理解が早くて助かるよ。そうだ、その通り。ドクター・ケイトは今、”この街”のどこかにミキヤサクラたちを連れ込んで”研究”を行っている。正確な場所は僕にも分からない。けれど、ソウルジェムには魔女や同類の”魔法少女の”気配を探る力がある。それを辿っていけば二人を見つけ出すことなど造作もないだろうね。

「そうは言うがな、何故奴がこの街にいと分かる。お前にだって居場所は掴めないんじゃないのか？」

出るべくして出た当然の疑問に、キユウベえは何か考えるように軽く唸った後、口を開いた。

そりゃあ分かるさ。何せ僕は今、ドクター・ケイトに”捕まってる”彼女の研究の手伝いをさせられているんだからね。尤も僕の持つ知識を、彼女が勝手に抜き出して利用しているだけなんだが。

キユウベえの口を突いて不意に出た衝撃の一言。

カナメからは驚きの、士とアケミからは怒りの声上がるが、キユウベえはそれらを無視して言葉を継いだ。

今まで言えなくてすまない。けれどこちらにも事情があつたんだ。ドクター・ケイトに捕らえられた僕は、テレパシーを遮断する特殊な空間の中に放り込まれて身動きが取れなくなった。どうにもならなくて困り果てていたんだが、そこにデイケイド、君が現れた。君の波長を探り出して交信し、アケミと引き合わせて、君を電波の『中継地点』にすることで、君たちと話をする事ができるようになったのさ。

「待てよ。じゃあなんで俺と話ができた時にそれを言わなかった。あの時伝えていればもっと早く事が済んだんじゃないのか」

そうしたかったさ。しかし君が大シヨツカーの手の者である可能性だつて否定できなかった。味方とまではいかないけれど、敵でないという確証が持てない限り、話すべきじゃないと思つてね。

キュウベエの言っていることは正しい。姿も目的も異なるが、別の世界からの厄介者という意味では、彼ら二人に大した違いはない。そう思つて押し黙る土に代わり、キュウベエはさらに話を進める。ドクター・ケイトは魔法少女を人工的に魔女にする技術を手に入れた。彩花ミキに京極サクラ。あの二人もいつまで魔法少女でいられるものか……。

「ちよ、ちよつと待つてよキュウベエ！ それつて一体、どういうことなの！？」

魔法少女を魔女に変える。敵はそんな恐ろしいことまで出来るといつのか。カナメはあまりのことに念話の言葉を声に出してしまつた。

キュウベエはカナメの問いに、当然の疑問だねと淡白な言葉を返した。

”希望と絶望は差し引きゼロ”。希望を願つた分だけ、その心には絶望が溜まる。魔法少女は人々に希望を振りまく存在だ。けど、

その心が絶望で埋め尽くされたら……どうなると思う？

「それは、えと、あの」

「希望の代わりに絶望を撒き散らす……。 ” 魔女 ” と同じになる、
つてことか」

動揺し、心の中でさえ上手く言葉を継げないカナメの代わりに、
士が言葉を返した。

その通りだ。そしてなるべく急いだ方が良い。あの二人をそこ
にいる麻未トモエのようにしたくなかったら、ね。

「そこにいる、つて……トモエさん、わたしたちの近くにいるの？」
いるも何も、トモエなら君が大事そうに握っているじゃないか、
カナメ。

何を馬鹿なことをと不思議な顔をし、掌の中の黒く濁った格子付
きのソウルジエムに目をやるカナメ。

トモエの大切な持ち物であることに違いはないが、それが一体何
だと言うのか。

意味が分からないよと首を傾げるカナメに、キユウベえは残酷な
事実を容赦なく突き付けた。

だから、それが麻未トモエなんだつてば。肉体などという外付
けハードウェアを廃した、魔法少女の『本来の姿』さ。

悪びれる様子もなく一步調子で淡々と呟くキユウベえ。

自分が手にしているものの正体を知ったカナメは、麻未トモエの
『魂』たるソウルジエムを強く握り、抱き留めるように体を丸めた。
「待つてよ、ちょっと待つて。これはあの魔女の体の中から出てき
たんだよ？ じゃあこれは……トモエさんは一体どうなっちゃった
の！？」

蒼い顔をして歯を鳴らし、頭を抱え小刻みに震えるカナメ。彼女
も薄々感付いていたのだ。

ドクター・ケイトは魔法少女を魔女に変える技術を人工的に生み
出した。円カナメが今手にしているのは、魔法少女・麻未トモエの

魂の結晶たるソウルジェム。

トモエは数日前からカナメたちに何も告げずに姿を眩ましており、彼女たちはその行方をずっと追っていた。

ここまでくれば、答えはもう一つしかない。

「トモエさんは『魔女にされて』、土さんに『殺された』ってこと……なの？」

殺された？ それは違うよカナメ。少し歪な形をしてはいるが、トモエは君の手の中で『生きている』じゃないか。ドクター・ケイトの研究はまだ未完成。魔法少女を魔女にし切ることにはできないみたいだね。

「そういう……そういう問題じゃないよキュウベえ！ トモエさんが死んでしまったんだよ？ なんでそんなに平気でいられるの!？」
冷静さを欠き、目に涙を溜めてキュウベえを糾弾するカナメ。

しかし当の本人はカナメに謝るところか失望の意を込め、溜め息をついて彼女に言葉を返した。

君たちはいつもそうだ。『肉体』なんて魂の 容れ物 ではないのに。どうして君たち人間はそもそも魂の在りかに拘るんだい？ わけがわからないよ。

信じられないくらい話が噛み合っていない。怒りと絶望が込められたカナメの言葉を、悪びれることなくのらりくらりとかわして行くキュウベえに対し、一連のやりとりを聞いていた土は、人間とは違う”何か”と底知れぬ恐怖を抱いた。

このままではカナメが真実の重さに耐え切れず、壊れてしまう。その場に膝をついて泣き出したカナメを、焰アケミは動揺する素振りすら見せずに抱き締めた。

「あいつの言う通り、麻未トモエはそうだった。それは変えようのない事実。でも彩花ミキと京極サクラ、あの二人まで魔女になったと決まったわけじゃないわ」

同じことを聞いたはずなのに、自分たちにとって大切な先輩が魔女となって死んだというのに、何故彼女はこうも冷静でいられるのだろう。カナメの疑問は増える一方だ。

しかし、そうなるの一つの疑問が浮かび上がる。士は彼女たちを尻目にキュウベえに自身の疑問を投げ掛けた。

「ちよつと待て。ミキとサクラについてはそれでいいかもしれないが、魔法少女じゃない夏ミカンはどうなるんだ。一人だけ特別待遇ってわけにはいかないだろう」

光夏海。だったかな。彼女も同様の首輪を付けられているよ。

魔法少女じゃないから魔女にはならないと思うけど、心の中に絶望が溜まったら、魔法少女じゃなくなっちゃって大変なことになると思うよ。耐えきれなくなっちゃって発狂するとか、やりきれなくて自ら命を絶ってしまうとかね。いずれにせよ、無事では済まないと思うな。

「予想してはいたが、やはりそうなるか。仕方がねえな」

士はキュウベえに当たり障りのない言葉を返すと、アケミに目配せをして立ち上がる。

敵を追う手掛かりは割れた。これ以上野放しにしておく理由もない。後は動き出すだけだ。

二人は揃って扉の前に立ってドアノブを握るが、カナメとユウスケに待ってくれと呼び止められた。

「アケミちゃんお願い、わたしも連れて行って！」

「無理よ。いくらカナメの頼みでも、それだけは出来ない」

「嫌だよ、このまま黙って待ってなんかいられない！ お願いだよアケミちゃん」

その気持ちはよく分かる。だが彼女を連れて行ってもいたずらに危険に曝すだけだ。

カナメの目に気圧されて何も言えないアケミの代わりに、士が彼女たちの間に割って入った。

「俺ア前に言つたよな。」お前はあいつらと同じ土俵にすら立つていない””つてよ。戦う力も意見する理屈もねえくせに、文句ばかり垂れてんじゃねえ」

不機嫌そうな顔で荒々しく鼻を鳴らす土に、彼の言葉に打ちのめされ、今にも泣き出しそうな顔で俯くカナメ。

もういいだろうと言い、再びドアノブに手をかける土の手を、今度はユウスケが押さえ込んだ。

「お前まで何だ。急いでるんだ、後にしろ」

「カナメちゃんを巻き込みたくない気持ちは分かる。けど、俺まで放つておくことはないだろ」

そう言つて息巻くユウスケに対し、土は「そうじゃない」と彼の首を強引に捻つて、視線をカナメの方へと向けさせた。

「お前はカナメのお守りだ。こういう輩は言つたつて止まりやしねえ。分かるか？　これはお前にしかできない、お前だからこそ任せられる仕事なんだ、小野寺ユウスケ」

土にそう諭され、ユウスケはカナメの方へと目をやった。

納得したと言つてはいたが、今尚土の顔を親の仇だと言わんばかりの怒りを込めて睨み付けている。諦めてなど微塵もないことは火を見るよりも明らかだ。

ユウスケには土たちの話は全く伝わっておらず、従つて何故カナメが彼にこんな目を向けているのかも分からない。

しかし、この目をした人間が危険であることは分かる。今カナメを自由にしてしまえば、その行動によつて彼女一人だけでなく、もっと多くの人々を悲しませてしまうだろう。

納得したくはないが仕方がない。世界中の人々の笑顔を護るのが自分の仕事なのだから。

ユウスケはドアノブから手を離し、その手でカナメの右腕を掴んで神妙な面持ちで首を縦に振つた。

「そつだ、それでいい。後は頼んだぞユウスケ」

今度こそ邪魔する者は誰もいない。ドアを開けて外に足を出す土

に対し、再びカナメが声をかけた。

「しつこいぞ。いい加減にしろ」

「そうじゃありません。ありませんけど……、この先どうするつもりなんですか！ 土さん、アケミちゃん」

答えるのが嫌なのか、アケミは背を向けて何も言おうとはしない。逆に土は首だけカナメたちの方に向けて決まってるだろと言った上で踵を返す。

「そんなもん、俺たちにだって分からねえよ」

ぶつきらぼうにそう付け加え、アケミと二人で光写真館を後にした。

「どうだ、反応は追えそうか？」

「ソウルジェムの輝きが徐々に強くなってる。次の交差点を左折して頂戴」

「あいよ」

焰アケミは、門矢土の運転するバイク・マシンデイクイダーの助手席に乗って街中を周り、ケイトにさらわれ異空間に隔離されたミキとサクラの行方を探っていた。

頭よりも少し大きめのフルフェイスヘルメットを被って助手席に座ったアケミは、右手で土の腰を掴み、左手に宝石の形を成したソウルジェムを掲げ、ミキとサクラの姿をイメージし続ける。

搜索範囲は広いが、バイクに乗って街を駆け回っていることもあり、二人の反応を捕捉するのにそれほど時間は掛からなかった。

求めに応じて、土はウインカーを出すのとほぼ同時に、殆どスピードを落とさず交差点を左折する。

アケミはそうして生じた慣性で振り落とされそうになるが、あばら骨が折れんばかりの勢いで土の腰を掴み、なんとか耐え凌いだ。

「なんてスピードなの。交通法規ぐらい守りなさい。殺すつもり？」

「三人もの人間が死にそうだって時だぜ。少しぐらい大目に見るよ」
「違反者の定例句ね。私が警察官だったなら迷わずに反則切符を切るわ」

そんなことを話しているうちに信号が赤に変わる。急いではいるが、赤ともなると話は別だ。土は仕方なくブレーキを踏んで横断歩道の前でバイクを止めた。

信号が赤から青に変わるまでの間、気を紛らわそうと土は思案する。さらわれた夏海やミキたちの安否、魔女のこと、ドクター・ケイトのこと。そして、自分の後ろに無愛想な顔をして跨るこの少女のこと。

よくよく考えると焰アケミが一番の謎だ。知り合いが二人、醜悪な化け物の仲間入りを果たそうとしているというのに、何故こうも落ち着いていられる。何故取り乱さない。

土がその疑問を口にしようとしたその時、アケミはそれに言葉を被せるように口を開いた。

「キユウベえも言った通り、私たち魔法少女の核はソウルジェム。あの二人……特に彩花ミキは、ジェムを直接叩かない限り何度だって怪我を治して襲ってくるわ。あの子のソウルジェムは服の下のおへその青い宝石、京極サクラは胸元の赤い宝石がそれよ。しっかり覚えておきなさい」

「なんだいきなり。何故そんなことを言う」

「何故も何も、知っておく必要があるからよ。あの二人を相手にした時、それともしも私があの子たちと同じようになってしまった時のためにね。それで、私は……」

「そうじゃない。そんなことを言ってるんじゃないよ俺は」

淡々と話すアケミに向け、土は語気を強めて言葉を返す。

諦め切ったように冷たく淡々とした口調で、ミキとサクラはおろか自分のことをも省みないアケミの言葉が気に食わなかったのだ。

「俺たちは今からあいつらを助けに行くんだぞ。やる前から諦めた

ような言い方をするのはやめる。気分が悪いんだよ」

言い終わるが早いのか、信号が赤から青へと切り替わる。

背後の車のクラクションに急かされた土は、ブレーキレバーから手を離すと同時に、思い切りアクセルを踏み込んで街道を突っ切って行く。

アケミは左手でソウルジエムを握り締め、振り落とされまいと土の腰を掴む右腕に力を込めた。

風すら追い越す猛スピードの中で、なんとか体を安定させたアケミは、無理なものは無理と土の問いに答えた。

「穢れを溜め込んで、絶望に打ちひしがれた魔法少女は魔女になるしかない。救うことなんて不可能よ」

「だったらその元とやら、あの首輪を叩き壊せばいい。穢れを浄化するグリーフシード、だっけか？　そういう道具があるんだろう？

問題ないじゃねえか」

「そうね、その通り。でもそれは一時の気休めに過ぎないわ。麻未トモエ、彩花ミキ、京極サクラ。あの三人は遅かれ早かれ、魔女になる運命なのよ。それは変えられないわ」

「運命、だあ？　何故お前にそんなことが分かるんだ」

喫茶店で話をした時から思っていたことだが、焔アケミの態度や言動はどうにも理解し難い。

同じ魔法少女であるミキやサクラとは違った意味で浮世離れしており、掴み所がない。

アケミはフルフェイスのヘルメットのバイザーを開き、言葉通りの意味よと呟いて話を起こした。

「キユウベえと契約して魔法少女になった女の子には、魔女と戦うための武器と、叶えたい願いに応じた祈りに沿って特殊な力が与えられるの。例えば、彩花ミキが持つ他者や自分に向けての回復能力。あれは彼女が癒しの祈りを契約に使ったからこそ得られたものよ」

「アフター・ケアってわけか。命懸けの戦いを強いられる魔法少女に対する」

何の気なしに士の口を突いて出たその言葉に、アケミは怒りに満ちた鋭い目付きで「そんな優しいものじゃないわ」と冷やかな口調で返した。

「それはともかく、私に与えられたのは何でも無尽蔵に収納出来る”盾”と『時間を止め』、『時間を戻す』能力。私はこの力で何度も時を戻し、このくだらない世界を変えようと戦ってきた。時を戻して、何度も、何度もね」

時間を操作・干渉する能力。滅茶苦茶ではあるが、突然消えたり現れたりを繰り返していた理由には納得がいく。どうりで気配すら掴めない訳だ。

彼女の言うことが本当ならば、その不可解な言動や態度にも得心が行く。

他の二人と比べて妙に落ち着いた態度。寸分の無駄なく能力を使役して戦う姿。他者の命はおろか、自分の命にさえも興味を示さない冷徹さ。そんな中で時折見せるカナメへの愛情と、他の魔法少女に対する不器用な接し方。

焰アケミは元から冷たい人間だったのではなく、延々と続いた時間旅行の中で『壊れて』しまったのだろう。

「驚かないのね」

「んなことで一々驚いてちゃ、世界を巡る旅なんてできねえっての」
内心かなり驚いているが、士はそれを微塵も見せることなく素っ気ない言葉で返す。

彼はその上で、自分の抱いていた疑問をアケミに投げ掛けた。

「お前のことはだいたい分かった。しかし何故あぁも必死に円カナメを護ろうとするんだ？ お前とあいつ、ただの友達同士の関係にしちゃあ行き過ぎてるように見えるんだがな」

士が何気無く発した問いにアケミは何も答えない。

「おいおい、ここまで来てだんまりはないだろう。洗いざらい吐か

なきや振り落とすぞ」

黙して何も語らないアケミに対し、土は語気を強めると共にアケミを踏み込んで物騒な脅しをかける。

脅しに屈したのか、ようやく話す決心がついたのか、アケミは喉元から絞り出すような声で言葉を紡ぎ始めた。

「それが私の願いだからよ。もう一度過去をやり直したい、円カナメともう一度笑い合いたい。ただ、それだけだった……」

土の返答を待たずして、徐々に声量を上げつつアケミの話は続く。

「あの子は、円カナメは『私を魔女から庇って』死んだの。私なんか放っておけばよかったのに、そうすれば勝てたっていうのに！」

「勝てた……って、あいつも魔法少女だったのか？ そいつは初耳だぞ」

「今 とは別の時間軸での話。円カナメは凄まじい力を持った魔法少女だったわ。ミキやサクラ、トモエさんだってあの子の足元にも及ばないくらいにね。それでも死んだわ、私なんかを庇ったせいだね。もうあんなことは二度と起こさせない。どんな犠牲を払っても、その果てに私がどうなるうと、カナメだけは魔法少女にさせない。だから私はここにいる。それだけよ」

「それがお前の存在理由か。だいたい分かった。分かったが……、はっは、全くお笑いだ」

どうしたことか、アケミの話を聞き終えた土は突如大きな声で笑い始めた。

こちらがどんな覚悟でこの話を切り出したかわからないのかと激昂し、両腕で土の首を絞めるアケミ。土は馬鹿野郎、二人揃って事故うちまうぞと声を荒げて切り返す。

「じゃあ何だと言うの、私を馬鹿にしているの？」

「いやな、おかしくておかしくて。時間旅行なんて大層なことが出来るくせに、考えることが小せえなあと思ってたよ」

「やっぱり馬鹿にしているのね。ふざけないで」

首を締める感触が消え、その代わり背中に拳銃の硬く重々しい感

触が掛かった。

たちの悪い脅しだと笑ったが、バックミラー越しに見えるアケミの瞳は暗く濁っている。本気で撃とうとしているに違いない。

「落ち着けよ。そんなモンを突きつけられちゃあビビって話もできやしねえ」

「だったら訂正しなさい。それぐらいならできるでしょう」

「分からないな。本当のことを何故訂正しなきゃならねんだ？」

「まだそんな減らず口をッ」

背中に銃を突きつけられても尚、まるで態度を変えようとしな
士。

そんな士に苛立ち、さらに力を込めて彼の背中に銃口を突き付け
るアケミ。話し合いは悪い意味で平行線を辿る一方だ。

大人かどうかは分からないが、年齢だけ見れば自分の方が年上だ。
士は仕方がないかと溜め息を漏らした。

「ふざけているのはお前の方だろ。自分や周りのやつらすら蔑ろに
して、カナメさえ無事ならそれでいい。それで誰かを救った気にな
っているとしたら、それこそ馬鹿げている」

「そのどこがふざけると言うの。私はただカナメのために」

「あああ、やっぱり何も分かつちやいねえ。自分を強く見せようと
必死みたいだが、やはり子どもだな。底が浅いんだよ」

士は何がおかしいのかと食い下がるアケミに向けて、とどめの一
言を畳み掛けた。

「カナメのためだあ？ 結局はてめえの自己満足じゃねえか。お前
はその果てに満足して逝けるだろうな。だが残された方はそうはい
かねえ。大切な友達が全員死んじまって、カナメがまともでいられ
ると思うのか。馬鹿馬鹿しくてヘドが出らあ」

士が話し終える頃には彼の背中に当たっていた銃口の感触が消え、
代わりにアケミの噁り泣く声すすりが彼の耳に届いてきた。

士は振り向かずにアケミに問う。

「泣くってことはお前、そうなると分かってやってやがったな。な

らば何故、運命に抗おうとしない。何故変えようとしなない」

アケミは左手の袖で涙と鼻水を拭い、涙ながらに答えを返す。

「やらないんじゃない、できないの。出来るのなら最初からそうしたわよ！ でもカナメ一人の運命を変えるので精一杯の私に、大勢の人々の運命を変えることなんてできっこないじゃない！ こんなことをしてもあの子の笑顔が戻るだなんて思っただけ。それでも、あの子には生きていてほしいのよ」

柄にもなく取り乱し、必死の弁解を続けるアケミ。

それを聞いた土は悪かったと詫びを入れた上で、アケミの頭を後ろ手で優しく撫でた。

「そりゃそうだ。一人でどうこうできるような話じゃない。でもよ、お前は忘れちゃあいないか？ 自分の目の前に誰がいると思ってる」「誰って、それは」

「そう、俺だ。お前が巡ってきた時間の旅にやあいなかったはずだ。この俺、仮面ライダー・デイケイドはな」

泣きじゃくるアケミを元気付けようと、土は明るく力強い声で語りかける。

だが、バックミラー越しに見えるアケミの表情は依然として曇ったままだ。

「気持ちとは分かんなくてもないが、そんなに信用できないかね、俺はよ」

土の問いに対し、アケミは曇った表情のまま「信用してはいるわ」と返して言葉を継いだ。

「でも、この世界の闖入者ちゆうにゅうしやはあなたたちだけじゃないのよ。破壊者って意味ならドクター・ケイトだって同じじゃない」

「何かと思えばそんなことか。心配性だな、お前はよ」

道路脇にバイクを止めて振り返り、肝っ玉の小さい奴だと呟くと、土は彼女の脇腹を思い切りくすぐった。

不意討ちに対応できなかったアケミは執拗なくすぐりに堪えきれず、人目も気にせず大きな声を上げて笑い始めた。

もうやめてという言葉の代わりに自分の肩を何度も叩くアケミに
応じ、土はくすぐるのをやめて口を開いた。

「お前の言う通り世界の破壊者は今二人いる。この先どう転ぶかは
正直、俺にだって分からねえ」

「それとつ、このくすぐりに何の関係があるのよッ」

「分からねえなら分からねえでいいじゃねえか。だからその分”笑
う”んだよ」

「笑うって……、こんな時に何を言うの」

「馬ア鹿、こんな時だからこそだ。暗い顔して塞ぎ込んでちゃ、勝
てる戦にだって負けちまう。いいか、お前はもう一人じゃない。世
界の破壊者デイケイドが味方についてるんだ。目を見開いて胸を張
れ。何もかも奪い返してやるうぜ、あの生意気な薔薇の化け物から
よ」

右手で指鉄砲を作ってアケミの顔を狙い撃ち、口元を吊り上げて
笑みを見せる土。

本当に彼がどうにかしてくれるのか、それは分からない。しかし
事情を知っても尚、自分や仲間たちのために協力してくれると言っ
てくれている。これほど頼もしい相手もない。

上手く言葉を継げずに俯くアケミに、土はいたずらっぽく笑みを浮
かべて彼女の額を人差し指で軽く突いた。

「いつまでも気負ってねえで顔上げる。ユウスケあいつじゃねえが、同じ
顔なら染つたれてるよりも笑ってる方がずっといい。さっきのあの
笑顔、悪くはなかったぜ」

「……ばか」

頬を紅潮させてそう呟くと、アケミは土の背中に顔を埋める。

土は後ろ手で彼女の頭を撫でると、デイケイダーのハンドルに差
さったエンジンキーを回し、右側のウインカーレバーに手をかけた。
「それで、ソウルジェムの方は今どうなってんだ？」

「あ……、かなり近いわ。一般道を抜けて、その先の路地を右にお
願い」

「あいよ」

バックミラーをちらと見て後続車両がないことを確認した土は、アクセルペダルを思い切り踏み込んで再びマシディケイダーを走らせた。

「……ここで、間違いないんだな？」

「彩花ミキ、京極サクラ。暗く淀んだ二人のジェムの感覚が私の心に直接伝わってくる。間違いようがないわ」

ソウルジェムの反応を追って土とアケミが足を踏み入れたのは、街外れにひっそりと建った鋳物工場の跡地。

所狭しと並んだ赤錆だらけの鋳造機に、鼻を突く錆びた鉄の臭い。稼働を停止してからかなりの年月が経過したことが見て取れる。

焔アケミはその奥にある、立入禁止の札が架けられた扉の前で足を止めた。

札を外して中に入ってみるが、そこにあつたのは鋳造しそこなつた歪な形の鉄鋼資材だらけで、ドクター・ケイトたちの姿は影も形もない。

「おいおい、奴らどころか手掛かりすらないぜ。本当にここでいいのかよ」

「問題ないわ。扉を閉めて」

求めに応じ扉を閉めたのを見計らい、アケミはソウルジェムを握り締めて魔法少女に変身して扉の前に右手を翳した。

翳した右手が淡く紫色に光る。それと同時に何もなかった扉に怪しげな魔法陣が現れた。

「なんだなんだ、お前何しやがった」

「結界に繋がる”道”を開いたのよ。自発的に魔女の結界に入り込むことが出来るのは魔法少女だけだから」

「そうかい。んじゃ、とつとと乗り込むとしようぜ」

眼前に広がるどこまでも深い闇に物怖じすることなく、先陣を切って魔女の結界へと足を踏み入れる土。

恐怖だとかそういうものはないの、と言かけた上で、焰アケミも後に続いた。

右も左も上も下も分からない闇の中をただひたすら前に進み続けた先に広がっていたのは、『不気味』としか形容しようがない空間だった。

虹色の空の下、一面に綺麗な薔薇が咲き乱れた中で、小さな子どものような”何か”が玩具の飛行機を持って薔薇園を踏み荒らし、羽の生えた裸の操り人形がその子どもをどこかに連れ去り、足元に目をやると苺の実に犬のような手足の生えた生き物が、せわしなく辺りを駆け回っている。

地上の様子に辟易し視界を頭上に移すと、何も入っていない無数の鳥籠が所狭しと空を舞い、黒い影の触手が先の子どもを抱えた操り人形を絡め取り、次から次へ地表に叩きつけ壊している。

先刻戦った魔女　麻未トモエの創りだした結界にはまだ規則性があった。しかしこの空間にはそれがない。単色のパレットの中に無秩序に絵具を混ぜ込んでぶちまけたような気持ち悪さだ。

「どこに目をやっても気色悪いな。どうなってんだよ」

「あの薔薇の化け物は”魔女を精製”するために『複数の魔法少女をさらったと言っていた。魔女の結界はその元となった魔法少女が生前望んだ”願い”が歪んで生まれる。だとすれば答えは簡単ですよっ?」

「魔女になって歪んだ魔法少女たちの願いが、ごちゃ混ぜにされてこうなった……、ってのか?」

その答えにアケミは何も言わず頷いた。土はひでえことしやがると吐き捨て、物憂げな顔で結界の中を跋扈する怪生物たちを見つめる。

ドクター・ケイトに対し怒りの炎を燃やしているのか、彼女によってこのような姿に変えられた顔も知れない魔法少女たちを憂いているのかは分からない。

二人は互いの顔を見合わせることなく、ソウルジエムの反応を頼りにし、ただひたすら前へ前へと進んで行った。

薔薇の咲き乱れる平野道を抜け、二人は『凱旋門』を模した見上げるほど大きな門の元へと辿り着く。

門の前には分厚い鉄の扉が立てられており、中がどうなっているのかは窺い知れないが、門の前に立ったアケミの顔が熟れ足りないトマトのように蒼褪^{あせ}め始めた。

士はそれほどまでの穢れがこの先に広がっているのだろうかとうと理解し、荒い息を吐いて足元をぐらつかせるアケミに肩を貸した。

「おいおい、戦いを前にして何へばってんだよ。ここまで来て怖くなったか？」

「見損なわないで。立ちくらみがしただけよ」

自分は戦える。助けはいらなと言わんばかりに、士の手を強く撥ね退けるアケミ。

士は怖い怖いと大袈裟に両手を振って、彼女の頭を軽く叩いた。

「痩せ我慢でも何でも、そんだけ言えりゃあ十分だ。俺アそういう奴は好きだぜ」

「だから、そんなのじゃない」

「隠すな隠すな。んじゃ、いつちよ派手におっぱじめようかね」

変身

KAMEN RIDE 「DECADE」!

バックルを腹部に押し当て、ライダーカードをドライバーに装填。仮面ライダーディケイドに変身した士は、ライドブツカーからファイナルアタックライドのカードを取り出してガンモードへと組み換えた。

「何をするつもりなの」

「正念場はこつからだ。こんなところで魔力を無駄にすることもねえだろう?」

FINAL ATTACK RIDE 「De - De - De - DECAD E」

DJがディスクを擦るようなスクラッチ音と共に銃口から放たれた桃色の光弾は、分厚い鉄の扉を粉々に砕いて吹き飛ばす。ディケイドは銃口を口元に寄せて吹き消すような仕草を見せると、砂埃舞う扉の奥へと足を踏み入れて行った。

その先にあつたのは、長椅子が末広がりになり、七色のステンドグラスが周囲を照らす奥行きの広い礼拝堂のような場所だった。

” ような” 場所ではあつたが、建物の億に置かれていたのはパイポルガンでも偶像でもなく、体に悪そうな液体が詰まった、目を覆うほどに巨大なカプセルと、それを制御する計器類の山、山、山。二人は唇を噛み締め銃を構えて、そろりそろりと歩を進めて行く。ドクター・ケイトはそのカプセルの前にいた。二人はケイトが足音に気付いて振り返った瞬間に光弾と銃弾を叩き込み、彼女を地に伏せさせた。

「く、うう……あなたたち、どうしてここが分かったの!」

「悪いがそいつは企業秘密だ。知りたきゃ俺たちに勝ってみな」

「彩花ミキ、京極サクラはどこにいるの?」

机に寄りかかり、必死になって立ち上がろうとするケイトに、尚も銃弾を浴びせるアケミ。

そのうち数発が机の上に跳弾し、色取り取りのコードが刺さった小動物用のケージに当たる。大鋸屑おがくずを敷き詰めたケージの中には、白い体に耳の穴からさらに長い耳を生やした、赤い目の猫のような生き物が入れられていた。

「なんだこいつは。ペットか何かか」

「こいつが”キュウベえ”よ。私たちの頭にテレパシーを送り込んできた張本人」

「キュウベえってあのキュウベエ!? こいつがそうだったのか?」
目の前にいるのは可愛らしい小動物だ。俺たちはこんなやつに踊らされていたというのか。

そんな馬鹿なと声を上げるディケイドの頭に、少女とも少年ともつかない声が響いた。

そう、僕がキュウベえだ。とてもぶん殴る気にはなれないだろう?

「ああもう、喋んな。マジかよ……、おい」

「今はそんなことどうでもいいでしょう。それよりも」

ディケイドの脛脛を蹴り付け、彼の注意をケイトに向けさせようとするアケミ。ディケイドは蹴られた右足の脛脛をさすりつつ、未だに立ち上がれないでいるケイトの頭にライドブツカーの銃口を向けた。

「ああもうツ、やってくれるじゃない。お探しの女の子たちは……この子たちかしら?」

脚ばかりを執拗に狙うアケミの銃撃に辟易し立ち上がるのを諦め、代わりに右手をさつと振り上げるケイト。

風をも切り裂く鋭い音が耳に届いたその刹那、アケミの体は礼拝堂のステンドグラスを破つて、先の不気味な空間へと放り出された。涙の跡が痣のように顔に残り、刺々しく黒い首輪を付け、生気を感じられない表情を顔に浮かべた彩花ミキと京極サクラの二人によって。

「アケミ! 待ってる、今行くツ」

「お待ちなさいなディケイド。あなたの相手は、この娘よ」

右手に続いて左手を振り上げるケイト。彼女の求めに応じ姿を現したのは、ミキたちと同じように涙で顔を腫らし、絶望し切った表情を浮かべた光夏海だった。

「夏ミカン……、お前何やってんだ。さっさと爺さんとこに帰るぞ」

ディケイドの言葉に夏海は何も答えず首を横に振り、どこからともなく飛んできた”白いコウモリ型のモンスター”を掴んで彼の目

の前に掲げた。

「あなたにディケイドドライバーを渡したのは大きな過ちでした。土君、あなたは世界の破壊者です。その運命からは逃れられないし、どうやっても変えられない。これ以上世界を破壊すると言うのなら、わたしがあなたを倒します」

変身。

ディケイドの制止も聞かぬまま、白いコウモリを自分の右手に噛ませる夏海。

彼女の頬にステンドグラスのような模様が浮かび、同時に腹部に現れたベルトにコウモリが取り付き、一体となる。

眩い光に包まれた夏海は、白と紫を基調とし「仮面ライダーキバ」にも似た異形の戦士へと姿を変えていた。

「わたしは……『仮面ライダーキバ』！」

「そんなことは聞いてねえ！ やめろ、やめるんだ夏海」

腰に差したサーベルを構え、ディケイドに斬りかかる夏海。

ケイトはよろよろと起き上がって椅子に座り、争い合う二人を見て嫌味たらしく口元を歪ませた。

「魔法少女じゃなくてどうしようかと思っただけど、まさかこういう使い方が出来たとはねえ。私のことに気付いて色々と嗅ぎ回ってたコウモリちゃん様々、ってとこかしら。さぁお嬢さん、貴女の敵、世界の破壊者ディケイドを倒してしまいなさい！」

時を同じくして光写真館の応接間。

不安げな面持ちでアケミたちの帰りを待つ円カナメの頭に、ケージから抜け出して自由になったキュウベえの声が届いた。

カナメ、大変だ！ アケミとディケイドがミキたちに襲われている。二人だけじゃ手に負えないみたいだ。

「ミキちゃんたちって……本当なの、キュウベえ」

この場で嘘を言って何になるんだい。二人のソウルジェムはケイトによってかなり濁らされている。このままじゃ危険だ。

「そんなこと言われても、わたしには何も出来ないよ！ 分かっているでしょう？」

円カナメには分からなかった。魔法少女でない自分には何の力もないし、そもそも結界の場所だった分かるはずもない。他に頼れる人間がいないのは分かるが、自分にそれを伝えてどうしようと言うのか。

そんなカナメを宥めつつ、キュウベえはそんなことはないよと優しくげな口調で語りかける。

ならば僕と契約して魔法少女に……と言いたいところだが、僕は今そこにはいない。けど、君になら、いいや君だからこそできることが一つだけあるんだ、カナメ。

「わたしにしか……できないこと？」

ああ。その力さえあれば、デイケイドやアケミたちを助けられるかもしれない。君にしかできないこと。それは……。

「おい、ちょっと待てよカナメちゃん！ 一体どこに行くんだ」

「お出かけかい？ 外は寒いから気を付けてねえ」

キュウベえからの言葉を聞き取ったカナメは、数度頷いた後唇を噛み締め凜とした表情を作ると、ユウスケたちに何も告げず突如光写真館から出て行った。

不意を突かれ、慌てて訳も分からずその後を追うユウスケ。

円カナメは一体、キュウベえから何を聞いたと言うのか。

それでもわたしは、魔法少女だから・そのよん【原作：魔法少女まどか マギカ

予想以上にこちらの見立てが甘かったらしく、四部どころか八部

近く制作しないと終わらなさそうです。無計画ですみません。

構成に余裕を持たせた関係で、今回は少し短めです。

なお、本項にはそれなりに”残酷描写”が含まれています。

苦手な方……特にお食事の方はご注意ください。

それでもわたしは、魔法少女だから：そのよん【原作：魔法少女まどか マギカ

「やめる、やめるんだ夏ミカン！ 俺の声が聞こえねえのかよッ」
「魔法の口付け」を受けた者に説得なんて……あはははっ、無駄
よ無駄。無駄無駄」

時を同じくし、結界内のドクター・ケイトの研究施設内。

デイケイドはケイトによって仮面ライダーキバラーに変貌させられた夏海と対峙し、彼女が振るう剣をかわし、いなし、受け止めつつ、必死に彼女の名前を呼び続けていた。

だがケイトの言う通り、その言葉は夏海には一切届かず、何も聞こえていない。

夏海はただ、かつて自分が下した決断を呪い、嘆き、悲しみに押し潰され、耳を塞がれてしまっているのだから。

剣にかかる力こそ大したものではないが、それを振るうのは光夏海その人。デイケイドが全力で戦えるわけがない。

とはいえ、手加減して戦っていられるほど弱くもない。長引けば倒されることだってあり得る。

デイケイドの狙いは一つ。夏海に絶望を与えているあの首輪だ。

夏海は魔法少女ではない。あれを壊せば正気に戻すことができるかもしれないからだ。

「ああもっ、しゃあねえな！ ちょっと痛いかもしれねえが……、我慢しろよ、夏ミカン！」

加減してはこっちがやられる。襲い来る夏海を蹴り飛ばし、デイケイドはドライバーにカードを装填した。

KAMEN RIDE 「KABUTO」
ATTACK RIDE 「CLOCK UP」

六面体の結晶がデイケイドの体を包み込み、その姿を『仮面ライダーカブト』のものへ変える。

彼が続いて取り出したのは『クロックアップ』のカード。周囲の時間を遅くさせ、素早く動き回る夏海を捉えようという算段だ。

これで決まる。決まらないはずがない。そう思いつつディケイドはバツクルにカードを装填しようとしたが、そこで生じた一瞬の間を縫い、夏海は彼の首筋に剣の柄の部分押し込んだ。

「あは、はははははははははは！ 夏ミカン、てめツ、ツボ押しま でしやがるのか……ッ！」

光家秘伝・笑いのツボ。対象を強制的に笑わせる、光家の人間の みが知る謎のツボだ。

不意と一緒にツボを突かれたディケイドは、カードを落とし、腹を抱えて笑い出してしまふ。気付いて拾おうとするも、サーベルに突き刺され、ばらばらに千切られてしまふ。

「ちきしょう、夏ミカンのくせにやりやがる。だったら、こいつで どうだ！」

FORM RIDE 「KIVA BASSHAA」

続いてディケイドがドライバーに装填したのは、『キバ・バツシ ャーフォーム』のカード。

青い複眼に赤い一本角から、緑のボディに緑の複眼の異形に姿を 変えたディケイドは、自身の足元に水の膜を張り、夏海の攻撃をか わして彼女の背後に回り込む。

それに気付き、夏海は背後に向かい剣を振るうも、右へ左へ水面 を滑るように移動するディケイドに、空振り続き。それどころか、 溢れる水に足を取られ、夏海は動くことすらまもらなくなつた。

自分の速さに夏海が追いつけないことを理解したディケイドは、 手にした拳銃「バツシャーマグナム」で彼女を威嚇しつつ、ファイ ナルアタックライドのカードをドライバーに装填した。

FINAL ATTACK RIDE 「Ki-Ki-K i-KIVA」

周囲に張られた水の膜が、集まり連なってバツシャーマグナムに

取り込まれて行く。

水の拘束から逃れた夏海が飛びかかってくるが、デイケイドは迷うことなく引き金を引き、収束された水の塊を彼女に放つ。

放たれた水の塊は夏海の体を凍りつかせ、体の自由を完全に奪った。

「よっし。んじゃ、とつと決めてやろうかね」

彼女が動けなくなったのを見計らい、デイケイドは先の戦いで使用した「青く輝く三つの御魂」が描かれたカードをバツクルに装填する。

K A M E N R I D E 「H I - B I - K I」

F I N A L A T T A C K R I D E 「H i - H i - H i - H i - H I B I K I」

仮面ライダー響鬼に変身したデイケイドは、同時にファイナルアタックライドのカードを装填し、一对の音撃棒を構えて、凍り付いた夏海に向かい、それを振るう。

魔法少女ではない夏海であれば、原因である首輪を取り除きさえすれば元に戻るはず。

清めの音撃が魔女に通じるのなら、当然魔女が放った口付けにも効いて然るべき。デイケイドはそう考え、撥を叩き込まんとするが、それを遠巻きに見ていたドクター・ケイトは、待っていたとでも言わんばかりに、唇を引き吊らせ、顔に嫌味な笑みを浮かべた。

「かか... たわねデイケイド。これであなたもおしまいよ！」

「オシマイだあ？ 何を言ってるッ!？」

全くもって予想外の事態だった。

音撃棒を振るわんとしたその瞬間、夏海の首にかかった首輪は、溶けた蠟ろうのように形を変え、腕輪となってデイケイドの右手に取り付いたのだ。

今の今まで夏海の体を巡っていた絶望の瘴気が、腕輪を通じデイケイドの体に溜まって行く。

膝をついて堪らずよろけるディケイドの首を、夏海は両の手で掴み、思い切り絞め付けた。

「残念だったわねえディケイド。それは首輪であって首輪じゃない、私の口付け、魔力の塊なのよ？ 外そうだったって壊そうだったって、無理無理無駄無駄！ あーっはっはっは！」

目論み当たって高笑うケイトをよそに、自分の首を絞める夏海の腕を剥がそうとするディケイド。

しかし腕輪となって絶望を与える魔女の口付けは、ディケイドの気力と体力を奪って行き、それを許そうとはしない。

絵に描いたような最悪の事態。窮地に追い込まれたディケイドに、反撃の手立てはあるのだろうか

時を同じくして、ケイトの研究施設を抜けた先に広がる、奇怪で奇妙な野原。

焰アケミは、京極サクラと彩花ミキの二人に両腕を掴まれ、ぐんぐんと研究施設から離されて行く。

このまま引き離され続けるわけにはいかない。アケミは両の足で二人の腹部を蹴りつけ、強引に拘束から逃れて、受け身を取りつつ野原の上を転がった。

彼女が体勢を立て直して起き上がる頃には、ミキとサクラは各々の武器を構え、アケミの前に立っていた。

「彩花ミキ、京極サクラ。こんなことをしている場合じゃないですよ。私たちの敵はドクター・ケイトただ一人のはずよ」

そう訴えるも、二人はうつむいて何かぶつぶつと言っぱかりで、何の反応も示さない。

首に嵌った不気味な首輪。これが何らかの作用を与えて、彼女たちをケイトにとって都合の良い操り人形にしているのだろう。

そう理解したアケミは二人を迎撃すべく、左手の盾から拳銃を取り出そうとするが、彼女が銃を手にするよりも早く、サクラの槍が彼女の左腕を斬り捨てた。

盾の中からこぼれ出す重火器を横目に見つつ、しまった、と唇を噛むアケミ。

自分の攻撃の要はこの盾。時間を止めるにも重火器を取り出すにも、盾を起動させなければ話にならない。

サクラは経験を積んだ優秀な手練れだ。武器を拾えるだけの隙を与えてくれるとは思えない。

振り下ろされた槍の穂先が、アケミの胸元目掛けて昇ってくる。

このまま斬り裂かれることだけは、何としても阻止せねば。

「そう簡単に、やらせはしない！」

アケミは盾の中から零れ落ちた拳銃を右手で拾うと、サクラが槍を振り上げるよりも早く引き金を引き、彼女の胸を狙い撃った。勿論彼女のソウルジェムを外してだ。

火薬が炸裂する乾いた音が響いたと同時に、胸を撃ち抜かれてのけ反るサクラ。アケミは念のためにと、さらに腹や足の付け根を狙い撃つ。彼女のことを憎いからではない。彼女は自分よりも遥かに高い身体能力と、魔法少女としての経験を積んだ存在。胸を撃ち抜いた程度ではまだまだ安心できないからだ。

サクラは口から溢れんばかりの血を吐き、のけ反ったまま体勢を崩す。

しかし彼女の肩を踏み台にし、その背後からもうひとつの影がアケミを襲う。青髪に白いマントの、剣の魔法少女・彩花ミキだ。

予想出来てはいたが避けようがない。弾丸はサクラを撃って使い切った。どうするべきか。答えは決まっている。

駄目で元々。千切れた左腕に意識を集中させ、盾の持つ本来の能力を発動させようとするアケミ。

ほんの一瞬だけはあるが、時が止まった。だが、一瞬だけではかわすのが精一杯で、ミキに反撃する暇はない。

「くそつ、くそツ！ ええい、くそツ！ ああもう、ああもうああもうッ！」

いくら剣を振るおうとも、時間を止めるアケミには届かない。苛立ちが口を突いて言葉となり、とめどなく漏れ出て行く。

「ちくしょう……ちきしょう、ちきしょう、ちきしょう！ みんな嫌い、大嫌い！ 自分のやりたいことも放っぽって、みんなのために戦って、何もかもずっと我慢してきたのに、その見返りがこんなものなのかよ。じゃああたしたちは、何のために今まで戦って来たって言うんだよ！ ちきしょうちきしょう、ちきしょう！」

ミキの口から漏れ出たのは、苛立ちばかりではなかった。

思えども決して口に出れなかつたことが、植え付けられた絶望によつて溢れ出し、彼女の心を覆っているのだ。

もう何も聞こえない。もう何も届かない。絶望を取り除かなければ、彼女も魔女の仲間入りをする他ない。時を止め彼女の攻撃をかわし続けるアケミは、ミキのそんな叫びを聞き「くだらない」と吐き捨てる。

魔法少女は人知れず自分のために魔女を狩る存在。他人から感謝や称賛を得ようだなんて、それこそ馬鹿げている。

彩花ミキ、あなたはいつだってそう。口では世のため人のためだと言っているけれど、あなたはそれの実、誰よりも他人からの感謝を求めて生きている。哀れな子。

あなたさえカナメの傍にいなければ。魔法少女にならなければ、彼女は悲しまなかつたのに。キュウベえと契約することもなかつたのに。

そのくせカナメの親友として、あの子の傍にいて。

ああ、憎い。彩花ミキ、あなたが憎い。カナメ最も近い場所にいなから、私にはいられないような場所にいなから、カナメを苦しめ続けるあなたが憎くて憎くてたまらない。

「ああ……あッ！」

そんなことを思い、憎しみを募らせていたからか、アケミは足元をおろそかにし、体勢を崩して転んでしまう。

間の悪いことに転んだ瞬間に時間停止の効力が消え、その隙を狙って放たれたミキの剣に胸を貫かれて仰向けになり、地べたに釘付けとなってしまう。

焰アケミは数多くの重火器を収納して持ち歩くか、時間停止以外に能のないひ弱な魔法少女だ。剣を武器とし、己の体捌きで戦うミキとの埋めがたい力の差は、自分の胸に刺さった剣を、満足に引き抜くことさえできない、という形で現れた。

文字通り心臓が張り裂け、体中から運ばれてきた血液がポンプ運動を伴って、アケミの胸から噴き出して行く。

刺された瞬間に痛覚を遮断したおかげで痛みはないが、ミキの左手に構えられた、逆手持ちになったもう一本の刃が、アケミの脳天目掛けて迫っている。

彼女はソウルジェムが何であるかを知らないが、立て続けに致命傷を喰えば、魔力による回復が追いつかなくなる。これではミイラ取りがミイラだ。

どうにも立ち行かない状況であるにも拘わらず、アケミは口元を歪ませ、冷たい目つきでミキの顔を見る。

絶望に身を裂かれ、涙すら枯れ果てたのだろう。ミキの頬には涙の跡が黒ずんで残り、発せられる言葉とは裏腹に、焦点の定まらない虚ろな顔をしていた。

「いい気なものね、彩花ミキ。魔法少女が人を助けて報われるわけがないじゃない。あなたのその口先だけの正義の味方ぶり。前々から気に入らなかつたの。消えなさい」

そう吐き捨てたアケミは、自身の胸に刺さった剣を引き抜こうともせず、ミキの右の乳房を握り締め、彼女の体に直接魔力を注ぎ込んだ。

自分のものと相反する魔力を注がれたからか、ミキの左手の手首

が、自分の方へと返される。

当然、逆手に持って今まさに振り下ろさんとしていた剣は、その勢いを伴って、ミキの胸へと突き刺さる。

首輪から溢れ出る絶望によって、意思は封殺されてはいるものの、痛みは感じているらしく、ミキは己の胸に刺さった剣を目にし、口から血を嘔き悲鳴を上げた。

アケミはその上で、右足で地面を叩き、足の裏から魔力を地に流し込む。長くか細く伸びたそれは、サクラによって千切られた左腕、その周辺にばらまかれた銃器の元へ向かい、一丁の拳銃の引き金を引いた。

拳銃から放たれた銃弾はミキの右顎を撃ち抜き、皮膚を貫き頬骨を砕き、生え揃った永久歯を粉々にして、辺りに散らばらせる。

嘔き出た血がアケミの顔を赤黒く染め上げ、粉々に砕けたミキの歯が、光に反射して辺りに燦々と降り注いだ。

ミキは死んだ魚の様な目をして、両の腕をだらりと垂らし、アケミの方へ力なく突っ伏してしまふ。

刺さった剣がつつかえ棒となって、抱き合うことにはならなかったが、その重量が全て剣にかかり、引き抜くのはいつそう困難となった。

「こんな姿になってもなお、私を困らせるとは……彩花ミキ、あなたって人……はッ」

アケミは血で顔じゅう赤く染まったミキの顔に一瞥をくると、彼女の脇腹を蹴りつけてどかし、魔力と己の力を併用しつつ、腹に刺さった剣を引き抜いた。

体を起こして立ち上がり、サクラに千切られた左腕を拾うと、残り少ない魔力を使って、風穴の開いた胸と一緒に取り付け、補修した。

盾の中から拳銃を取り出して、うつ伏せになって倒れ込むミキを見下ろす。今すぐに反撃できるとは思えないが、ぴくぴくと体が動いている。頭を撃たれ、意識を失って尚、まだ体を修復しようと言

うのか。

「ゾンビ」と形容すべきその再生能力に、アケミはおぞましさを覚え、体を震わせた。

体がまだ動いている以上、反撃を喰う可能性はある。自分は非力で魔力も残り少ないのだ。ここまで来て下手を打つわけにはいかない。

アケミは左腕の盾を操作し、自分以外のこの世界の『時間』全てを停止させた。

風にそよいで舞い散る花びらも、何かを探し蠢く小動物も、辺りを飛び回る玩具の飛行機も不気味な触手も、何もかもが動くのをやめ、微動だにしない。焰アケミ、彼女だけの時間の到来だ。

「カナメも、門矢土も、この子たちを助けたいと言っていた。けれど無理。もう無理。彼女たちの心はとくに絶望に支配されている。私には救えない。いいえ、きっとカナメたちにだって救えない。だから」

アケミはミキの体を蹴りつけて仰向けにすると、拳銃の安全装置を外して撃鉄を起こす。

助けられないのなら、呪いを伴って魔女になるというのなら、今の場で「魔法少女」として死んだ方が、彼女にとってもずっとマシだ。

撃たれる当人がそう思っているかどうか、それは分からない。だがアケミはそう思い、そうすべきであると考えた。

彼女のへそに輝く青い宝石に銃口を向け、引き金に手をかける。あとはそれを押し込むだけだ。そこからは全て拳銃がやってくれる。もう何度もやってきたことだ。無限とも言える遠大な時間旅行の中で、数えるのを諦める程に、悲しむという感情すら捨て去って、何度も何度もやってきたことだ。

だが何故だ。引き金にかかったアケミの指は、それを持つ手は、

「撃ち抜け」という命令を受け付けない。引き金と指の間に何かがかかっているかのようだ。もちろん、何もつかえてはいない。

額を伝い頬を伝い、顎の先から汗が滴り落ちる。指先だけでなく手全体がぶるぶると震え、段々と表情が険しくなっていく。

何故撃てない、何故殺せない。今まで何度もやって来たことだろうと自分自身に問いかける。

元は同じ人間だ。それが魔女か魔法少女かの些細な違いじゃないか。どうした、何故だ。何故なんだ。

ふうん。焰アケミって言うんだ。あたし、彩花ミキ。カナメの嫁です！……なあんちゃって、よろしくねー！

ま、ま。そんな落ち込むことないって。ずっと入院してたんだから、しゃあないじゃん？ あたしだってほら、よく間違ってたクラスのみんなに笑われたりするし。気にすんなくて。

ほおら、あと10m！ みんなに馬鹿にされないよーに、体力つけなきゃね体力！ ほらほらー、ペース落ちてるぞー！

あたし、あなたと友達になれて凄く嬉しかった。あなたがそう思ってるかは分からないし、あたしが一方的に思ってるだけかもしれないけど、それでも、さ。

ごめんね、あたしのせいで、迷惑ばかりかけちゃって。こんなこと言えた義理じゃないけどさ、カナメのこと、任せたよ。こんなこと、あなたにしか頼めないから

アケミの脳裏に、いつか見た光景が浮かぶ。遠大な時間旅行に出る前の、もしくは出た後の記憶の欠片たちだ。

二人は最初から険悪な仲ではなかった。時間旅行をする前や一部の時間軸のミキはとても優しく、友達と呼べる関係を築いていた。時間旅行の中でその存在を知った京極サクラも同様だ。

しかしアケミは彼女たちを見捨て続けた。カナメを救うために何度も、何度も。

笑い顔も泣き顔もその死に様も、幾度となく目にしてきた。彼女たちに流す涙など、とつくに枯れ果てたはずだった。

なのにこれは何だ。こうなることを望んだのは自分なのに、何度も目にしてきたはずなのに、涙が溢れて止まらない。「撃て」という命令と「撃つな」という命令が頭の中でせめぎあい、どうすることもできなかつた。

盾の中の歯車がかち、かちと音を立てて動き出す。時間停止の効力が切れかけているのだ。

魔力も残り少ない。再びこれだけの時間を止めるのは不可能だろう。彩花ミキを仕留めるのならば、これが最後のチャンスだ。

「ああ、もうッ！ 消えなさい、消えろ！ 消える消える！ 消えて……、なくなれッ！」

気合を込めるためにと、あえて痛覚を遮断せずに己の左肩を撃つが、それでもなお震えは止まらない。

円力ナメを救うためだ。自分には助けられない。どうにもならないのだ。言葉にして自分に言い聞かせようともしまらない。時が止まった中ではおかしな表現だが、時間停止解除の瞬間は、刻一刻と迫っている。

やらなければこちらがやられる。自分が死んだらカナメはどうなる。今まで行ってきた全てのこと水泡に帰してしまう。

ああ、あああああああッ！

声にならない叫びを上げ、かけた指が折れんばかりの勢いで、アケミは引き金を引いて銃弾を放つ。

同時に時間は再び動き出し、銃弾はミキの体を貫いた。

「あつ、ああ……ッ！」

放たれた銃弾は、ミキの体を確かに貫きはした。

しかし実際に着弾したのは、彼女の脇腹。へそに嵌まったソウルジェムから、狙いが僅かに反れており、殺すことはできなかったのだ。

加えて傷を癒し立ち上がったサクラが、背後からアケミの背を斬りつける。

よろけ、前のめりに倒れかかるアケミの顔に、ミキの膝蹴りが飛ぶ。

痛覚の遮断を忘れ、背の一撃をまともに喰らってしまったアケミは、時を止めることすらできずにそれらを直接喰い、背の神経を傷付け、鼻の骨と上下の前歯を砕かれてその場に突っ伏した。

サクラは突っ伏したアケミの背を、骨の軋む音がするほどに踏みつけ、ミキは柔肌の上から腕の骨の隙間に剣先を突っ込み、押し込んでかき混ぜて行く。慈悲も情けも、そこには一切なかった。

想像を絶する激痛に苛まれ、意識が遠退いて行く中でアケミは思う。これは罰、受けてしかるべき制裁なのだ。カナメを救えなかった自分への。そして、その為に犠牲にしてきた別の時間軸の魔法少女たちへの。

まだ死にたくない。けれど魔力がほぼ尽きかけた自分に、情に流され、殺すべき相手を手にかけれなかった自分に何ができる。

そんなことを考えている間に、ミキは腕を刺し貫いていた剣を引き抜き、振り上げてアケミの後頭部に狙いを定めた。

今のこの状態であんなものを喰らっては、魔力が尽きるよりも先に体の方が先に参ってしまう。

もう、どうにもならないのか。唇を噛み、大粒の涙を流し、焰アケミは懺悔する。

ごめんなさい、カナメ。ごめんなさい、みんな。私は誰も……守ることができなかった。ごめんなさい

懺悔の言葉を聞いていたのかいないのか、京極サクラは今まで以上に背を踏みつける足に力を込め、血で赤黒く濁った彩花ミキのその刃が、焰アケミの頭を砕こうと、今まさに降り下ろされた。

しかし、どうしたことだろう。頭蓋が割られ、脳漿が飛び散る音

もせず、そもそも剣は地面に降り下ろされてすらいない。

自分はまだ死んでいないのかと、きよろきよろと辺りを見回すアケミ。彼女は地面から少し浮いた所におり、自分を殺さんとしていた二人は、黄色い鍵のついたりボンで全身をぐるりと巻かれ、動けなくなっていた。

空を飛んでいるわけではない。自分の体、腰回りに何か暖かな感触がある。自分は今、誰かに抱き止められているのだろうか。

抱き抱えられていることが分かり、ならばそれは誰なんだと己の頭上に目を向ける。

間一髪だったわね。ほむら、さん。もう……大丈夫よ。

焰アケミを抱き抱えていたのは、あまりにも意外な人物であった。黒い小さな帽子をちょこんと頭に乗せ、胸元には薄黄色のリボン。コルセットを締め、薄黄色の短めのスカートを穿き、スカートの先辺りまで伸び、白のラインの入った茶のソックスと、その上に履いた黄色いブーツ。

こんなことが出来る人間　魔法少女は、アケミの知る限り一人しかない。自分たちの先輩”麻末^{マキ}トモエ”だけだ。

アケミは自身の頭上に目をやり、その名前を呼ぼうとするが、彼女の顔を目にし言葉を失った。

「そんな……まさか！　なんで、どうして!!」

「落ち着いてほむらさん。もう大丈夫、大丈夫だから」

「落ち着いていられるわけ、ないじゃない！　なんで、あなたが…

…あなたが!」

円、カナメ!

それでもわたしは、魔法少女だから：そのこ【原作：魔法少女まどか マギカ】

どうせ「リ・イマジネーション」なら、原典の出来事やキャラをなぞるよりも、「まどかだけが魔法少女になり、他の四人がキュウベえと契約するのを防ぐために戦っている」ような話の方が良かったのではないかと今更後悔。

ああでも、今から書いてまとまるとも思えないので、聞かなかつたことにしてください。

前回に引き続き、今回も一部”残酷な描写”が含まれております。苦手な方、およびお食事中の方はご注意ください。

それでもわたしは、魔法少女だから：そのご【原作：魔法少女まどか マギカ】

服装や扱う魔法こそ、先輩魔法少女・麻未トモエのものだ。しかし、自分を抱きかかえている人物は、桃色の髪を赤いリボンで二つに纏め、顔にあどけなさを残したあの少女「円カナメ」だったのだ。焰アケミが取り乱すのも無理はない。数えるのを諦めるほどに多大な犠牲を払ってまで、彼女が遠大な時間旅行を行ってきたその理由は、「円カナメを魔法少女にさせない」こと。

唯一無二の行動原理が立ち消えとなってしまったのだから、取り乱すのは当然だ。

しかし、彼女を抱きかかえた当の本人は、優しい微笑みを見せ、慌てふためくアケミの唇に人差し指をそつと乗せた。

「そうね、確かに私は円カナメ。でも今は麻未トモエなの。あなたとまたこうして話が出るなんて。まどかさんに感謝しなきゃね」

「感謝って……一体、何を言ってるの、カナメ」

「飲み込みが悪いのね。ま、仕方ないか。実はね……」

麻未トモエ（の格好をしたカナメ）はそこまで言つと、背後から迫り来るアケミの槍を飛び退いてかわし、アケミを抱きかかえたまま高台へ着地した。

ミキとサクラの足元に、千切られて四散した黄色いリボンが見える。

加減していたとはいえ、こうもあっさり破られるとは。トモエは小首を傾げて溜め息をついた。

「あなたと話していたいのは山々だけど、あつちをなんとかする方が先決ね。待ってて、すぐに終わらせてくるから」

アケミを静かに床に降ろすと、トモエは高台を飛び降り、虚ろな目をして苦しげな声を上げる二人の魔法少女と向かい合った。

「京極サクラ……しなやかで力強い体捌きに、どんなことにも折れない強靭な精神の持ち主。憧れ、ずっとずっと追い続けた、私の目

標。けれど、今のあなたは違う。ただ力任せに振るうだけの槍じやあ、私の体は貫けないわ」

サクラの槍がトモエに向かって飛ぶ。トモエは恐れを抱くことなく、腰の動きだけで、飛んでくる槍を直接視認せずしなやかにかわす。サクラは戻ってきた槍の反動でよろけ、その隙を突かれ、トモエの回し蹴りを喰って地面に叩きつけられた。

同時にトモエの背後から、剣を伴ってミキが迫る。

トモエはそれに動じることなく、突き一つ一つを腕でいなして狙いを反らせ、無防備となった脇腹に正面蹴りを見舞う。

吹き飛ばされ、地面に叩きつけられたミキは、地を踏み締めて飛び上がり、トモエの脳天目掛けて頭上から斬りかかる。

しかしその一撃も、彼女の人差し指と中指の間に刃を挟まれ、斬り裂くことなく止められた。

「彩花ミキさん……私の、初めての後輩。勢い任せでちよっぴり頼りないところもあるけれど、自分のことをないがしろにしてまで、他人のために戦える優しくて強い魔法少女。あなたは私に憧れてくれてたみたいだけど、私だってあなたのそういうところに憧れていたのよ。素敵だったわ。でも、今のあなたにはそれがいい。あなたはまだ、いくらだって輝けるの。諦めちゃダメなのよ」

トモエは刃を挟んだ指に力を込め、ミキの手から剣を奪い取ってその場に放り、蹴りを喰ってよろよろと立ち上がる、二人の魔法少女に人差し指を突き立てた。

「あなたたちは私とは違うの。お願い、目を覚まして。絶望なんかに負けてはいけないわ。……ま、聞こえないか。だったら、力づくしか、ないわねっ」

戦うしかないかと覚悟を決め、被っていた黒い小さな帽子を掴み、目の前でさつと振るトモエ。

瞬間、どこからともなく数丁の小銃が現れて、彼女の目の前に並

んだ。

そのうち二丁を掴み、向かい来る二人の魔法少女に向かい、引き金を引く。放たれた銃弾は、ミキには背中のマントで、サクラには槍の先で弾かれ、当たることなく地面に突き刺さった。

その勢いを保ったまま、右と左から二人が迫る。トモエは手にした銃を振って二人を遠ざけつつ、代えの銃を引き抜いて跳び上がった。

美しい曲線を描いて跳び、ミキとサクラの頭上に達したと同時に再び銃撃。しかし寸での所でかわされ、かすりすらしない。

着地と共に後ろに飛び退き、銃弾を発射。二人の武器に弾かれ、これも当たらない。

こちらの攻撃は二人の魔法少女には通用しない。槍と剣、二つの武器を同時にいなし切ることはできず、トモエは飛び退き様に二人の反撃を喰ってよるけ、サクラの”節同士が鎖で繋がった”槍に絡め取られ、地面に叩きつけられてしまう。

振り払おうにも、自分の胸元目掛けてミキの剣が迫っている。時間の猶予は殆どない。

まさに「絶体絶命」なのだが、トモエは狼狽つろたえることなくぱちんと指を鳴らし、薄い微笑みを顔に浮かべた。

「ふふっ。二人とも、まだまだ……ね」
これは一体どういうことか。

トモエが指を鳴らしたその瞬間、彼女を刺し貫こうとしていたミキが、槍で彼女を絡め取っていたサクラが、逆に無数の黄色いボンによって、全身を絡め取られたのだ。

腰回りだけを絡め取っていた先程までとは違い、今度は両腕両足腰に首と、拘束の範囲が全身に及び、その一つ一つが魔力を発しているからか、力づくで拘束を解くことは適わない。

ミキとサクラが拘束されたのを見、アケミは魔力で傷を治し、槍に拘束され、地面に転がったままのトモエにの元へ向かい、声をか

ける。

「麻未トモエ、あなたまさか……、わざと外して撃っていたの？」

「そういうこと。大切な友達と後輩よ。傷つけたくなんか、ないじゃない？」

麻未トモエの放つ銃弾は、アケミのものと違い、自身の魔力で精製されたものだ。外して地面に突き刺さったとしても、それらを別のものに変質させることなど、彼女にとっては造作もないこと。

トモエはあえて、銃弾を外して地面に撃ち込ませ、それをリボンに変化させて蜘蛛の巣のようにし、ミキとサクラを絡め取った、と言うわけだ。

「さすが、ね。憎たらしい程に美しい戦い方だわ」

「褒めてくれてるの？　じゃあ、素直に受け取っておこうかな。それはそうと……この鎖、外してもらえる？　一人じゃどうにもつ、ならなくって」

「ええ」

アケミに拘束を外してもらって立ち上がり、右手をひらひらと振ってリボンを操作して、ミキとサクラを自分の近くへと引き寄せるトモエ。

ここまでではいい。しかし問題なのはこの先だ。

”そのこと”を思い出したアケミは、余裕の笑みを浮かべ、二人に近付かんとするトモエに問いかける。

「待ちなさい麻未トモエ。彼女たちは魔女の口付けによって絶望に心を支配されているのよ。どうするつもりなの？」

「そんなに取り乱さなくても大丈夫よ、ほむらさん。”私だから”できることが、一つだけあるの」

「あなただから……できること？」

「大体のことは聞いてるわ。グリーンフィードぐらいじゃ被いきれないほどに、深く暗い絶望を生じさせ、魔法少女を無理矢理魔女に変える悪魔の口付け。酷いものね……」

トモエは二人の首にかけられた不気味な首輪を改めて見つめ、「可哀想に」と目を伏せた。

「この首輪がそれね。後は私に任せて頂戴、ほむらさん」

不安そうな面持ちのアケミに対し、トモエは大丈夫よと微笑んで頭の髪飾り ソウルジエムを外し、二人の魔法少女に近付ける。

首輪に内包された絶望が、黒い瘴気となってトモエのソウルジエムの中に吸い込まれていく様を目にし、アケミは彼女が何をしているのかを悟った。

「やめなさい麻未トモエ！ それが一体何を意味しているのか、あなただつて分かっている筈でしょう!？」

「承知の上よ。今の私はソウルジエムであり、グリーンフシード。魔法少女と魔女、その中間の存在。グリーンフシードに口付けの呪いを吸わせることはできないけど、グリーンフシードの特性を持った私のソウルジエムでなら、首輪から発せられる絶望を吸収できる……」

「そんなことは分かっている！ 違う、私が……言いたいのは……」
絶望を吸収する毎に、徐々に悪くなって行くトモエの顔色を目にし、声を上げるアケミ。このままでは彼女はまた魔女になる。そんなことは彼女だつて分かっているはずだ。

しかし、当人はそうなることに恐れを抱いていないのか、アケミの方に向き直つて微笑み返した。

「大丈夫よ、負けるもんですか。ほむらさん、あなたが傍にいてくれるのだから」

「なッ、こんな時に何を言うの!」

「こんな時だからこそ、よ。ふふふっ」

あまりに唐突で意味深なその言葉に狼狽え、うまく継げずにもつてしまうアケミ。そんな彼女の様子を見て、トモエは「可愛い」と微笑み、アケミの頭を優しく撫でた。

「ほおら……ね。言った通りでしょう?」

麻未トモエの言う通りだった。二人の首にかかった悪しき首輪は、

内包された絶望の瘴気を放出し切って外れ、人の首から離れると同時に、ヒビ割れて塵に変わった。

「う、うう……うん？」

「なんなんだあ？ アタシたち、なんでこんなところに……」

口付けの絶望から解放されたミキとサクラは、暫し微睡まどろんだ後、目を覚まして周囲を見回す。

二人の目に飛び込んだのは、自分たちの見知った派手な黄色い衣装を身に纏う、その恰好をしているはずのない親友の姿。どういことだと声を上げる二人の魔法少女の唇に、トモエは「落ち着いて」と軽く人差し指を触れた。

「そう、今の私は円カナメ。でも、『心は』麻未トモエなの。だからこの衣装を着ているし、魔法だって使えるってわけ」

「それはさっき聞いたわ。もっと具体的な説明をなさい、麻未トモエ」

「わ、わけがわからねえよ。お前、何言ってるんだ」

「トモエさんがカナメで……カナメがトモエさん、ってこと？」

「体は円カナメ」、「心は麻未トモエ」。的を射ない抽象的な回答に、訳が分からないと首を傾げる三人の魔法少女。どういことだと首を傾げる三人に、トモエは髪飾りから濁りに濁ったソウルジェムを外して見せた。

「私たち魔法少女の本体はこのソウルジェム。まあ本体と言っても、何も見えず聞こえずしゃべれない。五感を持たないただの石ころよ。あの戦いで体を失いはしたけど、グリーンフィードとなった私のソウルジェムは、浄化されてソウルジェムに戻ったの。ま、少し濁りが残って、グリーンフィードとソウルジェムの中間のようなものになっちゃったんだけどね」

自分の魂の宿ったソウルジェムを握り締め、トモエは話を続ける。「生きていくことに絶望して、呪いを産んで魔女になって……。自分が死んだことにすら気付けないまま一生を終える。酷いものよね。」

こうして”悲しい”と思うことすら、ソウルジェムのままじゃできないんですもの。事情はどうあれ、まどかさんには感謝しているわ。私に体を貸して、もう一度あなたたちに会わせてくれたのだから”

「ちよ、ちよっと待ちなさい。じゃあ、カナメは今……」

円カナメの中に麻未トモエの精神が宿っている。それは理解した。しかし、だとすれば今、体の持ち主の精神はどうなっているのだ。取り乱して胸倉を掴むアケミに対し、トモエは「大丈夫よ」と咳いて、唇に人差し指をちよんと乗せた。

「まどかさんは生きてるわ。ただちよっと眠っているだけ。”私”がこの体から離れば、彼女の意識はすぐに戻るから”

「そう、なの？ その根拠は”

「私が一度でも、あなたに嘘を言ったことがあるかしら？ 焰アケミさん”

屈託のない笑顔を浮かべてそう答えるトモエに、二の句を継げず押し黙るアケミ。そこに対してとやかく言うつもりはないのだが、同時にアケミの頭に疑問が過ぎる。

カナメの意思がないというのなら、彼女をここまで誘導してきたのは誰だ。そもそも、魔法少女の”秘密”を彼女に教えたのは一体誰だ。

考えなくても分かる。そんなことが出来るのは、自分たちを魔法少女にした張本人、キュウベえをおいて他にないと。自分たちがいなくなっただけ、言葉巧みにカナメを唆し、彼女を危険極まりない戦場にまで連れてきたのだ。もしも麻未トモエが破れたとしても、カナメと契約させられればそれでよし。そういう算段もあつてのことだろう。

おかげで命を拾えたとはいえ、状況はなお悪化したと言わざるを得ない。アケミはキュウベえの狡猾さに怒りを覚え拳を震わせたが、そんな拳をトモエは自身の両の手で優しく包んだ。

「女の子がそんな顔をしてはだめよ、はしたない。まあでも、それだけ元気なら大丈夫ね”

アケミの様子を見て何かに踏ん切りが付いたのか、トモエは自身のソウルジェムを握り締め「最後の仕上げね」と呟いた。

意味深な言葉を吐くトモエに対し、ミキとサクラは何を言っているんだと笑い合う。しかし、彼女が自身のソウルジェムを握り締めていることに気付いて凍り付き、何をやっているんだと声を上げる。握っている”だけ”ならまだいい。しかしトモエはそれを”握り潰さん”勢いで力を込めているのだ。それが何を意味する行為であるか、もはや分からない二人ではない。

ミキとサクラはトモエの右手を掴み、アケミは拳銃を構えて、ソウルジェムから引き剥がそうとするが、地中から伸びてきた黄色のリボンに全身を絡め取られ、逆に引き剥がされてしまった。

「ちよっ、ちよっとトモエさん!? 一体何をッ」

「自分が何をしようとしているのか、分かっているのかよ!? それを握り潰すって事は……」

「だからきちんと説明したのよ。私、もう魔女にはなりたくない。あなたたちを傷付けたくないの。凄く残酷なことだつてのは分かっている。けれどお願い。人間の……いや、魔法少女のままで、人生の幕引きをさせて頂戴」

二人の魔法少女は改めて、トモエのソウルジェムをまじまじと見つめる。

かつて陽光のように暖かに、誰よりも美しく輝いていた頃の面影は見る影もなく、どす黒く濁り、所々にヒビが入っている。溜まりに溜まった絶望が放出されかけており、いつ魔法の卵グリーンフィードに変わってもおかしくない状況だ。

ミキとサクラが息を呑んで言葉を詰まらせる中、トモエはよろよろと腰を降ろし、額に脂汗を浮かべ、力なく微笑んだ。

「後はあなたたち次の世代に任せるわ。先輩の私は……、退散しちやおつかしらね」

「そんな……そんな! やめてくださいトモエさん!」

「馬鹿な真似は止せ! グリーフィードならいくらだってある。何

もアンタが消えることはねえだろ！」

「それはあなたたちがすべきことのために使いなさい。今の私には必要のないもの、だから……」

自身のソウルジエムを省みてトモエは言う。

口付けの穢れを吸い尽くす前、魔女から蘇った時点で、自分は既に魔女に近い何かに変質しており、グリーンフィードで穢れを消すことすら出来なくなっていた。存在するだけで周囲に絶望を撒き散らす魔女となる。今までの生活に戻る事など、最初から不可能だったのだ。

その姿を不安そうに見つめるミキたちに対し、トモエは弱々しく微笑んで、彼女たちの額に短く唇を重ねた。

「いいのよ、もういいの。一人寂しく殺されるはずだった私が、大好きな後輩たちに見守られて逝けるんですもの。私今、最高に幸せよ」

ミキたちはもう何も言えなかった。目は虚ろで息も絶え絶え、いつ倒れてしまってもおかしくない程に弱り、先輩魔法少女としての面影は、もはやこの場の誰よりも辛いはずなのに、それでもなお自分たち後輩への感謝の言葉を述べる彼女に、誰も継ぐべき言葉を持たなかった。

各々が武器を落とし、目元に涙を溜めてうつ向き様を目にし、トモエは目を伏せて再び自身のソウルジエムを握り締めた。

「未練……だとは言わないけど、まどかさんにお別れできないのはちょっと心残りかな。さよならの言伝て、宜しく頼むわね。それじゃあ……ばいばい、みんな」

最後の最後まで涙を見せず、優しげな微笑みを残して、麻未トモエは自身のソウルジエムを握り潰す。

どす黒く濁った宝石は粉々に砕けると同時に穢れを瘴気として放出し、黄色く輝く欠片となって、彼女の足元に雨のように降り注いで行った。

瞬時に魔法少女の衣装から、普段着ていた見滝原の制服姿に戻り、意識を失って前のめりに倒れるカナメ。トモエの命が散り、彼女の魔法の拘束から逃れられたアケミは、カナメが地面に額を打ち付けるよりも速く、彼女を抱き止めて声をかけた。

「カナメ、円カナメ！ 返事をして、円カナメ！」

「うう……うん？ アケミ……ちゃん？」

アケミの呼び掛けに応じ、目を覚まして周囲を見回すカナメ。

彩花ミキに京極サクラ。親友の変わらない姿がそこにあった。しかし、何かがおかしい。目の前の二人はどこかやりきれない面持ちで自分を見つめている。

カナメはどうしたのかと彼女たちに問いただそうとするが、同時に黄色く輝く石の欠片を握っていることに気づき、カナメは今一度辺りを見回した。

「ねえ、トモエさんは？ トモエさんはどこに行っちゃったの！？」
必死そうな表情と声で答えを求めるカナメの姿を目にし、三人は改めて「麻未トモエはもういない」という事実を痛感し、口をつぐんでうなだれる。

はつきりとした答えは得られなかったものの、この場所で何があったのか、麻未トモエはどうなったのか、何故何も言おうとしないのか。その理由はカナメにも薄々分かり始めていた。

周囲に気まずい沈黙が流れる中、焰アケミはあえて凜とした表情を作り、カナメの目を真正面から見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「あなたが気に病む必要はないわ。麻未トモエは……行ってしまっただけよ。『円環の理』に導かれて、ね」

「『円環の理』！？ それって一体何なの？ 訳が分からないよアケミちゃん」

「一杯の夢と希望を持って産まれた少女が、その夢を叶えるために魔法少女となり、今度は誰かの夢と希望を護る。その志を胸に抱いたまま命を散らして、転生の後、再び夢と希望に祝福されてこの世

に生まれ落ちる……それが魔法少女の円環の理。麻末トモエは自分の人生に納得し、自らの意思で消えることを選んだの。あなたのことじゃないわ」

アケミの言うことは、魔法少女でないカナメには理解し難いものであったが、彼女は彼女なりに自分を慰めてくれているのだと理解した。

しかし、理解と納得は別問題。そんな言葉で納得できるはずがない。そう思っていたのは、ミキとサクラも同じであった。

「トモエさん……あたしたちの、あたしたちなんかのために……」「ふざけんじゃねえぞ、バカ野郎……あんなに幸せそうな面して、とんでもねえ爆弾残して行きやがって……、許さねえ、絶対に許さねえぞトモエえ！」

ミキは泣きながら地面に突っ伏し、サクラは今にも泣き出してしまいそうな顔をし、悲しみを誤魔化すように声を荒げて怒りを見せる。していることは違えど、トモエの死に責任を感じているのは双方とも同じなようだ。

事態をようやく飲み込み、トモエの死を悼んで泣きじゃくるカナメを尻目に、アケミは傷だらけの体に鞭を打って踵を返す。「どこに行くんだ」と問うサクラに、アケミはドクター・ケイトのアジトを指差し、「決まっているでしょう」と冷たく返した。

「戦いはまだ終わっていない。あの化け物がいるかぎり私たちに未来はないわ。今はくだらない感傷に浸っている場合じゃないのよ」

「くだらないって……あんたそれ、本気で言ってるの」

「人が一人死んだんだぞ、何故そんなに冷静でいられるんだよ」

仲間が死んだというのに、この物言いにこの態度。ミキとサクラはアケミに詰め寄って彼女の胸倉を掴むが、当人は「くだらないわ」と返して、胸倉を掴む二人の手を引き剥がした。

「泣いて塞ぎ込んでいれば、故人が喜ぶとも言っの？ 死人は口を利かない。いない人間に振り回されるより、今、自分たちのことを考えるべきでしょう」

アケミの言い分は尤もだ。麻未トモエは死んだ。その意思を代弁できる人間もいない。トモエが何を望んでいるかなど、誰にも分かるはずがない。

理屈はそうだ。筋も通つてはいる。しかし、こんな説明で納得できるものか。二人の魔法少女は拳をかたく握り締め、背を向けるアケミに放とうとするが、涙ながらに「やめて」と叫ぶカナメに止められた。

「やめて、やめてよ二人とも……。辛くないわけがないよ。だって、だって……」

カナメの叫びを耳にしたミキは、握り拳を解いてアケミの顔を自分の方へと向ける。

焰アケミは泣いていた。唇を噛み、刃物を腕に刺して震えを止めて、泣いているのを二人に気取られぬようにしていたのだ。

辛くないわけがない。しかし、立ち止まっただけでも何になる。あえて冷徹に振る舞うアケミの姿を目にし、ミキは言葉を失うようになった。

その様子を横目に見ていたサクラは、改めてアケミの傷だらけの体を目にし、「こんな体で戦うつもりなのか」と驚いた。ドクター・ケイトがどのような力を持った相手なのか。対峙して間もなく口付けを植え付けられたサクラには窺い知れないが、こんな体で挑むなど、無謀以外の何物でもないことは分かる。

先に動いたのは彩花ミキだ。顔を上げてアケミの顔を見据えると、握り拳を開いて彼女の胸元に押し付ける。同時に血だらけで所々骨が剥き出しになっていたアケミの体が、青色の光と共に修復されて行く。

何をするのと声を上げるアケミに対し、ミキはうつむいたまま「動かないで」と言葉を返した。

「あんたの体の傷、殆どあたしが付けたものでしょ。だから、これ

「でおあいこ。文句ある?」

「文句は……ないけど、何で急に」

「あのチューリップの化け物、倒しに行くんでしょ? そんなぼろぼろの体でどうしようっての?」

ぶっきらぼうにそう答えて顔を上げ、穏やかな微笑みを浮かべるミキ。

唐突な心変りに戸惑い、二の句を継がないでいたアケミの体を、京極サクラが背負い込んだ。

「よっ……っ。物騒な武器ばかり携帯しているくせに、案外軽いな」

「京極サクラ、あなたまで何を」

「病み上がりで全力ダツシユはきついだろ。乗んな、連れて行つてやる」

サクラの言っていることは正しい。焰アケミは時を止める反則的な力を除けば、運動能力は殆ど人並みであり、運動能力を強化し、剣や槍で戦うミキとサクラには到底及ばず、常日頃そうした戦いを続けるサクラにとって、アケミ一人おぶさった所で、移動に何ら支障はない。

だが、アケミには彼女たちが何故そうするのか分からない。疑問に思つて問い掛けると、二人は鼻を鳴らし「決まってるんだろ」と答えた。

「あなたの言いなりになるのは癪シヤクだけどさ、あのチューリップをなんとかしなきゃやばいってのは、あたしたちが一番よく分かつてるし、それに……」

「トモエのやつのの甲い合戦だ。あんなやつでも、一宿一飯の恩義があるしな」

そう言つて、齒を覗かせにかりと笑う二人の魔法少女。

焰アケミはサクラの赤く伸びた艶やかな髪に顔を埋めて言葉を返す。

「ふふ、あなたたちって、本当に馬鹿ね。それと京極サクラ。あの

化け物はチューリップじゃないわ、薔薇よ」

「馬鹿とは何よ馬鹿って。せつかく手伝ってあげようとしてるのに。馬鹿って言うやつが馬鹿なんですよー」

「うっせえな。重箱の隅つつくようなことばかり言ってるって、いつか友達なくしちゃまうぜ？ ああ、元から友達なんかいなかったか。アタシたちを除いてよ」

物言いは酷いが、誰も腹を立ててはいなかった。ミキとサクラは、馬鹿」という言葉に隠された意味を読み取り、アケミもまた、二人の優しさを素直に受け止められたのだろう。

一様に顔を見合わせて頷き返す。乗り込む準備は整った。

三人の魔法少女が再びケイトのアジトに乗り込まんとしたその時、一人残された円カナメが声を上げた。

「行くんだよね？ あそこに。じゃあわたしも……」

声や面持ちに怯えはない。それどころかその目から、死ぬことすらいとわないうという覚悟まで伝わってくる。

麻未トモエが命を落として悲しいのは自分たちばかりではない。

その気持ちは痛い程よく分かる。だからこそ三人の魔法少女は、カナメと自分たちの間に赤と青の格子で隔たりを作り、彼女をその中に閉じ込めた。

「な……何これッ！？ 出して、出してよお！」

自分も連れて行ってと必死に格子を叩くカナメに対し、三人の魔法少女は振り向いて答えた。

「こつからはアタシたち魔法少女だけの問題だ。ただの人間はすっこんでな」

「心配しないで待っててよ、チューリップの化け物なんかちよちよいつとやっつけてきちゃうからさ」

「あなたのおかげでこの二人を殺さずに済んだ。それは感謝している。けれどこれ以上あなたを危険な目に遭わせたくないの。お願いだから分かって頂戴、円カナメ。私のためにも、あなたのためにも」

各々が各々の言葉で、カナメにここに留まるよう促す。説得などではどうにもならないことを悟ったカナメは、格子から手を離し、分かったと呟いてうなだれた。

アケミはありがとうと言ってすぐに踵を返し、自分をおぶったサクラの尻を軽く数度叩いた。

「さつさと片付けるわよ。行って」

「いちいち命令すんなっての。アタシはあなたのタクシーじゃねえ」
取り留めのない会話を残し、ケイトの研究施設に向かって駆け出す三人の魔法少女。

一人取り残された円カナメは、何も出来ない歯痒さに唇を噛み、彼女たちの後姿を不安そうな面持ちで見つめていた。

「どうして、なのかな……。みんなのこと、信じたいって思うのに、どうしても、そんな気になれないよ……。アケミちゃん、ミキちゃん、サクラちゃん……」

321

ああ、もうどうでもよくなってきやがった。

遅かれ早かれ、生きてる以上死からは逃れられない。

ここらで幕引きをしようじゃあねえか。過去も何も見つけてねえが、とつかかりを残したまま消えてくつてえのも乙なもんだ。

頼むぜ夏ミカン。俺を早く黄泉の世界とやらに連れて行ってくれ

門矢士の心は、夜の闇よりも黒く深い絶望に支配されかけていた。夏海を救うことはおろか、自分の命さえも、どうでもよいことになりかけていた。

何もかも諦め、握っていた武器を捨てた士は、自分の首を絞める

夏海の手に自身の手を載せ、その全てを彼女に委ね、目を閉じる。

それで全てが終わった。自分は喉を潰され、呼吸困難で死んだはずだ。

しかし今の自分は先ほどまでと同じように空気が吸える。首を絞められていると言うのに痛みはない。

なんだ、もう死んでしまったのかと辺りを見回すも、目の前に広がるのは、先程までと同じ趣味の悪い礼拝堂の中。

おかしいのはそれだけではない。土の首を絞めていた夏海の腕が、今度は自分の首輪を掴んで苦しがつているではないか。

虚ろだった意識を覚醒させ、どうということだと再び辺りを見回す土。

意識を取り戻した彼の目に映ったのは、青色の棒で夏海的首輪を刺す、仮面ライダークウガの姿があった。

「馬鹿野郎、何ぼおつとしてやがんだ土ア！ 夏海ちゃんがピンチなんだぞ！」

予期せぬクウガの登場に、デイケイドの仮面の中で目を見開いて驚く土。

「馬鹿はお前だ！ 子どものお守すら満足にできねえのか」

同時に、自身がユウスケに課したことを思い出し、助けられたことも忘れて、荒い口調で言及するデイケイド。クウガは即座に「言いがかりだ」と反論する。

「そのカナメちゃんを追ってたら、こんなわけのわからない場所に落ちちゃったんだ、不可抗力なんだって」

「何が言いがかりだ。逃がした時点でお前が悪いだろ」

悪いのはお前だと、みつともない言い合いを続ける二人のライダー。

その最中、首輪を掴んで苦しがる夏海の姿をちらと見たデイケイドは、ある疑問を抱いた。

首を棒で刺されて痛みを感じ、それを引き剥がそうとするのは分かる。しかし、それで自分が絶望から解放されるのはおかしいのではないか。

クウガと言い合いを続ける中、何故こうなっているのかと思案を巡らせる。デイケイドは彼が夏海の首筋に刺した棒と、彼の体表を目にして、一つの結論に達した。

「そうか……そういうことかよ」

彼が今目になっているのは、青のクウガ・ドラゴンフォーム。手持ちの武器はドラゴンロッド。

仮面ライダークウガは手足や手持ちの武器から「封印エネルギー」を放出して、グロンギたちを抹殺する戦士だ。そのエネルギーが首輪を伝い、自分の中に巣食いかけていた絶望を断ち切ったのではないか。デイケイドはそう結論付けた。

その証拠に首輪が形を変え、自分の腕に取り付かんとしていたあの腕輪は、砕けて千切れ床に散乱している。

デイケイドは「助かったぜ」と仮面の下でにやりと笑った。

「その話は後だ！そこを動くなよユウスケ、夏ミカン！」

「ええ、えっ？」

床に落とした音撃棒を拾い上げ、念には念をと、ライドブッカーからカードを引き抜いてドライバーに装填。

FORM RIDE「HI-BI-KI KURENA

I」

ドライバーから無機質な電子音が発せられると同時に、デイケイドの体を灼熱の炎が包み込み、紫の体表を真っ赤に染め上げる。

仮面ライダー響鬼の強化形態「響鬼・紅」だ。

「一発で決めてやる、音撃打・灼熱深紅の型！」

FINAL ATTACK RIDE「Hi-Hi-Hi-Hi-HI-BIKI」

ファイナルアタックライドのカードを装填すると同時に、デイケイドは夏海の腹部目掛けて、勢い良く音撃棒を振るう。

清めの音を叩き込まれた夏海は、炎の紋を体に刻み、それが弾けると同時に、長机の間と間に吹き飛ばされてしまった。

「痛ててて……いきなり何するんだよ土」

夏海と共に吹き飛ばされ、机や椅子の下敷きになったクウガが、よろよろと起き上がる。

デイケイドは「夏海のためだ」と彼の言葉を遮って、近くに倒れている夏海の様子を見るよう促した。

「夏海ちゃん、夏海ちゃん！ 大丈夫か、夏海ちゃん！」

机と机の間に挟まって横たわる夏海を抱き上げ、軽く揺すって無事を確かめるクウガ。

清めの音撃が効いたのか、変身は既に解けており、絶望を増幅させるあの首輪も、跡形もなく消え去っていた。

意識はないが、寢息にも似た穏やかな息遣いが聞こえてくる。無事にケイトの呪縛から解き放たれたようだ。二人のライダーは仮面の下で安堵の溜め息を漏らした。

「私の口付けが破られるなんて……！ けれどまだ終わりじゃないわよ、今度はあなたたちが喰らいなさいッ！」

その一瞬の隙を、ドクター・ケイトは逃さなかった。夏海に気を取られた二人のライダーに向かい、杖を振り上げてあの光線を放ったのだ。

気付いた所で時遅し。光線は彼らの首筋近くにまで迫っていて、避けようがない。

あのデイケイドを自分が仕留め、手駒に変えた。これで昇進だと高笑うケイトだったが、杖を握る右手に、銃弾が迫っていることは、全く気付いていなかった。

「ああ……ッ、なんで、いきなりッ！」

銃弾はケイトの右掌を貫き、握っていた杖を叩き落とす。

音もなく突然放たれた銃弾に動揺し、何奴かと必死になって辺り

を見回すケイト。

彼女が施設の入り口に、拳銃を構えてこちらを狙っている焰アケミの姿を見つけるのに、それほど時間はかからなかった。

彼女に気を取られ、杖を拾うことすら忘れたことがケイトの運命を分けた。アケミに気を取られたことで反応が遅れたケイトは、左脇から飛び込んだきた彩花ミキの突撃を避けることが出来なかった。

「トモエさんの、仇いいいいいいいいッ！」

「う……、ぐッ！」

両手に構えたミキの剣が、ケイトの両手を刺し貫いて、そのまま壁に叩きつけて釘付けにする。

ミキはケイトの顔に膝蹴りを見舞って、空中で一回転し、痛み悶えるケイトの顔を横目に着地した。

「なるほどね、こんなもんのためにトモエのやつはねえ……。けどよ、これで終わりだよ！」

その上で、京極サクラが右脇からケイトのいる大壇に登り、転がっていた杖を折って投げ捨てる。放られた杖はサクラの魔法の力によるものか、炎に包まれて消し炭と化した。

鮮やかな形勢逆転だ。デイケイドは壇上に立つミキとサクラ、入り口の前で拳銃を構えるアケミの姿を見て口元を歪ませた。

「お前ら……やりやあ出来んじゃねえか、見直したぜ」

「私の力じゃないわ。強いて言えばあなたと……あいつ」

苦々しくそう語り、アケミはデイケイドと、その背後に立つ二足歩行の白い生き物を指差す。円カナメにソウルジェムの秘密を教え、この場所まで誘導し、ユウスケに彼女を追わせる算段を立てた者、
「キユウベえ」だ。

「やってくれるわね。麻末トモエまで引っ張り出して……そこまでしてカナメを魔法少女にしたいっていうの？」

鋭い目付きで銃口を向け、怒りに満ち満ちた表情を見せるアケミ。キユウベえはそれに一切気圧されることなく、無表情のまま淡々

と言葉を返した。

酷い言われようだなあ、今君たちが生きていられるのは僕のお陰だっていうのにさ。わけがわからないよ。

「黙りなさい。けれど、お前の企みもここまでよ。ドクター・ケイトを倒して、何もかも終わりにしてやる」

そうだね。デイケイドに大シヨツカーに麻未トモエのソウルジエム……。イレギュラーな事態はもう勘弁してほしいよ。

悪びれることなく切り返すキュウベえに、苛立ちを募らせるアケミ。デイケイドは「放っておけよ」と平手を振って、剣で両腕を刺され、壁に釘付けとなったドクター・ケイトの方に目を向けさせた。「それよりも、まずはこいつだ。とっとと終わらせてメシにしようじゃねえか。この小動物の摂関もな」

「……そう、ね。その通り」

デイケイドの一言で我に返ったアケミは、ケイトの方に向き直り、未だ抵抗を続ける彼女の足に鉛弾を撃ち込んだ。

「もう逃げられないわよ、イレギュラー。大人しくここで消えなさい」

「トモエさんの仇……、討たせてもらおうわ！」アケミに続き、剣先をケイトの顔に向けてミキが叫ぶ。

「あんたから受けた借り、きっちりと返させてもらうぜ、覚悟しなさい！」自慢の槍を抜いたサクラが、それをこれ見よがしにぶんぶんと回しながら自信たっぷりと言う。

三人の魔法少女と二人のライダーは、各々武器を構え、とどめの一撃を放つべくじりじりと迫る。

自分たちの勝利を確信していたからか、ケイトがうつむいて、その下で不気味な薄笑いを浮かべていたことに、彼女たちは気付けなかった。

「ふふ、ふふふふふ。あなたたちまさか、「これで終わり」だなん

て……、そんなこと考えているんじゃないでしょうねえ？」

「な、なんだよ。事実その通りだろ。この期に及んで負け惜しみ？」
そのことを最初に不審がったのは彩花ミキだ。痛みを堪えて苦悶の表情を見せてはいるものの、これから殺されるというのに、恐怖を全く表に出していないのだ。

痩せ我慢か、大シヨツカーの幹部であるという矜持プライドからか、はたまた、何か策があるとしても言うのか。彼女の脳裏に一抹の不安が過った。

ミキの疑問をよそに、ケイトは震える声で話を続ける。

「この『カプセル』……、いつから空っぽだったか分かる？ まあ、分からないでしょうねえ。ふふ、ふふふ」

「カプセルう？ あんた、一体何のこと言ってるのよ」

「何やってんだ馬鹿ミキ。そいつはもう虫の息なんだぞ、ちょちょいつとトドメ、刺しちまえよ」

ケイトの言葉に聞く耳を持たず、戸惑うミキにとどめを刺せと促すサクラ。それに応じ、疑問は一先ず横に置いて、手にした剣を振り上げるミキ。

それが、彼女たちの最期の言葉となった。

早くしろと野次を飛ばしていたサクラの声が消えた。どうしたのかと彼女の方に顔を向けると、京極サクラは、鳥の羽根の様な耳を生やし、道化師のような顔の化け物に上半身を喰われ、残された胴体は炎に包まれ消し炭となった。

どうなっているんだとデイケイドたちが考えるよりも早く、今度はケイトに剣先を向けていた彩花ミキが、空から伸びた巨大な手に捕まり、頭と両足を残して握り潰されてしまう。

ミキの頭と足は、泡に包まれて気化し、跡形もなくこの世界から消え去った。

瞬く間に二人の魔法少女が死んだ。何故、誰が、どうやって。わ

けが分からないにも程がある。

彼らのそんな姿を見て、ドクター・ケイトがさも可笑しそうに笑っている。彼女の仕業なのは間違いないが、腕や足を潰され、魔女の口付けさえも封じられた今、ケイトにこんなことが出来るのだろうか。否、不可能だ。

三人が驚き戸惑う中、ドクター・ケイトは勝ち誇ったように、痛みも忘れて高笑いを上げた。

「これでおしまい？ 違うわ、終わりなのは私じゃない、あなたたちの方。見せてあげるわ、私の研究成果、人口魔女の合成・融合態の力をね」

ケイトの求めに応じ、天井から何かの姿を現した。

薄い暗幕の張られた鳥籠に、青いシヨルダードレスを纏った女性（のような何か）が入れられ、格子の隙間からは無数の腕と不気味な小窓。登頂部には、何本もの剣が刺さった蓄音機。籠の下では巨大な歯車が不気味な音を立てて回っている。

「なん……なんだよ、こりゃあ！」

「分からない、分からないけど……怖い！」

これも”魔女”だと言うのか。二人の仮面ライダーは恐怖に顔をひきつらせ、焰アケミは強大過ぎる敵の出現に、ただただ唇を噛んでいた。

それでもわたしは、魔法少女だから・そのろく【原作：魔法少女まどか マギカ

約半年ぶりの更新となります。毎度毎度遅くてホントすみません。
前回前回とそれなりに残酷な表現がありました。今回は特に
用意しておりません。

それでもわたしは、魔法少女だから…そのろく【原作：魔法少女まどか マギカ

「融合態だあ？ ンな木偶の坊、すぐにブツ倒してやる」

FINAL ATTACK RIDE 「Hi-Hi-Hi-Hi-HIBIKI」

ディケイドは頭上から襲い来る腕を音撃棒で薙ぎ払い、ファイナルアタックライドのカードをドライバーに挿入。

御魂を模った炎の塊が檻の柵と柵の間にくつつき、それを叩いて音撃を流し込む。

しかし、響鬼・紅の強力な音撃を浴びてなお、籠の化け物は何事もなかったかのように腕を動かし、音撃を叩きこんで隙だらけになったディケイドを吹き飛ばした。

「この野郎…音撃すら効かねえってのか…よッ!？」

末広がり of 机と机の間に叩きつけられたディケイドだったが、そこで休んでいるわけにはいかない。

籠に備え付けられた小窓の中から、あの道化の化け物が時報を知らせる鳩時計の鳩のように飛び出し、ディケイドを喰おうと大口を開けていたからだ。

咄嗟に体を捻り、なんとかかわすことが出来たが、ディケイドは目視するまで接近して来ていることに気付けなかった。

「油断大敵。注意一秒怪我一生ってか。そうかいそうかい、だったらこつちも全力で行かせてもらっぜ」

KUGA! AGITO! RYUKI!

FAIZ! BLADE! HIBIKI! KABUT

O!

DEN-O! KIVA!

FINAL KAMEN RIDE 「DECADE」!!

ベルト右腰に嵌ったツール「ケータッチ」を取り外し、九つの仮面ライダーの紋章を指でなぞる。

デイクイドの胸部に9人の仮面ライダーカードが並べられ、盛り上がった頭の上に自分のライダーカードが填まる。

仮面ライダーデイクイドの最強形態、『コンプリートフォーム』だ。

H I B I K I ・ K A M E N R I D E 「 A R M E D 」

デイクイドは化け物の腕の攻撃をかわしつつ、ケータッチの響鬼のマークにをタッチ。

胸部に並んだカード全てが響鬼のものへと代わり、彼の隣に響鬼の最強形態「装甲響鬼」^{アームドヒビキ}が召喚された。

「今度こそ決めてやる、くらえッ！」

F I N A L A T T A C K R I D E 「 H i - H i - H i - H I B I K I 」

飛び退きつつ、右腰のドライバーにファイナルアタックライドのカードを装填するデイクイド。

並び立つ響鬼の装甲声刃と、^{アームドセイバー}デイクイドが持つライドブッカーの刃に清めの炎が灯る。

いざそれを放たんとした瞬間、檻の中の小窓が開き、道化の化け物が二人のライダーを一口に喰らう。

しかし刃に灯った清めの炎は止まらない。ライダーを飲み込んだ化け物の口元・両側面からバーナーの様な炎が噴き出し、^{ハサミ}鋏のように交差することで、化け物の体を内側から斬り裂いたのだ。

顎を無理矢理こじ開け、中から飛び出す二人のライダー。道化の化け物は上顎と下顎を境に真っ二つに斬り裂かれ、飲み込んだ赤く輝くソウルジェムを吐き出し、どろどろに溶けて消え去った。

「ざまあみる、ケダモノ大将。このまま一気に終わらせてやらあ」

デイクイドは間髪入れず、自分の背丈以上に伸びた清めの炎を、空飛ぶ檻の化け物に叩き込む。

清めの炎は長く伸びた格子と格子の間に当たり、炸薬が爆ぜるかのような轟音を響かせるが、格子を破ることは敵わず、弾かれた上

で空虚に消えた。

「おいおいおいおい……なんで、なんで効かねエんだ……よ！」

「士！ ああくそつ、外からがダメだってんなら、中に直接ブチ込んでやる！」

渾身の一撃が効かず歯噛みするデイケイドを、檻の中から伸びた触手が叩く。空を斬る程の速さで礼拝堂の壁に叩きつけられてしまふも、そうして生じた砂埃を隠れ蓑にし、ミキの残した剣をタイタンソードに変えて、紫のクウガが飛び出した。

手にした剣を力任せに振るい、（攻撃が通るであろう）檻の格子と格子の間に刺し入れようとするが、花卉のように広がった無数の掌に阻まれる。

掌の花の上に着地し、苦々しくこれもダメかと呟くクウガの頭上に、別の格子の隙間から現れた、青銅の手甲を嵌めた逞しい腕が、彼を押し潰さんと迫り来る。

「調子に乗ってんじゃ……ねえぞ！ なめんなッ」

潰されるより前に跳び上がり、タイタンソードを振るうクウガ。落下の勢いを借りて放たれたそれは、手甲の付いた奴の腕を豆腐のように斬り裂いた。

「ざまあみる、やってやったぜこんにやろう！」

着地し、そう言っただけ誇ったのも束の間、手甲の腕は切り口から色鮮やかな魚の尻尾を生やし、人差し指と中指と薬指があらぬ方向に曲がって一体化。赤色のマントへと変わる。

小指と親指はそれそのものが腕へと変貌し、背中から身の丈ほどもある大剣を担いだ、首のない鎧の化け物に姿を変えた。

鎧の化け物が背中の中剣を抜き、クウガに襲いかかる。得物ばかりか図体も大きいため、かわすことは容易であったが、空振って地面に当たる度、花卉状の腕がたわんで揺れた。

揺れる地面に足を取られ、尻もちを付くクウガに、首なし鎧の剣が迫る。立ち上がって逃げていては間に合わないと思信したクウガ

は、指と指の間の隙間に潜り込み、そのまま下の地面へと降り立った。

息付く間もなく、首なし鎧が剣を振るって向かい来る。このままだやかわしきれないと判断したクウガは、地に足を付けて踏ん張り、振り下ろされる剣を白刃取りで受け止めた。

自分の数倍もの丈の剣を受け止めて、無事でいられるわけがない。首なし鎧が剣に力を込める度、クウガの足元は亀裂を走らせて陥没し、徐々に彼の眉間へと迫って行く。

「ぐぬ……ううう、ちきしょう！ 負けて……たまるかよオ！」

クウガは負けじと両の腕に身体中の力を込め、霊石アマダムを集中させる。あわやクウガを潰しかけた大剣が、見上げる程大きなタイタンソードへと変化した。

「おおおっ！？ なんだかよく分からないけど……喰らえッ！」

予想外の展開に冷や汗をかくも、刃は鎧の方を向いている。ならば細かいことは後で考えればよいと結論付け、クウガは山のように大きいタイタンソードを首なし鎧に向けて振るう。

首なし鎧は白羽取りで防ごうとするも、クウガ・タイタンフォームの馬鹿力には敵わず、頭のとっぺんから尾鱗の先まで、青色のペソキのような体液を噴き出し、真っ二つに切り裂かれた。

「はははっ、どうだこの野郎。今度こそやってやった……って、うあおッ！？」

倒したと同時に降ってきた青色の宝石を握り締め、膝をついて力なく笑うクウガ。しかし彼は失念していた。自分が戦っていたのが、魔女本体ではなく、その『使い魔』だったことを。

使い魔の一つが倒されたことを知った魔女本体は、無数の腕を彼の元に向ける。首なし鎧との一戦で疲弊したクウガは成す術無く押し潰されてしまった。

「なんて奴……こんなものと、どうやって戦えと言うの！」

デイケイドとクウガが成す術なく倒される様を見、焔アケミは敵の強大さに怯え、体を震わせ親指の爪を噛んでいた。

しかしそこで立ち止まるわけにはいかない。ミキとサクラに加え、二人の仮面ライダーがやられた以上、次に襲われるのは自分しかない。こいつを放っておけば、屋敷の外にいるカナメにも被害が及ぶ。それだけは絶対に阻止しなくては。

アケミは震える腕を抑え付け、巨大な檻の化け物に向かって駆け出した。彼女の接近に気付いた魔女が檻の中に手を引っ込め、無数の使い魔たちを放つ。

目標は檻の中の化け物ただ一つ。雑魚に構っている暇はない。アケミはほんの一瞬だけ時間を止めて使い魔たちの攻撃をかわし、空中に浮いた使い魔を足場にして、檻の格子にしがみ付いた。

「これ以上お前の好きにはさせない……、消えなさい」

アケミの左手、手甲内の歯車が動いた。自分以外の時間が制止したと同時に、手甲の中に収められた重火器を全て解放し、格子の中の魔女本体に放つ。

彼女が離脱すると同時に盾内部の歯車が回り、時が再び動き出す。魔女を覆う籠の中で大小複数の爆発が起こり、見上げる程大きな悪魔の鳥籠は、アジトである教会を巻き込んで吹き飛んだ。

ややあって、瓦礫の下からアケミが体を起こして立ち上がる。盾を揺するが何も出ず、時も止められない。文字通りのガス欠だ。力を殆ど使い果たした甲斐あってか、魔女の体は爆ぜ、粉々になった亡骸の欠片が宙を舞っている。

「ふふ、ふ……ざまあ見なさい、この、化け物……」

安堵の溜め息を漏らし、その場に座り込むアケミ。しかし、そんな彼女を嘲笑うように、跳ねて飛んだ二本の人差し指が、アケミの胸と左足を貫いた。

「な、なんで……！ 奴は今、粉微塵になった筈じゃ」

言いかけて空を見上げたアケミは、胸と足の痛みすら忘れ、絶望

に体を震わせ歯噛みする。先程まで粉々に砕けていた善の魔女の体が、いつの間にか元通りになっていたのだ。

自分の力程度では奴には絶対に敵わないことを思い知らされたアケミは、抵抗することすら出来ずに持ち上げられ、瓦礫の山に叩き付けられた。

暫くし、瓦礫の山を掻き分けて薔薇の花弁が顔を出す。ドクター・ケイトは体の埃を払って嫌味な笑い声を上げた。

「素晴らしい……素晴らしいわ、流石私の最高傑作！世界の破壊者デイケイドだって、この魔女の前には足元にすら及ばない！この子を大首領様に献上すれば、大シヨツカーでの私の地位も更になるわ、はは、あははははッ」

どうやら、遅かったみたいだね。

「これ……は、アケミちゃん！ ミキちゃん！ サクラちゃん！ みんな……、みんな、どこにいるの!？」

瓦礫と化したドクター・ケイトのアジトに向かい、足早に駆けて行く者がいた。アケミたちに邪魔だと結界で足止めされていた円力ナメだ。

ミキとサクラが死んでしまったことで結界が消失した上、彼女たちが向かった建物が轟音を立てて崩れたことで不安を覚え、アケミたちの身を案じ、キユウベエの声に導かれてここまで来たのだ。

カナメの目に映ったのは視界いっぱい広がる瓦礫の山と、そこに埋もれる仮面ライダー二人と友人の姿。焔アケミが負傷を推して立ち上がる。しかし、既に体力も貯蔵している武器も尽きた彼女に出来ることは何もなく、魔女の指に頭の右半分を抉られ、成す術無く突っ伏した。

溢れんばかりの涙が零れ、胃の中のものが逆流し、カナメはその場に蹲おのってしまふ。怯えおの慄くカナメに、瓦礫の下から這い出し

たキユウベえが事実だけを淡々と述べる。

彩花ミキ、京極サクラ。彼女たちの体はあの魔女に喰われて消滅した。抵抗する暇もなくね。あんな強大な力を持った魔女は初めてだ。どれだけのグリーンフィードがあの中にあるのか……僕にも想像がつかない。

奴は危険だ。逃げようカナメ。君一人だけなら、僕の力でこの結界から出してあげられる。さあ、早く！

「そんなの……」カナメは怒りに声を荒げる。「そんなのつてないよ！ アケミちゃんを……、士さんたちを見捨ててわたしだけに逃げろつて言っの！？」

頭を冷やして、よく考えてご覧よカナメ。あの魔女の力は、焰アケミはおるか、デイケイドですら歯が立たない程に強力だ。逃げたつて誰も文句は言わないし、君の身を護る……それがアケミたち三人の願いなんだよ。君は彼女たちの想いを無下にするつもりなのかい？

「分かってる、分かってるよそんな事……」カナメは大声でそう叫んだ後、うつ向き絞り出すような声で言う。「でも、わたしには無理だよ。みんなを放ってなんかおけない。これ以上大切な人を失うのは嫌……」

蹲って泣きじゃくるカナメを見、キユウベえのルビーのような赤い目がきらりと光る。キユウベえは「君の気持ちはよく分かった」と彼女に話を切り出した。

その為にどうすれば良いのか……、その答えは既に君自身が分かっているんじゃないのかい？ 君が内包する力は僕にも計り知れない。その力を解放すれば、この状況を打開できるかもしれないよ。さあ、解き放つてご覧。君の願いを

「わたしの……わたしの、願いは……」

キユウベえの耳の様な触手がカナメの胸元に迫る。カナメは目を伏せ、迷いを断ち切るかのように首を左右に振ると、凜とした顔で言葉を紡いだ。

「あの魔女を、元の姿に戻してあげて。奇跡を願った魔法少女が、他の誰かに絶望を与えるなんて、そんなの絶対おかしいよ。これ以上、みんなを苦しませないで！」

……訳が分からないよ、カナメ。あの魔女はアケミたちをこんなにした元凶なんだよ。アケミたちを救うならまだしも、なんであんな奴に情けを掛けるんだい。

「誤魔化したって無駄だよ」カナメは憤怒の籠った目でキュウベエを見る。「あの魔女もトモエさんと同じ、ドクター・ケイトによって魔女に変えられた魔法少女なんでしょう？ だったら、戻すことが出来ればこれ以上暴れることもないはず。お願いだよ、キュウベエ！」

カナメの目に宿る決意は本物だ。自身の願いを叶えてもらうまで、きつと一步も退きはしないだ。下手に誤魔化しても時間の無駄だろう。そう判断したキュウベエは、仕方がないと溜め息を吐いた。

君の気持ちは良く分かった。だからこそ言おう。気を悪くしないでくれ。その願いは……叶えるに値しない

「ええ……えっ!？」

『どんな願いも叶えてあげる』と言っておきながら、今一番叶えて欲しい願いを無下にする。キュウベエの訳の解らない行動に、カナメは怒る所か困惑して言葉に詰まってしまふ。

どうして良いか解らず戸惑うカナメに、キュウベエは「言葉が足りなかったね」と侘びた。

結論から言えば、君の願いを叶えるのは不可能じゃない。君の推論通り、あの魔女は何処からか集められ、ドクター・ケイトに絶望を植え付けられた、元・魔法少女たちの集合体だ。君の願いで奴の体から穢れを取り除けさえすれば、少なくともソウルジェムの状態までは戻るかも知れない。

「だったら……！ なんでそうしてくれないの!？」

話は最後まで聞くことだ。確かに僕は、穢れを取り除けるとは

言った。けどね、取り除いた絶望を消し去ることは不可能なんだ。誰かが飲み込んで肩代わりするしかない。それを担えるのは、彼女たちの幸せを望んだカナメ、君をおいて他にない。

あれだけ強力な魔女を生み出す程の絶望だ。君のソウルジエムは絶望に覆い尽くされて呪いを産み、魔法少女になる前に、その魔女よりさらに強大な化物へと変貌するだろう。その先に何が待っているのか……、僕が一夕説明しなくても分かるだろう？

「ちよつと……、ちよつと待ってよ。魔法少女が魔女になって、あれはドクター・ケイトが産み出したんじゃない、なかつたの!？」

今更何を言っているんだい、カナメ。魔法少女は遅かれ早かれ、魔女になる運命なんだよ。ドクター・ケイトはそれを早めたに過ぎない。麻未トモエだって、ケイトが手を下さなくとも、いずれあの姿になっていた筈さ。あれで気の弱い子だったからね。

「そんな！ そんな、そんな……」

畳み掛けるように告げられた、残酷な真実に耐えられず、カナメは頂垂れて床に膝をついてしまう。キユウベえは彼女の肩に前足を乗せ、『君を傷付ける気はなかつたんだよ』と釈明する。

僕だって、本当はこんなこと言いたくは無いんだ。君にはちゃんと魔法少女になって欲しかったんだ。絶望を糧に魔法少女になられちゃあ、『エネルギー』を回収出来ないからね。

さあ、他の願い事を決めるんだカナメ。アケミやデイケイドたちを助けたいんだとか、何なら、トモエを生き返らせたいってものでも構わない。何にせよ、今君が行動を起こさない限り、この結界にいる者たちはみんな死んでしまっただろうね。誰一人救われずに。

そんなこと、わざわざ言われなくとも分かっている。だがなんとかしたとして、自分が目の前の魔女以上の怪物になると言うのなら、何の意味も無いではないか。

魔女と化した麻未トモエの姿が、カナメの臉に焼き付いて離れない。大切な友を友と分ならず、見境無く人々を襲う自分など、想像

したくもない。

魔法少女になるか、ならないか。どちらを選んでも誰も救えないと知った今、自分は一体何をすれば良いのだろう。カナメは顔を掻きむしり、頭の中で解の無い問答を繰り返していた。

「おおツ、うおおお、お！」

そこに、傷だらけの仮面ライダーデイケイドが、数メートル程地面を擦ってやって来た。魔女の攻撃を喰い、廃墟となった教会アシトからこの場所まで放り投げられたのだろう。

変身が解け、土の姿に戻りながらも、手にした剣を杖によるよると立ち上がり、怒りに任せてカナメに契約を迫るキュウベエの首根を掴んだ。

「聞いてたぞこの野郎、全部てめえの仕業だつたんだな。ミキにサクラ、アケミの奴を泣かせた上に、カナメまで引き込もつてか。ふざけんじゃねえ！」

首根を絞められ、いきり立つ土を前にしながらも、キュウベエは涼しい顔と抑揚の無い声で言葉を返す。

「……やれやれ。君はそんなことを言える立場かい？ 僕たちは君のせいで生まれたと言うのにさ。」

「俺の……せい、だと？ 何を言ってるんだ」

惚けるつもりかい？ 君は世界の破壊者で、無秩序に増え過ぎた『ダミー』の世界を壊し、『オリジナル』の世界を消滅から救う役目を負っていたじゃないか。君はそれを無視し、世界と世界を橋渡しをして崩壊を助長させてしまった。

僕は平行世界の意思によって産まれたんだよ。世界各々が『個』として存在し続け、他の干渉に屈しない程のエネルギーを集めるためにね。『第二次成長期の少女の、希望から絶望への相転位』。このエネルギーが、それに最も適している。

彼女たちを気の毒とは思いますが、平行世界全てが崩壊するかどうかの瀬戸際だからね。それに『どんな願いも叶える』という対価だつ

て用意しているんだ。理不尽を強いているつもりは無いんだけどな。「おい、ちよつと待てよ、おい……。何なんだよ、そりゃあ」

キュウベエの口から明かされた、門矢士の旅の目的と、それ自体が無駄なことだったという言葉。彼がそう言っているだけで根拠も何もなく、信じようが信じまいが士の自由なのだが、ここまで多くの怪異を目の当たりにしてきた以上、信じざるを得なくなってしまう。

自分が巡ってきた旅は全て無駄なことだったのか。カナメと仲間魔法少女たちは、自分のせいでこんな目に遭っていると言うのか。士は呆然自失のまま膝を落とし、床に両手をついて頂垂れた。

士の手から脱け出したキュウベエが催促のため、カナメの元へ可愛らしく駆けて来た。

泣いている暇は無いよカナメ。皆を助けたいと思うなら、時間の猶予はあまり無いんだからね。さあ、僕と契約して、魔法少女になつてよ。

キュウベエの頭の、耳とも触手ともつかない物体が泣きじゃくるカナメの頭に触れる。彼女の都合や想いもお構い無しに、深層心理の中から願いを読み取り、強引に叶えてしまうつもりなのか。

だがカナメはそれを引き剥がすどころか、逆に自分の胸元に押し付け、唇を固く結んで凜とした顔で言った。

「契約するよ。でも、わたしの願いは変わらない。あの魔女を元に戻して。それ以外は望まないし、叶えてくれるまで絶対に退かないら」

何を言い出すんだい、カナメ。僕の話聞いていただろう、そんな利の無い願いなんて、叶えられないと。

「嘘」カナメはキュウベエの言葉を遮って話を続ける。「あなたはさつき、『不可能じゃない』って言っていた。願いを叶えてもエネルギーが手に入らないから拒んでいるだけなんですよ。でも、そうは行かないよキュウベエ。だってわたし、もう決めちゃったから」

不意に土の方へと顔を向け、カナメは怖さも辛さも微塵も見せない堂々とした顔で彼に言う。

「土さん、『世界の破壊者』なんですよ？ わたしのこと、宜しく願いますね。出来れば、魔女として覚醒する前に……」

「おい、馬鹿やめろ！ そんなことして何になる。お前には背負わせたくなないと命張ったアケミの、ミキやサクラたちのやったことを無駄にするつもりか！」

「分かってます。分かってますけど……、あの魔女を放っておけば、この世界全てを絶望させてしまうんですよ。わたしの願いでそれが防げるのなら……、構いません」

「構うだろ！ 俺もアケミも、お前のために死んでったミキたちも！ ふざけんじゃねえ」

土の言葉に、カナメは声を荒げる。「分かっているって言うてるんです！ わたしだって皆を護りたい……。舞台の袖で観客をやっているだけで終わりたいくないんです！」

かつて自分が言った言葉が、こんな形で仇となるとは。土はさせるものかとカナメの元に駆け出すが、魔女の長く太い腕に掴まれ、阻まれた。

「そんな小娘とばかりお話してないで、もっと私の方を見て頂戴。お仲間さんが首を長くしてお待ちかねよお」

「馬鹿ツ、今はお前らに構ってる暇なんか……」

「今も昔もあるもんですか。生意気ね、やっておしまい！」

ケイトは魔女に命じ、土をアケミやユウスケたちの元へと放り投げる。床に叩き付けられ、背骨に激痛が走るが、意に介している暇はない。土はバツクルを片手に再び走り出すが、彼と同じ位大きく長い魔女の指に弾かれ、またも宙を舞った。

もう、止める者は誰もいない。カナメは歯を食い縛って涙を堪え、キユウベえの『耳』を握り締めて叫んだ。

「次はあなたの番。さあ、叶えてよ、キユウベえ！」

待ってくれ。そんな願い、叶えられる訳が……。

キユウベえの予想に反し、カナメの胸が、彼女の強い思いに呼応するかのように、桃色の輝きを発した。太陽のように眩く、力強い輝きは、見上げる程大きな魔女の体を容易く取り込むと、その巨体を形作る”絶望”の黒い煙を吸い尽くした。

穢れを吸われて本来の輝きを取り戻したソウルジェムが、雨のように降り注ぐ。願い通り魔女を消し去り、利用されていた魔法少女たちを救うことは出来た。しかし、その代償は余りにも大きく、元魔法少女たちの絶望全てを吸い取ったカナメは、桃色の光の代わりにどす黒い瘴気を発し始めたのだ。

暗黒の瘴気は空中で一ヶ所に集中し、『何か』を形作って行く。絶望に身を焦がされ、魔女に変化する前兆だ。

一瞬のうち起きたこの怪異に対し、アケミや士たちよりも先にドクター・ケイトが声を上げた。

「なっ、何よ、何なのよ!? 私の可愛いカイクツは、一体どこに行っちゃったのよッ」

辺りを見回そうが、カナメを覆う黒い瘴気が見えるばかりで、魔法の姿はどこにもない。業を煮やしたケイトは、右手を振り上げ、デルザーの戦闘員たちを呼び出した。

「お前たちお行き! あの小娘の息の根を止めるんだよ!」

ケイトの呼び声に従い、花の面を被った戦闘員たちがカナメの元へ襲い掛かる。

一時遅れて、その様子を目の当たりにした焰アケミは愕然として泣き崩れた。

「ああ、ああ……。そんな、そんな! こんなことに……。嫌よ、こんなの嫌!」

左手の盾を操作するが、中の砂時計は一粒足りとも動かない。先の魔法との戦いで魔力という魔力を使い切ってしまったからだ。無理に力を引き出すとすれば、アケミの心は絶望に覆われ、彼女もまた魔女に変貌してしまうだろう。

「なんで……なんでよ、なんで！ どうして戻れないの！ どうしてやり直させてくれないのよ！ こんな嫌、絶対に嫌ア！」

自身の魔力が尽き掛けているのも分からず、アケミは辺りの瓦礫に当たって喚き散らす。土はそんな彼女を見かね、カナメを襲わんとする戦闘員たちに掴みかかりつつ叫んだ。

「いい加減にしろ！ ンなこと悔やんでどうする、取り乱して何になる！ 今お前がやらなきゃならないのは、そんなことじゃあねえだろう！」

「勝手なことを……」土の言葉に、アケミの堪忍袋の緒が切れた。

「こつなつたのは、元を正せばあなたのせいじゃない！ あなたさえいなければ、カナメは、カナメは……」

「ああ、そうさ。その通り」土は悪びれることなく言い返す。「やつをあんな目に遭わせたのは俺の責任だ。だからもう、いいだろう。逃げないで戦え、考えろ！ いくら焦ろうが怯えようが、状況は何も変わらないんだぞ！」

「そんな……、勝手な……！」

立ち向かわねば何も変わらない。そんなこと、アケミにだって分かっていて。だが、魔女たちの絶望を全て飲み込んだカナメに対し、自分が出ることなど何も無いではないか。濁りに濁った自身のソウルジェムを見つめ、アケミは改めて自分の非力さを呪う。

いや、待てよ。彼女は今一度自身のソウルジェムに目を向ける。麻末トモエの最期の瞬間。彼女は一体何をした。穢れの溜まったソウルジェムを自ら砕いて命を落とし、自分たちに癒えない悲しみを与えた。いや、気になったのはそこじゃない。何故彼女のジェムには絶望が溜まったのか？ 麻末トモエは自分たちに『何』をしてくれたのか？

「そうか……。そういつ、こと！」

アケミの瞳に紫色の輝きが戻る。彼女は気付いたのだ。ジェムの穢れを吸えるのは、何もグリーンフシードだけじゃない。自身のソウルジェムをカナメに近付け、その苦しみを肩代わりすることが出来

れば、カナメを魔女ではなく、魔法少女で留められるかもしれない。どうせ時間跳躍には足りない魔力だ、可能性は低くとも、何もしいよりずっと良い。

心より体が先に動く。アケミは気が付くと、戦闘員たちを掻き分け、カナメの元へと脇目も振らずに駆けていた。

彼女が一目散に駆ける様子を、門矢士は敵を薙ぎ倒しつつ横目に見る。彼女の目には輝きが満ちている。自棄になっての特攻ではない。彼にとってはそれで十分だった。

士は倒れた戦闘員から剣を奪うと、アケミに群がる花面たちを斬り倒した。

「門矢士、あなた……」

「道は俺たちで切り開く！ お前は先に進め！」

そう言い放った士は、奥で横たわっているユウスケに向かい、奪い取ったもう一本の剣を放る。

刃は彼の耳元に突き刺さり、何事かと飛び起きる。士はそれを見計らい、声を思いきり張り上げた。

「寝てばかりいねえで起きろユウスケ！ 俺たちでアケミの道を開くんだ！」

「は……あ！？」

叩き起こされて微睡むユウスケには、何が起こっているのか分かる訳がない。だが花面の雑兵に襲われて目を覚まし、必死になってカナメの元へと駆けるアケミの姿を目に留めて、漸く事態を理解する。

ならば自分のすべきことは一つ。ユウスケは士に言われるまでもなく、アケミの行く手を塞ぐ戦闘員たちを散らし始めた。

アケミは礼を口にし、振り返らずに進み続ける。距離はそう離れていないが、魔力の殆どを使い尽くし、先の戦いで脚を負傷したのも響き、未だに辿り着けないでいた。

散らされたうちの一体が、先を急ぐアケミの足首を掴んだ。引つ張られるようにうつ伏せに倒れ、それを見た花面たちが彼女に覆い

被さろうと突っ込んで来る。

彼女の非力な力では、花面の怪物を引き剥がすことは出来ず、頼みの綱の士たちも、敵の余りの多さに苦戦を強いられており、助けは間に合いそうも無い。

アケミはどうにもならないと目を閉じ、悔しさに歯噛みする。戦闘員たちが彼女を羽交い締めにし、どこかへと持ち去ろうとする。だがその時、不意に彼らの動きが止まった。花面の誰もが苦しそうに笑いこけ、何も出来ないでいたのだ。

羽交い締めから抜け出し、何がどうなっているのかと周囲を見回す。剣を持った相手に怯むことなく、右の親指だけで戦闘員たちを倒して行く『光夏海』の姿がそこにあった。

「アケミちゃん！」夏海は笑い転げる花面たちを押し退け、アケミの体を抱きかかえた。「事情は存じませんが、あの場所まで連れて行けばいい………んですよ？ わたしの背に乗ってください」

「光夏海……、あなた……」

「あなたたちが何をしていて、何に苦しんでいるのか、わたしには分からないから………。せめて、このくらいはさせてください、ね？」

「……ありがとう」

夏海はアケミを自身の背に乗せて駆け出し、近づく戦闘員たちを笑いのツボを突いて散らして行く。途中、肩にぼたり、ぼたりと滴が落ちたが、振り返ることなく走り続けた。

立ち上る瘴気が一層濃くなってきた。カナメはもう目と鼻の先だ。アケミは夏海の肩を叩き「ここでいい」と指示を出す。

「この先は生身の人間が行って良い場所じゃない。後は自分で行くわ」

「行く………って、魔法少女であろうとなかろうと危険ですよ！ わたしも一緒に」

アケミは夏海の忠告を振りきって、彼女の背から降りると、何か悟ったかのような晴れやかな顔で言葉を返した。

「本当にありがとう、光夏海。いいのよ、もう………いいの。さよう

なら」

それだけ言い残し、焰アケミは黒い煙の中へと姿を消す。夏海は、寸前の彼女の晴れやかな表情に圧倒され、何も言い返すことなく呆然と立ち尽くした。

皆の協力を得て、焰アケミは漸くカナメの元へと辿り着く。雪のように白く弱々しい肌に、断続的に続く微かな呼吸。いつ魔女になってもおかしくない。今まで良く人の姿を保っていたいられたものだ。アケミは親友の変わり果てた姿に涙を溢し、そっと彼女の手を握った。

今頃来て何なんだい焰アケミ。あの魔女から吸い取った絶望で、円カナメ自身が呪いを産み始めた。今となっては誰にも、どうすることも出来ないよ。

キュウベエの辛辣な言葉を無視し、アケミは左手の甲からソウルジエムを外し、カナメの胸元に差し出した。

カナメ、あなたは優しすぎる。優しすぎるのよ。魔法少女は神様なんかじゃない。何を願ったって全てを救うことは出来ないのよ。

でも。私はあなたのそんなところが好きだった。あなたのそんな想いに救われてきた。

辛かったよね？ 苦しかったよね。もう、大丈夫。あなたを独りぼっちになんかせさない。私はずっと、傍にいるから

アケミのソウルジエムは彼女の体を離れ、漆黒の闇に吸い込まれて行った。同時に、彼女の『体だったもの』は、顔には深い皺が刻まれ、長く艶のあった黒髪は白髪になり、皮膚のあちこちがささくれて行く。

『時間を操る』能力を持った魔法少女・焰アケミの肉体は、ジエムが離れると同時に、今まで止めてきた時間の流れを受けて急速に老化し、肉は腐り、骨は砕け、砂となって結界の中に浚われていった。

なんだ、これは……どういうことなんだ！

今尚空に昇り続ける黒い煙を見、キユウベえは驚いて声を上げる。今の今まで勢い良く昇っていた漆黒の闇が、徐々にではあるが弱まり始めているのだ。焰アケミの犠牲を持つてしても、カナメの魔女化を止めることは叶わなかった。だが、彼女の心がカナメの絶望や呪いを癒し、魔女化を押し留めている。

こんなこと、ある筈がない。穢れを溜め込んだソウルジエムは、例外なく魔女の卵に変化する筈なのだ。キユウベえは今そこで起きている事態に困惑し、カナメの周りを何度も回る。

瘴気の中で起こった怪異は、煙の外で戦う士にも理解出来た。徐々に薄く成り行く煙に、アケミのしたことを『だいたい』把握し、成る程なと一人頷いた。

「そうか、そういうことだったか。だが足りねえな。何か、何かないか……」

アケミの狙いは的を射ているが、絶望に染まりかけた彼女のジエムだけでは、カナメの深い絶望を払い切れない。

『それ』が何であるのか理解した士は、背後で戦うユウスケに向けて、今一度声を張り上げた。

「おおい、ユウスケ、ユウスケ！」

「何だよ、お前と一緒にでこつちも取り込み中なんだ、後にしてくれ」

「手間は取らせねえよ。お前さつき『首なし』の化物をやっつけて、『青色の宝石』を手に入れ……なかったか？」

「宝石？ 宝石……って、これのことか？」

ユウスケは敵を蹴り付けて距離を取り、ポケットの中から、土のものに似た形の青い宝石を取り出す。これだ、これしかない。士は彼が宝石を持っていたことを確認し、「だったら」と更に言葉を続ける。

「そいつをあゝの煙の中に放り込め。カナメたちを助けるにやあそれしかねえ！」

「これを、放り込めって!? 何考えてんだよ土、そんなことしたって何も……」

「うだうだ言ってねえでやれ! 手遅れになるだろう」

「あああ、分かった、分かったってば……」

訳は分からないが、土がそこまで言うからには、何が意味があるのだろう。ユウスケは青い宝石を手に大きく振り被った。

「俺に呼吸を合わせろよ。せえ……のッ!」

土の掛け声と共に、赤と青のソウルジェムが空を舞い、暗黒の闇の中に吸い込まれていく。

「彩花ミキ、京極サクラ。お前らのダチがピンチなんだ。カナメたちを……頼んだぞ」

そこには何もなく、何も聞こえず、何も見えない漆黒の闇の中だった。何故自分はここに居るのか。誰か、助けてくれる人はいないのか。孤独の身を切るような寂しさが、未だ幼い円カナメの心を包み込む。

頭の中に声が響いた。顔も名も知らぬ誰かの為に願いを掛けた自分を嘲笑うかのような、嫌味な笑い声がこだまする。

「やめて……、嫌ッ、助けて! 助けて……」

どこに助けを求めても、答えはどこからも返ってはこない。これが現実なのか。皆のために命を賭けたのに、帰ってきたのはこんな仕打ちだけか。虚しいにも程がある。哀しいにも程がある。

もう嫌だ。何処へ逃げても何も変わらず、どうして良いか分からない。友達皆死んだ。こんな自分のために命を張って、報われることなく一つしかないそれを散らして行ったのだ。

何もかもが嫌になった。誰かの笑顔が何だ。自分の笑顔すら護れ

ないのに、人のものまで護っていられるか。壊してやりたい、何もかも壊してすつきりしたい。

自分の心がどす黒い何かに染まり行くのが分かる。悪くない感覚だ。このまま闇に身を委ねるのも良いかも知れない。無数の腕が自分に向けて手を伸ばしているのが見える。あれを掴もう。あれを掴んで闇に心を委ねよう。

苦しみや悲しみから逃れようと、無数の腕にすがろうとするカナメの手を、彼女の背後から焰アケミが力強く掴んだ。

「そっちに行つては駄目。魔女の呪いから逃れられなくなるわ」

「アケミ……ちゃん!?」カナメは驚いた様子で振り返る。「ちょっと、ちょっと待つてよ……。アケミちゃんがここにいては、まさか」

アケミはカナメの唇に人差し指を触れさせ、彼女の言葉を遮った。「いいのよ。もう、いいの。私は十分幸せよ。これでようやく、あなたの傍にいられるようになったから」

「よくない……全然良くないよ！ それってアケミちゃんも死んじやつたつてことじゃない。アケミちゃんは良くて、わたしは納得できないよ。わたしの、わたしなんかの為に……命を捨てるなんて死んでも尚、自分は友達に迷惑を掛け続けるのか。カナメは自分の不甲斐なさに泣き崩れ、啜り泣きと鼻水で言葉にならなくなるうとも、謝罪の言葉を口にし続ける。

焰アケミは、泣きじゃくる親友の肩を抱き、「いいのよ」と励ます。

「あなたが悔やむことなんてないわ。私たちは自分のしたいことをしただけなんだから」

そおそ。アタシら魔法少女は自分のしたいようにして、生きたいように生きる。シンプルでいいだろ？

ちよつと、あんと一緒にしないでよ。あたしまで馬鹿みたいに思われるじゃんか！。

「……え、っ!?!?」

聞き覚えのある声に気付き、カナメは驚いて顔を上げる。そこに居たのは、先程魔女に喰われて死んだ筈の、彩花ミキと京極サクラの二人であった。土たちが投げた二色のソウルジェムが、闇の中でカナメの体に吸収されたのだろう。

「ミキちゃん、サクラちゃん！ どうしてここ……おっ!？」

カナメの問いを遮り、彩花ミキは彼女の背中に抱きついた。「細かいことは言いつ子なしよ。ま、強いて言えば……愛の力ってやつ？ カナメはあたしの嫁だしねえー」

「ちょ、ちよつと彩花ミキ！」ミキの発言に、アケミが声を荒げる。「カナメは誰のものでも無いわ、私のものよ。そこから離れなさい」「のっけから矛盾してんじゃん……。誰のものでも無いんなら、誰が何をしようと自由でしょ。ねー、カナメー」

「彩花ミキ……、あなたはいつもいつも、どうしてそうも馬鹿なの」口ではそう言っているが、ミキの遠慮のない行動を内心羨ましく思っているらしく、アケミは目を血走らせ歯噛みしている。

このまま痴話喧嘩が続くと厄介だ。そう考えた京極サクラは、軽く手を叩いて、火花を散らし合う二人の間に割って入る。

「はいはい。目の毒なモン見せ付けてくれてどーもありがとう。続きはあの世でもやんな。んなことより、さ」

サクラは二人をカナメから強引に引き剥がし、彼女の手を握って言った。

「……ま、結局はそういうことなんだよ。アタシたちは自分の好きなように生き、好きなことをやって死んだ。んで、とうとうお前もそっちの道に足を踏み入れちゃった訳だ。好きでやったんなら、アタシたちも文句は言えねえ。だからよ、お前も『好きなように』生きるよカナメ。魔法少女として、さ」

「好きなように……生きる？」

「そうだ。アタシたちの意志を継ぐんだとか、誰かの為に自分を犠牲にする必要はねえ。お前のしたいようにしろ。難しい事を考えて悩んだり悲しんだりするな。それだけでいいんだ」

「そうそう。あたしたちみんな、カナメの泣き顔なんて見たくないしさ」言いつつ、ミキがカナメの右手を掴む。

「カナメのやりたいことは私たちにみんなのしたいこと。さあ、教えて頂戴。あなたの願いを」アケミは今まで誰にも見せたことのないような晴れやかな顔で、カナメの左手を優しく握る。

「遠慮すんなって、ばばーっと言っちゃまえよ。アタシたちがついてんだ。何も心配はいらねえ」最後にサクラがミキとアケミの肩に手を伸ばし、カナメと向かい合って円陣を組む。

何故、あんなことで悩み、塞ぎこんでいたのだろう。自分にはこんなに素敵な友達がいたじゃないか。ここまで来て何を恐れる必要がある。

「わたしの……願いは……」

円カナメはそつと目を閉じ、静かに口を開いた。

ドクター・ケイトの繰り出す花面の戦闘員たちと、門矢士たちとの争い。戦況はケイト側に傾き始めていた。変身を解除させられて尚、気力だけを支えに立ち向かう二人の男と、『笑いのツボ』という武器はあるものの、身体能力は並の女性の夏海だけでは、倒せども倒せども増え続ける戦闘員たちを捌き切ることは不可能だったのだ。

ここまで、笑いのツボで近寄る花面たちを散らしてきた夏海だったが、ついに疲労のピークを迎えてしまった。肩で息をしている隙に背後から羽交い絞めにされて、ツボ突きを封じられてしまう。

「嫌ッ、離して！ 離してくださいッ！」叫べども喚けども、助ける者はいない。土もユウスケも目の前の火の粉を払うだけで精一杯なのだ。

夏海の眼前に、両方の手をわきわきと嫌らしく蠢かす、気味の悪い花面が迫る。諦めたくない、だが、諦める以外にもう道はない。

夏海は恐れに身を震わせ、目を閉じて甲高い声で叫んだ。

辺りに凄まじい風が吹き荒れ、ケイトの戦闘員たちを皆吹き飛ばしたのはその時だ。彼らに捕まっていた夏海も、当然その風に煽られて宙を舞うが、自分より背丈の小さい何者かに抱きかかえられ、瓦礫が連なり、高台となつている場所に着地する。

「今の……は」信じられないと言った表情を顔に浮かべ、夏海は自分を抱きかかえる者の姿を目にする。

白とピンクを基調とし、全身にフリルがあしらわれたドレスを身に纏い、右手には赤の宝石を、左手には青の宝石、そして胸元には桃と黒の二色が混ざった宝石が輝いている。

焰アケミ、彩花ミキ、京極サクラ。三人の力を取り込んで『魔法少女』としての存在を確立した円カナメがそこにいた。

それでもわたしは、魔法少女だから：そのろく【原作：魔法少女まどか マギカ

・サーカステントの魔女

その性質は”混沌”。ドクター・ケイトによって、多種多様の魔法少女の絶望、呪いが混ぜ合わされ、『個』というものが完全に欠落している。

檻の中から無数の腕を伸ばし、中にいるサーカス団員たちを放ち、自身もその腕で敵を襲う。

創造主であるケイト以外の動く者が消えるまで暴走し続ける。いつまでもいつまでもいつまでも。

・サーカステントの魔女の使い魔

魔女の体内から投てきされ、敵という敵を抹殺するまで止まらない。ここには劇中に登場した二種を記す。

鳩時計型の使い魔

魔女の檻に備え付けられた扉から飛び出す、芋虫に道化師の顔を張り付けたような怪物。役割はサーカス団の道化師。標的を喰らうことしか出来ないが、その速さは人間には知覚出来ない。肉付きの良い人間を好み、そうでない人間は何度か咀嚼した後、飲み込まずに吐き出してしまふ。

首無し騎士型の使い魔

千切られた腕から発生した魔女。役割はテント内・ホラーハウスの首無し騎士。

彩花ミキのソウルジェムを核として産まれており、外見に彼女の面影が散見される。

それでもわたしは、魔法少女だから・そのなな【原作：魔法少女まどか マギカ

あけましておめでとございます。何かとスローペースになるか
と思いますが、今年も宜しくお願い致します。

それでもわたしは、魔法少女だから：そのなな【原作：魔法少女まどか マギカ

配下の戦闘員たちが皆吹き飛ばされ、ドクター・ケイトは戸惑いと怖れに唇を噛む。「何よ、何よ、何なのよ！ 誰なのこの子、何なのこの子！」

ややあつて事態を把握し、恐れ以上に怒りに駆られたケイトは、倒れ込む花面たちを踏みつけて叫んだ。

「何を寝てるのあなたたち！ あんな小娘、さつさと挽き肉にしちやいなさい！」

戦闘員たちはケイトの号令に体を起こし、一丸となって瓦礫の山頂に立つカナメに襲い掛かる。魔法少女・円カナメは、抱きかかえた夏海を脇に降ろし、にこやかに微笑んだ。

「暫くわたしの近くを離れないでください。あいつらはわたしがやつつけます」

「でも……、あんな数、カナメちゃん一人じゃあ」

「大丈夫です。ぱぱつと片付けちゃいますから」

そうは言うが、花面たちはカナメたちをぐるりと囲んだ上で、目と鼻の先まで迫っている。こんな状況でどうしようというのか。

カナメは身を屈めた夏海を自分の足下に寄せると、目を閉じて静かに呟いた。

「ミキちゃん……。行こう、一緒に」

その刹那、カナメの左手の甲、青色のソウルジェムが輝いた。ジエムの光はカナメの体を包み込み、彼女の背に純白のマントを、髪を淡い蒼に変え、瞳を涼やかな群青に染めた。

カナメは背のマントで自身と夏海を覆い、戦闘員たちの攻撃から身を守る。マントにはどの角度からも剣は刺さっておらず、彼女がマントを翻すと共に吹き飛ばされていく。

花面たちは直ぐ様体勢を立て直し、再びカナメたちに向かい来る。カナメは夏海に離れるよう言うと、瓦礫の山から二本の剣を造り出し、彼らに向かって跳んだ。

何が起こったのか、花面の戦闘員たちには全く理解出来なかった。彼らは何の抵抗も出来ず、一瞬のうちに胴や首を斬り裂かれていたのだから。

その理由が、風より早く剣を振るう円カナメであると、この場にいた何人が気付けただろうか。彩花ミキの『素早さ』と『剣技』を身に付けたカナメは、風すら追い越すスピードを獲得していたのだ。戦闘員たちのほぼ全てを仕留めたカナメが、ケイトに向かい、弾丸のように突っ込んで行く。

配下の戦闘員たちが皆吹き飛ばされ、ドクター・ケイトは戸惑いと怖れに唇を噛む。「何よ、何よ、何なのよ！ 誰なのこの子、何なのこの子！」

ややあつて事態を把握し、恐れ以上に怒りに駆られたケイトは、倒れ込む花面たちを踏みつけて叫んだ。

「何を寝てるのあなたたち！ あんな小娘、さつさと挽き肉にしちやいなさい！」

戦闘員たちはケイトの号令に体を起こし、一丸となって瓦礫の山頂に立つカナメに襲い掛かる。魔法少女・円カナメは、抱きかかえた夏海を脇に降ろし、にこやかに微笑んだ。

「暫くわたしの近くを離れないでください。あいつらはわたしがやっつけます」

「でも……、あんな数、カナメちゃん一人じゃあ」「大丈夫です。ぱぱっと片付けちゃいますから」

そうは言つが、花面たちはカナメたちをぐるりと囲んだ上で、目と鼻の先まで迫っている。こんな状況でどうしようというのか。

カナメは身を屈めた夏海を自分の足下に寄せると、目を閉じて静かに呟いた。

「ミキちゃん……。行こう、一緒に」

その刹那、カナメの左手の甲、青色のソウルジェムが輝いた。ジエムの光はカナメの体を包み込み、彼女の背に純白のマントを、髪を淡い蒼に変え、瞳を涼やかな群青に染めた。

カナメは背のマントで自身と夏海を覆い、戦闘員たちの攻撃から身を守る。マントにはどの角度からも剣は刺さっておらず、彼女がマントを翻すと共に吹き飛ばされていく。

花面たちは直ぐ様体勢を立て直し、再びカナメたちに向かい来る。カナメは夏海に離れるよう言うと、瓦礫の山から二本の剣を造り出し、彼らに向かって跳んだ。

何が起こったのか、花面の戦闘員たちには全く理解出来なかった。彼らは何の抵抗も出来ず、一瞬のうちに胴や首を斬り裂かれていたのだから。

その理由が、風より早く剣を振るう円カナメであると、この場にいた何人が気付けただろうか。彩花ミキの『素早さ』と『剣技』を身に付けたカナメは、風すら追い越すスピードを獲得していたのだ。カナメは戦闘員のほぼ全てを仕留め、ドクター・ケイトに向かって弾丸のように突っ込んで行く。「あなたは、あなただけは許さない！」

「だったら何だって言うのよ、うっとおしいわね！ お前たち、出てらっしゃい！」

ケイトを指して一直線に進むカナメを、地面から発生した泥の塊のようなものが受け止める。

塊は二つに別れて形を成して行き、片方は鬼の角のような兜と鎧を纏った鋼鉄の武人に、もう一方は鎖かたびらを着込み、鷲のような顔の怪物へと姿を変える。

カナメの剣を受け止めた白銀の鎧は、自由の効かない彼女に文字通りの鉄拳を見舞う。寸前に剣の柄から手を離し、腕を十字に組むが、奴の力は凄まじく、防いでなお地面を擦って土たちの元へと戻されてしまう。

「鋼鉄参謀！ 荒ワシ師団長！ このコムスメを八つ裂きにしておやり！」

ケイトの命を受け、まずは荒ワシ師団長が、片手斧を伴って空から襲い来る。カナメは体を起こし、剣を呼び出して師団長の一撃を受けて跳び、戦いの場を空中に移す。

純白のマントをはためかせた少女と、銀色の鎖かたびらを纏った鷲頭が、刃物の鈍い輝きを伴って交錯する。

傍目では勝負は互角に見える。しかし、カナメは劣勢に追い込まれていた。背中に一对の翼を持つ荒ワシ師団長とカナメとは、空を駆ける早さがまるで違う。交錯する鈍い輝きは、防戦一方で成すがままにされて出来た代物なのである。

師団長の力を御し切れず、カナメはガードの上から撥ね飛ばされ、地表に亀裂が走る程の勢いで叩き付けられてしまう。

これで終わりだと言わんばかりに嫌味な鳴き声を上げ、斧を両手で握り、振り下ろさんと突っ込んで来る。あんなものを喰らって無事で済む筈がない。

カナメは剣を支えに立ち上がると、瞳を静かに閉じ、両手を顔の前で十字に組んだ。

「サクラちゃん……、あなたの力、わたしに貸して！」

綴じられた力を解き放つように、組んだ腕を広げる。頭髪が桃色に戻り、背のマントが消え、カナメの右半身が真っ赤に染まった。手には京極サクラの象徴だった多節根が握られている。

単一の力では勝てないと理解したカナメは、魔法少女二人分の力で挑もうと考えたのだ。

襲い掛かる鷲頭に狙いを定め、槍の刃先を奴に向けて伸ばす。師団長は寸での所で体を捻り、軌道を逸らすが、カナメは待つてましたと槍の柄に力を込めた。

瞬間、槍に切れ目が走り、節同士が鎖で繋がれる。重たい刃先は重力に従って下へと折れ曲がり、体を捻らせた鷲頭の脇腹を捉えた。刃が脇腹に食い込み、その先にある鎖に巻かれ、鷲頭は身動きが

取れなくなる。カナメは大地を踏み締めて槍を振り、師団長の体を右へ左へ振り落とした。

弱った鷲頭を鎖の拘束から解いて放り投げる。奴は呻き声を上げるばかりで何もしない。仕掛けるなら今だ。カナメは右の槍に熱く燃え上がる炎を、左の剣に青い稲妻を宿して、奴の元へと駆け出した。

体を起こすも間に合わず、師団長は逆袈裟に稲妻の一撃を、横一闪に燃える炎の一撃を喰って、体を四つに斬り裂かれた。

荒ワシ師団長を裂いたカナメに、白銀の鎧が迫る。彼女の顔ほどに大きい拳で、カナメを武器の上から殴り付け、大きくよろけさせた。

両の武器を振って反撃するが、鋼鉄参謀はびくともしない。それどころか鎧の堅さに刃の方が欠けてしまう。

このままでは行けない。カナメは武器を置いて再び顔の前で組む。「アケミちゃんお願い、一緒に……戦って！」

組んだ腕を解くと共に、カナメの衣装が紫に変わる。頭髮は黒に染まり、左手には焰アケミが持っていたのと同じ盾が現れた。

鋼鉄参謀の殴打を盾で受け止める。衝撃が地面に逃げ、周囲に亀裂が走るが、カナメに痛みはない。参謀の残った左手が、そこから動けないカナメに迫る。今殴られたら対処のしようがない。

盾の中央部が開き、中の砂時計が動く。同時にカナメの姿が音も無く消え失せ、奴の左拳は空を切った。

その場に居た誰もが周囲を見回すが、カナメは見付からない。彼女は鋼鉄参謀の頭上にいた。多数の重火器を携え、それら全てを奴の方へと向けている。

テイロ……、ファイナーレ！

カナメの叫びとともに、重火器全ての砲門が開け放され、鋼鉄参謀を焼き尽くす。奴の居た半径数メートルを焦土に変えた。

「すげえ……、あれがカナメちゃんの力かよ」ユウスケが興奮気味

に言う。「戦闘員や怪人たちをあんなに容易く仕留めるなんて」

「いや、あれはカナメだけの力じゃない」ユウスケと対照的に、士は冷やかに言う。「アケミにミキにサクラ……。やつら三人の力が合わさってやがるんだ。確かに強いさ。けれど、悲しいな」

「それ……は」ユウスケはそれ以上何も言えず押し黙る。

二体の護衛とほぼ全ての雑兵を始末したカナメは、桃色の衣装に戻って、たじろぐケイトに向かい歩を進めて行く。

「く、く、く……！ 近寄るな、離れる、離れなさいッ！」

ケイトは体表から流れ出る毒液を飛ばし、必死にカナメの行く手を阻もうとする。だがそれもカナメの手持ち武器・木の枝を象った弓に弾かれ、全く意味を成さなかった。

「アケミちゃんたちだけでなく、夏海さんや、他の魔法少女までも……！ あなただけは、わたしの手で、倒す！」

「ひっ……、ひいやあああッ！ 助けて、助けて、助けて！ 誰か、誰かあッ！」

攻め手を無くした上に恐怖に駆られケイトは、カナメに背を向けて逃げ出してしまう。カナメはそんな彼女を逃がさなかった。胸元に輝くソウルジェムが、光となって弓に装填される。そこに赤青紫のソウルジェムが合わさって、力強く渦を巻いた四色の矢となった。カ一杯弦を引き、四色の光をケイトに放つ。光の矢は邪なる怪人を一撃で撃ち貫き、再び彼女の胸元へと戻った。

「私が、この私が、消える……？」

そんなこと認められるか。自分は大シヨツカーの大幹部になる。ライダーや人間の小娘ごときに邪魔されてなるものか。消え行くケイトの脳裏に、怨み辛みが去来する。

彼女は決断した。どうせ死ぬのであれば、目の前の邪魔者たちを自らの手で始末し、組織に自分の力を認めさせてやるうと。

ドクター・ケイトは矢が自分を焼き尽くす前に、残された腕で胸から上を斬り落とし、残る体を鷲のようなものへと変え、地の底へ

と姿を消した。

ややあつて、地鳴りと共に結界中が激しく揺れ始めた。あちこちで亀裂が走り、呪いから解放されたソウルジェムが次々と呑み込まれていく。

それから間も無く、カナメたちから見て遙か遠方の地表が、不気味な隆起をし始める。物凄い早さで盛り上がり、先の魔女と同じかそれ以上の大きさにまで達した。

膨れ上がった地面は地表から切り離され、宙に浮いた。土と草だらけの物体は徐々に形を変え、大きな『薔薇の花』のような形状となつて落ち着く。

薔薇の花弁が開いた。中では細かい歯が隙間無くびっしりと生え揃つており、中央の雌しべ部分には、上半身だけとなつたドクター・ケイトが埋まっている。

巨大な薔薇の化け物となつたケイトが叫ぶ。「最早姿形などどうでもよい！ 私の憎しみ怨み辛み……、その力でお前たちを大シヨツカー大首領様の生け贄にさせてもらうわ！」

「そんなこと……させないっ！」新たな敵に物怖じせず、カナメは弓矢を構えて突っ込む。先の戦いで使つた四色の光の矢を放ち、核となるケイトを狙い撃つ。だが、円カナメ渾身の一撃も、着弾の瞬間閉じた花弁に阻まれて、彼女にまで届くことはなかった。

「……くうッ！」攻撃が通じず歯噛みするカナメに、無数の薔薇の蔓が襲う。うちいくつかを撃ち落とし、残りを体を捻らせてかわすが、避け切ることは出来なかつた。不意に飛んで来た一本の鳶に足を取られ、振り子の要領で地表に叩き付けられた。

足を掴まれ自由に動けないカナメを羽交い絞めにし、鳶同士が複雑に絡み合つて出来た”槍”を伸ばす。頭や腹を突かれても死にはしないが、胸に填まつたソウルジェムを狙われれば話は別だ。

抜け出そうともがくが、魔法力こそあつても、力は女子中学生のそれと何ら変わらないカナメには、鳶の拘束と解くことは適わない。カナメの意思に関わらず、鳶の槍は無慈悲に振り下ろされる。

させ、るかあああああッ！

KAMEN RIDE 「DECADE」！

身動きの取れないカナメを救ったのは、痛みを堪えて変身したデイクイドだった。ライドブツカーの刃で槍の軌道を反らしたのだ。

「カナメ、無事か！」

「土さん……、無事かっていうならあなただつて」

「お前が命張つてんのに、男の俺たちが黙つてられるかってんだ。なあ？」

デイクイドの呼びかけに応じ、カナメの近くまで来ていたクウガがおう、と言葉を返す。彼は力任せにカナメに絡まる鳶を引き千切つた。

「ありがとうございます、土さん。小野寺さん」

「いいつてことよ、気にしないで」クウガは右手の親指を立てて言葉を返した。

彼に手を引かれて体勢を立て直し、今一度怪物と化したケイトと向かい合う。

「……だがよ、どうするカナメ」デイクイドが問う。「手抜きっぽかった今のですら、反らせるのが精一杯だった。お前の力が効かないとあつちゃあ、俺たちに為す術なんざ何もねえぞ。尻尾巻いて逃げるか？」

「何言つてるんですか土さん」カナメが凜とした表情で言う。「そりゃあ怖いですよ。勝ち目なんてありませんし、元が同じ魔法少女と戦うだなんて嫌です。けど……。ドクター・ケイトを放っていたら、もつとたくさんの人々が悲しむんです。もう他の誰にも、わたしみたいな思いをしてほしくないんです！」

「そう……か。考えてることは同じみてえだな。あんな花のつぼみに俺たちの行くべき道を潰されてたまるか。倒すぞカナメ。俺とユウスケと……お前たちの力だな」

「わたし……たち？」

「そつだ。カナメ、ちよつとくすぐつたいぞ」

言葉と共にディケイドが取り出したのは、金の縁取りにカナメのソウルジェムが刻まれたカード。対象に特殊な変化を与える『ファイナルフォームライド』カードだ。絶望を恐れず、志を持って立ち向かうカナメの心と土の心が響き合ったのだからか。

-. -. FINAL FORM RIDE 「Ma - Ma - Ma -
MADOKA」

ドライバーからスクラッチ音が響き渡ると同時に、カナメの背に両手を突っ込み左右に引いて行く。彼女の体に目立った変化はないしかし、胸に填まったソウルジェムから赤青紫の輝きが消えた。同時にそれら三色がカナメの背中から放たれ、形を成して目の前に並び立つ。

焰アケミ、彩花ミキ、京極サクラ。死んだ筈の三人がカナメの前に現れた。

「みんな……どうしてここに！」

カナメの問いに、ミキが頭を掻きながら答える。「いやさ……、あたしたちにもよく分かんないんだよねえ。しっかし何よそのヒラヒラ衣装。可愛いけ……どおツ!？」

ミキを突き飛ばし、彼女の話が強引に遮って、アケミが二人の間に割って入って来た。

「カナメ……! また貴女と話せる時が来るなんて……逢いたかった、ずっとずっと逢いたかったッ!」

「むうう……、くるしいよアケミちゃん、離れて、離れてっ!」
カナメがいくら言おうとも、アケミは彼女に抱き締めての頬擦りをやめようとはしない。

それを腹立たしく思ったミキは、仕返しにとアケミの頭に拳骨を入れた上で、彼女をカナメから引き剥がした。

「出てきて早々何してかしてんのよ! カナメが嫌がってるじゃない!」

「邪魔しないで彩花ミキ、あなたに私の何が分かると言つもの!？」

「だったらカナメの気持ちも察してやんなさいよ！ そんなんだからあんたは友達出来ないのよ、分かってんの!？」
「そんなこと今はどうでもいいのよ、カナメ、カナメーッ！」

自分を偽る必要が無くなり、己の欲望のままに動くアケミと、彼女のそんな一面に戸惑いつつも、カナメを守るために体を張るミキ。傍から見ると微笑ましい争いに、一步退いた所で見えていたサクラが待ったを掛けた。

「はいはい、嫁の奪い合いはみつともねえし、余所でやれよなー。そんなことしてる場合じゃねえだろうが！」

「そんな事とは何。あなたまで私を馬鹿に……」
怒りに任せて掴み掛かろうとするも、魔女の蔦に阻まれる。サクラは斬り裂き、アケミは時間を止めてそれをかわした。

「……納得したわ」アケミは歯噛みして魔女を睨む。「あれを倒さなきゃ、どうにもならないってことね」

「そーゆーこと。んで、そのピンク色の縞々仮面。何か策はあるのか？」

「誰がピンクだ、誰が！」声を荒らげてデイケイドが言う。「まあ、こんだけ頭数が揃えば、やってやれないことはない。

俺たちが花弁を突き破り、お前たちがケイトを片付ける。それくらいはしてやらにゃあな」

「簡単そうに言うけど……」アケミが口を挟む。「ぼろ雑巾一歩手前のあなたたちに何が出来るとっというの」

「仮面ライダーを舐めるなよ。そこまで言うなら『とっておき』を見せてやる」

デイケイドは左腰のケータッチをバツクルに詰め換え、再びコンブリートフォームに変身すると、そこに描かれた『クウガ』の紋章を押し込んだ。

「行くぜユウスケ。これが俺たちのとっっておきだ！」

KUGA・KAMEN RIDE 「ULTIMATE」

ケータツチの電子音と共に、ディケイドの胸に輝く九枚のライダーカードがクウガのもの一色に変わる。しかもただのクウガではない。二本だった頭部の角は四本になり、黒い体に金のラインが走った、より禍々しい姿だ。

小野寺ユウスケ 仮面ライダークウガの体を、一枚のカードが通り抜ける。カードを潜ったクウガは、ディケイドの胸に描かれたあの姿へと変わっていた。

何者をも地獄の業火で焼き尽くす、クウガ最強にして最後の形態・アルティメットフォームだ。

「うお……おおっ!? なんだよこりゃあ! 黒くなってんぞ、滅茶苦茶黒くなつてんぞ士あ!」

「色の事ぐらいでいちいち騒ぐな、来るぞ!」

薔薇の魔女は、変化に困惑するだけの隙をクウガに与えなかった。鳶を纏めて槍にしたのと同じ要領で、巨大な鎚を作り出し、仮面ライダーたちへと振り下ろしたのだ。

飛び退いて避けようとするも、鳶は既にディケイドたちの足を絡め取っており、彼らは鎚を受け止めざるを得なかった。

ライダーと魔女との力の差は余りにも大きい。このままでは押し潰されて終わりだ。だが、今の彼らには対抗策があった。

二人は両の掌に力を込める。それと同時に、魔女の花弁のあちこちから火を噴いて、気味の悪い呻き声が上がった。

標的を内部から焼き尽くす、クウガ・アルティメットフォームの『超自然発火能力』だ。

魔女は堪らず鎚の形を解き、炎を揉み消さんと鳶を這わす。この機を逃す手は無い。二人はお座なりになった鎚を放って逃れ、魔女を見下ろす程に高く跳び上がった。

「行くぜユウスケ、一発で決めるぞ!」

「おうよ!」

FINAL ATTACK RIDE 「KU-KU-KU-KU-KUUGA」

跳ぶと同時に左腰のバツクルを叩き、スクラツチ音を響かせる。二人の両足に炎が灯り、斬り揉みを加えた上で魔女に突っ込んで行く。

二大ライダーの強烈な一撃も、魔女を覆う堅牢な花卉に防がれて、やはり本体に届かない。逆に弾かれ、ディケイドとクウガは跳んだ時よりも高く宙を舞う。

だが変化はあった。足先に灯った炎と蹴りの衝撃に依り、まるで玉葱の皮を剥くように、ケイトを包む花の鎧が剥がれ、垂れ下がって行っただのだ。

地表にめり込む程強く叩き付けられ、指一本動かせなくなったが、それでも尚、ディケイドは声を張り上げた。「後はお前たちの仕事だけ、一気に決めろよ！」

ミキとサクラが武器を掲げて叫ぶ。「上等。やってやるーじゃん」
「ここはアタシたちに任せろ。カナメとアケミはドでけえ一発の準備でもしてな」

カナメとアケミは何も言わず頷き、弓を二人で構えて力を込める。蒼髪の少女は両手に剣を、紅色の少女は槍を手に、魔女の核へと飛び込んだ。

蔓と同じく、ケイトは無数の棘を伸ばして牽制を掛ける。彩花ミキは青い残像を残して棘を刈り取り、京極サクラは槍より噴き出した炎で焼き払いつつ、コアの頂点に進んで行く。

ドクター・ケイトの本体が見えてきた。核まで後少しだ。しかしそう容易く辿り着かせてはくれない。ケイトは両腕を壁にめり込ませ、二人を押し潰さんと壁を狭めて来た。剣にしる槍にしる、広くなければ存分に振るえない。魔法少女たちは核に乗り込むのを諦めて、手持ちの武器を支えにし、狭まる壁を受け止める。

「残念だったな。アタシたちはまだ生きてるぜ！」

「こいつはお返しよ、喰らいなさいッ」

言って、ミキは二本の剣を投げ付ける。剣はケイトの両腕を根本から斬り裂いた。腕が本体から離れ、指令が行き届かなくなったこ

とで壁の動きが止まり、ケイトをぐるりと囲んで、中央にぽつかりと穴が開いた。

穴から這い出した二人が叫ぶ。「今よカナメ、アケミ！」

「チューリップの化物を焼いちまえ！」

「うん！」

弓には、既に桃と黒のエネルギーで作られた矢が張られている。後はこれをケイトに放つだけだ。しかしケイトもそう簡単にやられはしない。狭め過ぎて筒状になったのを利用し、体表を流れる毒膜を液に変えて放射したのだ。

ミキとアケミが青い稲妻と赤い炎で護りを固めるが、それすらも突破してカナメたちに迫る。

アケミの時間停止能力を使えば避けるのは容易い。だが矢の勢いを保ったまま、ここから動くことは出来ないのだ。皆が作ったチャンスを不意にして避けるか？ 相殺覚悟で矢を撃ち込むべきか？ 弓を引く二人の少女は思い悩む。

いや、答えは最初から決まっている。皆が開いてくれた道が無駄にするわけに行かない。

そう考え、毒液ごと撃ち抜かんとするが、彼女が矢を放たんとしたまさにその時、カナメたちの背後から『黄色い閃光』が飛び、降り注ぐ毒液を掻き消した。

「今の……は！？」カナメは驚いて顔を後ろに向ける。眩しくてはつきりしないが、金色の輝きの中に、カナメたちと同じ”魔法少女”の姿が見て取れた。

ふと、右手に目をやると、黄色い粉のようなものが、光に反射して周囲に舞っている。信じられないことではあるが、二人は全てを理解した。

「ありがとう……、トモエさん。この一撃で、全てを、終わらせるッ！」

うわああああッ！

友が、仲間が、憧れの先輩が作ってくれた道に感謝し、十分に集

束された光の弓矢を魔女に放つ。矢は一直線にケイトの頭を貫き、
声を発する間すら与えずに消し去った。

ドクター・ケイトという核を失ったソウルジェムが、浄化の炎に
巻き込まれ、美しい光となって消えて行く。彼女たちは幸せだった
のか、本当にこれで救われたのだろうか。カナメたちには分からな
かった。

それでもわたしは、魔法少女だから・そのはち、とえぴろーく【原作：魔法少女

連載開始から十ヶ月も掛かってしまいました。この回で漸く完結となります。

休載が続く中、最後までお付き合い下さって、誠にありがとうございました。

それでもわたしは、魔法少女だから…そのはち、とえびろーく【原作：魔法少女

「あれ……、ミキちゃん、サクラちゃん、アケミちゃん。なんで、体が……」

「ああ、うん。ちょっと……言いくいんだけどさ」

「アタシたち……、もうダメみてえだ」

光となつて消え始めたのは、魔女に吸収されていたソウルジェムだけではなかった。ファイナルフォームライドの力でカナメの体から分離されていた彩花ミキ、京極サクラ、焔アケミの三人もまた、戦いの終結と共に肉体を失い、ソウルジェムに戻ろうとしている。

ミキは努めて笑顔を決やさず、サクラはぎこちなく口元を歪ませて、わざとぶつきらぼうに喋る。

アケミに至っては何も言えず、今にも泣き出しそうな顔で下を向いている。抗っても無駄なのだ、自分たち自身が良く分かっているのだろう。

「別れるのは辛いけど、誰に文句言つて済む話でもないしねえ、はは、あはは」

「アタシたちが居なくなっても、ベソかいて下向いてんじゃねえぞ。前を見る、前を」

「う……うん」

円カナメは思う。皆と別れるのは嫌だ。でも辛いのは彼女たちだつて同じじゃないか。泣きじゃくつて別れを惜しんでも、それはただの自己満足だ。自分がしっかりしなくてどうする。

唇を固く結び、悲しみを堪えて笑顔を作り、カナメはミキとサクラの手を握った。

「大丈夫だよ、みんなが守ってくれた命だもん。それに、これはお別れじゃない。二人だつて分かつてるでしょう？」

カナメの言葉と態度に心を打たれ、今度は逆にミキたちの表情が

崩れた。

「……嫌よ、嫌！ でも無理なんだよ、だってあたし、もう……死んじやつてるんだもん。行きたくない、ここに……、カナメの傍に居たいよ……」

「全く、世話ねーな。励ましてやんなきゃならないアタシたちが泣いちゃうってのは、よ……」

慰めるつもりが、逆に慰められてしまった。馬鹿みたい、何をやってるんだと口にしつつも、溢れ出る涙は止められない。カナメは二人の親友の肩を抱き、目を伏せてうん、うんと頷いた。

「アケミちゃん」カナメはその後で、俯いて立ったままのアケミに声を掛ける。

何を喋っても泣き出してしまいそうな中、アケミは堪えに堪えて答える。「……な、に？」

「もう、我慢しなくていいんだよ。魔法少女として皆とひとつになった時、アケミちゃんが何を考えて、何をしてくれたのか、全部分かったから。ずっと、ずっと、わたしの為に頑張ってくれてたんだよね。」

怖かったよね、寂しかったよね。気付いてあげられなくて……、本当にごめんなさい。でも、アケミちゃんはもう一人ぼっちじゃない。

辛いことを一人で抱え込まないで。泣きたい時は一緒に泣こうよ。わたしもミキちゃんたちも、ずっとずっと、傍にいるから」

アケミの言葉を待たずして、カナメは彼女を抱き締める。もう、限界だった。出してはならぬと押し殺してきたもの全てが、嗚咽となって噴き出した。

円カナメはその全てを受け止めた。泣きじゃくるアケミを抱いて大丈夫だよ、と優しく頭を撫でる。

別れたくない、だが別れなくてはならない。だから今は、せめて今だけは繋がっていたい。カナメは別離の悲しみを感じさせないほ

どに、穏やかで暖かい笑みを浮かべた。

アケミたち三人の体が、足先から徐々に透けて行く。別れの時が訪れたのだ。カナメはアケミと、後ろに立つ二人に目をやって言った。

「さよならは言わないよ。誰がどこに行っただって、わたしたちはずっと一緒だもん。だから……『またね』、みんな」

己の運命を受け入れたのか、三人は晴れやかな顔で頷く。魔法少女たちの体は赤青紫の光へと姿を変え、再びカナメの胸元のソウルジェムに吸い込まれた。

それと同時に、今の今まで立っていた空間が捻じ曲がり、霧が晴れるように掻き消える。ドクター・ケイトの消失によって結界を維持する力が無くなり、元々そこにあった工場跡地に帰ってきたのだ。変身を解いて見滝原の制服姿に戻ったカナメの元に、門矢士が夏海に支えて貰いつつ近付く。

「……行っちゃったのか」

「ええ」

「ごめん、な。俺が不甲斐ないばかりに、お前のダチ三人を……死なせてしまった」

「謝らないでください」それは違つと、カナメが言葉を返す。「アケミちゃんたちは死んでなんかいませんよ。ずっと、ずっと……一緒にです」

言つて、土たちの眼前で右掌を開く。赤青紫桃、混ざり合つて鮮やかに輝く彼女のソウルジェムがそこにあった。

「そう、か……。強いな、お前。もう馬鹿にやあ出来ねえな、舞台上に上がつて来ちまったんだからよ」

「まだまだ、ですよ。アケミちゃんたちは、もっ……と……」

もつと凄いと叫びかけ、カナメはまるで、糸の切れた人形のように倒れ込む。土は夏海から離れ、残る体力を振り絞つて彼女を抱き抱えた。

「限界か……。ダチの死を越えて、魔法少女になって、その上で凄

まじい量の魔力消費。今まで立っていられたって方がおかしい」
「冷静に分析してる場合ですか。早く病院に連れて行かないと……」
「目立った外傷は無いし、ぐーすか寝息立てていやがる。写真館で休ませればすぐに良くなるさ。だから、とつとと帰るぞ夏ミカン、それにユウスケ」

士はカナメを抱つこから背負う体勢に変え、夏海たちを連れて、入口に停めてあるマシンディケイダーの元へと進んで行く。

カナメを魔法少女にした張本人、白い小動物キュウベえの姿が見えないのが気になったが、満身創痍の彼に、探して見付け出すだけの余裕は無かった。

そこには何もなくて、ただ暗闇だけが広がっていた。寒くもなく暑くもなく、遮るものは何もない。

円カナメが「ここはどこ」と問い掛けると、何処からか声が聞こえてきた。少年とも少女とも取れる高くて、抑揚の無い声だ。

君には驚かされてばかりだよ、カナメ。願いの同調によって、四つの魂が、一つの個として存在を確立するとはね。不可能を可能にする見えない力。つまりそれが 君たちの言う『絆』なのか。

でも、君はもう分かっているのだろう？ その力は

カナメ、おい、カナメ！

彼女の言葉を遮るように、門矢士の声が響く。呼び掛けに導かれるかのように、円カナメは真暗闇から現実へと引き戻された。

微睡む頭に鞭打って、ゆっくりと体を起こす。辺りに漂う珈琲の芳しい香りが、カナメの脳を覚醒させた。

壁に掛けられた数多くの写真たちに、体にかかったタオルケット。気を失ったカナメは光写真館に連れて行かれ、そこで介抱されていた。

カナメの目覚めに気付き、土は少し温めの珈琲を差し出した。

「外はもう暗いからな、お前の生徒手帳から住所調べて、親に連絡させてもらったぜ。もうちょいでここまで来るそうだな」

「パパと……、ママに？」

「ああ。誤解を解くまで大変だったんだぜ。やつらと来たら、俺を誘拐犯か何かと勘違いしやがってよ」

「ええっ……！　パパとママったら、もう……」

「いいさ、別に気にしちやいなえよ。それだけ想ってくれる親が居て、幸せだな」

「……はい」

カナメは珈琲に口を付けて、舌の上で暫く転がせた後、「そういえば」と土に問う。

「夏海さんや、小野寺さんたちは？」

「あいつらも無事だ。今そこでクッキー焼いてる。そろそろ夕飯時だが、クッキーくらいなら平気だろ？　形は悪いが、珈琲には良く合うぜ」

「……ありがとうございます」

礼をカナメは寂しげな顔で俯く。あんな出来事があった後だから仕方がないとはいえ、何故こうも憔悴しているのだろう。

土はソファの端に腰掛けて、俯いたままのカナメに問いかけた。

「……これから、どうするつもりだ？」

「わたし、ですか？」

「お前以外に誰がいる。魔法少女となつて、舞台上に上がったんだ、途中で降りることは許されねえ。お前はこの先、舞台の上で何を演じて生きていくのか。それが知りたいんだよ」

「わたし、わたしは……」暫しの沈黙の後、ゆっくりと口を開く。

「戦いたいです、魔女や魔法少女たちを救うために。ソウルジェムが絶望に負けて魔女を産むと言うなら、わたしの『浄化の力』で救つてあげたい。こんな辛い思い、もう誰にもさせたくないから……」

「戦う、か……。それもいい。けどよ、あの小動物がお前を放つて

おくとは思えん。それに誰もが誰も、お前の考えに賛同してくれる訳じゃない。誰に褒められるでもないのに、よくやるよ、ホントに」
「それは……」気圧されて、手にしたカップが小刻みに揺れる。士は「悪かった」と詫びを入れ、カナメの手を自身の手で包んだ。
「笑ったり、脅してるつもりは無い。純粹に凄いと思っただけだ。誰にでも出来る事じゃないからな。」

そんな勇敢なお前に、一つ頼みがあるんだ。聞いてくれるか？」
「頼み……ですか？」

「ああ。もしも俺が破壊者として覚醒し、他の世界を滅ぼしそうになったら、円カナメ。お前が俺の息の根を止めてくれ」

「息の根って……ええッ!？」カナメは驚いて目を白黒とさせた。

「そんなこと、出来る訳ありません。士さんを倒すことなんて、とても……」

「アケミたちがそうだった原因が、俺だったとしてもか？」冷徹な声で士が答える。「奴の話はお前も聞いてるだろ。魔法少女や魔女が生まれたのも、俺が世界を破壊しなかったせいだ。倒す理由なら大有りだ」

「それは……そうかも知れませんが、それでも、わたしは……」
士はばつの悪そうな顔で頭を掻いた。「まあ、そう来るわな。俺の言い方もまずかった、謝る。」

ならこうしよう。俺の条件を呑んだなら、お前が魔女になった時、俺がお前を仕留めてやる。ンなしけた面してんじゃねえ。胸を張れよ、胸を。俺たちや仲間、だろ」

カナメは目をしばたかせて言う。「わたしが……士さんたちの、仲間？」

「嫌か？ だがもう決めちゃったからな、口答えは許さねえ。アケミたちみたいにならずと傍に居てやれないが、もしもの時は次元の壁叩き壊してでも来てやるさ。約束する」

根拠も何もない、口先だけの出任せだ。そんなことは分かっている。けれど、その暖かな言葉は、カナメの胸中に渦巻いていた不安

と恐怖を掻き消した。

カナメは心から微笑んで、土の手を強く握り返した。

「分かりました、約束します。土さんもちゃんと護ってくださいね？」

「当たり前だ。俺を誰だと思ってる」

「通りすがりの仮面ライダー……。そうでしょ？」

「その通りだ」

「やっと笑ったな」と、土はカナメの髪をくしゃくしゃと掻き上げる。

「おおい、何二人で遊んでんだよ、土ア」

「クッキー、焼き上がりましたよ」

そんな中、焼き立てのクッキーを持って、光夏海と小野寺ユウスケが応接間にやってきた。土は皿に盛られたクッキーに目を見開いた。

「おいおい、なんだこいつは。夏ミカンのクッキーが、こんなに綺麗な形に焼ける筈がねえ。どんなカラクリ使いやがったんだ」

皿に並んでいたのは、仮面ライダーディケイドにクウガ。夏海に栄次郎にカナメの顔の形をしたクッキー。掌に収まる程の大きさながら、目や鼻の細部まで丁寧に作り込まれている。

つい最近までディフォルメした人の顔すら上手く作れなかったのとは比べると、驚くべき程の進歩だ。

信じられないを連呼する土に対し、夏海はいい加減にしてくださいと頬を膨らませる。

「それはちよつと、ユウスケに手伝ってもらいましたけど……、だからって、そんな言い方ないじゃないですか土君」

「手伝ってもらったんなら最初からそう言えよ。にしてもこれ、ユウスケのデザインかよ。お前、仮面ライダーやめてクッキー職人になった方が良くないか？」

「いやあ、ははは。褒めても何も出ないぞ土ア」

「……ユウスケ。多分それ、馬鹿にされてます」

土は夏海の手から皿を奪い取って、カナメの前に差し出した。

「とりあえず食べよ。自分の顔を食うのは抵抗あるかも知れんが…

…」

「平気です。夏海さん、小野寺はん。いただきます」

カナメは自分と同じ顔のクッキーを取り、唇の間に挟んでかじる。何度かの咀嚼の後、夏海が心配そうな顔付きで声を掛けてきた。

「あつ、あの……。お味は、いかがですか？ カナメちゃん」

「美味しいです、とおーっても」カナメはにこりと微笑んで答えた。「あの時生きていられたからこそ、クッキーも珈琲もとてもおいしい。当たり前前の幸せがこんなにも尊く感じられるなんて……。わたし『たち』を助けてくれて、本当にありがとうございました。皆に救われたこの命、大切にに使わせていただきます」

クッキーを食べ終えた上で深々と頭を下げ、カナメは土たちに感謝の言葉を述べる。夏海とユウスケが気恥ずかしさに微笑む中、土はカナメの額を軽く小突いた。

「その返しだと、クッキーが美味しいのか、命が助かって嬉しいのか、良く分らんが……。気持ちだけは受け取っとくよ。ありがとな」

「……こちらこそ」

顔を上げたカナメには、別離の悲しみや寂しさは微塵も無かった。写真館の外でクラクションの音がする。カナメの両親が迎えに来たのだ。土たちは彼女に心許りの土産を手渡し、さようならと送り出す。

「あ、ああ……。ちょっと待った。まだ外に出るな」カナメが玄関に立ったその時、何かを思い出した土は、一人現像室へと駆けて行く。「俺からの餞別だ。こいつを持っていけ」

「これは……。写真、ですか？」

餞別だと彼女に手渡したのは、現像仕立てて少し濡れた、一枚の写真だった。「何故これを、わたしに？」

「餞別だからな。辛くなったりもうダメだと思ったら、この写真のことを思い出せ。きつとお前に勇気をくれる」

「勇気……」手渡された写真を表に返して覗き見る。カナメの目元がほんのりと潤んだ。彼女は写真を胸に抱いて、鼻の頭を少し赤くした。

「ありがとうございます、土さん。大切に……します」

「おう。達者でな」

「土さんこそ、お気をつけて」

二人の間に、それ以上の言葉は要らなかった。カナメは深く深く礼をして、両親の運転する車の中へと去って行く。

何をそんなに笑っているんだい、カナメ。

後部座席に座るカナメに、どこからか声を掛ける者が居る。先程も微睡む意識に呼び掛けてきたキユウベえだ。何処からともなく現れたこの小動物は、カナメの膝にちょこんと座ると、彼女の心に直接語り掛けてきた。

さつきも言った筈だよ。君はアケミたち三人と一つになったことで、他の魔法少女を大きく突き放す力を手に出来た。けど、それは決して良いことばかりじゃない。

君は犠牲になった三人の魂を、文字通り『受け継いだ』んだ。力もそうだし、勿論”穢れ”もね。自分のソウルジェムを見てごらん。ドクター・ケイトから奪い取った大型のグリーンフィードを使っても、完全に濁りを消し切れない。

どういうことか分かるかい？ 魔法を使えば使う程、君の魔力は目減りして行くんだよ。魔法少女として戦い続けるには、致命的な欠陥だ。

魔力が膨大であればある程、絶望に総転移した時のエネルギーは凄まじい物となる。もしかしたら、君一人で世界を救うことが出来るかもね。

もう少しここで観察させてもらおうよ。途方もない希望を願った君がこの先どうなるか……。

キユウベえは言うべきことを言い終えると共に、その場から煙のように消え失せる。自分を見るカナメの目が鋭くなっており、このまま留まるのは危険だと判断したからだろうか。

キユウベえの言う通り、自分の行く手には絶望しかないのかも知れない。いつか自分の選択を後悔する日が来るのかも知れない。

しかし、円カナメは挫けない。

ソファの上で寝息を立てる自分と、その周囲に集まる「四人の少女」の姿が映った写真を胸に、カナメは自分自身に言い聞かせるように呟いた。

「負けないよ。それでもわたしは、魔法少女だから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9571/>

Journey through the Decade Re:imagination

2012年1月4日09時49分発行